

博士論文

「非行」と向き合う親たちのセルフヘルプ・グループの実践と機能  
——ナラティブ・コミュニティのなかでオルタナティブな語りが  
構築される文脈に注目して——

北 村 篤 司

## 目次

|   |     |
|---|-----|
| 第1部 研究の展望   | 3   |
| 第1章 問題と目的   | 4   |
| 第1節 問題意識  | 4   |
| 第2節 セルフヘルプ・グループに関する先行研究                                   | 7   |
| 第3節 ナラティブ・アプローチと先行研究の課題                                   | 14  |
| 第4節 本研究の目的と構成   | 19  |
| 第2章 方法論とフィールド   | 23  |
| 第1節 理論的枠組み  | 23  |
| 第2節 フィールド：「非行」と向き合う親たちの会                                  | 28  |
| 第3節 フィールドとの関わり  | 32  |
| 第2部 親たちの会における参加者の語りの変化                                    | 37  |
| 第3章（研究1）子どもの「非行」で悩んだ親たちの体験 ——アンケート調査の結果からの検討——            | 38  |
| 第1節 問題と目的   | 38  |
| 第2節 方法  | 39  |
| 第3節 結果  | 41  |
| 第4節 まとめ   | 56  |
| 第4章（研究2）子どもの「非行」と向き合う親たちの語りの変化 ——セルフヘルプ・グループへの参加と視点の拡がり—— | 58  |
| 第1節 問題と目的   | 58  |
| 第2節 方法  | 59  |
| 第3節 結果と考察   | 63  |
| 第4節 まとめ   | 83  |
| 第2部のまとめと第3部の課題  | 89  |
| 第3部 親たちの会における語りの構築  | 91  |
| 第5章（研究3）ディスコースの中での語りの構築 ——コミュニティ・ナラティブとの関係に注目して——         | 92  |
| 第1節 目的  | 92  |
| 第2節 方法  | 95  |
| 第3節 結果と考察   | 98  |
| 第4節 まとめ   | 114 |
| 第6章（研究4）やりとりの中での語りの構築 ——笑いの共有に焦点を当てて——                    | 120 |

|      |  |     |
|------|--|-----|
| 第1節  | 目的   | 120 |
| 第2節  | 方法   | 123 |
| 第3節  | 結果と考察  | 124 |
| 第4節  | まとめ  | 132 |
| 第7章  | (研究5) 親以外の参加者の語りの構築への関わり —— 「ともに」 学び, 語り合う実践—— | 136 |
| 第1節  | 問題と目的  | 136 |
| 第2節  | 方法   | 138 |
| 第3節  | 結果と考察  | 143 |
| 第4節  | まとめ  | 163 |
| 第4部  | 総括   | 170 |
| 第8章  | 本研究のまとめ —— 「非行」と向き合う親たちの SHG の特徴と機能——          | 171 |
| 第1節  | 本研究のまとめ  | 171 |
| 第2節  | 「非行」と向き合う親たちの SHG の特徴と機能                       | 174 |
| 第9章  | 本研究の意義と課題                                      | 183 |
| 第1節  | 本研究の臨床心理学的意義                                   | 183 |
| 第2節  | 本研究の SHG 研究における意義                              | 187 |
| 第3節  | 本研究の限界と今後の課題                                   | 188 |
| 引用文献 |  | 194 |
| 謝辞   |  | 203 |

## 第 1 部 研究の展望

第 1 部では、本研究の問題および目的を提示すると共に、本研究全体に係わる方法について記述する。本研究は、子どもの「非行」に悩み、向き合おうとする親たちのセルフヘルプ・グループにおいて語りが構築される実践を対象とする。第 1 章では、先行研究を概観した上で、本研究の目的およびリサーチクエスチョンを明らかにし、研究全体の構成を示す。第 2 章では、本研究で用いる方法論と、本研究が対象とした調査フィールド、そして、研究者のフィールドとの関わりについて記述する。

## 第1章 問題と目的

本研究は、子どもの「非行」<sup>1</sup>に悩み、向き合おうとする親たちのセルフヘルプ・グループ（以下、SHG と表記）において、語りが構築されていく実践を対象とする。第1節では、本研究の対象である「非行」の子どもを持つ親たちのSHGについて述べ、本研究の問題意識を提示する。第2節では、SHGに関する先行研究を概観する。第3節では、本研究で採用する理論的枠組みである、ナラティブ・アプローチに基づく先行研究について検討し、その問題点や課題を整理する。第4節では、これらをまとめ本研究の目的およびリサーチクエスチョンを明らかにし、本研究全体の構成を示す。

### 第1節 問題意識

第1節では、子どもの「非行」に悩む親たちをめぐる社会的な状況や、親たちのSHGの活動について説明し、本研究の問題意識を述べる。

#### 1-1-1 子どもの「非行」と親

「非行」に走った子どもの親と言われたときに、多くの人に連想されるのはどのような親だろうか。内閣府政策統括官が平成21年度に行った『第4回 非行原因に関する総合的研究調査』において、保護者を対象に、「青少年が犯罪を犯したり、非行に走る主な原因として重要だと思うもの」について尋ねたところ、「親に問題があるから」（74.7%）と答えた人の割合が最も多く、次いで「テレビ、新聞、雑誌などのマスコミの影響があるから」（58.3%）、「本人の自覚が足りないから」（53.4%）の順という結果が出ている。この調査結果に現れているように、親は子どもの「非行」の原因として、真っ先に挙げられる存在である。子どもが何か事件や問題を起こせば、しばしば「親の顔が見たい」ということが言われ、「親の責任」が社会的に問題にされる（前田, 2004; 芝田・戸川・葉山, 2003）。社会の人が共通に持つイメージや、言葉の暗示的意味の一連の集合体をディスコースと呼ぶが（綾城, 2014）、「非行」に走った子どもの親に対しては、親を非難する社会的なディスコースが存在すると考えられる。また、「非行」に関する研究においても、「非行」の原因を解明するものが中心で、家族の問題は、「非行」の「原因としての家族」という視点からのアプローチが主流であった（藤田, 1992）。そのため、子どもが「非行」に走ったとき、親が子どもの「非行」と直面し、どのような体験をしているのかという側面は、調査や研究としてほとんど取り上げられてこなかった（特定非営利活動法人非行克服支援センター, 2014）。

---

<sup>1</sup> 本研究では、法的な意味の非行に限定せず、不良と見なされる行為や社会規範に反すると考えられる行為全般を指し、いわゆる非行という意味で、かつこつきで「非行」という言葉を用いる（詳しくは第2章第2節で述べる）。

しかし、非行少年を抱える家族は、少年の起こす犯罪や問題行動に振り回される上、周囲からも非難を受けるなど疲弊、苦衷が甚だしく、家族が非行少年の立ち直りを支えていくためには、家族に対する心理的・社会的援助が不可欠であると言われている（生島, 2002; 山本, 2005）。近年では、非行少年が立ち直るためには、保護者を含む家族への支援が重要であることが認識されるようになり、司法機関による家族への働きかけの措置が法令の中でも明文化され<sup>2</sup>、保護観察所や家庭裁判所において、家族を対象としたグループ・アプローチが行われるようになってきた（生島, 2008; 東京保護観察所観察第一課特別処理実施班, 2007; 山本, 2005）。ただし、こうした取り組みは、保護観察、試験観察といった司法手続きの下にある少年の家族になされるもので対象に限定があり、また司法領域の専門家の働きかけによって行われるもので家族が自ら参加できるものではない。

### 1-1-2 子どもの「非行」と向き合う親たちの SHG の活動

他方で、子どもの「非行」の問題に悩む親たちが中心になり、当事者グループも組織され、各地に広まってきた（「非行」と向き合う親たちの会, 2006）。「非行」と向き合う親たちの会（以下、「親たちの会」と表記）は、「悩みを共有する仲間がほしい」という母親の願いから生まれた。会として正式に発足したのは、1996年11月のことである。当時、子どもの不登校に悩む親の会は全国各地に存在し、ネットワークも存在したが、子どもの「非行」で悩む親の会は存在しなかった。これは、「非行」という問題の特徴による影響も大きいと思われる。「非行」と呼ばれる行動は、社会に迷惑をかける反社会的な行動である場合が多く、他の者に危害を加える行動も含まれる。そのため、世間をはばかって誰にも相談できずに親が一人で悩むケースが多いと考えられる。しかし、親たちの会ができた翌年（1997年）には、神戸市須磨区で全国に大きな衝撃を与えた少年事件が起き、会が新聞の特集記事で紹介されたこともあり、入会者が急増し、遠方からの入会者も増えた。そして、「近くに気軽に悩みを話せる会がほしい」という遠方の会員の願いから、同じような親の会が全国各地で設立されていった（能重・浅川・春野, 2004）。その際には、①「親たちの会」が主催して、公開学習会や交流会を現地の人と共同で行う、②「親たちの会」の会員である現地の親たちが中心となってつくった準備会や交流会に、東京から「親たちの会」のメンバーが参加する、といった方法で、各地の会の立ち上げが支援された（「非行」と向き合う親たちの会, 2006）。現在では、全国で少なくとも30の親の会<sup>3</sup>が存在し、全国的なネットワークも存在する。このように親たちの会は、社会的なニーズを受けて、その活動を広げてきた。親たちの会の活動内容の詳細は第2章で述べるが、その中心は、例会での語り合いである。当事者の体験記や、活動の実践報告では、会の中で自分の苦しさやつらさを話すことで心が楽に

<sup>2</sup> 2001年4月施行の少年法の一部改正で、同法25条の2に家庭裁判所の保護者に対する措置が新設された。また、2007年11月施行の少年法等の一部改正により、犯罪者予防更生法が改正され、同法36条の2に、保護観察所が行う保護者に対する措置が新設された。さらに、同年6月に成立した更生保護法の59条においても、保護者に対する措置の規定が設けられている。

<sup>3</sup> 各地の会によって構成されている、「非行」と向き合う全国ネットに加盟している親の会の数である（2017年3月時点）。

なったという体験や、会が「居場所」になったという体験が書かれており（「非行」と向き合う親たちの会, 2002; 春野, 2007), 親たちにとって, 例会の語り合いに参加することが重要なサポートになっていることが窺われる。

### 1-1-3 本研究の問題意識

しかし, こうした親たちの会の活動や機能については, 活動に直接関わっている当事者や専門家からの実践報告はあるものの (木村・能登原・足立, 2009; 春野, 2001; 2006; 2007 など), 研究は寡少である。「非行」の子どもをもつ同じ立場の親が集まるグループは, 親にとって何らかの心理的サポートとしての機能を果たしていることが想像されるが, どのようにそれが生じて, 参加者にどういった影響を及ぼしているのかという点は, 解明されていない。「非行」の子どもをもつ親たちの SHG の機能や意義を明らかにしたいというのが, 本研究の出発点となる問題関心である。

SHG に関する研究は, 社会福祉学や社会学のものが多いが, 近年は, 臨床心理学の分野でも, SHG への関心が高まっている。臨床心理学において, SHG を研究する意義としては, 次の 4 つのことが考えられる。

一つは, グループにおいて, 参加者が変化していく過程を明らかにして, 臨床場面における援助に活かすということである。例えば, 方 (2006) や和田 (2007) は, 断酒会やアトピー性皮膚炎患者の SHG の参加者にインタビューを行い, アルコール依存症者の回復過程や, アトピー性皮膚炎患者の心的変容プロセスを解明することを目的としている。SHG と臨床面接は同じものではないが, SHG において参加者の語りや体験が変化していくプロセスを明らかにすることができれば, 臨床場面における援助にも活用できる可能性がある。

二つ目に, SHG でテーマとされていることをめぐる社会的な背景や, そのテーマに関する社会的ディスコースが, 問題の発生や維持, 拡大にどのように影響しているかという点を明らかにできることが挙げられる。心理臨床活動では, 特定の個人の体験に注目しながらも, 同時に, それに対して社会的ディスコースが及ぼしている影響を意識する必要がある (Winslade, 2005)。臨床心理学的な援助を求めるクライアントは, 社会的ディスコースの否定的な影響を受けていることが多く, クライアントの援助においては, その影響からクライアントを遠ざけることや, その影響に気づくことが有益となるからである (綾城, 2014)。綾城 (2014) は, 臨床心理面接においては, 特に, ディスコースのもつ「支配性」に注目することが重要であると指摘し, クライアントがそれにどのように対処できるのかを検討している。本研究がテーマとする子どもの「非行」の問題では, 前述したように「親に問題や責任がある」といった親に対する批判的なディスコースが存在する。そのため, 臨床心理学的な援助を行う際にも, その批判的なディスコースへどのように対処するのかという視点が重要になることが予想される。SHG には, 同種の問題を抱えた当事者が集まるため, 社会的なディスコースが個人に及ぼしている影響や, グループの参加者がディスコースの支配性にどのように対処しているかを検討しやすい。また, 臨床面接の場面では見られないような対処法が見出される可能性もある。このように, SHG の研究から得ら

れる知見は、社会的ディスコースと個人の問題との関連性を捉え、社会的ディスコースの支配性への対処を考える上でも重要な参照枠となると考えられる。

三つ目の意義は、SHGの参加者の語りやその実践から学ぶことで、臨床心理学的な支援を批判的に省察できることである。臨床面接においては、支援に不満を持つクライアントはドロップアウトしてしまう場合が多いため、支援に対する批判を直接聞ける機会は多くない。一方、SHGは専門職による援助を問い直す側面を持っており（三島, 1998a）、グループの中で、専門職の援助に対する不満や、援助の中で傷ついた体験が語られることもある。例えば、臨床心理士である高松（1999）は、トラウマに対するSHGと専門家のアプローチの違いを検討し、専門家の持つ問題点として、①話を聞かない、聞いても無視する、②専門家が話を理解しない、③専門家がサバイバーを傷つける、④専門家は「変化」や「解決」を求めすぎるということを挙げている。また、SHGは援助専門職の文化とは異なる文化を持つため、専門職はSHGとの関わりを通して自分自身のあり方を問い直し、自らの実践をより豊かにしていくことも可能である（松田, 2000）。専門職がSHGのアプローチを一方向的に理想化し、自分自身の知識や専門性を卑下してしまうことは問題だが（三島, 1998a）、SHGについて研究し、そこから学ぶことは、専門家の援助に対する批判的な声を知り、援助実践をより良いものに変えていく上で意味を持つ。

四つ目の意義は、SHGの活動をエンパワーし、SHGと協働していくあり方を検討できるという点である。臨床心理学研究では、科学性だけでなく、実践性も重要になる（下山, 2008）。特に、コミュニティ心理学の観点からは、心理職は専門家・非専門家・市民と協働することや、SHGのようなコミュニティの持つ外的援助資源を活用していくことが求められる（高島, 2011）。SHGの機能や意義について明らかにすることは、グループの活動をエンパワーすることにつながる。また、研究で得られた知見は、グループと協働して、臨床心理学的な地域援助を行っていく可能性を検討する上でも重要である。SHGに専門家が介入し、支配してしまうことは望ましくないが、三好（2014）は、「NPO法人・生活の発見会」の調査の中で、SHGの運営者側に「専門的知識の介入」のニーズが存在するとして、現在は専門家と当事者が協働する在り方を模索する段階にあるのではないかと指摘している。本研究で対象とする、「非行」の子どもを持つ親たちのSHGにおいても、様々な専門職が関わっている。SHGとの協働を行っていくためには、どのような関わり方が、グループにとって有用なのかを考えていく必要があり、SHGの研究は、グループとの協働を促進する上でも意味を持つ。

以上をまとめると、本研究の問題関心は、特に社会的な非難を浴びやすい立場にある「非行」の子どもをもつ親にとって、SHGがどのような機能を果たしているのかを探求することである。それによって、心理臨床活動において参照枠となる知見を得るとともに、専門職のSHGとの関わり方について検討することが、本研究の狙いである。

## **第2節 セルフヘルプ・グループに関する先行研究**

本節では、SHGとは何かということを確認しながら、その先行研究について整理する。まず、SHGの特徴やその思想的背景を押さえながら、SHGの定義や範囲に関する研究を見ていく。そ



の後、本研究における問題関心と関連が深い、SHG の機能に関する研究、SHG と専門職との関係についての研究、そして、子どもの「非行」の問題で悩む親の SHG に関する研究について検討する。

### 1-2-1 SHG とは何か

SHG とは、簡潔に言うと、なんらかの問題・課題を抱えている本人や家族自身のグループである(久保,1998)。SHG におけるセルフヘルプ (self-help) には、2つの意味があると言われている。1つは、個人による自助、独立の意味であり、自立(自律)をさす。もう1つは、相互援助 (mutual aid)、共同の意味である。その思想的な起源としては、それぞれ、Smiles (1812~1904) と Kuropatkin (1842~1921) が挙げられることが多い (Froland, Pancoast, Parker, 1983; 三島,1997; 久保, 1998)。このように、欧米の SHG の思想的背景は、自助(個人個人が自らの力で自分自身の問題を解決していくという個人主義的な方向性)と、相互援助(相互的な助け合いの中で社会を変えていこうとする社会変革的な方向性)という相反する2つの思想の混在の中にあると捉えられている(三島,1997)。

SHG の基本的な考え方について、岡(1998)は、「わかちあい・ひとりだち・ときはなち」という3つのはたらきから説明している。SHG では、同じ体験をしている人同士で、気持ち・情報・考えかたをわかちあうことが出発点となる。この「わかちあい」を通して、自己決定・自己選択と社会参加を意味する「ひとりだち」や、自分への尊敬や社会への参加を意味する「ときはなち」が目指される。ここにも、同じ体験をしている人同士の相互援助という側面と、参加している個人の主体性を尊重する自立(自律)の側面が含まれている。

SHG の特徴として、最も重要な点は、「共通の問題をもつ当事者であること」である(久保,1998)。そのため、SHG は専門職によるケアとは異なる側面を持つ。三島(1997)は、SHG の援助特性として、①専門的知識ではなく、体験的知識に根差していること、②従来の専門的組織や専門職による援助を問い直す側面を持っていることを挙げている。すなわち、従来の専門職による援助は、専門職のもつ専門的知識に価値が置かれ、問題を狭く限定し、その背後にある「病理」にアプローチすることが多かったが、SHG においては、個々の体験に根差した体験的知識が重視され、具体的・個別的な日常の全体的・包括的な問題に焦点が当てられる。

SHG と似たものとして、専門職が主導するサポート・グループがあるが、岡・Borkman(2011)は、両者の違いとして、①SHG は、専門職とは違った視点でメンバーの問題を理解し、解決に向かっていく理論的な枠組みをもつこと、②SHG はミーティングの外でも交流ができる一種の継続的なコミュニティとして機能すること、③SHG は専門職の専門分野に限定せず、社会的、法的な問題を含めてメンバーの権利擁護やエンパワーメントに取り組むことを挙げ、両者の区別を強調している。このように、SHG は、専門職ではなく、共通の問題や体験をもつ当事者が主導するということが前提となり、専門職によるケアとは異なる援助特性を持っている。

SHG が発展した経過を見ると、欧米では、1930年代以降、Alcoholics Anonymous (AA) を始めとして数多くの SHG が組織され始め、その後1950年代にかけて、グループ内での話し

合いの中から問題解決を図っていくという SHG の基本的方法が確立されていった (Froland, Pancoast, Parker, 1983)。その後、50 年代から 70 年代にかけては、市民運動・社会運動とも結びつき、SHG の数が爆発的に増加し、1970 年代以降は、ほとんどの障害・疾病別にわたっているといわれるほど SHG の種類や数が増大し、多様化していった (Katz & Bender, 1976; 三島, 1997; 久保, 1998)。日本では、第 2 次世界大戦以降、日本患者同盟 (1948 年) と全国ハンセン氏病患者協議会 (1951 年) が設立され、その後、1960 年代後半からは、障害・疾病・難病・アディクションのグループなどが次々と設立され、増加していった。SHG が増大した理由として、久保 (1998) は、①家族・近隣などのサポートシステムの崩壊、②専門的機関・制度の不足、③制度によるサービスでは満足できないものを満たそうとしたこと、④利用者の主体性、権利意識の増大などを挙げている。

SHG に関する学問的関心は、アメリカでは主に 1970 年代後半以降、日本では 1980 年代後半以降活発になった (伊藤, 2009; 久保・石川, 1998)。その主要な関心としては、SHG の定義および、その分類や範囲設定 (Katz, 1993/1997; Katz & Bender, 1976; 久保・石川, 1998; Levy, 1976)、グループと専門職との関係 (Gartner & Riessman, 1977; 岩田, 1994; Katz, 1993/1997; 中田, 1997; 中田, 2000)、そして、グループの機能やその理論的位置づけ (Antze, 1976; Borkman, 1976; Riessman, 1965; Katz, 1993/1997; Levy, 1976; Stewart, 1990) などが挙げられる。

SHG の定義としては、有名なカツとベンダー (Katz & Bender, 1976) のものを始め、様々な定義がある。これらは、多様な SHG を一括して定義する文章を提出しようとするものであり、起源と発足の自発性、相互援助という目的、共通の問題に取り組む、既存の社会施設や組織への不満、メンバーの個人的責任、精神的または物質的な支え、イデオロギーの啓蒙といった SHG の諸特徴を包括的に列挙する。例えば、三島 (1998a) は、「SHGs (セルフヘルプ・グループ) とは、ある共通の問題に見舞われた個人が (あるいは、その家族が)、自分ひとりだけでは解決できそうにないその自分自身の抱える問題の解決、あるいは、その問題と共に生きていく力を得ていくために、自発的かつ意図的に組織化したグループである」(p36) としている。SHG の問題が取り上げられるようになった 1970 年代から現在まで、定義にはそれほど大きな変化はない (石川・久保, 1998)。SHG の定義や範囲の確定は、議論の出発点として必要にはなるが、こうした諸特徴を列挙することは、SHG をどのようなものとして見て、その機能をどのように捉えていくかという問題を解決するとは言えないだろう。本研究では、従来型の専門的治療や援助の枠の外側にできた、何らかの問題や目標を抱える当事者グループ (伊藤, 2009) として大まかに SHG を捉えておく。

### 1-2-2 SHG の機能に関する研究

SHG の機能については、さまざまな研究者によって、ある一側面についてはそれぞれすぐれた成果をあげてきているが、それらの諸機能を有機的に結びつけ、統合するような理論体系は存在していないと言われている (Humphreys & Rappaport, 1994; 三島, 1998b; 三島, 2001; Stewart, 1990)。ここでは、伊藤 (2009) および三島 (1998b) の整理を参考にしながら、言及

されることの多い、SHG が参加者に対してもつ 4 つの機能に関する説明を見ていく。

一つ目は、SHG は参加者の孤立感を取り除き、コミュニティの感覚 (sense of community) を生成させるという説である (Levy, 1976; Stewart, 1990)。例えば、Levy (1976) は、参加者は、グループの議論を通じて、その問題を抱えるのは自分一人ではないことを発見し、自分の体験を打ち明け、シェアし、その過程でコミュニティの感覚が生成されると言う。

二つ目は、社会的学習を発生させるという説である。これは、Bandura (1977) の社会的学習理論に影響を受けたもので、メンバーの変化を社会的学習によって説明する (Katz, 1993/1997; Stewart, 1990)。Katz (1993/1997) によれば、新しい参加者は、グループの中から自分のモデルとなる人を選び、役割モデリング (Role modeling) や、社会的比較 (Social comparison) によって、自己効力や集団効力を高め、グループに社会化されていく。

三つ目は、Riessman (1965) によって提唱された援助者療法原理 (helper therapy principle) である。これは単純に言うと、「人は援助することによって最も援助を受ける」ということである。Riessman は、SHG では、メンバーが相互に援助し合うことで、この援助者療法原理が有効に機能していると見ている (Riessman, 1965; Gartner & Riessman, 1977)。

四つ目は、SHG は「知識」の伝達機能を果たす、という説である。Borkman (1976) は、「専門的知識 (professional knowledge)」に対して「体験的知識 (experiential knowledge)」という概念を提唱し、SHG では、専門家が提供する知識とは異なった知識が交換されていると主張した。体験的知識の特性として挙げられるものは、①実用的・実践的であること、②今ここでの方向性、③全体的・包括的であることの3点である。これと似たもので、しばしば言及されるものとして、Antze (1976) が提唱した「イデオロギー」という概念がある。これは、メンバーに変化をもたらす SHG 独特の凝縮された世界観のセットを意味している。Antze は、SHG は、単なるエンカウンターグループや、告白を行う集団とは異なり、問題の扱い方についての一定の知恵と、それを参加者に伝える教育のシステムをもっていると言う。イデオロギーの多くは、本にまとめられていたり、例会の開始時に決まったやり方で引用されたりする。イデオロギーは、参加者たちに吸収されると、認識や態度を変える「解毒剤」としての役割をはたす。

以上の4つの説は、SHG が個人にもたらす機能としてしばしば言及される説である。これらは、それぞれ、実際に SHG がもつ一側面を表わしており一定の有効性をもっている。しかし、伊藤 (2009) が指摘するように、SHG において「語り」がもつ機能については、十分に注目されていない。「コミュニティの感覚」説では、人々の語りは、連帯感を強化する要因あるいはツールである。社会的学習説と援助者療法原理では、語りは役割モデルが探索されたり、実際に援助が行われたりするための手段もしくは媒介として捉えられている。「知識」の伝達説は、語られる内容を特徴づけているという点で、語りの捉え方としてはやや踏み込んだものとなっている。しかし、そこでも語りは、「体験的知識」あるいは「イデオロギー」といった実体的な知を伝える手段としての意味合いが強く、語るという行為がもつ意味を生成する機能や、その動的な側面は捉えられていない。

しかし、1990年代に入るとアメリカを中心に「語り」や「物語」に着目して理論的に SHG

を捉えようという研究が活発になり、SHGの機能を捉える際にも新しい視点が加わった。この点については、次節で詳しく見ていく。

### 1-2-3 SHGと専門職との関係についての先行研究

SHGと専門職との関係については、SHGと専門職やヒューマン・サービス機関との現在の関係、望ましい関係、可能な関係はどのようなものかといった点について議論がなされている。

専門職のSHGに対する見方も否定的なものや肯定的なものがあるが、Katz(1993/1997)は、今後専門職とSHGの間の接触が増えることが予想され、それぞれの側の妥当性と固有性を相互に尊敬し合える協力が望ましいとしている。SHGと専門職のお互いの態度（お互いのことを認めているのか、関わりたいと思っているのか）については、1980年代を中心に行われた調査結果を見ると、SHG側、専門職側の双方とも概ね肯定的であると考えられている（陰山,2002; Stewart,1990）。

専門職がSHGに関わるときの具体的な役割については、陰山(2002)がこれまでの欧米の調査結果をまとめている。最も多かったのは、会員の紹介であり、約6割から7割の専門職が行っている。また、SHGを立ち上げるときの支援、相談、会合への参加も比較的多く行われている。

専門職がSHGに関わるときの原則や留意点としては、①SHGが自律、自立した存在であることを認め、専門家が支配してしまわないこと、②SHGの体験的知識を尊重すること、③SHGの成長に伴って専門家の役割を適切に変化させること、などが挙げられる（板東,2008; 陰山,2002; Lavoie1994; 岡・Borkman, 2011; 三島,1998a）。①や②の原則に関して、三島(1998b)は、専門職がSHGに関わることによって、専門職の内側にある構えや専門職中心主義が持ち込まれ、それによってSHGの持つ独自の意味が喪失される危険性を指摘する。具体的には、メンバーによる自立性の喪失や、平等性の喪失、「イデオロギー」の喪失、SHGが専門職に支配されることなどである。他方で、専門職がSHGのアプローチを理想化し、自分自身の知識や専門性を卑下することによって、専門性を放棄してしまうことも問題である（三島, 1998a）。専門職は、SHGのアプローチを尊重しつつ、自身の専門性も保持し、両者を統合しながらバランスをとっていくことが必要になると考えられる。

③の原則に関連するものとして、岡・Borkman(2011)は、専門職の在り方として「セルフヘルプ・サポーター」という概念を紹介している。これは、SHGのメンバーではないが、SHGの自律性と優れた点を認める専門職や行政担当者等のことを差す。そして、その特徴の一つとして、専門職が必要だろうと判断した支援ではなく、グループ自身が必要と感じた支援を行うことを挙げている。SHGが発足するときには、専門職者からの支援が有用な場合も多い（中田, 1997）。しかし、活動が軌道に乗ってからもそれが継続すると、専門職者への依存となり、専門職とメンバーが対等な関係を維持することが困難になってしまうことも考えられる（中田, 2004; 三島, 1998a）。このように、専門職は、グループの状況やニーズを理解し、それに応じて自身の関わりを調節していくことも必要になる。

SHG と専門職の望ましい関係としては、お互いの妥当性や固有性を認め合い、対等な関係を築くことが主張されている（蔭山, 2002; Katz, 1993/1997; 中田, 2000; 松田, 2000 など）。蔭山（2002）は、SHG と専門職の関係モデルとして、パートナーシップモデルとコンサルテーションモデルを比較している。コンサルテーションモデルでは、SHG の課題をグループ自らの責任で自らが解決できるように専門職が導く。専門職は局外者であり、責任がなく、基本的に SHG の課題を解決すれば関わりは終了する。一方、パートナーシップモデルでは、SHG と専門職が共通した目的をもち、それを達成するためお互いの特性を活かした努力をする。SHG と専門職の両者が共に責任をもち、関わりを継続させていく。これは、関わることでお互いに利益があり、お互いに成長していくという関係である。蔭山（2002）は、特に地域を活動の基盤としている SHG の場合、SHG と専門職は、問題をもつメンバーが暮らしやすいまちづくりを行うという共通した目的があり、パートナーシップモデルが望ましいとしている。また、松田（2000）は、ソーシャルワークにとっての SHG の意味として、①クライアントとしての SHG、②社会資源としての SHG、③ソーシャルワーカーが成長する場としての SHG の 3つを挙げる。すなわち、SHG は、専門職にとって、支援する対象や、クライアントをリファーマする社会資源としての意味だけでなく、専門職自身が成長する場としての意味も持っており、そこでは、SHG と専門職が「ともに」学び、成長するという共生的な関係が想定されている。

このように、先行研究からは、SHG と協働していく上で、SHG を支配することなく、対等な関係性やパートナーシップを築いていくことが重要であることが分かる。しかし、具体的に、支配する関係、あるいは、対等な関係とはどのようなものであるか、また、どのようにして対等な関係を築いていけばよいのかという点は、十分に検討されていない。特に臨床心理学の分野においては、板東（2008）が指摘するように、専門家と SHG との関わりについての実践報告も少なく、知見が積み上げられていない。実際、専門職が SHG と関わりを持ちながら、対等な関係性を築いていくということはそう簡単なことではない。専門職は、まず、そのグループと継続的に関わり、グループのことを知らなければならない。しかし、そもそも問題を抱えた本人以外の参加を認めない SHG も存在し、また、参加を認める SHG であっても、専門職が現場に居続けることが難しい場合もある。

石川（2005）は、「ひきこもり」の集まりにおいて、当事者ではないが「ひきこもり」に関わる人々は、自分が“現場”にいる根拠を説得的に説明し、正当化しなければならないとして、彼らが“現場”に居続けるための実践を描き出している。そこでは、当事者との同質性と異質性のバランスの取り方が重要になったり、当事者と自分の関係を非対称的な「援助関係」ではないものとして、両者の対称性を維持しようとする試みがなされたりするとされる。また、松田（2006; 2010）は、援助専門職自身が SHG との関係を通して変わるという側面や、ソーシャルワーカーが SHG から何をj得ることができるのかという点を検討しているが、そこでは、専門職としての立場ではなく、問題を抱えた一個人として SHG と関わることや、その関わりが自らの専門性や専門職としてのアイデンティティを問い直す契機となる可能性が指摘されている。さらに、赤阪・サトウ（2015）は、自ら立ち上げた IBD 病者とその関係者が集う場を対象とし、場を観察

し記述する「研究者」、場を開きファシリテートする「実践者」、当該疾患の患者である「当事者」という多重な立ち位置を持つ自分自身の有り様を検討している。ここでは、特に会の立ち上げ当初は、自分の専門性の扱いへ扱い方やそれを明示することへの迷いが強かったことが述べられている。

このように、専門職の人々は、SHGにおいて常に「専門職」という固定した立場で振舞っているわけではなく、多重なポジションの間で揺らぎながら自分の立ち位置やグループとの関わり方を模索し、構築していると考えられる。そのため、SHGと専門職との関係を検討する上では、専門職が、グループの中でどのように振舞い、その活動にどのように参加しているのか、さらに、SHGのメンバーはそれをどのように捉えているのかといったことを具体的な文脈の中で明らかにしていく必要がある。

中田（1997）は、専門職とSHGとの関係についての先行研究を（1）依存と嗜癖、（2）ライフスタイル、（3）身体障害と病気、（4）家族の会という4つに分けて検討しているが、本来、多様なSHGと専門職との関係を十把一絡げにすることは不可能であり、それぞれのSHGを熟知した上での事例研究が望ましいとする。問題の性質やグループの展開過程に応じて、専門職の関わり方も異なってくるため、専門職は、個々のグループの性質や特徴を熟知した上で、グループが最大の機能を発揮できる関わり方を個別的に検討していく必要があるだろう。

#### 1-2-4 子どもの「非行」の問題で悩む親のSHGに関する先行研究

次に子どもの「非行」の問題で悩む親のSHGに関する研究の現状を見ていく。日本では、第1節で述べたように、活動に直接関わっている当事者や専門家からの実践報告はあるものの（木村・能登原・足立,2009; 春野, 2001; 2006; 2007 など）、研究は寡少であり、参加者にとってグループがどのように機能しているのかは明らかにされていない。研究として挙げられるものとして、藤原・辻川（2009）は、「我が子の非行と向き合う親の会」の参加者に面接調査を行い、6つの事例を検討して、親の会が同じ悩みを共有でき、自由に感情を吐き出せる場として重要な援助資源になっていると指摘している。ただし、この研究では、「親が我が子の非行を機に自身の未解決の葛藤に対する自己理解を深め変容していく」という前もって立てられた仮説の検討が中心で、参加者の体験プロセスや、その過程でグループが及ぼす影響については十分検討されていない。また、SHGの研究ではないが、関連があるものとして、保護観察所における家族に対するグループ・アプローチに関する研究が存在する。生島（1993）は、保護観察中の少年の家族にグループワークを実施した結果として、参加者にとって、共通の悩みを抱える親と知り合うことが心理的なサポートとなり、グループが、少年の加齢に伴う成熟を待つ間、家族を持ちこたえさせるための「癒しの場」としての機能を持つと指摘している。ただし、この研究も実践の事例検討による研究であり、「癒しの場」としての機能がどのように生じて、参加者の変化にどのように影響したのかという点は明らかにされていない。

海外でも、“Toughlove”という子どもの「非行」や問題行動に悩む親のグループが存在する。このグループは、1970年代に、カウンセラーであったPhyllis YorkとDavid Yorkが、彼ら自

身の子どもの問題に向き合う体験に基づいて設立した (York et al,1982)。その後、アメリカやカナダを中心に発展し、現在では、オーストラリアやニュージーランド、南アフリカにもグループが広がり、国際的なネットワークも存在している (TOUGHLOVE, 2016)。Toughlove については、1980 年代後半から 1990 年代前半を中心に、そのアプローチに関して研究がなされている。Lohman (1986) は、Toughlove のアプローチについて、アドラー心理学の理論と比較しながら検討を行っている。Toughlove には「10 の信条」と呼ばれる基本的な原則があり、これらは、親の権利と限界や、子どもに対する社会や文化の影響を強調している。Lohman (1986) は、この「10 の信条」について具体的に検討し、アドラー心理学の概念や方法と一致する点が多いことを指摘している。

また、Hollihan and Riley (1987) は、ロサンゼルスで開かれていた Toughlove のミーティングの参与観察を行い、Toughlove のストーリーが持つ特徴を明らかにし、その魅力とリスクについて検討している。この研究では、ミーティングで語られた重要なテーマとして、①「優しく思いやりのある世話」といった現代的な子育てのアプローチへの批判と、厳しいしつけに特徴づけられた伝統的な価値観への回帰、②専門職への批判、③既存の制度への批判とお互いの支え合いの重要性、④子どもへの限界設定、という 4 つのテーマが挙げられている。そして、Toughlove のストーリーは、親の自責感や挫折感を緩和する魅力をもつ一方で、親が設定した限界を守らない子どもを排除することや、子どもの様々な事情を考慮せず全ての行動上の問題に同じ改善法をとることによるリスクを伴うことを指摘している。

さらに、Everts (1990) は、ニュージーランドのオークランドにある Toughlove のグループの調査を行っている。そして、Toughlove の基本的なプログラムにより、多くの参加者が、問題の経験が自分だけではないと知ること、問題について率直に分かち合うこと、賛同や説明の要求を受けること、新しい熱意と行動のプランを持つこと、といった結果に対する満足感を抱いている一方で、グループには様々な課題もあり、グループのプロセスや、参加がもたらす効果についての研究の必要性を指摘している。

これらの研究は、Toughlove のアプローチの特徴やそれが参加者に及ぼす影響などを検討しており興味深い。ただし、Toughlove のアプローチには、当時アメリカで提唱されていた子育てのアプローチへの批判や、アメリカの伝統的な価値観への回帰を主張する側面を含み、日本の子どもの「非行」の問題で悩む親の SHG に直ちに適用できるものではないと思われる。また、Toughlove に対する研究自体が多くはなく、グループが参加者にとってどのように機能しているのかという点は十分に解明されていない。

### **第 3 節 ナラティブ・アプローチと先行研究の課題**

第 2 節で見たように、SHG の参加者に対する機能を捉えようとする先行研究は多いが、その理論的な統合はなされていない。その中で、近年有力になっているものが、ナラティブ・アプローチである。これは、SHG が参加者個人に対してどのように機能するかという問題について、

語りに注目することで説明しようとする。本項では、1990年代以降活発になった、SHGを「語り」や「物語」という概念を使って捉える先行研究について概観し、その特徴や意義を整理するとともに、今後の課題を検討する。

### 1-3-1 ナラティブ・アプローチ

1990年代以降、SHGを「物語」という概念を使って捉える研究が増加したが(Davis & Jansen, 1998; Humphreys, 2000; 伊藤, 2005; 伊藤, 2009; 伊藤, 2010; Mankowski & Rappaport, 2000; Rappaport, 2000 など), そういった動きに大きな影響を与えたものとして Rappaport (1993) の論文がある。Rappaportによれば、従来の専門家の見方は、SHGを、専門家サービスに対する代替的なサービスを提供するものとして捉えるものであった。Rappaportが共同研究者たちと行った800人以上の専門職に対する調査によれば、SHGを肯定的に見ている専門職でも、常に専門職援助の方がSHGよりも優れていると考えていた。Rappaportはこれを、「専門家中心主義 (professional centrism)」と呼んだ。そして、SHGが、専門職集団と同じように、ある種のサービスの提供主体として捉えられている限り、比較の基準は、メンバー自身によって判断される社会的アイデンティティではなく、専門家によって判断される治療効果のデータに限定され、SHGは二番目のものとししか評価されないとする。そこで、彼がメンバー自身の意味付けや体験を探求するために導入したのが、「語り」への注目、すなわち、ナラティブ・アプローチであった。

ナラティブの視点から考えると、SHGとは専門的治療の代替物ではなく、独自の機能を持つものである。Rappaportによれば、SHGは「ナラティブ・コミュニティ (narrative community)」として捉えられる。グループには、多くのメンバーによって繰り返し語られる「コミュニティ・ナラティブ (community narrative)」があり、それは、メンバーたちの「個人の物語 (personal story)」に取り入れられ、個人のアイデンティティの変化の基礎として働く。ここでは、SHGの参加者は、単なるサービスの受け取り手ではなく、個人の物語を変化させ、新しいアイデンティティを作り出す主体として認識されている。

また、Davis & Jansen (1998) も同様の視点から、Alcoholics Anonymous (以下、AA) をナラティブ・コミュニティとして捉え、「無力」「病気」「ハイパーパワー」といった言葉がAAにおいても象徴的な意味を説明していく。彼らによれば、AAというコミュニティは、参加者に、個人の物語を再構築するために使える豊かなストーリーと、安全な場所を提供する。また、Humphreys (2000) も、コミュニティのナラティブと個人の物語の相互作用という視点でAAを捉え、AAで語られる5つの物語のタイプを紹介し、これらが参加者やグループに及ぼしている機能を明らかにしている。日本においても、伊藤 (2005; 2009; 2010) や野口 (2005) が、SHGをナラティブ・コミュニティとして捉え、断酒会や、死別体験および吃音のSHGなどの研究を行っている。

### 1-3-2 ナラティブ・アプローチの特徴と意義



SHG に対するナラティブ・アプローチには、以下の4つの特徴や意義があると考えられる。

一つ目は、SHG の参加者を主体的な存在として捉え、参加者の語りに注目することによって、参加者の視点から SHG の意義や機能を検討することである。これは、Rappaport (1993) が指摘した専門家中心主義を避けるという効果のほか、SHG やその参加者の声を聞き、エンパワメントするという実践的意義を持つ (Rappaport, 1995)。

二つ目は、ナラティブという概念を活用することで、参加者個人の変化を、グループや社会的なプロセスと結びつけて理解しようとするすることである。ナラティブ・アプローチでは、参加者一人ひとりの「個人の物語」、その SHG が持つ「コミュニティ・ナラティブ」、そして「支配的な文化ナラティブ<sup>4</sup>」が相互に影響し合うという視点を持つ (Monkowski & Rappaport, 2000; Rappaport, 2000)。ナラティブ・アプローチのメリットとして、個人から社会に至るまでの分析のレベルを結びつけ、そのダイナミックな関係性を検討することができるという点がある (Rappaport, 1998)。

三つ目は、これまで先行研究で挙げられてきた SHG の機能のある程度統合的に説明できるという点である。第2節で提示した、コミュニティの感覚の生成、社会的学習、援助者療法原理、体験的知識やイデオロギーの伝達といった機能は、いずれも、グループで自らの体験を語り、他の参加者の語りを聞くという、語り合いの相互的なプロセスの中で生じていると考えることができる。また、体験的知識やイデオロギーといった概念も、コミュニティ・ナラティブの一つとして、包括的に検討することができる。コミュニティ・ナラティブは、体験的知識やイデオロギーといった固定的な概念に比べ、グループの中で構築され、変化していく、流動性をもったものとして捉えられる。ナラティブ・アプローチにおいては、そうした機能が生じる条件や、それが参加者に影響を及ぼしていくダイナミックな過程について検討することが可能である。

四つ目に、SHG と専門職との関わりや協働を考える際にも、ナラティブ・アプローチは有用な視点をもたらす。SHG をナラティブ・コミュニティとして捉えると、専門職が、そのグループのナラティブや、それが構築されるプロセスにどのように関与しているかが重要になる。このような視点は、専門職のどのような関わりが SHG の自律性を妨げる「支配」につながってしまうのか、或いは、どのように関われば SHG と「対等」な関係を築けるのかということを考える手がかりになると思われる。また、ナラティブ・アプローチは、当事者の声を聴きエンパワメントを促進するだけでなく、当事者と、研究者や専門家との協働の可能性を広げるという意義も持つ (Rappaport, 1995)。

### 1-3-3 ナラティブ・アプローチに基づく先行研究の課題

このように、ナラティブ・アプローチは、SHG の機能を捉える上でも、また、SHG と専門職との関わりを考える上でも有用であると考えられる。しかし、ナラティブ・アプローチに基づく

---

<sup>4</sup> Rappaport (2000) は、3つのレベルのナラティブを「個人の物語」(personal story)、コミュニティ・ナラティブ (community narrative)、支配的な文化ナラティブ (dominant cultural narrative) という用語で記述しているが、本研究では、“dominant cultural narrative”については、「社会的ディスコース」という用語で表現する場合もある(第2章第1節で詳しく述べる)。

先行研究にはいくつかの課題がある。

まず、Rappaport (1993) は、コミュニティ・ナラティブが、個人の語りや体験に取り入れられていくという仮説を提示しているが、具体的にどのようなプロセスでそれが生じるのかという点は十分に明らかにされていない。ナラティブに注目する研究においても、参加者間の個々の違いに注意することなく、コミュニティ・ナラティブの持つ文化的なメッセージを強調したり、逆に、コミュニティ・ナラティブには関心を持たず、参加者個人のライフストーリーを強調したりする研究が多く、両者の関係性に注目している研究は少ない (Rappaport, 1993)。その中で前述した、Davis & Jansen (1998) や Humphreys (2000) は、コミュニティのナラティブと個人のライフストーリーが相互作用するという視点で AA の物語を分析している。これらの研究では、コミュニティ・ナラティブの特徴や、それが参加者に対して持つ機能を検討しているが、個人の語りや体験が、コミュニティ・ナラティブと関わりながら変化していくプロセスについては、十分検討できていない。日本では、伊藤 (2009) が、断酒会および死別体験の SHG で語られる参加者の物語を描き出し、それを社会的文脈との関連でも論じている。ただ、伊藤 (2009) の主な関心は、SHG を自己物語構成の場として提示することであり、語りの変化や語りの背後にある参加者の体験の変化には、重点が置かれていない。

このように、ナラティブ・アプローチに基づく先行研究は、検討されている SHG の種類が限られている上、現状ではナラティブの内容や特徴を取り出す研究が多く、そのダイナミクスは理論的に仮定される一方で、実証的にはあまり検討されてこなかった。特に、臨床心理学的関心からは、参加者個人の語りや体験が、コミュニティ・ナラティブや社会的なディスコースと関連し合いながら変化していくプロセスや、その過程でどのようにしてオルタナティブな語りが構築されていくのかを明らかにすることが求められる。ナラティブ・アプローチのメリットの一つに、個人の語りや体験と、社会的なプロセスを結びつけ、そのダイナミックな関係性を検討することができるという点があるが (Rappaport, 1998)、その視点の有用性を活かした研究が求められる。

二つ目に、コミュニティ・ナラティブという概念をどのように捉えるかという問題がある。Rappaport (1993) の理論的枠組みでは、SHG には、グループに固有のコミュニティ・ナラティブがあると仮定される。しかし、コミュニティ・ナラティブ (「共同体の物語」とも訳される) という概念は、使い方によっては弊害をもたらす場合もある (伊藤, 2013)。水津 (2013) は、ある物語を「共同体の物語」と名指すと、それこそが SHG の目標だと思われがちであり、参加した人は誰でもその「共同体の物語」を目指すのが望ましい、という見方が含まれるのではないかと指摘する。そして、自死遺児の事例の分析を通じて、必ずしも「語ること」のみが SHG を成立させているわけではなく、「語らない」「語ることのできない葛藤」を承認すること、沈黙の共有それ自体が SHG において重要であると言う。伊藤 (2005) も、吃音のセルフヘルプ・グループ言友会の自己物語を分析する際に、参加者の語りの中に、共同体の物語に適合しない「ためらいの声」が存在することを指摘する。そして、言友会は、複数の声が緊張関係を持って絡み合う場としてとらえられるべきであるとしている。

このような視点は、SHG に対する批判的な研究の中でより明確な形で指摘されている。例えば、Frank (1995/2002) は、ある癌患者の SHG を次のように描いている。そこでは、グループのメンバーの大半は癌から立ち直って寛解の状態にあり、ほとんどの人が、自分の名前とどんな種類の癌にいつかかったのかを言い、語りの最後に声の調子を上げて「今は元気です！」と締めくくっていた。しかし、まだ治療を継続している一人の女性が自分の癌について話すうちに泣き出してしまった。これに対してグループは、彼女の話をそこで終わらせて、次の話し手に話を始めるように促した。そして、次の語り手は、非常に簡潔に自己紹介を済ませ、特に力を込めて「今は元気です」と言葉を継いだという。ここで Frank によって描かれているグループは、そのグループのコミュニティ・ナラティブである「回復の物語」に対する選好を示し、それ以外の物語を拒絶する場である。女性が語ろうとした苦しみは、グループのナラティブに合わないために、排除されてしまっている。このように、コミュニティ・ナラティブは、それに沿わない語りを抑圧する可能性も持っている。

そのため、コミュニティ・ナラティブについて検討する際には、どのようにしてコミュニティ・ナラティブがグループの中で醸成されているのか、それに沿わない語りはどのように扱われているのかといった点にも注意を払う必要がある。例えば、酒井・宮坂 (2013) は、アルコール依存症者の SHG である断酒会において、〈集団〉での語り合いが、どのような仕組みで参加する〈個人〉を断酒継続のための規範に従わせているのかを検討している。そして、断酒会においては、飲酒に結びつく内容が含まれている発言に対しては、直接性や批判性を緩和したやわらかい修正が行われることがあり、独特の断酒継続の仕組みが存在することを示唆している。こうした点を踏まえると、コミュニティ・ナラティブ自体も、静的・固定的な対象としてではなく、参加者の語りやそのやりとりの中で醸成されているダイナミックなものとして検討する必要がある。

野口 (2005) は、「ナラティブ・コミュニティ」の概念は、グループがひとつの物語を共有する場（「物語の共同体」）であると同時に、ひとびとが互いに語り合う場（「語りの共同体」）であるという二つの意味を含むものとして理解する必要があると言う。先行研究では、SHG の「物語の共同体」としての側面は捉えられてきたが、野口 (2005) の言う、「語りの共同体」としての側面、すなわち、SHG において、個人のオルタナティブな語りや、コミュニティ・ナラティブがどのように構築されているのかという点は、十分に検討されてこなかった。しかし、ナラティブ・コミュニティとしての SHG の機能は、オルタナティブな語りを構築していく実践と深く関連しており、コミュニティ・ナラティブの特徴を明らかにするだけでは見えてこない。具体的な参加者の語りや、参加者間のやりとりに着目し、そこでコミュニティ・ナラティブがどのように活用され、オルタナティブな語りの構築がどのように実践されているのかを明らかにしていくことが求められる。

三つ目の課題として、SHG と専門職との関わりをナラティブ・アプローチの視点から捉え直すことが挙げられる。Rappaport (1998; 2000) は、心理学者や研究者の役割として、社会的に弱い立場にあり、社会で支配的なナラティブしか利用できない人々が、オルタナティブなナラティブを発見し、創造し、利用できるようにするのを援助することを挙げている。ナラティブ・ア

アプローチの視点からは、専門職が、コミュニティと協働して、オルタナティブな語りが構築されるプロセスを促進したり、活性化したりすることが期待されている。こうした語りの構築への関与という視点は、専門職の具体的なSHGへの関わり方を検討する上で有用であると考えられる。しかし、ナラティブ・アプローチに基づく研究においても、専門職や研究者が、どのような関わり方をしているか、および、どのような関わり方をすれば、SHGにおけるナラティブの構築を促進することができるのかという点は検討されていない。実際には、その関わりが、オルタナティブな語りの構築を妨害したり、抑制したりしてしまう可能性もある。第2節で述べたように、SHGと専門職との関わりを検討する上では、専門職がグループの中で具体的にどのように振舞い、その活動にどのように参加しているのかを検討していく必要がある。語りの構築への関与という視点から、専門職の具体的な関わりを明らかにしていくことが求められる。

## **第4節 本研究の目的と構成**

本節ではここまでの議論をまとめ、求められる研究について整理した後、本研究の目的および意義を明らかにする。また、本研究の概要と構成を提示する。

### **1-4-1 求められる研究**

第1節で述べたように、本研究の問題関心は、「非行」の子どもをもつ親たちのSHGが、参加者にとってどのような機能を果たしているのかを探求し、それによって、心理臨床活動において参照枠となる知見を得るとともに、専門職のSHGへの関わり方や協働の可能性について検討することである。本項では、まず、前節までに見てきた先行研究から明らかになった課題を整理し、本研究に求められることを述べる。

**「語り」に注目した質的研究** まず、日本において、「非行」の子どもをもつ親たちのSHGに関しては、先行研究がほとんど存在しないことから、質的、仮説生成的な研究が求められる。そして、参加者の視点からSHGの機能を捉えるという点や、グループとの協働の可能性を探るという点から、参加者の「語り」に注目し、参加者自身の意味や経験を探索するナラティブ・アプローチが適切と考えられる。

**参加者の語りや体験が変化するプロセスを明らかにする** 前節で述べたように、Rappaport (1993) は、コミュニティ・ナラティブが、参加者の語りに取り入れられ、参加者の語りや体験、アイデンティティが変化していくという理論的な枠組みを提示しているが、その具体的な変化の過程については、十分に明らかにされていない。心理臨床活動において有効な参照枠となる知見を得るためには、参加者の変化のプロセスを丁寧に見ていくことが必要になる。コミュニティ・ナラティブとの相互作用に注目しながら、個人の語りや体験の変化を明らかにすることが求められる。

**語りを構築する実践への注目** ナラティブ・アプローチに基づく先行研究においても、SHGが持つ「語りの共同体」としての側面、すなわち、SHGにおいて、個人の語りやコミュニティ・

ナラティブがどのように構築されているのかという点は、十分に検討されてこなかった。しかし、ナラティブ・コミュニティとしての SHG の機能は、オルタナティブな語りを構築していく実践と深く関連しており、具体的な参加者の語りの行為や、グループの中での参加者間のやりとりに着目し、語りが構築されるやり方やプロセスを明らかにしていくことが求められる。

**専門職の語りの構築への関わりの検討** 専門職の SHG への関わり方や協働の可能性を検討するためには、専門職が、グループの中でどのように振舞い、その活動にどのように参加しているのか、さらに、グループの参加者はそれをどのように捉えているのかといったことを、具体的な文脈の中で明らかにしていく必要がある。本研究が対象とする「非行」と向き合う親たちの会では、親の立場の人だけでなく、専門職など様々な立場の人が参加し、関わっている。親以外の立場の参加者も、グループに関わる際には、様々な形で語りの構築に関与していると考えられるが、先行研究では、その点が明らかにされておらず、語りの構築との関係で専門職の関わりを検討していく必要がある。

#### 1-4-2 本研究の目的とリサーチクエスチョン

前項では、先行研究の課題を踏まえて、本研究で求められることとして、①質的・仮説生成的な研究、②ナラティブ・アプローチの適合性、③参加者の変化のプロセスを明らかにすること、④語りが構築されるやり方やプロセスへの注目、⑤専門職の語りの構築への関わりの検討という5つの点を挙げた。

これを踏まえて、本研究では、「非行」と向き合う親たちの SHG において、参加者の語りや体験がどのように変化し、また、その変化の過程において、グループがどのような影響を及ぼしているのかをナラティブ・アプローチの視点から質的に検討する。そして、特に、オルタナティブな語りを構築する実践の特徴や、それに影響している文脈について注目し、「非行」と向き合う親たちの SHG が、ナラティブ・コミュニティとしてどのような特徴や機能を持っているのかを明らかにすることを目的とする。

本研究では、以上の研究目的を探求する上で、以下の3つのリサーチクエスチョンを立てる。

- ① 親たちの会に参加することで親の語りや体験はどのように変化するのか
- ② 参加者はどのようにしてオルタナティブな語りを構築しているのか
- ③ 専門職は親たちの会における語りの構築にどのように関わっているのか

3つのリサーチクエスチョンを探求することを通じて、最終的に「非行」と向き合う親たちの SHG の実践のもつ特徴や機能について検討を行う。

#### 1-4-3 本研究を行う意義

まず、本研究で検討する、親の参加者の語りが増え、変化していく過程や、オルタナティブな語りを構築していくやり方に関する知見は、子どもの「非行」や問題行動で悩んでいる親への臨床心理学的な支援を行う際に役立つと考えられる。

また、本研究では、Rappaport (1993) のナラティブ・アプローチにおける理論的枠組みを活用しながら、先行研究で十分に検討されてこなかった個人の語りとコミュニティ・ナラティブの間のダイナミクスや、オルタナティブな語りが構築されるやり方やプロセスに焦点を当てる。本研究は、ナラティブ・アプローチの理論的仮定を実証的に示す研究として意義があり、また、これまで扱われてこなかった語りが構築されるダイナミックな過程を明らかにすることで、ナラティブ・アプローチに基づく SHG 研究の発展に寄与することが期待される。

さらに、語りの構築に対する専門職の関わりを検討することで、専門職が SHG と関わり、協働的な関係を築いていく上で役立つ知見を得られることが期待される。加えて、本研究で得られた SHG の意義や機能に関する知見は、グループにフィードバックすることで、グループのメンバーが実践を振り返り、より充実したものにしていく 1 つのきっかけとなる可能性を持ち、コミュニティ心理学における実践的な意義も持つ。

#### 1-4-4 本研究の構成

第 1 部では、本研究の問題および目的を提示すると共に、本研究全体に係わる方法について記述する。第 1 章では、先行研究を概観した上で、本研究の目的およびリサーチクエスチョンを明らかにした。第 2 章では、本研究で用いる理論的枠組み、調査フィールド、そして筆者とフィールドとの関わりについて記述する。

第 2 部では、一つ目のリサーチクエスチョンを明らかにするため、参加者である親の語りやその背後にある体験が変化するプロセスについて検討する。第 3 章では、NPO 法人が主催し、筆者も参加して行われた調査研究プロジェクトにおけるアンケート調査の結果を示しながら、子どもが「非行」に走ったときの親の体験について記述する。第 4 章では、参与観察およびインタビューによって得られたデータを分析し、参加者の語りや体験が変化していくプロセスについてより詳細に検討する。

第 3 部では、二つ目と三つ目のリサーチクエスチョンを明らかにするため、SHG における語りの構築について検討する。第 5 章では、社会で支配的なディスコースや、親たちの会におけるコミュニティ・ナラティブとの関係で、参加者がどのようにしてオルタナティブ・ストーリーを構築しているのかを検討する。第 6 章では、参加者間のやりとりの中で生じる笑いの共有という現象に着目し、それが語りの構築にどのように関与しているのかを検討する。また、第 7 章では、専門職などの親以外の立場の参加者が語りの構築にどのように関与しているのかを検討する。

第 4 部では、総括として、これまでの知見をまとめ、「非行」と向き合う親たちの SHG の特徴や機能について論じる。また、臨床心理学的援助（実践および研究）における本研究の知見の意義や今後の課題について論じる。

図 1-1 は以上の説明を踏まえ、本研究の流れを図示したものである。

## 第1部 研究の展望

### 第1章 問題と目的

- ・「非行」に走った子どもの親に対する批判的なディスコースと SHG の存在
- ・SHG に関する先行研究
- ・ナラティブ・アプローチの意義と課題：参加者の語りが変化するプロセスや、オルタナティブな語りがどのように構築されているのかは十分検討されていない、専門職が語りの構築にどのように関わることができるのかという点も明らかにされていない

**目的**オルタナティブな語りを構築する実践の特徴や、それに影響している文脈に注目し、「非行」と向き合う親たちの SHG が、ナラティブ・コミュニティとしてどのような特徴や機能を持っているのかを明らかにする

**RQ**①親たちの会に参加することで親の語りや体験はどのように変化するか、②参加者はどのようにしてオルタナティブな語りを構築しているのか、③専門職は親たちの会における語りの構築にどのように関わっているのか

### 第2章 方法論とフィールド

本研究全体に係わる理論的枠組み、調査フィールド、フィールドとの関わり

## 第2部 親たちの会における参加者の語りの変化

### 第3章 研究1：子どもの「非行」で悩んだ親たちの体験

### 第4章 研究2：「非行」と向き合う親たちの語りの変化

## 第3部 親たちの会における語りの構築

### 第5章 研究3：ディスコースの中での語りの構築

### 第6章 研究4：やりとりの中での語りの構築

### 第7章 研究5：親以外の参加者の語りの構築への関わり

## 第4部 総合考察

### 第8章 本研究のまとめ：「非行」と向き合う親たちの SHG の特徴と機能

### 第9章 本研究の意義と課題

- ・臨床心理学的意義と SHG 研究における意義
- ・限界と今後の課題

図 1-1 本研究の構成

## 第2章 方法論とフィールド

第2章では、本研究全体に係わる方法論と、調査フィールド、そして、筆者とフィールドとの関わりについて記述する。第1節では、本研究で採用する理論的な枠組みを明らかにする。第2節では、本研究における調査フィールドである「非行」と向きあう親たちの会について、その選定の理由を含めて述べる。第3節では、筆者とフィールドとの関わりについて記述する。

### 第1節 理論的枠組み

---

本節では、本研究で用いる理論的な枠組みについて述べる。本研究は、エスノグラフィーという文脈性を重視したアプローチを採用し、ナラティブ・アプローチに基づき、「語り」が構築されるプロセスを多角的な視点から捉えようと試みる。

#### 2-1-1 エスノグラフィー

本研究では、エスノグラフィー (ethnography)<sup>5</sup>という方法論を採用した。エスノグラフィーは、質的調査研究の方法論の一つであり、ある社会的事象に密着しながら理論的考察をするための諸前提や諸技法の総体である(小田, 2010)。エスノグラフィーという方法論を用いて行われる研究では、具体的に用いられる調査や分析の方法は多様であるが、研究を進めていく上でのある種の共通する構えや特徴がある。ここでは、エスノグラフィーという方法論がもつ構えや特徴を整理した上で、本研究でこの方法論を採用する理由や意義について述べる。

**エスノグラフィーの特徴** エスノグラフィーは、1920年代の文化人類学と社会学において確立された、人間の質的理解のための方法である。近年、教育学、看護学、医学、歴史学、言語学、経営学などでも用いられるようになり、1980年代後半から1990年代前半にかけて心理学の研究法としても導入された(Flick, 1995/2002; 柴山, 2004)。エスノグラフィーは、ある社会的事象について、その事象を文脈も含めて捉えることを特徴とし、フィールドワークが重要な調査方法として用いられることが多い。

エスノグラフィーの研究方法論としての特徴は、標準化の程度の低さである。決まった特定のやり方があるわけではなく、エスノグラフィーは、それぞれの調査対象や研究設問の特性に応じて集めるべきデータの種類と集め方、データ分析の仕方、結果の発表の仕方などを臨機応変に選んでいく。その際には、参与観察法、面接法、質問紙調査法、文献収集など異なった種類のデータや方法を組み合わせるトライアンギュレーションやマルチメソッドと呼ばれる多角的な手法が行われることが多い(小田, 2010; 佐藤, 1992)。これは、それぞれの技法の長所を生かし、

---

<sup>5</sup> 「エスノグラフィー」という言葉には、①特定のフィールドについて記述した報告書という意味と、②報告書を生み出すための研究方法という二つの意味があるが(柴山, 2004)、ここで主に見ていくのは、②の研究方法としてのエスノグラフィーである。



他方ではそれぞれの技法に特有の短所を補い合っていくことで、多面的なデータを収集し、記述を厚くする意義を持つ。このような特徴は、エスノグラフィーの起源と関連する。エスノグラフィーは、もともと文化人類学において「他者」と出会うことから始まった。他者の世界を自己の手持ちのやり方に押し込むのではなく、他者の意味世界を捉えて、内側から描き出すためには、できるだけ標準化・規格化されていない方法、他者との対話的な関係の中で即興的に進めていく方法が適切となる（小田, 2010）。

このように、エスノグラフィーで用いられる方法は多様かつ柔軟であるが、そこには共通する特徴がある。柴山（2004）は、エスノグラフィーの特徴として、①人びとの生活に参加して、人びとの視点から生活世界や意味世界を理解すること、②細部を厳密に見ると同時に全体の構造や文脈も把握すること、③フィールドを熟知すると同時に、常に異人としての目も持ち続けること、④データ収集と収集しつつあるデータの分析を同時に行い、研究設問を柔軟に練り上げていくこと、の4点を挙げている。ここで挙げられている、現場性、現場の人々の意味世界の探求、文脈の重視、フィールドとの関係のとり方、研究プロセスの循環性といった要素は、いずれもエスノグラフィーを用いた研究では重要な点である。

**エスノグラフィーを採用する理由と意義** 本研究でエスノグラフィーという方法論を採用した理由は、以下の3つの点である。

まず、本研究は、「非行」と向き合う親たちの会というSHGの具体的な文脈に注目しながら、参加者の語りや体験の変化を明らかにし、参加者の視点からグループが持つ機能や意義を検討することを目的としている。そのため、現場性、現場の人々の意味世界の探求、文脈性を志向するエスノグラフィーという方法論は、本研究の目的と合致していると考えられた。

また、本研究では、SHGにおける参加者の語りやコミュニティ・ナラティブが構築されるプロセスについて検討を行うが、エスノグラフィーは、ナラティブ・アプローチとも適合し、個人やコミュニティのナラティブを把握する上で役立つツールとなる（Case et al., 2014）。エスノグラフィーの利点の一つに、多様な方法でデータを集められることがある。コミュニティ・ナラティブに関する情報は、文書、口述の伝承、物理的な空間や建物、展示品、歌、詩、食べ物、儀式、商品、メディア、政治団体、サービス、雑誌など多様な資源からもたらされる。これらの資源にアクセスするための方法も、多様であるべきであり、エスノグラフィーは、柔軟で文脈に適合し、コミュニティに根差した研究のやり方をもたらすことができる（Harper et al., 2004）。本研究においても、第3節で述べるように、筆者自身がグループの様々な活動に参加するようにして、文書、活動が行われる場のセッティング、合唱、劇など様々な資源に触れることを心がけた。

さらに、エスノグラフィーは、深い文脈的な理解、主観的な意味づけ、関係性の構築、プロセスへの注目といった点を強調するが、これは、多様性、文脈性、文化、アクションといったコミュニティ心理学の中心的な価値と一致し、これを促進する強力なツールとなる（Case et al., 2014）。本研究では、コミュニティ心理学的な関心から、専門職や研究者がSHGと関わり、協

働的な関係を築いていく上で役立つ実践的な知見を得ることも目指しており、エスノグラフィーのアプローチは、SHGと専門職の関わりを検討する上でも適切な方法論であると考えられた。

本研究では、以上の理由からエスノグラフィーのアプローチを採用し、調査法としては、参与観察とインタビューを併用し、また文書資料もデータとして活用した。

## 2-1-2 ナラティブ・アプローチ

第1章でも述べたが、本研究では、ナラティブ・アプローチの枠組みを活用し、「語り」が構築されるプロセスを多角的な視点から捉えようと試みる。ここでは、ナラティブ・アプローチで用いられる概念について簡単に整理をした後、本研究で語りをどのように捉えるか述べる。

**ナラティブ・アプローチ** ナラティブ・アプローチという立場について、野口(2005;2010)は、「ナラティブという形式を手がかりにして、なんらかの現実接近していく方法」として定義している。ナラティブ・アプローチは、ナラティブやストーリー<sup>6</sup>という概念を、理論構成や実践の核心に据えたさまざまなアプローチの総称であり、その概念の指し示す対象は様ではない(野村,2004)。このアプローチは、研究目的にも実践目的にも使用され、臨床心理学においても、研究と実践の双方に広範な影響を与えている(McLeod,1997/2007;2001/2007など)。ナラティブ・アプローチが広まった背景には、いわゆるナラティブ・ターンと呼ばれるナラティブや語りに対するポストモダン的な見方の転換がある。ここでは詳述しないが、端的に言うと、ナラティブは、自己の経験を組織化し意味づけるものとして働くこと、そして、語り手と聞き手によって共同生成されるダイナミックなプロセスであるという認識である(Bruner,1990/1999;やまだ,2000)。

ナラティブ・アプローチは、現実がナラティブという形式となんらかの関係をもつという前提をもつ。ナラティブの捉え方として、ナラティブのなかに何らかの本質が隠されている(本質主義)と考えるか、ナラティブがなんらかの現実を構成する(構成主義)と考えるかによって研究や実践の方向性は異なってくる(野口,2010)。本研究は、ナラティブの捉え方として後者の視点をとる。すなわち、現実や意味は、他者との関係性の中で言語的共同作業によって構成される(Gergen,1999/2004)という社会構成主義<sup>7</sup>の見方を踏まえて、語られるナラティブも、関係性の中で構成されたものであり、それ自体も現実の構成に影響していくと捉える。このようなナラティブの捉え方は、ナラティブ・セラピー(McNamee & Gergen,1992)におけるナラティブの捉え方と共通するもので、本研究の知見を心理臨床の実践に活かす上でも有効であると思われる。

---

<sup>6</sup> 本研究では、*narrative*と*story*を互換的なものとして考えながら、*Rappaport*の使い分けに倣い、基本的には、グループの語り・物語を指すときには、ナラティブ(*narrative*)という用語を、個人の語り・物語を指すときにはストーリー(*story*)という用語を用いる。ただし、ドミナント・ストーリーとオルタナティブ・ストーリーという用語においては、そのままストーリーという言葉を使用する。

<sup>7</sup> 社会構成主義とは、バーガーとルックマン(Berger & Luckmann,1966/1977)の「現実社会的に構成される」という議論を出発点として多様な領域で展開していったひとつの理論的立場を指す。

**SHGにおけるナラティブ・アプローチ** 第1章でも述べたが、Rappaport (1993) は、SHGをナラティブ・コミュニティとして捉える見方を提唱した。ナラティブ・アプローチの枠組みでは、「個人の物語 (personal story)」、「コミュニティ・ナラティブ (community narrative) <sup>8</sup>」、「支配的な文化ナラティブ (dominant cultural narrative)」という3つの層のナラティブが想定されている (Monkowski & Rappaport, 2000; Rappaport 1993; 1998; 2000)。「個人の物語」は、ライフストーリーのような、その人物に固有の、出来事に対する認識の表現や社会的なコミュニケーションのことを差す。「コミュニティ・ナラティブ」は、多くのメンバーによってくり返し語られる語りであり、グループの人々に共通するストーリーである。それは、社会的なやりとり、文書、写真、パフォーマンス、儀式など様々な形で共有される。「支配的な文化ナラティブ」は、マスメディアやその他の大きな社会的・文化的組織やネットワークで伝えられ、過剰に学習されたストーリーである。そして、その時代、場所で生きている大半の人々の一般的な価値、信念、アイデンティティに影響を与えている。「個人の物語」、「コミュニティ・ナラティブ」、「支配的な文化ナラティブ」は相互に影響し合っていると考えられる (Monkowski & Rappaport, 2000; Rappaport, 2000)。そのため、その相互関係や影響に注目することで、個人の語りや経験を社会的なプロセスとの関係で理解していくことが可能になる。本研究においても、この3種類の概念を用いながら、SHGにおいて語りが構築されるプロセスを検討する。

**ディスコースという視点** 「支配的な文化ナラティブ」という概念は、第1節で少し言及したディスコース (言説) という概念と重なるものである。ディスコースという用語は、様々な意味で用いられる<sup>9</sup>が、私たちが共有している社会文化的な枠組みのことを意味し (綾城, 2015), Burr (1995/1997) の定義によれば、「何らかの仕方でまとまって、出来事特定のヴァージョンを生み出す一群の意味、メタファー、表象、イメージ、ストーリー、陳述等々」を指す。ナラティブとディスコースという概念は、重なる部分もあるが、ディスコースという概念は、特に、個人の発話や行動をコミュニケーションの過程の中でダイナミクスに作り上げられるものとして捉え、それが社会文化的な影響を受けて構築されていることを重視する (能智, 2015)。ディスコースという概念を用い、言葉の使用を通してどのように現実が構成されたり、達成されたりするのかを検討する方法として、ディスコース分析という手法がある (Willig, 2001/2003)。ディスコース分析は、様々な目標や理論的背景を持つ、きわめて多様な研究を包含しており、統一した方法が定まっているわけではない (Burr, 1995/1997; 鈴木, 2007; Woofit, 2005)。しかし、「言語を様々なレベルの文脈の中での意味が生成されるものとして見ること」「言語をそれが発せられる場に対する働きかけと見ること」といった共通した視点を持っており (能智, 2015), 語りが構築される様相を問う際には、ディスコース分析の視点が有用である。本研究では、特に

<sup>8</sup> コミュニティ・ナラティブは、「共同体の物語」と訳されることが多いが (例えば、伊藤, 2013 など)、「物語」という言葉は、語られた内容に焦点が当てられ、固定的なイメージを喚起しやすいと思われるため、本研究では、コミュニティ・ナラティブという用語を用いる。

<sup>9</sup> ディスコースは、本文で説明した「言説」という意味のほか、「ひとまとまりの現実の言語表現」のことを指す場合もあり、この場合は「談話」という訳語があてられることが多い (能智, 2015)。

第5章でディスコース分析を用いた研究を行う。それに伴い、Rappaport の言う「支配的な文化ナラティブ」については、「社会的ディスコース」という用語で表現することがある。

**ドミナント・ストーリーとオルタナティブ・ストーリー** 野口 (2005) は、SHG をそれまでの支配的な物語 (ドミナント・ストーリー) とは異なる新たな物語 (オルタナティブ・ストーリー) を生み出す場として捉えている。ドミナント・ストーリーとオルタナティブ・ストーリーという概念は、ホワイトとエプストンのナラティブ・セラピー (White & Epston, 1990/1992) で有名になった概念であるが、「ドミナント・ストーリー」は、ある状況を支配している物語、「オルタナティブ・ストーリー」は、それと異なる新たな物語という意味で用いられる。両者の区別は、ある状況においてそのストーリーが自明の前提とされているかどうかにかかっており、状況依存的である。一つのドミナント・ストーリーが効力を失うと、新たなオルタナティブ・ストーリーが次のドミナント・ストーリーになるということもある (野口, 2010)。ただし、野口 (2005) は、SHG も「オルタナティブ・ストーリー」という名のドミナント・ストーリーを再生産するだけにすぎないのではないかという見方に対して、SHG は、単にひとつの物語を共有し再生産するのではなく、それを新たに展開させていく場であり、「新しい語り」「いまだ語られなかった物語」を生み出すための場として捉えられると言う。

SHG のコミュニティ・ナラティブは、支配的な文化ナラティブによって形作られたものとは異なる、オルタナティブなやり方で、個人の物語を構築するやり方を提供すると考えられている (Monkowski & Rappaport, 2000)。本研究では、ドミナント・ストーリーとオルタナティブ・ストーリーという概念も用いながら、SHG において、オルタナティブ・ストーリーがどのように構築されているかを明らかにすることを試みる。そして、SHG が「オルタナティブ・ストーリー」という名のドミナント・ストーリーを再生産する場とはどのように異なっているのかという点についても検討する。

**本研究における語りの捉え方** 語り・ナラティブという概念は非常に多様な側面を含んでいる。例えば、能智 (2006) は、ナラティブを大きく、「〈もの〉的な対象としてのナラティブ」と、「行為としてのナラティブ」の二つの側面にわけてナラティブのもつ様々な側面を整理している。ナラティブの一つの側面は、「語られたもの」である。ナラティブの捉え方の一つとして、「語られたもの」であるナラティブを手がかりとして、語り手の意味付けや体験を捉えるということがある。一方で、ナラティブには、ダイナミックな行為としての側面もある。何かを語る時には、語りの対象となる出来事だけでなく、常にその話を聞いている聞き手や、その場の状況も意識されている。ナラティブが行為であり、特有的の時と場所において特定の聞き手を前に行われる〈こと〉である観点に立つと、行為の結果としての発話内容は、語り手自身が生み出した何かであると同時に、語りの場において、聞き手との関係のなかで共同生成されたものであるとも言える。従来のナラティブ研究では、ナラティブの内容や構造を把握することを目的とするものが多かったが、近年では、ナラティブをテキストとして捉えるのではなく、社会実践として捉える社会相互行為的なアプローチへの転換が生じている (Bamberg, 2012; イェルガコポロ, 2013 など)。

本研究では、語られた内容から意味付けや体験を捉えるだけでなく、語りの行為としての側面を捉えるために、ストーリーの語り方や、語りの場における聞き手との相互行為に注目する。そして、ディスコース分析や会話分析の手法を活用し、語りがどのように構築されているのかを明らかにすることを目指す。コミュニティ・ナラティブや、支配的な文化ナラティブ（社会的ディスコース）という概念についても、それらが、語りが構築されるプロセスの中でどのように現われ、どのように活用されているのかという点を明らかにすることを試みる。

## 第2節 フィールド：「非行」と向き合う親たちの会

本節では、本研究における調査フィールドである「非行」と向きあう親たちの会について、その選定の理由を含めて述べる。また、本研究における「非行」という用語の使い方についても確認しておく。

### 2-2-1 「非行」と向き合う親たちの会

本研究が対象としたフィールドは、「非行」と向き合う親たちの会という、関東で活動している、わが子の非行・問題行動で悩んでいる親と子どもに関わる人たちの会である。

この会は、「悩みを共有する仲間がほしい」、「同じ悩みをもった親同士、お互いに手をつないで、支え合い、励まし合い、学び合いたい」という親の願いから生まれ、1996年11月に、わが子の「非行」に悩む親たちと、元教師、元家庭裁判所調査官らを中心に結成された（能重・浅川・春野, 2004; 「非行」と向き合う親たちの会, 2006）。子どもが「非行」に走ったとき、多くの親は様々なところに相談に行くが、学校や相談機関からは、「親がしっかりしていないから、子どもが非行化した」とか、「子どもへの干渉や監視を強めるように」などの、叱責や不適切な助言を受けて無理をし、かえって子どもとの溝が深まったという体験をしていることが多い（木村・能登原・足立, 2009）。会の事務局長<sup>10</sup>である春野は、子どもと向き合うのは、大変なエネルギーが必要だが、会の中で、共感され支えられたときに、それが可能になると言う（春野, 2007）。SHGでは、同じ体験をしている人同士で、気持ち・情報・考えかたをわかちあうことが出発点となるが（岡, 1998）、親たちの会も、専門職等による支援とは異なり、同じ体験をしている親同士のわかちあいが基盤となっている。

一方で、親たちの会には、専門職等の親以外の立場の人も参加することが可能である。この会は、親が専門家の援助のもとで原因や解決の方法を見つけていくというやり方や、親だけが集まって語り合うというやり方のどちらでもなく、「親が、親以外の人とも自由に対等に語り合うことを通して、力を得、自ら学び向き合い、乗り越えていく」ための会でありたいという願いをもって作られた（春野, 2006）。そのため、専門職も、親と対等な立場で参加し、学び合うということが行われている。例えば、元家庭裁判所調査官で、会の副代表である浅川は、例会に参加し続ける中で、「私は家裁にいたときに理解し、受けとめたつもりになっていたレベルとは比較に

---

<sup>10</sup> 現在は会の代表である。

ならないほどの強さと深さで、親の気持ちが共感的に理解でき、受けとめられるようになってきた、なってきたと感している」(能重・浅川・春野, 2004, p157)と述べており、会が専門職にとっても、自らの姿勢を問い直す学びの場となることを示している。

この会の結成後、同じような「非行」の問題に取り組む親たちの SHG が全国各地で設立されるようになり、現在では、全国で 30 以上のグループが存在する。この会は、「非行」と向き合う親たちの SHG の中でも日本で最初に設立されたグループの 1 つで、その後各地に設立された会にも影響を与えており、SHG の意義や機能を検討していく上で適切なフィールドと考えられた。

親たちの会では、会の通信<sup>11</sup>の発行、公開学習会の企画、全国交流集会の開催、非行相談など多様な活動が行われているが、その最も中心的な活動は、親たちが集まって自分の経験を語り合う「例会」である。ここでは、親たちの会の例会における活動の様子について簡潔に記述する。親たちの会では、地域ごとの例会や、父親例会<sup>12</sup>、成人の子をもつ家族例会<sup>13</sup>など様々な例会があり、いずれも月に 1 回、土曜日または日曜日に実施されている。

**例会全体の流れ** ここでは筆者が継続的に参加した例会の流れを記述する。この例会は、月 1 回、休日の 13 時半から 17 時まで行われる。

#### ① 受付

まず、参加者は、部屋の入口で受付を済ませる。用紙に名前と住所を記載し、参加費(会員・学生は 500 円、非会員は 1000 円)を払う。非会員の参加者は、毎月発行される通信や学習会の案内のチラシなどを受け取る。受付後、参加者は部屋に入り、椅子に座って会が始まるのを待つ。参加者の人数は、日によっても異なるが、約 20~30 人程度である場合が多い。時間の構造は比較的緩やかであり、13 時半を少し過ぎてから例会が始まる場合もある。また、遅れて来る参加者や、用事があり、終了時間の前に例会を抜ける参加者がいる場合もある。

#### ② 初めの全体会

時間になると初めの全体会が始まる。会の代表や副代表が挨拶をし、会の趣旨について簡単に説明する。そこでアナウンスされることは、会の参加者の大半がわが子の「非行」の問題で悩んできた親であるということや、討論会ではないので、批判や分析、安易なアドバイスなどはせず、お互いに自分の悩みを語り合い、聞き合うことで、学び合いましょうというような内容である。

#### ③ 語り合い

その後、参加人数に応じて、10~15 人程度のグループに分かれ、グループごとに語り合いが始まる。グループは、初めの全体会のときに座っていた場所によって分けられることが多い。グループごとの語り合いは、14 時前後に始まり、16 時半頃に終わる。語り合いの進行の様子につ

<sup>11</sup> 会の通信は月に 1 回発行され会員に郵送される。各例会や学習会の様子の報告や、今後の予定の連絡のほか、川柳、料理レシピのコラムなど様々な情報が掲載されている。

<sup>12</sup> 父親例会は、母親が多くて話しにくい父親もいるということで、筆者が会に参加する 10 年ほど前から行われるようになったが、現在は休会になっている。

<sup>13</sup> 成人の子をもつ家族例会は、主に成人になった子どもの問題で悩んでいる親たちが語り合う例会として、筆者が会に参加するようになる 1 年ほど前から開かれている。

いては後述する。

#### ④ 終わりの全体会

16時半頃になるとグループごとの語り合いが終了し、参加者は、初め全体会を行った場所に再び集まる。その後、終わりの全体会が始まる。終わりの会では、代表や副代表、参加者が各グループで出た話を紹介して少し感想を述べることもある。それから今後の例会や学習会のお知らせがあり、17時前後に解散となる。解散後、インフォーマルな食事会やお茶会が開かれることもあり、希望者は、近くのカフェでお茶を飲んだり、居酒屋で食事をしたりする。

**語り合いの流れとルール** 次に語り合いがどのように進行していくかについて述べる。語り合いの際のグループには、司会者と記録者が一人ずつおり、会の世話人<sup>14</sup>である親が交代で担当する。各グループの司会と記録は、グループ分けの前に決められている。参加メンバーの大半は、子どもの「非行」で悩んでいる親である。会に参加している年数は様々で、10年以上前から例会に来ていて、子どもの問題は既に落ち着いているという人もいれば、初めて例会に参加して、現在まさに子どもが激しく荒れているという人もいる。前述したように、親たちの会では、子どもの「非行」の問題で悩んでいる親に限らず、様々な立場の人が会に参加することを認め、歓迎している。そのため、自分自身が「非行」を経験した体験者や、専門職、(元)教師、学生、ジャーナリストなど親以外の立場で「非行」に関心を持つ人が参加することもある<sup>15</sup>。

初めに司会者と記録者の自己紹介があり、司会者が例会の趣旨およびルールを説明する。説明の仕方は、司会者によって多少の違いはあるが、中心的な内容は以下の4つである。

- ① 批判や中傷、討論、過度なアドバイスなどはせず、話を聞き合うことで学び合う
- ② 会で聞いたことは他言しない
- ③ 名前や住んでいる場所を言う必要はない、話したくない人は話さなくてもよい
- ④ 話の内容を匿名化して会の通信に載せることがあるが、記録してほしい人、載せてほしくない人は申し出てほしい

ルールの説明の後、初めに、司会者が自分の体験を語る。その後は、司会者が一人ひとりに話の順番を振っていくが、基本的には、席の順番で司会から右回りまたは左回りで一人ずつ話をしていく。途中で帰る人がいる場合や初めての人がいる場合には、順番が変更されることがある。初めて参加した人は、様子がわからず話しにくいことがあるので、初めての人が早い順番にあたる場合は、司会者が、今話す方がいいか後で話す方がいいかを聞くなどの配慮を行い、先に会に慣れている参加者が話をして、ある程度経ってから、初めての人に話をしてもらい場合も多い。記録者は、司会者の次に話す場合もあるが、時間が足りなくなる可能性を考慮して最後に話すこ

---

<sup>14</sup> 世話人は、会に参加してからある程度年数が経った親を中心に構成されており、例会の司会や記録を含め、会の運営の手伝いを行う。事務局長や他の世話人から誘われて世話人になるというケースが多いようである。

<sup>15</sup> 会の元代表や副代表は、参加者の話が終わった後に時々質問やコメントをしたり、自分の話す番のときに参加者の話に触れたり、全体的な感想を話したりするが、自分の個人的な話をすることもあり、役割が固定化されているわけではない。親以外の立場の人の参加の仕方については、第7章で詳しく検討する。

ともある。一人の参加者の話が終わると、司会者が「ありがとうございました」などと言って、次の人に話を進めることが多いが、場合によっては、司会者や他の参加者、相談員などから、話した人に質問やコメントがなされるときがある。

参加者が一人ずつ話をしていき、一巡する間に終了の時間になって語り合いが終わる場合もあるが、一巡しても時間が残っているときには、話を聞いている中で思いついた人や、話したい人が適宜発言して、終了時間まで語り合いが続けられる。

## 2-2-2 非行という言葉の使い方

調査フィールドと関連して、本研究で用いる非行という用語の内容を確認しておく。非行の法的な定義は、少年法 3 条 1 項に定められている。法的な意味での非行少年は、犯罪少年、触法少年、虞犯少年の 3 種類である（表 2-1 参照）。犯罪少年と触法少年は範囲が明確で定義としてわかりやすいが、虞犯少年になると、どこまでの少年が虞犯少年に入るのか境界が曖昧になる。さらに、非行という言葉は、一般的には、より広く、怠学や夜遊び、無断外泊など、不良と見なされる行為や社会規範に反する行為全般を指して用いられる。

表 2-1 法的な非行少年の定義

- |   |
|---|
| ① 犯罪少年：罪を犯した少年  |
| ② 触法少年：14 歳に満たないで刑罰法令に触れる行為をした少年                                |
| ③ 虞犯少年：次に掲げる事由があつて、その性格または環境に照らして、将来、罪を犯し、又は刑罰法令に触れる行為をする虞のある少年 |
| イ 保護者の正当な監督に服しない性癖のこと   |
| ロ 正当の理由がなく家庭に寄り付かないこと   |
| ハ 犯罪性のある人若しくは不道徳な人と交際し、又はいかがわしい場所に入出入りすること                      |
| ニ 自己又は他人の徳性を害する行為をする性癖のあること                                     |

本研究の調査フィールドである「非行」と向き合う親たちの会では、会の名称において、非行という言葉がかっこつきで用いられている。会の中では、非行という言葉を使うことをめぐって議論があったが、名称としてわかりやすい言葉ということで、「いわゆる非行」という意味で、非行という言葉の会の名称として使うことにした（能重・浅川・春野，2004）。実際に会に来る親たちが悩んでいる子どもの問題も、法的な意味での非行に該当するものから、該当しないものまで様々である。本研究は、SHG の機能を探ることを目的としており、厳密に法的な意味での非行に研究の対象を限定する意図はないので、グループの用語の使い方に倣って、不良と見なされる行為や社会規範に反する行為全般を指し、「いわゆる非行」という意味で、かっこつきで「非行」という言葉を用いる<sup>16</sup>。

<sup>16</sup> ただし語りの抜粋中では、表記が煩雑になるため「」はつけずに記載する。



### 第3節 フィールドとの関わり

本節では、筆者の親たちの会との関わりについて記述する。エスノグラフィーでは、前述したように、フィールドとの関係のとり方が重要になる（柴山，2004）。特に、ナラティブ・エスノグラフィーでは、次の2つの理由から研究者とコミュニティとの関係性に注意を払うことが決定的に重要とされる（Harper et al., 2004）。一つ目の理由は、コミュニティのメンバーが、複雑かつデリケートな論点や体験を話すには、研究者のナラティブを理解する意志や能力に対する十分な信頼が必要であるからである。また、同様に、研究者も、インフォーマントが正しい情報をもたらしてくれることを信頼できなければならない。二つ目の理由は、ナラティブには、コミュニティやそのメンバーが研究者をどのように見ているかなど、研究者とコミュニティとの関係性をテーマとするものも含まれているからである。研究者はこのようなナラティブにも注目する必要がある。コミュニティとの信頼関係を築くためには、研究者が、コミュニティのことをより深く理解していく必要があり、長い期間にわたった継続的な参加が必要とされる。

本研究では、筆者は6年以上にわたって親たちの会に参加してきたが、その中で、会との関わり方や、筆者の立場も変化してきた。筆者の会との関わり方、筆者の立場、そして会のメンバーが筆者のことをどのように認識しているのかといったことは、本研究のデータ収集や結果にも影響を及ぼしていると考えられる。そこで、本節では、筆者の会との関わりや、会における立場の変化について記述する。表2-2は、筆者の6年間の会との関わりについて、資格の取得や仕事の状況も含めて整理したものである。

表 2-2 筆者の親たちの会との関わり

| 年    | 会との関わりや役割  | 仕事や資格   |
|------|--|---|
| X年   | <ul style="list-style-type: none"> <li>臨床心理学を学んでいる大学院生としてフィールド・エントリー</li> <li>例会のほか、全国交流集会、そのチラシ配り、会報の発送作業などに参加</li> <li>インタビューを紹介してもらい5人の参加者(親)にインタビューを行い、修士論文を執筆</li> </ul>                      | <ul style="list-style-type: none"> <li>中学校のティーチング・アシスタントのアルバイト（～X+1年まで）</li> </ul>                                  |
| X+1年 | <ul style="list-style-type: none"> <li>修士論文の結果を会の世話人会で発表</li> <li>要望があったときに、会の事務所で中学生・高校生に学習支援を行う（～現在まで継続）</li> <li>全国交流集会の実行委員になり、実行委員会に参加（～X+5年まで継続）</li> <li>会で時々行われる合唱のピアノの伴奏をするように</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>中学生や高校生への学習支援の仕事を非常勤で行うようになる（～X+5年まで継続）</li> <li>修士課程を修了し、博士課程に進学</li> </ul> |

|      |   |              |
|------|---|--------------|
|      | なる（～X+5年まで継続）<br>・年2回行われている非行の電話相談を見学   |              |
| X+2年 | ・会の姉妹団体であるNPO法人が主催する調査研究プロジェクトが始まり、調査メンバーに加わる（～X+4年まで）  | ・臨床心理士の資格を取得 |
| X+3年 | ・会が創作した劇の公演でピアノ伴奏をする（～X+5年までに5回公演）<br>・会の姉妹団体であるNPO法人の理事になる<br>・「非行」の電話相談に相談員として参加（～X+5年まで継続）     |              |
| X+4年 | ・調査研究プロジェクトの成果が本として出版される。学習会などの機会に調査研究の結果を報告する  |              |
| X+5年 | ・年1回開催される一つの学習会のスタッフとなり、学習会の企画や準備、当日の運営などを他のスタッフと共に行うようになる（～現在まで継続）<br>・NPO法人が発行している雑誌に研究結果の一部を発表 |              |

### 2-3-1 筆者の会との関わり

まず、筆者が、どのように親たちの会に参加し、会との関わりがどのように変化していったのかを記述する。

**フィールド・エントリー** 筆者は、元々「非行」の問題に関心があったが、偶然に親たちの会のホームページでその存在を知り、会が発行した親や子どもの「非行」の体験記を読み関心を持った。ホームページで書かれていた会の説明では、親以外の立場の人でも例会に参加することができそうであったため、事前に電話で連絡を入れ、例会に参加した。子どもの「非行」を体験している親の話は、筆者がこれまで聞いたことのないもので、親の大変さや、それでも子どもを思う気持ちに胸が詰まり、圧倒されるような感覚があった。一方で、会には不思議と明るく温かい雰囲気もあった。それ以来、筆者は、会に関心をもち継続的に例会に参加するようになった。3か月ほど例会や他の学習会に参加した後、会の事務局長に研究について相談し、インタビューと参与観察について研究の許可を得た。

**例会の場での振る舞い** 親たちの会では、学生や専門職など、子どもの「非行」の問題に悩む親以外の立場の人でも参加することがある。そして、例会の語り合いでは、親以外の立場の人でも、一人の参加者として自分のことを語る機会が与えられる。筆者も参加者の一人として、順番が回ってくれば自分の話をした。主に、臨床心理学の勉強をしている大学院生であるという自己紹介や、「非行」に関心を持って会を知った経緯、例会に参加した感想、自分の子ども時代や家族の話、仕事などでの中学生や高校生との関わりなどについて話をすることが多かった。残り時

間が少ないときは、自己紹介だけをする場合もあった。筆者は、語り合いの中では、基本的には、自分が話す番のときだけ発言し、それ以外は他の参加者の語りを聞いていた。ただし、稀に、発達障害などの話が出たときに、臨床心理学を勉強しているということで話を振られることや、法律を以前勉強していたということで、法律が絡んだ話題のときに話を振られること<sup>17</sup>もあった。

**会の活動への参加** 筆者は、初めに参加した例会にはほぼ毎月参加したほか、何度か父親例会や成人の子をもつ家族例会といった他の例会にも参加した。また、筆者は、特に1年目は、例会だけでなく、例会の後に行われる食事会や、会が行った全国交流集会のチラシ配りや、会報の発送作業といった活動、および、全国交流集会や、不登校の全国のつどい（その中の「非行」の文科会）などのイベントにも時々参加した。これらの活動に参加したのは、フィールドにいる人たちと一緒に会の活動を体験することで、参加者の視点や会の特徴をより深く理解できるようにするということや、会の人たちとのラポールを築くということがあった。また、研究とは関係のないところで何か筆者が手伝えることがあれば手伝いたいという気持ちもあった。

**会との関わりの拡がり** 2年目以降も、少しずつ筆者の会との関わりは増え、多様化していった。X+1年からは、会の事務所で「非行」傾向のある中学生・高校生に勉強を教える学習支援の活動を手伝ったり、年1回行われる全国交流集会の実行委員となり、準備や当日の運営を手伝ったり、さらに、会の有志のメンバーで構成されている合唱団のピアノの伴奏をするようにもなった。X+2年には、会の姉妹団体であるNPO法人が主催した調査研究プロジェクトが始まり、筆者も調査チームのメンバーに加えてもらい、2年間チームのメンバーと調査を行った。また、親たちの会で年2回行っている「非行」の無料電話相談にも、参加するようになり、X+3年からは筆者も相談員の一人として相談の電話を受けるようになった。X+5年からは、年1回開催される一つの学習会のスタッフとなり、学習会の企画や準備、当日の運営などを他のスタッフと共にやるようにもなった。

### 2-3-2 筆者の立場

筆者の親たちの会における立場や役割は、学生、研究者、専門職（臨床心理士）、ピアノの伴奏者、スタッフなど様々であった。会への参加年数が増え、筆者の会との関わりが多様化したり、筆者が臨床心理士の資格を取得したりしたことに伴い、筆者のフィールドにおける立場も微妙に変化していった。ここでは、フィールドにおける筆者の立場や、その変化について述べる。

**学生・学ぶ者** 筆者は、例会では、名前と心理学を勉強している大学院生であることを自己紹介として話していた。筆者以外にも、「非行」に関心を持って親たちの会に参加する学生は時々おり、他の参加者からは、筆者もそのような会に学びに来た学生の一人として認識されていたと思われる。実際、例会に参加し始めた頃は、筆者は「学生さん」と呼ばれることが多く、「良い心理学者になってください」などと声をかけられることもあった。また筆者自身も、自分の語

---

<sup>17</sup> アルバイトを途中で辞めた場合に途中までの給料をもらえるかということや、ナンバープレートを外したバイクで走るとどうなるかといったことが問題で、筆者には答えられないことが多かった。

りの中で、「話を聞いて学びたい」「会に参加して勉強させてもらっている」など、学ぶ・勉強するというフレーズを頻繁に使っていた。

**外部者としての感覚** 筆者が例会に参加し始めた頃は、学生で継続して参加している人は、他にいなかったこともあり、例会の中での自分の立場に居心地の悪さを感じるが多かった。初期の頃のフィールドノートには、「浮いている感覚がする」「入りづらさ」「胃の辺りがずっと痛かった」といった記述がある。筆者は、親たちの会のなかで、決してよそ者扱いされていたわけではない。むしろ、例会によく来ている参加者からは、例会に顔を出すと、笑顔で挨拶してもらい、語り合いのときには、筆者の話も他の参加者と同様に丁寧に聞いてもらっていた。それでも、例会に参加し始めた頃は、落ち着かず、緊張して胃が痛くなるが多かった。その背景として、まず、自分が語る番になったときに話すことに困るということがあった。また、自分は当事者でもなく相談員でもないのに、会に毎回参加して、深刻でプライベートな話を聞かせてもらっていいのかという気持ちもあった。

**メンバーとしての感覚** 筆者は例会にはほぼ毎月参加し、例会以外の活動にも参加したので、半年ほど経つと、頻繁に会に来る参加者からは顔と名前を覚えられ「北村さん」と名前と呼ばれるようになった。筆者のフィールドでの感覚が少し変わり始めたのもこの頃だった。筆者は、「非行」を考える全国交流集会で自分が参加した分科会の記録係を務めた。これは、偶然、筆者が参加を希望した文科会の記録係が決まっていなかったからではあったが、少しでも会の役に立つことができ嬉しいと感じた。さらに、2年目以降になると、全国交流集会の実行委員になり、スタッフとして運営を手伝ったり、合唱や劇の活動と一緒に参加したりと、他の参加者と共に、会のメンバーとして共通の目的に向かって活動するという機会が増えていった。このような活動では、筆者自身、純粋に楽しみながら活動に参加することができた。

例会の中でも、自分の仕事等で子どもと関わる時に感じる困難や喜びについて話す機会が増え、筆者自身が例会で話を聞いてもらうことで、自分の関わりを振り返り、気持ちが整理されたり、楽になったりする感覚を持てるようになった。また、例会の中で、筆者も以前より笑えるようになり、他の参加者と笑いを共有できるようになってきたことを感じた。

**専門職・研究者としての立場** 3年目に筆者は臨床心理士の資格を取得し、その後、調査研究プロジェクトのチームや、「非行」の電話相談に相談員として参加するようになり、研究者や専門職という側面でも、会の活動に参加する機会が増えてきた。また、筆者自身の研究を報告する機会も作ってもらい、研究結果を発表し、そのフィードバックをもらうこともあった。

ただ他方で、会の中で、専門職に相談に行ったが良い体験をしなかったという話や、会の活動に参加した専門職や研究者の言動に嫌な思いをしたという話を聞くこともあった。親たちの会は、親も、親以外の立場の人も対等な立場で語り合うということが目指されているが、専門職や研究者の関わり方が問題になることもあり、筆者も自分の関わりを自省することがしばしばあった。

**筆者の立場の変化** 松田(2000)は、専門職とSHGとの関わりの態様として、SHGに「ついて」学ぶことと、SHGと「ともに」学ぶことを区別して論じている。SHGに「ついて」学ぶとは、SHGの外側から、専門職者として用いている言葉を用いてSHGで生じていることがら

を分析し、理解することであり、SHGと「ともに」学ぶとは、ソーシャルワーカーが、SHGのメンバーが用いている言葉を使って自分自身のあり方について問い直すことであるとする。この区別を用いれば、本研究における筆者の親たちの会との関わりは、会に「ついて」学ぶ関わりから、会と「ともに」学ぶ関わりへ少しずつ移行してきたと考えられる。会に参加し始めた頃は、会のことや、親の体験をよく知らない外部の人間として、会について学ぶという側面が強かった。それが少しずつ、会のことを知り、会の様々な活動に参加する機会が増え、メンバーの一人として、会とともに学ぶという側面が増えていったと思われる。ただ一方で、自分が、子どもの「非行」を体験している親とは違う立場であることを痛感する場面もあり、筆者自身、外部的な立場と内部的な立場の両方を揺れ動きながら、会と関わってきたと考えられる。筆者自身を含め、親以外の立場の参加者が、会の中でどのように語り、どのように活動に関わっているのかという点は、第5章の中でも検討する。

## 第 2 部 親たちの会における参加者の語りの変化

第 2 部では、親たちの会に参加する中で、参加者である親の語りやその背後にある体験がどのように変化するかを検討する。第 3 章では、親たちの会が行った調査研究プロジェクトにおけるアンケート調査の結果を示しながら、子どもが「非行」に走ったときの親の体験について記述する。第 4 章では、参与観察およびインタビューによって得られたデータを分析し、参加者の語りや体験が変化していくプロセスをより詳細に検討する。

## 第3章（研究1）子どもの「非行」で悩んだ親たちの体験

### ——アンケート調査の結果からの検討——

第3章では、筆者も調査研究メンバーとして参加し、親たちの会の姉妹団体であるNPO法人非行克服支援センターが主催して行った、「何が非行に追い立て、何が立ち直る力となるか——『非行』に走った少年をめぐる諸問題とそこからの立ち直りに関する調査研究——」（特定非営利活動法人非行克服支援センター，2014）の調査結果の一部を提示し<sup>18</sup>，子どもの「非行」を体験した親が，どのような状況の中でどのような経験をしてきたのかを明らかにする。

#### 第1節 問題と目的

---

##### 3-1-1 調査研究の主催団体

本調査研究は，親たちの会の姉妹団体である，NPO法人非行克服支援センターの主催で行われた<sup>19</sup>。このNPO法人は，2003年に教育関係者や家庭裁判所調査官，わが子の「非行」を体験して悩んできた親たちによって作られた。代表や理事などの構成メンバーも，親たちの会のメンバーとほぼ重なっており，親たちの会と密接な関係がある。親たちの会が，主に例会の開催や会の機関誌の発行といったSHGとしての活動を主に行っているのに対し，非行克服支援センターは，「非行」に関する相談活動，子どもたちの「非行」からの立ち直りの支援，親や教師に向けた学習会の企画や開催，調査研究など幅広い活動を行っている。

##### 3-1-2 調査研究の目的

今回の調査研究は，2012年4月から2014年3月にかけて行われた。少年法の改正や裁判員制度の導入で，少年非行への関心が新たに広がっている。しかし，残念ながら現状では学校や地域では，問題を抱えた少年を排除する傾向も強まり，加えて「親の責任」や「家庭の問題」に収斂され，社会での少年や家族への理解と支援の取り組みは立ち遅れている。そこで，この調査研究では，非行克服支援センターや親たちの会が，これまで非行少年やその親への支援を行ってきた実績を活かして，当事者・家族がどのような支援を求め，何に困難を感じているかを明らかにし，少年司法，保護観察，矯正教育，地域での支援体制，保護者への教育と支援などについて資料を提示し，より良い支援制度の構築について提言することを目的とした（p11-12.）。

これまでの非行に関する多くの調査や研究では，学校，家庭裁判所，少年院，保護観察制度など，非行のプロセスの一部の時期についての検討はなされてきたが，少年が荒れ，そして立ち直っていくプロセス全体を捉える視点が欠けており，また，処遇を受ける本人やその親といった当

---

<sup>18</sup> 本章では，適宜この本の内容を参照するが，該当箇所を括弧書きで示す。

<sup>19</sup> この調査研究プロジェクトは，日工組社会安全財団からの助成金を得て行われた。

事者の視点も考慮されてこなかった。この調査研究では、非行の体験者や、非行少年の親という当事者の視点を重視し、非行につながる行動が生じ、それが進展していく過程や、そこから変化が起き、立ち直りに向かっていく一連のプロセス全体を検討した (p256)。

## 第 2 節 方法

---

### 3-2-1 調査研究の方法・進め方

調査は、子どもの非行を体験した親へのアンケート調査と立ち直った当事者へのインタビュー調査という 2 つの方法で行われた (p12)。

- (1) 親へのアンケート調査：任意団体『『非行』と向き合う親たちの会』メンバー、全国各地の同趣旨の親の会メンバーや、NPO 法人に非行相談をしてきた方を対象にした。親の会会員通信等にアンケート用紙を同封、団体宛にアンケート用紙を送付、または、親の会の集まり等で配布し、返信用封筒にて個別に無記名で回収した。約 1000 通を配布し、回答数は 215 名 (母親 196, 父親 17, 不明 2) であった。
- (2) 立ち直った当事者へのインタビュー調査：42 人の非行から立ち直った青年にインタビュー調査を行った。インタビューは原則として調査研究プロジェクトのメンバーを含む 2 人体制で行い、インタビュー時間は、42 分～3 時間 16 分で平均時間は 1 時間 31 分であった。インタビューの際には、本人の承諾を得て録音を行い、逐語録を作成した。

調査研究プロジェクトのメンバーは 11 人で、親、元教師、元家裁調査官、弁護士、臨床心理士、カウンセラー、元児童私立支援施設職員など様々な立場から構成されていた。2 年間に渡り、およそ月 1 回のペースでメンバーが集まって、会議を行いながら、アンケートやインタビューの実施方法の検討、アンケートおよびインタビューの実施、分析、結果の整理などを行った。調査研究の結果は、『何が非行に追い立て、何が立ち直る力となるか』(特定非営利活動法人非行克服支援センター, 2014) という書籍にまとめて出版し、親たちの会が主宰するシンポジウムや学習会、さらに学会などでも報告を行った。

筆者は、親たちの会の事務局長から声をかけられて、調査研究プロジェクトのメンバーに加わった。毎回会議に参加し、親へのアンケートの原案の作成、結果の分析、インタビューの実施、結果の分析などの一部を担当した。

### 3-2-2 親へのアンケート調査の項目

親へのアンケートを作成する際には、親が世間から、つね日頃「親の責任」「子育ての失敗」などと指弾されていることを配慮し、本音で回答しやすいような設問の問いかけを選択式と記述方式を取り混ぜて行った (p13)。アンケートは、8 つのテーマについて、37 の質問から構成されていた (表 3-1)。

表 3-1 親へのアンケート調査の項目



- I フェイスシート
- II 子どもの荒れ, 子どもとの関わりについて
- III 家族について
- IV 学校の対応について
- V 司法機関や施設に関連する体験について
- VI 子どもが荒れていたときの心理状態について
- VII 相談機関やサポート資源について
- VIII 親の会について

アンケート調査を作成する際には、親たちの会の例会で語られることや、筆者が行ったインタビュー調査の結果などを参考にして、アンケートに回答する親が答えやすいように配慮しながら質問項目の原案を作成した。原案をもとに会議の中で議論を行いながら、修正を行った。また、何人かの親たちの会のメンバーに、実際にアンケートに回答してもらい、質問が適切かどうかのチェックを行った。最終的に、アンケートは全体で 14 頁となった。アンケートの回答者からは、「1 日では終わらなかった」「当時のことを思い出し涙が出た」といった感想が多く寄せられ、回答者の多くは、かなり時間をかけて丁寧にアンケートに取り組んだ様子が窺われた。

### 3-2-3 アンケート調査結果の分析

アンケート調査結果は、選択式の項目と記述式の項目とを分けて集計した。選択式の項目については、全ての回答をエクセルシートに入力し、集計を行った。その後、集計結果を表にまとめ、集計結果から読み取れることについて、プロジェクトのメンバーで検討を行った。子どもとの関わりについては、＜子どもが荒れ始める以前＞／＜子どもが荒れているとき＞／＜現在＞（荒れているときから変化があった場合のみ回答）の 3 つの時点について回答してもらったため、各時点での回答について、比較を行った。

記述式の項目については、設問ごとに全ての回答を入力した後、似た内容・趣旨の回答を集めて、整理した。その後、プロジェクトのメンバーで寄せられた全ての回答を読み、検討を行った。

本研究では、選択式の項目についても、統計的な検定は行わず、記述的に分析を行ったが、これは以下の 2 つの理由による。

まず、本研究の目的は、特定の仮説を検証することではなく、これまで十分に取りあげられてこなかった当事者・家族の体験に焦点を当て、彼／彼女らが感じている困難や求めている支援を明らかにすることにあった。そのため、アンケート調査で得られた結果に関しても、統計的な指標に還元することは行わず、記述的な分析および解釈を行った。

また、本研究のアンケート調査で得られた回答は、回顧的な性質を持っており、過去の体験について回答している部分についても、現在の回答者の視点が反映されている。例えば、子どもとの関わりについての回答において、過去の状況についての回答は、回答者の現在の状況や視点の影響を受けていると考えられる。そのため、過去の時点についての回答と、現在の時点について

の回答はそもそも独立しておらず連関があることが想定されるため、統計的な検定にはなじまないと考えられた。

### 第3節 結果

本節では、調査研究のうち、親へのアンケート調査の結果の一部を提示して、子どもが「非行」に走ったときに親たちがどのような体験をしているのかという点を検討する。

#### 3-3-1 アンケートの回答者

アンケートの回答数 215 のうち、母親が 196、父親が 17、不明が 2 であった。アンケートに回答した人の多数である 186 人 (86.5%) が、全国各地のいずれかの親たちの会に参加したことがある人であった。また、【子どもの荒れのその後の経過】に関する質問では、「現在は落ち着いている」という回答が 99 人 (46%)、「以前のように荒れてはいないが、別の心配ごとがある」という回答が 77 人 (35.8%)、「荒れているが以前よりは落ち着いている」という回答が 10 人 (4.7%)、「荒れている」という回答は 7 人 (3.3%) であり、回答者の約 8 割が、現在は子どもの非行や問題行動自体は落ち着いていると回答していた (p26)。現在、子どもが荒れている人の回答数が少なかったのは、アンケートに答えられるような状況や心境ではない場合が多かったのではないかと考えられる。

#### 3-3-2 子どもの荒れ、「非行」の内容

【子どもが荒れ始めた時期】については、「中学 1 年生」から「中学 3 年生」の間と回答した人が最も多かった (75.3%)。ただし、少数ではあるが、「小学校高学年より前」(1.9%)、あるいは逆に「高校 3 年生」(2.3%)、「19 歳以降」(0.5%) と回答した人もいた (p17)。

【荒れているときの子どもの行動】についての質問 (複数回答可) では、「夜間外出・外泊・家出」が回答者の 9 割を超える人が該当すると答え、最も多かった。続いて「喫煙」が 8 割を超え、「学校でのトラブル」「万引・窃盗・占有離脱物横領」「家庭での暴言」「飲酒」の順に回答数が多かった (p21) (表 3-2)。

表 3-2 荒れているときの子どもの行動

|                |                |              |                |                |                |    |
|----------------|----------------|--------------|----------------|----------------|----------------|----|
| 夜間外出・外泊・家出     | 喫煙             | 学校でのトラブル     | 万引き・窃盗・占有離脱物横領 | 家庭での暴言         | 飲酒             |    |
| 197<br>(91.6%) | 176<br>(81.9%) | 144<br>(67%) | 132<br>(61.4%) | 130<br>(60.5%) | 117<br>(54.4%) |    |
| 無免許運転          | 家庭内暴力          | 傷害・暴行        | 暴走族            | 金銭問題           | 自傷行為           | 薬物 |

|               |             |               |               |               |               |               |
|---------------|-------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 97<br>(45.1%) | 56<br>(26%) | 50<br>(23.3%) | 38<br>(17.7%) | 34<br>(15.8%) | 32<br>(14.9%) | 29<br>(13.5%) |
|---------------|-------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|

| 風俗            | 恐喝            | 援助交際         | 暴力団          | ギャンブル        | 強盗          | その他          |
|---------------|---------------|--------------|--------------|--------------|-------------|--------------|
| 25<br>(11.6%) | 23<br>(10.7%) | 16<br>(7.4%) | 14<br>(6.5%) | 13<br>(6.1%) | 7<br>(3.3%) | 19<br>(8.8%) |

(特定非営利活動法人非行克服支援センター, 2014, p21 から引用)

また、回答者の中で、子どもの事件が家庭裁判所に送致されたことがある人は 125 人 (58.1%)、子どもが少年鑑別所に送られた経験を持つ人は 76 人 (35.3%)、少年院に送致されたことがある人は 49 人 (22.8%)、保護観察に付されていた時期がある人は 80 人 (37.2%) であった (p 48,49,57,59)。

### 3-3-3 子どもが荒れているときの親の体験

まず、【子どもが荒れ始めた時期の対応】についての結果を見ていく。7 つの項目について、「1 全く当てはまらない」「2 あまり当てはまらない」「3 やや当てはまる」「4 とても当てはまる」という 4 件法で回答を求めた (表 3-3)。

「ア 厳しく注意した」という項目は、「やや当てはまる」「とても当てはまる」を合わせると 78.5%、「イ とにかく荒れた行動を止めようとした」は 87.4%で、多くの親が子どもの行動を止めようとして、注意するなどの行動をしていたと回答している。一方、「ウ しばらく様子を見た」「エ 放っておいた」「オ あきらめた」「キ 子どもの行動を認めた」の 4 つの項目については、「全く当てはまらない」「当てはまらない」のどちらかに回答した人の割合の方が多かった。子どもが荒れ始めたときは、大半の親が子どもの行動に対して、すぐにあきらめてしまったり放っておいたりすることはなく、何らかの行動をしていたと振り返っている。

「カ 子どもの言い分を聞いた」については、当てはまらないと回答した人と当てはまると回答した人の割合がほぼ同じだった。この点では、「その他」に記載された記述回答に、「どうしていいかわからなかった」などの混乱した気持ちが多く寄せられ、一方では「子どもの言い分」を聞こうとしつつも、それを受けとめきれず、どのようにしたらよいかわからないと感じていた親も多かったのではないかと考えられる。

表 3-3 子どもが荒れ始めた時期の対応

|                 | 全く当ては<br>まらない | あまり当て<br>はまらない | やや当ては<br>まる   | とても当て<br>はまる   | 無記入          |
|-----------------|---------------|----------------|---------------|----------------|--------------|
| ア 厳しく注意した       | 8<br>(3.7%)   | 28<br>(13.0%)  | 61<br>(28.4%) | 108<br>(50.2%) | 10<br>(4.7%) |
| イ とにかく荒れた行動を止めよ | 4             | 17             | 60            | 128            | 6            |

|               |                |               |               |              |              |
|---------------|----------------|---------------|---------------|--------------|--------------|
| うとした          | (1.9%)         | (7.9%)        | (27.9%)       | (59.5%)      | (2.8%)       |
| ウ しばらく様子を見た   | 68<br>(31.6%)  | 76<br>(35.4%) | 51<br>(23.7%) | 9<br>(4.2%)  | 11<br>(5.1%) |
| エ 放っておいた      | 149<br>(69.3%) | 43<br>(20.0%) | 8<br>(3.7%)   | 3<br>(1.4%)  | 12<br>(5.6%) |
| オ あきらめた       | 154<br>(71.6%) | 34<br>(15.8%) | 14<br>(6.5%)  | 1<br>(0.5%)  | 12<br>(5.6%) |
| カ 子どもの言い分を聞いた | 33<br>(15.3%)  | 73<br>(34.0%) | 79<br>(36.7%) | 20<br>(9.3%) | 10<br>(4.7%) |
| キ 子どもの行動を認めた  | 107<br>(49.8%) | 69<br>(10.7%) | 23<br>(32.1%) | 3<br>(1.4%)  | 13<br>(6.0%) |

(特定非営利活動法人非行克服支援センター, 2014, p19 から引用)

次に、【子どもが荒れているときに感じる事】について見ていく。ここでも、7つの項目について、4件法で回答を求めた(表3-4)。

全ての項目について、「当てはまる」と回答した人の割合が、「当てはまらない」と回答した人の割合を上回った。特に、「ア 早く非行を止めたかった」「イ 子どもの言動が理解できなかった」「ウ 親としてどう行動したらいいかわからなかった」「エ 子どものことが常に心配だった」「オ 子育てに対して自責感をもった」の5つの項目については、「やや当てはまる」または「とても当てはまる」と回答した人の割合が、9割近くに達しており、大多数の回答者に共通して実感されたことであると考えられた。多くの親が、子どもの非行を止めたいと思いつつも、子どもの言動が理解できず、どう行動したらいいかわからないという困惑や苦悩を体験し、そのように自分の過去の体験を振り返っていることが推察される。

また、「カ 親戚からの目が気になった」に「当てはまる」と回答した人がほぼ半数、「キ 周囲からの目が気になった」に「当てはまる」と回答した人が73%あり、かなりの人が、身近な人からの目を気にすることがあったと感じていることがわかる。

表3-4 子どもが荒れているときに感じる事

|                         | 全く当てはまらない   | あまり当てはまらない   | やや当てはまる       | とても当てはまる       | 無記入         |
|-------------------------|-------------|--------------|---------------|----------------|-------------|
| ア 早く非行を止めたかった           | 0<br>(0%)   | 3<br>(1.4%)  | 26<br>(12.1%) | 180<br>(83.7%) | 6<br>(2.8%) |
| イ 子どもの言動が理解できなかった       | 5<br>(2.3%) | 20<br>(9.3%) | 52<br>(24.2%) | 133<br>(61.9%) | 5<br>(2.3%) |
| ウ 親としてどう行動したらいいかわからなかった | 2<br>(0.9%) | 13<br>(6%)   | 52<br>(24.2%) | 144<br>(67%)   | 4<br>(1.9%) |

|                  |               |               |               |                |             |
|------------------|---------------|---------------|---------------|----------------|-------------|
| エ 子どものことが常に心配だった | 0<br>(0%)     | 3<br>(1.4%)   | 21<br>(9.8%)  | 186<br>(86.5%) | 5<br>(2.3%) |
| オ 子育てに対して自責感をもった | 1<br>(0.5%)   | 6<br>(2.8%)   | 44<br>(20.4%) | 157<br>(73%)   | 7<br>(3.3%) |
| カ 親戚からの目が気になった   | 40<br>(18.6%) | 62<br>(28.8%) | 52<br>(24.2%) | 53<br>(24.7%)  | 8<br>(3.7%) |
| キ 周囲からの目が気になった   | 12<br>(5.6%)  | 39<br>(18.1%) | 70<br>(32.5%) | 87<br>(40.5%)  | 7<br>(3.3%) |

(特定非営利活動法人非行克服支援センター, 2014, p24 から引用)

また、【子どもが荒れていた時の親の状態】については、表 3-5 のような結果になった。ここでは、子どもが荒れていたときの気分について、抑うつ尺度である SDS (Self-rating Depression Scale) の項目を参考にして作成した 10 の項目について尋ねている。

「ア 気分が沈んで憂鬱になる」という項目では、「いつもある」が 77.7%、「ときどきある」が 20%で、合わせると 97.7%の人が、憂うつ・抑うつ状態を感じていた。また、「イ 泣いたり、泣きたくなる」「ウ 夜よく眠れない」では、「いつもある」または「ときどきある」と回答した人が 80%を超え、「エ 食欲がない」「カ 疲れやすい」「ク 落ち着かずじっとしてられない」では、70%を超えていた。「キ 普段通り仕事をするのが難しい」「ケ 自分を役に立たない人間だと思う」についても、70%近い回答であった。過去を回想して回答した人が多いと考えられるが、当時抑うつ状態、あるいはそれに近い状態であった人も多かったのではないかと推測される。

さらに、「コ 死にたいと思うことがある」という質問項目についても、「いつもある」という回答が 3 割近くであり、「ときどきある」を合わせると 60%になった。子どもが荒れているときに感じるものの記述回答の中には、「毎日、子どもを殺して自分も死にたいと思っていた」(p25) という回答もあり、子どもが荒れていたとき、多くの親が精神的に非常に追い詰められ、苦しい状況にあったのではないかと考えられる。

表 3-5 子どもが荒れていた時の親の状態

|               | 全くな<br>い     | あまり<br>ない    | ときど<br>きある    | いつも<br>ある      | 無記入          |
|---------------|--------------|--------------|---------------|----------------|--------------|
| ア 気分が沈んで憂鬱になる | 1<br>(0.45%) | 3<br>(1.4%)  | 43<br>(20%)   | 167<br>(77.7%) | 1<br>(0.45%) |
| イ 泣いたり、泣きたくなる | 7<br>(3.3%)  | 17<br>(7.9%) | 64<br>(29.8%) | 125<br>(58.1%) | 2<br>(0.9%)  |
| ウ 夜よく眠れない     | 8<br>(3.7%)  | 19<br>(8.8%) | 73<br>(34%)   | 113<br>(52.6%) | 2<br>(0.9%)  |

|                    |               |               |               |               |             |
|--------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|-------------|
| エ 食欲がない            | 14<br>(6.5%)  | 35<br>(16.3%) | 92<br>(42.8%) | 72<br>(33.5%) | 2<br>(0.9%) |
| オ 痩せてきたことに気がつく     | 32<br>(14.9%) | 68<br>(31.6%) | 48<br>(22.3%) | 65<br>(30.2%) | 2<br>(0.9%) |
| カ 疲れやすい            | 13<br>(6%)    | 37<br>(17.2%) | 74<br>(34.4%) | 87<br>(40.5%) | 4<br>(1.9%) |
| キ 普段通り仕事をするのが難しい   | 12<br>(5.6%)  | 45<br>(20.9%) | 84<br>(39.1%) | 71<br>(33%)   | 3<br>(1.4%) |
| ク 落ち着かず、じっとしていられない | 10<br>(4.7%)  | 47<br>(21.9%) | 85<br>(39.5%) | 68<br>(31.6%) | 5<br>(2.3%) |
| ケ 自分を役に立たない人間だと思う  | 15<br>(7%)    | 53<br>(24.7%) | 66<br>(30.7%) | 76<br>(35.3%) | 5<br>(2.3%) |
| コ 死にたいと思うことがある     | 39<br>(18.1%) | 43<br>(20%)   | 70<br>(32.6%) | 59<br>(27.4%) | 4<br>(1.9%) |

(特定非営利活動法人非行克服支援センター, 2014, p63 から引用)

### 3-3-4 子どもとの関わり

子どもとの関わりについては、子どもとの会話の頻度と、子どもとのやりとりがどのようなものであったかを尋ねた。それぞれ、〈子どもが荒れ始める以前〉／〈子どもが荒れているとき〉／〈現在〉（荒れているときから変化があった場合のみ回答）の3つの時点について回答してもらった（表3-6）。

子どもとの会話の頻度については、〈荒れ始める以前〉では、「ア よく会話をしていた」または「イ ある程度会話をしていた」と回答した人が合わせて87.5%であり、多くの回答者が、親子間での会話があったと振り返っている。一方、〈子どもが荒れているとき〉を見ると、「ア よく会話をしていた」「イ ある程度会話をしていた」という回答の割合が大きく減少し、多くの回答者が、親子の会話が増減したと認識している。そして、〈現在〉を見ると、再び親子の会話の頻度が増加しており、無記入の回答数も考慮すると、〈荒れ始める以前〉とほぼ同程度の水準になっている。多くの回答者が、子どもが荒れているときは、親子の会話が増減するが、荒れている時期を過ぎると、再び会話が復活したと振り返っていることが窺われる。

表 3-6 子どもとの会話の頻度

〈荒れ始める以前〉

| よく会話をして<br>いた | よく会話をして<br>いた | あまり会話がな<br>かった | 全く会話がなか<br>った | 無記入     |
|---------------|---------------|----------------|---------------|---------|
| 76(35.4%)     | 111(51.6%)    | 25(11.6%)      | 2(0.9%)       | 1(0.5%) |

<荒れているとき>

| よく会話をして<br>いた | よく会話をして<br>いた | あまり会話がな<br>かった | 全く会話がなか<br>った | 無記入     |
|---------------|---------------|----------------|---------------|---------|
| 20(9.3%)      | 77(35.8%)     | 90(41.9%)      | 24(11.2%)     | 4(1.9%) |

<現在（荒れているときから変化があった場合のみ回答）>

| よく会話をして<br>いた | よく会話をして<br>いた | あまり会話がな<br>かった | 全く会話がなか<br>った | 無記入       |
|---------------|---------------|----------------|---------------|-----------|
| 66(30.7%)     | 95(44.2%)     | 17(7.9%)       | 4(1.9%)       | 33(15.3%) |

(特定非営利活動法人非行克服支援センター, 2014, p16,22,27 を基に作成)

次に、子どもとのやりとりについての結果を見ていく。ここでは、「ア 子どもは親に対して言いたいことを言う」「イ 親は子どもに対して言いたいことを言っている」「ウ 子どもの話を親はよく聞いている」「エ 親の話を子どもはよく聞いている」「オ 親は子どもの気持ちや考えをわかっている」「カ 子どもは親の気持ちや考えをわかっている」という6項目について、「1 全く当てはまらない」から「4 とても当てはまる」の4件法で回答を求めた(表3-7)。

<荒れ始める以前>では、オ以外の項目では、「やや当てはまる」と回答した人が最も多く、親子間で言いたいことを言ったり、相手の話を聞いたりといったやりとりがある程度あったと認識されている。ただし、「オ 親は子どもの気持ちや考えをわかっている」という質問については、「あまり当てはまらない」に回答した人が53.5%と最も多かった。回答している現在は子どもの荒れがおさまった人も多く、回答時点から振り返ると、当時は子どもの気持ちや考えをわかっていたと考え、回答した人も多かったのではないかとと思われる。

<荒れているとき>になると、<荒れ始める以前>の回答と比べ、ア以外の項目では、当てはまると回答した人が大きく減少した。その結果、「ウ 子どもの話を親はよく聞いていた」「エ 親の話を子どもはよく聞いていた」「オ 親は子どもの気持ちや考えをわかっていた」「カ 子どもは親の気持ちや考えをわかっていた」の4つの項目では、半数を超える人が「全く当てはまらない」または「あまり当てはまらない」という回答になっていた。多くの回答者が、子どもが荒れているときには、親子相互に相手の話を聞くことが少なくなり、相手の気持ちや考えが理解できなくなると感じていることがわかる。

<現在>になると、<荒れているとき>に比べ、特に「ウ 子どもの話を親はよく聞いていた」「エ 親の話を子どもはよく聞いていた」「オ 親は子どもの気持ちや考えをわかっていた」「カ 子どもは親の気持ちや考えをわかっていた」の4つの項目では、「当てはまる」と回答した人の割合が大きく増加し、全ての項目で、「当てはまる」と回答した人の合計が半数を超えた。さらに、<荒れ始める以前>の回答と比較しても、「ウ 子どもの話を親はよく聞いていた」「オ 親は子どもの気持ちや考えをわかっていた」「カ 子どもは親の気持ちや考えをわかっていた」の3つの項目については、「当てはまる」と回答した人の割合が10%以上高くなっていた。

このアンケート調査は、親側の認識に基づく回答であるが、子どもの荒れが落ち着いてくると、

親子間で互いに相手の話を聞いたり、相手の気持ちや考えが理解できるようになったりして、再びコミュニケーションが豊かになってくると認識されていることがわかる。いくつかの項目で、子どもが荒れ始める以前よりも数値が高くなっていることは興味深い点で、子どもの荒れを経ることで、親子のコミュニケーションや関係性が深まるということが生じている可能性も考えられる。

表 3-7 子どもとのやりとり

- ア 子どもは親に対して言いたいことを言う      イ 親は子どもに対して言いたいことを言う  
 ウ 子どもの話を親はよく聞いている              エ 親の話を子どもはよく聞いている  
 オ 親は子どもの気持ちや考えをわかっている      カ 子どもは親の気持ちや考えをわかっている

<荒れ始める以前>

|   | 全く当てはまらない | あまり当てはまらない | やや当てはまる    | とても当てはまる  | 無記入     |
|---|-----------|------------|------------|-----------|---------|
| ア | 8(3.7%)   | 71(33%)    | 91(42.3%)  | 44(20.5%) | 1(0.5%) |
| イ | 2(0.9%)   | 24(11.2%)  | 95(44.2%)  | 92(42.8%) | 2(0.9%) |
| ウ | 4(1.9%)   | 80(37.2%)  | 104(48.4%) | 25(11.6%) | 2(0.9%) |
| エ | 9(4.2%)   | 75(34.9%)  | 110(51.2%) | 17(7.9%)  | 4(1.9%) |
| オ | 28(13%)   | 115(53.5%) | 63(29.3%)  | 7(3.3%)   | 2(0.9%) |
| カ | 15(7%)    | 86(40%)    | 93(43.3%)  | 16(7.4%)  | 5(2.3%) |

<荒れているとき>

|   | 全く当てはまらない | あまり当てはまらない | やや当てはまる   | とても当てはまる  | 無記入     |
|---|-----------|------------|-----------|-----------|---------|
| ア | 10(4.6%)  | 65(30.2%)  | 81(37.7%) | 55(25.6%) | 4(1.9%) |
| イ | 12(5.6%)  | 83(38.6%)  | 86(40%)   | 30(13.9%) | 4(1.9%) |
| ウ | 22(10.2%) | 97(45.1%)  | 70(32.6%) | 22(10.2%) | 4(1.9%) |
| エ | 64(29.8%) | 116(53.9%) | 27(12.5%) | 4(1.9%)   | 4(1.9%) |
| オ | 58(27%)   | 111(51.6%) | 38(17.7%) | 4(1.9%)   | 4(1.9%) |
| カ | 48(22.3%) | 105(48.8%) | 49(22.8%) | 9(4.2%)   | 4(1.9%) |

<現在（荒れているときから変化があった場合のみ回答）>

|   | 全く当てはまらない | あまり当てはまらない | やや当てはまる    | とても当てはまる  | 無記入       |
|---|-----------|------------|------------|-----------|-----------|
| ア | 4(1.9%)   | 36(16.7%)  | 104(48.3%) | 47(21.9%) | 24(11.2%) |



|   |         |           |            |           |           |
|---|---------|-----------|------------|-----------|-----------|
| イ | 9(4.2%) | 56(26%)   | 101(47%)   | 24(11.2%) | 25(11.6%) |
| ウ | 2(0.9%) | 20(9.3%)  | 105(48.8%) | 64(29.8%) | 24(11.2%) |
| エ | 3(1.4%) | 54(25.1%) | 93(43.2%)  | 41(19.1%) | 24(11.2%) |
| オ | 5(2.3%) | 38(17.7%) | 124(57.7%) | 22(10.2%) | 26(12.1%) |
| カ | 6(2.8%) | 45(20.9%) | 107(49.8%) | 31(14.4%) | 26(12.1%) |

(特定非営利活動法人非行克服支援センター, 2014, p16,23,28 を基に作成)

### 3-3-5 学校との関わり

次に、学校との関わりの中で、親の体験を見ていく。アンケート調査では、学校（小学校・中学校・高校）の対応について、「ア 学校に入れることを拒んだ、学校から排除した」「イ 子どもが教師の言動に傷つけられた」「ウ 子どもと親身に関わってくれる先生がいた」「エ 親がしっかりしてほしいと注意された」「オ 親の相談にのってくれる先生がいた」という5つの項目について、4件法で回答を求めた（表3-8）。

学校の子どもへの対応を見ると、「ア 学校に入れることを拒んだ、学校から排除した」という項目に「とても当てはまる」または「やや当てはまる」と回答した親が52.1%、「イ 子どもが教師の言動に傷つけられた」という項目では69.8%であった。一方で、「ウ 子どもと親身に関わってくれる先生がいた」という項目では、「当てはまる」という回答は51.4%と約半数であった。そして、親との関わりでは、「エ 親がしっかりしてほしいと注意された」という項目は「当てはまる」が57.7%と半数以上だったのに対し、「オ 親の相談にのってくれる先生がいた」という項目では、32.1%にとどまった。比較的多くの回答者が、教師や学校は、相談にのってくれるよりも、子育てについて注意される関わりが多かったと認識していることがわかる。

表3-8 子どもが荒れ始めたときの学校の対応

|                         | 全く当てはまらない     | あまり当てはまらない    | やや当てはまる       | とても当てはまる      | 無記入          |
|-------------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|--------------|
| ア 学校に入れることを拒んだ、学校から排除した | 59<br>(27.4%) | 35<br>(16.3%) | 47<br>(21.9%) | 65<br>(30.2%) | 9<br>(4.2%)  |
| イ 子どもが教師の言動に傷つけられた      | 12<br>(5.6%)  | 42<br>(19.5%) | 63<br>(29.3%) | 87<br>(40.5%) | 11<br>(5.1%) |
| ウ 子どもと親身に関わってくれる先生がいた   | 46<br>(21.4%) | 56<br>(26.1%) | 83<br>(38.6%) | 25<br>(11.6%) | 5<br>(2.3%)  |
| エ 親がしっかりしてほしいと注意された     | 31<br>(14.4%) | 52<br>(24.2%) | 57<br>(26.5%) | 67<br>(31.2%) | 8<br>(3.7%)  |
| オ 親の相談にのってくれる先生がいた      | 74<br>(34.4%) | 63<br>(29.3%) | 50<br>(23.3%) | 19<br>(8.8%)  | 9<br>(4.2%)  |

(特定非営利活動法人非行克服支援センター, 2014, p37 から引用)

また、アンケート調査では、【学校の対応で良かったこと】【学校の対応の中で良くなかったこと】【学校・教師に対する希望・要望】について記述式の回答を求めたところ、非常に多くの回答が寄せられた。【良かったこと】としては、『協力していこう』という教師の姿勢に励まされた「担任の先生が真剣に向き合ってくれ、家庭の事情を心配してくれ、励ましてくれた」「子どもが変化しても以前と変わらず、もしくはそれ以上に気にかけて親身に話を聞いてくれる先生が学年に2人いたこと」「担任ともう1人の先生で少年院に在学中も、卒業後も面会に行ってくださった」など、子どもや親の事情を配慮した親身な対応についての記述が多かった。ただ、「一つありません」「全然ありません」といった回答も存在した (p39-41)。

一方、【良くなかったこと】としては、「子どもが悪い、親が悪い、何をやってるんだ！こんなに迷惑をしている…というようなことを、呼び出されては1対複数で責められる」「臨時学校懇談で糾弾され、懇談会恐怖症になった」「子どもの非行や暴言で傷つき、うつになり入院したが、子どもが学校に来てないと病院にまで電話をしてきたこと」「トラブルがあるとすべて我が子が原因と決めつけられた。指導という名のもとに長時間何をすることもなく放置されたり、校則を写すことをさせられ、直接教師が関わる時間がなく、さらに学習についていけなくなり、ますます学校が苦痛になった」「本人の気持ちや行動を理解してもらえず、ただ学校から排除しようという姿勢が見えて、とてもとても悲しい思いが残っています」など、親を責めたり、子どもを排除したりといった対応についての記述が多く寄せられた (p41-43)。

また、【希望・要望】としては、「荒れて手に負えない子どもでも、学校から排除しないでほしい。そのためには親・教師がお互いのつらさを共有して一緒に考えていくことが大切だと思う。先生から『どうしたらよいか一緒に考えましょう』という言葉かけがほしかった」「本人、学校、親がそれぞれできること、協力できることを子どもを真ん中に一緒に考える環境がほしい」「子どもの気持ちをもっと分かってほしい」など、子どものことを学校と親が協力して考えたい、子どもや親の気持ちを理解してほしいという記述が多かった (p43-46)。

これらの記述回答を見ていくと、教師や学校が子どもや親の支えになったと認識されている場合もあるが、子どもを排除されたり、親自身が責められたりすることで、学校に対する不信感や傷つきが残っていることも多いことが窺われる。表3-5で見たように、子どもが非行に走ったとき、親は精神的に追い詰められ、苦しい状況にあることが多いと考えられる。学校や教師は、親にとってサポート資源となる可能性もあるが、今回の調査結果からは、逆に、親は、学校との関わりの中でより追いつめられてしまう体験をしている場合も多いことが考えられた。

### 3-3-6 相談機関

次に相談機関との関わりについて見ていく。調査では、子どもの問題についてどのような人や機関に相談したか、また、その中で良かったもの、不満が残ったものについて理由も含めて尋ねた。

まず、子どもの非行の問題で悩んでいる親の多くが、さまざまな人や相談機関に相談に行って

いることがわかった。「非行」の親の会（177人／82.3%）、家族、友人の3つについては、回答者の半数以上の人が相談をしていた。また、学校、教育相談室（教育相談所）、警察・少年サポートセンター、心理相談室、児童相談所、病院などにも多くの人が相談していた（表 3-9）

表 3-9 相談先

| 「非行」の親の会       | 家族             | 友人             | 教育相談          | 学校            | 警察・少年サポートセンター |
|----------------|----------------|----------------|---------------|---------------|---------------|
| 177<br>(82.3%) | 160<br>(74.4%) | 117<br>(54.4%) | 95<br>(44.2%) | 94<br>(43.7%) | 80<br>(37.2%) |

| 心理相談          | 児童相談所         | 病院            | その他自助グループ     | 弁護士           | 鑑別所        | その他           |
|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|------------|---------------|
| 70<br>(32.6%) | 60<br>(27.9%) | 50<br>(23.3%) | 28<br>(13.3%) | 26<br>(12.1%) | 13<br>(6%) | 36<br>(16.7%) |

※%は、回答総数 215 に対する割合。複数回答可  
（特定非営利活動法人非行克服支援センター，2014，p65 から引用）

相談して良かった人や機関として挙げられたものはさまざまだった。記述回答では、家族、知人・友人、学校、スクールカウンセラー、教育相談所、児童相談所、警察・少年サポートセンター、鑑別所の職員、保護司、病院（医師）、心理相談（カウンセラー）、弁護士、宗教団体、自助グループやサポート・グループなどが挙げられていた。相談して良かった理由として、話を聞いてもらえて良かった、気持ちの整理に役立った、親や子どもの気持ちを理解してくれた、子どもの心理を教えてくれた、実践的な方法を教えてくれた、子どもを肯定的に評価された、今後の見通しを教えてくれた、励ましの言葉が嬉しかったなどが挙げられていた（p65）。

一方で、相談して不満が残った人や機関として挙げられたものもさまざまであった。相談して良かった人や機関として挙げられていたものがほぼ全て、不満が残った人や機関としても挙げられていた。不満が残った理由としては、親が悪いと責められたり批判されたりした、マニュアル通りの対応だった、「子どもを連れてきてほしい」など親ができなくて悩んでいることを要求された、話を聞くだけだった、見守りましょうといった定型の言葉だけだった、具体的なアドバイスやサポートがなかった、子どもの気持ちに寄り添ってくれなかった、子どもについての言葉かけによって傷ついた、親身に聞いてくれなかったなどが挙げられていた（p66）。

記述回答では、「相談に行くたびにますます自分を責めてしまい、その負の感情が子どもに向いてしまった」という回答もあり、相談機関に行くことでかえって苦しくなったと親が感じている場合もあることが明らかになった。親の多くは、子どもの犯罪や問題行動に振り回される上、周囲からも非難を受けるといった大変な状況の中で相談機関を訪れる。特に、相談機関が親を責めたり批判したりしてしまうと、先ほどの回答のように子どもにも良い影響を及ぼさないと考えられる。

る。逆に「お母さんはがんばっておられますね」という一言が救いになったという回答もあり、相談機関が、親の頑張りをねぎらったり、子どもの行動や気持ち、子どもへの具体的な関わりについて一緒に考えていったりすることは、親が非行少年の立ち直りを支えていく上で重要なサポートになると考えられる。回答からは、諸機関や相談担当者が、非行についての知識が乏しい場合が少なくないことも窺われた。臨床心理士が勤務している場合が多いスクールカウンセラーについても、不満が残った理由として、「ただ聞くだけで時間のムダだった」「しばらく様子をみましよう、見守りましよう等、定型の言葉しかなかった」「『本人が話しに来るまで待ちましよう』といて、結局終わりだった」などの回答があった。各相談機関がもっと非行をしている子どもやその親の現状を知り、それに合わせた対応ができるような力をつける必要があると考えられた。

### 3-3-7 親たちの会について

最後に、親たちの会との関わりについて見ていく。調査では、親たちの会の例会への参加の頻度、会を知ったきっかけ、参加した理由、例会に参加して感じる事、例会に参加しなくなった理由、親の会に対する希望や要望について尋ねた。

前述したように、アンケート調査では 215 名の回答者のうち 186 名が親たちの会に参加したことがあると回答しているが、そのうち 3 分の 1 にあたる 62 人が「ほぼ毎月参加」、約 2 割の 38 人が「2～3 カ月に 1 回程度」と回答しており、回答者の約半数は定期的に親たちの会に参加していた。一方で、64 人が現在は親たちの会に参加していないと回答し、過去に親たちの会に参加していたが、現在は参加していない人もかなりの数含まれていた（表 3-10）。

表 3-10 親たちの会への参加の頻度

| ほぼ毎月参加     | 2～3 か月に 1 回程度 | 半年に 1 回程度 | 年に 1 回程度 | 現在は参加していない | 合計  |
|------------|---------------|-----------|----------|------------|-----|
| 62 (33.3%) | 38 (20.4%)    | 15 (8.1%) | 7 (3.8%) | 64 (34.4%) | 186 |

(特定非営利活動法人非行克服支援センター, 2014, p72 から引用)

親たちの会の存在を知ったきっかけとしては、HP (ホームページ)、新聞・テレビ、知人の紹介などが多かったが、その他の回答として、電話相談、学校の先生からの紹介、少年院での講演、鑑別所、児童相談所、教育相談所などでの紹介、図書館、不登校の親の会なども挙げられており、会の存在を知るきっかけは多様である（表 3-11）。

表 3-11 親たちの会を知ったきっかけ

| 会の HP      | その他の HP  | 会の著作物     | 新聞・テレビ     | 知人の紹介      | その他        | 合計  |
|------------|----------|-----------|------------|------------|------------|-----|
| 44 (22.2%) | 5 (2.5%) | 17 (8.6%) | 48 (24.2%) | 48 (24.2%) | 36 (18.2%) | 198 |

(特定非営利活動法人非行克服支援センター, 2014, p73 から引用)

親たちの会の例会に参加してみたいと思った理由については、「ア 子どもの非行を止める解決策が知りたかったから」「イ 子どもへの対応の仕方が分からなかったから」「ウ 他の親の話を知りたかったから」「エ 自分の話を誰かに聞いてほしかったから」という4つの項目について、「1 全く当てはまらない」から「4 とても当てはまる」の4件法で回答を求めた(表3-12)。

結果を見ると、ア～エのいずれの項目についても、「とても当てはまる」または「やや当てはまる」と回答した人の合計が8割～9割程度となっていた。多くの人が、子どもへの対応の仕方が分からなくなり、非行を止める解決策を知りたいという気持ちや、非行の子どもをもつ他の親の話を聞いたり、自分の悩みを話したりしたいという気持ちがあったと、会に参加した理由を振り返っている。その他の記述回答では、「誰にも言えない話ができる」「居場所が欲しかったから」「身の置き所がなかったから」といった回答もあり、親たちの会の例会は、他ではできない話ができる居場所として期待されることもあるようである。

表 3-12 例会に参加してみたいと思った理由

|                          | 全く当てはまらない   | あまり当てはまらない    | やや当てはまる       | とても当てはまる       | 無記入         | 合計  |
|--------------------------|-------------|---------------|---------------|----------------|-------------|-----|
| ア 子どもの非行を止める解決策が知りたかったから | 5<br>(2.7%) | 12<br>(6.5%)  | 43<br>(23.1%) | 126<br>(67.7%) | 0<br>(0%)   | 186 |
| イ 子どもへの対応の仕方が分からなかったから   | 2<br>(1.1%) | 3<br>(1.6%)   | 41<br>(22%)   | 140<br>(75.3%) | 0<br>(0%)   | 186 |
| ウ 他の親の話を聞きたくから           | 4<br>(2.2%) | 16<br>(8.6%)  | 38<br>(20.4%) | 126<br>(67.7%) | 2<br>(1.1%) | 186 |
| エ 自分の話を誰かに聞いてほしかったから     | 6<br>(3.2%) | 27<br>(14.5%) | 50<br>(26.9%) | 97<br>(52.2%)  | 6<br>(3.2%) | 186 |

(特定非営利活動法人非行克服支援センター, 2014, p73 から引用)

調査では、例会に参加した感想として、【初めて例会に参加したときに感じたこと】と、【現在例会に参加していて感じること】をそれぞれ尋ねた。

【初めて例会に参加したときに感じたこと】では、「ア 話を聞いてもらって楽になった」「イ 自分だけが苦しいのではないと知り安心した」「ウ 非行がエスカレートするかもしれないと怖くなった」「エ 解決策を教えてもらえないと知ってショックだった」「オ 会の様子や雰囲気不安を感じるがあった」の5項目について、4件法で尋ねた(表3-13)。

その結果、「ア 話を聞いてもらって楽になった」と「イ 自分だけが苦しんでいるのではないと知り安心した」については、「とても当てはまる」または「やや当てはまる」と回答した人が9割近くになっており、多くの回答者が例会に参加することで、気持ちが楽になったり安心

したりする体験をしたと感じていることが分かる。自由記述の回答の中でも、「自分がひとりではないことに安心した」「非行の親って私と同じ普通のお母さんだと思って安心した」といった回答があり、同じような体験をしている人がおり、自分だけが苦しんでいるのではないということを知って安心できるということがあると考えられる。また、「ひとすじの光が見えた」「希望の光が見えてきた」「(現在は非行が落ち着いている)体験者の話は希望になる」「心が軽くなれた」「優しさに触れた」といった回答もあり、初めて例会に参加したときに、これまで感じられていなかった希望を感じられる場合があるようである。

一方、「ウ 非行がエスカレートするのかもしれないと怖くなった」「エ 解決策を教えてもらえないと知ってショックだった」「オ 会の様子や雰囲気不安を感じるがあった」の3つの項目については、「やや当てはまる」または「とても当てはまる」という回答が、ウが25.8%、エが15.6%、オが8.6%あった。割合としては少ないが、初めて例会に参加したときには、非行がエスカレートするのかもしれないと不安を感じたり、何か非行を止めるための特別な解決策を知りたいと期待していたが、それが無いことに落胆したりしたと振り返っている人もいる。また、自由記述の回答では、「言いつばなしでコメントもなく不満が残った」「私の場合は批判やアドバイスをほしい」といった、例会の討論や批判、アドバイスをしないというやり方に対する不満もわずかだが寄せられた。

表 3-13 初めて例会に参加したときに感じたこと

|                            | 全く当てはまらない     | あまり当てはまらない    | やや当てはまる       | とても当てはまる       | 無記入         | 合計  |
|----------------------------|---------------|---------------|---------------|----------------|-------------|-----|
| ア 話を聞いてもらって楽になった           | 5<br>(2.7%)   | 17<br>(9.1%)  | 62<br>(33.3%) | 100<br>(53.8%) | 2<br>(1.1%) | 186 |
| イ 自分だけが苦しいのではないと知り安心した     | 2<br>(1.1%)   | 7<br>(3.8%)   | 49<br>(26.3%) | 128<br>(68.8%) | 0<br>(0%)   | 186 |
| ウ 非行がエスカレートするのかもしれないと怖くなった | 53<br>(28.5%) | 80<br>(43%)   | 33<br>(17.7%) | 15<br>(8.1%)   | 5<br>(2.7%) | 186 |
| エ 解決策を教えてもらえないと知ってショックだった  | 80<br>(43%)   | 72<br>(38.7%) | 23<br>(12.4%) | 6<br>(3.2%)    | 5<br>(2.7%) | 186 |
| オ 会の様子や雰囲気に不安を感じるがあった      | 119<br>(64%)  | 45<br>(24.2%) | 13<br>(7%)    | 3<br>(1.6%)    | 6<br>(3.2%) | 186 |

(特定非営利活動法人非行克服支援センター, 2014, p75 から引用)

【現在例会に参加していて感じること】については、「ア 自分の話を聞いてもらうことで楽になる」「イ 自分の話が参加者に分かってもらえたと感じる」「ウ 話をすることで自分の考えが整理される」「エ 他の参加者の話を聞くことで元気がもらえる」「オ 話を聞く中で別の考え

や関わり方に気づく」「カ 話を聞く中で子どもの気持ちに気づく」「キ 話を聞く中で自分の考え方や行動を振り返る」「ク 日常生活のつらさを一時的に忘れられる」の8つの項目について4件法で回答を求めた（表3-14）。

ア～キまでの7つの項目については、「とても当てはまる」または「やや当てはまる」と回答した人が回答者の約9割程度になっていた。自分が話をすることに関しては、話を他の参加者にわかってもらえたと感じる事が多く、話を聞いてもらうことで楽になるという気持ちをもっている人が多いことが分かる。また、他の参加者の話を聞くことに関しては、話を聞く中で元気をもらえるといった感情的なサポートを得られるというだけでなく、自分の考え方や行動を振り返ったり、別の考え方や関わり方、あるいは、子どもの気持ちに気づいたりといった体験をしている参加者が多いと考えられる。例会で他の参加者の話を聞くことが、自分や子どものことを少し客観的に振り返り、さまざまな気づきを得る機会にもなっていることが窺われる。自由記述の回答でも、「本音で話ができ、泣いたり笑ったりしているうちに元気になれる」「苦しんでいるのは自分だけじゃないと心強くなる。そして、子どもが苦しんでいることにも気づいたり再認識できる」「解決策はなくても、こんなふうにしてみたら？とか、大変だねとか、共感やプラス方向のコメントで救われる」といった回答があった。

「ク 日常生活のつらさを一時的に忘れられる」という項目については、「当てはまる」と回答した人が回答者の約7割になっており、約3割の人には当てはまらない結果になった。今回のアンケート回答者の約半数が子どもの荒れが現在は落ち着いている人であったことも影響しているように思われる。

自由記述の回答では、「自分が救われたので、話すことでまた同じように苦しんでいる人を少しでも楽にして助けられたら」「他の方の想いに共感することで、その方のつらい思いが少しでもやわらげばと思います」などの回答もあり、自分が会に参加して楽になったので、今悩んでいる人の支えになれるようにという気持ちで例会に参加している人もいることが分かる。また、少数だが「貧富の差を感じて少しつらいことがある」「真の悩みや心配は例会の中では言えない。言えるのは時間が経ってから」といった回答もあり、人によっては例会でつらさを感じたり、なかなか悩みを言えなかったりする場合もあることがわかる。

表3-14 現在例会に参加していて感じること

|                         | 全く当てはまらない   | あまり当てはまらない   | やや当てはまる       | とても当てはまる      | 合計  |
|-------------------------|-------------|--------------|---------------|---------------|-----|
| ア 自分の話を聞いてもらうことで楽になる    | 1<br>(1%)   | 10<br>(9.5%) | 32<br>(30.5%) | 62<br>(59%)   | 105 |
| イ 自分の話が参加者に分かってもらえたと感じる | 2<br>(1.9%) | 8<br>(7.5%)  | 41<br>(38.7%) | 55<br>(51.9%) | 106 |
| ウ 話をすることで自分の考えが整理される    | 1<br>(1%)   | 5<br>(4.8%)  | 38<br>(36.2%) | 61<br>(58.1%) | 105 |

|                        |             |               |               |               |     |
|------------------------|-------------|---------------|---------------|---------------|-----|
| エ 他の参加者の話を聞くことで元気がもらえる | 0<br>(0%)   | 11<br>(10.4%) | 35<br>(33%)   | 60<br>(56.6%) | 106 |
| オ 話を聞く中で別の考えや関わり方に気づく  | 2<br>(1.9%) | 2<br>(1.9%)   | 33<br>(31.4%) | 68<br>(64.8%) | 105 |
| カ 話を聞く中で子どもの気持ちに気づく    | 2<br>(1.9%) | 8<br>(7.6%)   | 40<br>(38.1%) | 55<br>(52.4%) | 105 |
| キ 話を聞く中で自分の考え方や行動を振り返る | 0<br>(0%)   | 2<br>(1.9%)   | 30<br>(28.3%) | 74<br>(69.8%) | 106 |
| ク 日常生活のつらさを一時的に忘れられる   | 6<br>(5.8%) | 25<br>(24%)   | 37<br>(35.6%) | 36<br>(34.6%) | 104 |

(特定非営利活動法人非行克服支援センター, 2014, p78 から引用)

アンケートでは、現在例会に参加していない人に、【例会に参加しなくなった理由】についても尋ねた。「ア 子どもの問題が落ち着いたから」「イ 自分で子どもの問題に対応できるようになったから」「ウ 忙しくなった、参加する時間がとれなくなったから」「エ 会の様子や雰囲気と自分が合わないと感じたから」の4項目について、4件法で回答を求めた(表3-15)。

例会に参加しなくなった理由として、「ア 子どもの問題が落ち着いたから」は「とても当てはまる」または「やや当てはまる」と回答した人が約8割、「イ 自分で問題に対応できるようになったから」は約7割だった。子どもの問題が落ち着いたこと、あるいは、自分で子どもの問題に対応できるようになったことから、例会に参加しなくなる人が多いことが窺われる。「ウ 忙しくなった、参加する時間がとれなくなったから」についても6割以上の人が「当てはまる」と回答していた。自由記述の回答でも、「会の開催日が仕事の休みではなくなってしまったので参加できなくなった」「遠方で行けない」という回答があり、時間や距離的な問題で例会に参加しなくなる場合も多いと考えられる。また、「自身の身体不調のため」「子どもの状態が落ち着いていないので、参加したいがなかなか難しい」といった回答もあり、親自身の体調や、子どもの状態が不安定なために参加ができないといった場合も見られた。

一方、「エ 会の様子や雰囲気が自分と合わないと感じたから」については、回答者の15%程度の人が「当てはまる」と回答していた。回答者の中での割合は多くはないが、参加した例会が自分と合わないと感じて参加しなくなった人もいることが分かる。

表3-15 例会に参加しなくなった理由

|                  | 全く当てはまらない    | あまり当てはまらない   | やや当てはまる       | とても当てはまる    | 合計 |
|------------------|--------------|--------------|---------------|-------------|----|
| ア 子どもの問題が落ち着いたから | 9<br>(10.2%) | 9<br>(10.2%) | 33<br>(37.5%) | 37<br>(42%) | 88 |
| イ 自分で子どもの問題に対    | 13           | 13           | 41            | 16          | 83 |



|                                |               |               |               |               |    |
|--------------------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----|
| 応できるようになったから                   | (15.65%)      | (15.65%)      | (49.4%)       | (19.3%)       |    |
| ウ 忙しくなった, 参加する時<br>間がとれなくなったから | 18<br>(21.2%) | 13<br>(15.3%) | 41<br>(49.4%) | 16<br>(19.3%) | 85 |
| エ 会の様子や雰囲気と自分<br>が合わないと感じたから   | 48<br>(62.3%) | 17<br>(22.1%) | 9<br>(11.7%)  | 3<br>(3.9%)   | 77 |

(特定非営利活動法人非行克服支援センター, 2014, p80 から引用)

## 第4節 まとめ

本節では、前節の結果を踏まえて、親の体験について整理し、次章で検討する課題について述べる。

### 3-4-1 親の体験

アンケート調査の結果からは、子どもが「非行」に走ったときの体験について、回答した親たちがある程度共通した認識を持っていることが窺われた。多くの親が、子どもの「非行」を止めたいと思い、そのように行動しながらも、子どもの言動が理解できず、どうしたらいいかわからないという困惑や苦悩を体験するようである。また、自分の子育てに対して自責感をもったり、周囲からも批判や叱責を受けたりする中で、子どもが荒れていた時は、精神的に疲弊し、うつに近い状態であったと考えられる場合も多い。

調査結果では、教師や学校が、親にとって相談ができ、支えになったと捉えられている場合もあるが、逆に、学校との関わりの中で親がより追いつめられてしまったと捉えられている場合も多いことが示された。相談機関についても、親はさまざまところへ相談に行くが、相談機関が支えになったと捉えられている場合もある一方で、相談機関の対応でかえって苦しくなると捉えられている場合もあることが明らかになった。

調査の回答者が親たちの会と関わりのある親であったことも影響していると考えられるが、親たちの会については肯定的な意見が多数を占めた。多くの人が、子どもへの対応の仕方が分からなくなり、「非行」を止める解決策を知りたいという気持ちや、「非行」の子どもをもつ他の親の話の聞いたり、自分の悩みを話したりしたいという気持ちをもって会に参加をしたと振り返っている。例会に参加することで元気をもらえたり、自分とは別の考え方や関わり方、あるいは、子どもの気持ちに気づいたりといった体験をしている参加者が多いことも窺われた。ただし、割合として多くはないが、初めて例会に参加したときには、「非行」がエスカレートするかもしれないと不安を感じたり、何か「非行」を止めるための特別な解決策を知りたいと期待していたが、それができないことに落胆したりしたと、振り返られている場合も見られた。

回答者の中には、現在は例会に参加していない人も一定数おり、会から離れる理由としては、子どもの問題が落ち着いたこと、自分で子どもの問題に対応できるようになったこと、そして、

時間がとれなくなったことが多かった。他方で、今悩んでいる人の支えになれるようにという気持ちがあって、例会への参加を続けている人もいた。

親と子どもとのやりとりという点について、回答した時点の親の視点から見ると、子どもが荒れているときは、親子の会話が減少し、親子相互に相手の気持ちや考えが理解できなくなるが、荒れている時期を過ぎると、再び会話が復活し、親子間で互いに相手の話を聞いたり、相手の気持ちや考えが理解できるようになったりして、再びやりとりが豊かになると認識されている傾向が見られた。子どもとの関係性が変化し、改善したと実感している親が多く、それが結果に反映されたと考えられる。ただし、今回の調査では、どのようにして親子の関わりや関係性に変化が生じるのかという点は十分に検討できなかったため、この点は次章で検討する。

### **3-4-2 次章の課題**

今回の調査研究の結果では、アンケート調査に回答した、親たちの会に参加している多くの親にとって、グループが重要なサポート資源となっていることが明らかになった。また、時間の経過とともに、親子の関わりや関係性が変化すると認識されていることがわかった。ただし、そうした変化がどのようなプロセスで生じていくのか、また、その過程でグループはどのように機能しているのかという点は明らかにされていない。そこで次章では、参与観察およびインタビューデータの分析を用いて、親たちの体験が変化するプロセスと、その過程でグループが果たしている役割についてより詳細に検討する。

## 第4章（研究2）

### 子どもの「非行」と向き合う親たちの語りの変化

#### ——セルフヘルプ・グループへの参加と視点の拡がり——

第4章では、参与観察およびインタビューによって得られたデータを分析し、例会で語られる参加者の語りの特徴と、その背景に想定される参加者の体験の特徴を明らかにし、親たちの会に参加することで語りや体験が変化していくプロセスについてより詳細に検討する。

#### 第1節 問題と目的

---

本章では、親たちの会に参加している親たちの語りや体験が変化していくプロセスを明らかにし、その過程でグループが果たしている機能について検討する。

第1章で述べたように、非行少年を抱える家族は少年の犯罪や問題行動に振り回される上、周囲からも非難を受けるなど疲弊、苦衷が甚だしく、家族が非行少年の立ち直りを支えていくためには、心理的・社会的援助が不可欠であると言われている（生島, 2002; 山本, 2005）。実際、第3章のアンケート調査の結果では、親の多くが、自分の子育てに対して自責感をもったり、周囲からも批判や叱責を受けたりする中で、精神的に追い詰められる体験をしていたことが窺われた。また、学校や相談機関が親の支えになる場合もあるが、学校や相談機関との関わりで、逆に親が苦しくなってしまう場合も多いことが示唆された。そのような状況の中で、親たちの会は、参加した親たちにとって、情緒的なサポートや様々な気づきを得られる場となっていることが考えられる。また、子どもの荒れがおさまっていく過程では、悪化していた親子の関係性が良好なものに変化していくと親が認識している場合が多いことも示された。本章では、参与観察およびインタビューによって得られたデータを分析し、親たちの会の参加者の語りや体験が変化するプロセスと、その過程でグループが果たしている役割についてより詳細に検討することを目的とする。

第1部で述べたように、本研究では、ラパポートのナラティブ・アプローチ (Rappaport, 1993) の枠組みを用い、当事者の語りに注目しながら、変化のプロセスを検討する。特に、参加者が、コミュニティのナラティブをどのように取り入れ、活用し、それが語りの変化にどのようにつながっているのかという点を明らかにすることを試みる。SHG 研究において参加者の語りからその体験の変化を明らかにしようとした研究はいくつか存在するが（金子, 2007; 方, 2006; 和田, 2007 など）、多くの研究では、語られた内容のみから語り手の体験を捉えようとしている。本章では、それだけでなく、語り方の変化や、語るときの体験の変化にも目を向ける。このような手法をとることで、参加者が変化するプロセスを多角的・重層的に検討することができると考えら

れる。

## 第 2 節 方法

---

本研究では、参加者のグループ内での語りの特徴と、生活の中での体験の双方を捉えるために、フィールドワークによる参与観察とインタビューを併用してデータを収集した。本研究フィールドや、筆者とフィールドとの関わりについては、第 2 章で述べたので、ここでは、データ収集および分析の手続きについて示す。

### 4-2-1 データの収集

#### (1) フィールドワークによる参与観察

**参与観察とフィールドノーツの作成** フィールドに入った初期の 6 か月間は、全体的観察を行い活動の流れを幅広く記録した。その後、観察の焦点を絞り、例会中の語りと、参加者間のやりとり注目して観察を行った。その後、語りの類型とその関係性に関する仮説が形成されたため、以降は仮説に反する語りや仮説に含まれない語りがいないかを意識して観察を行った。本章の分析では、主に、筆者が例会に参加し始めてから 1 年間のフィールドノーツのデータを用いた。

筆者は、語り合いの場では基本的にはメモをとることを控えた。これは、話の内容がプライベートなものであり、「非行」に反社会的な側面があるため、参加者によっては、メモをとられることで語りにくさを感じる事が予測されたからである。そこで、例会の現場でのメモ取りは最小限に留め、現場を離れた後に語りの概要などに関する暫定的なメモを書き、帰宅後メモと記憶をもとにフィールドノーツを作成した。フィールドノーツの分量は、話の内容にも左右されて変動があったが、各例会につき A4 の用紙で 8~9 ページ程度、文字数にして 8000 字~10000 字の間ということが多かった。

**倫理的配慮** 本研究では、参与観察で収集したデータの分析およびデータの掲載の際には、以下の配慮を行った。まず、フィールドノーツを作成する時点で固有名詞や地名を記号化し匿名性を確保した。また、会の記録者に記録をとらないように申し出た参加者の語りはデータから除外した。さらに、語りのデータを引用するときには、個人を特定させる恐れのあるような子どもの具体的な「非行」事実に関する部分は掲載しないようにして、語りの具体性を最小限にとどめるようにした。加えて、データの主要な引用部分について、事前に、プライバシーの観点から問題がないか事務局長にチェックを受けた。

#### (2) インタビュー

**インタビューイ** 「非行」と向き合う親たちの会に参加する親 5 名にインタビューを行った (表 4-1 参照)。全ての人が事務局長による紹介である。事務局長には、紹介に際して会への参加年数にばらつきが出るよう依頼をしていた。これは、会の参加者は、初めて会に来る人から、10 年以上継続して会に参加している人まで様々であり、会に参加してから語りや体験が変化し

ていく全体的なプロセスを捉えるために、参加年数が異なる様々な人から話を聞く必要があると考えたからである。

事務局長から紹介を受けるというやり方でインタビューイヤーを選定した理由は 2 つある。第一には、筆者が、会の参加者の特徴や、属性、会への参加年数などについて十分に把握できていなかったためである。第二には、インタビューにおいて研究協力者は、研究という目的のために、「非行」という反社会的行為を伴う子どもの問題について語ることを求められるので、精神的な負荷が大きく、未だ十分な関係性を築けていない筆者が直接協力を依頼することが難しかったためである。研究協力者の数が 5 名となったのは、第一には、参加者の体験が変化していくプロセスを明らかにするために、一人ひとりの体験をかなり詳細に聞きとり、細かく分析していく必要があったからであり、第二には、結果の妥当性の検討は、参与観察によって行うことが可能であると考えられたからである。

表 4-1 インタビューイヤーの属性

|             | 参加年数        | 子ども                       | 年齢        | 職業、社会的属性    | インタビュー時間<br>(1回目, 2回目) |
|-------------|-------------|---------------------------|-----------|-------------|------------------------|
| Aさん<br>(母親) | 5年<br>世話人   | 長女, <b>次女(19)</b>         | 40代<br>後半 | パート<br>勤務   | 1時間15分,<br>55分         |
| Bさん<br>(母親) | 10年半<br>世話人 | 長男, <b>次男(25)</b> ,<br>長女 | 50代<br>半ば | 主婦          | 2時間,<br>1時間52分         |
| Cさん<br>(母親) | 1年半         | <b>長男(18)</b> , 長女,<br>次女 | 40代<br>半ば | フルタイム<br>勤務 | 2時間15分,<br>2時間45分      |
| Dさん<br>(母親) | 3年          | <b>長男(21)</b> , 次男        | 40代<br>後半 | パート<br>勤務   | 1時間50分,<br>1時間40分      |
| Eさん<br>(父親) | 2年<br>世話人   | <b>長男(17)</b> , 長女,<br>次女 | 50代<br>前半 | 公務員         | 2時間30分                 |

※太字が会に来るきっかけとなった子ども。年齢は1回目のインタビュー時のものである。Eさんについては多忙で2回目のインタビューの時間がとれなかったため、郵送で結果のフィードバックを行った。

**インタビューの実施** インタビューは、1回目は、筆者がフィールドに入ってから6か月～10か月の間、2回目が11か月～12か月の間に行われた。インタビューの内容は、インタビューイヤーの承諾が得られた上で、ICレコーダーで録音された。ただし、途中で録音しないよう申し出があった部分は、録音を停止した。1回目のインタビューでは、①会に参加した経緯、②例会の中での体験、③生活の中での体験や会に参加することでの影響などについて尋ねた。これらのテーマについて、インタビューイヤーの語りの流れを尊重しながら、可能な限り具体的なエピソードとともに語ってもらうよう心がけた。2回目のインタビューでは、語りや体験が変化するプロセ

スについての暫定的な仮説のフィードバックを行うとともに、1回目のインタビューの追加、補足の質問を行った。主に質問したテーマは、1回目のインタビューの感想およびその後の変化、フィードバックに対する感想、1回目のインタビューで語られた内容に関する追加の質問、会のナラティブの受けとめ方、例会で生じる涙と笑いについての体験である。

**倫理的配慮** インタビューの全過程を通して、インタビューイの自由意思を尊重し、研究への参加・中断を自由に決定できるよう配慮した。まず協力を求める際に、研究の趣旨やデータの用い方について文書を用いて説明し、研究協力の意思を確認し同意を得た。また、インタビュー開始前に口頭と書面にて、①研究の趣旨と目的、②研究への参加は任意で撤回が可能なこと、③記録・録音はいつでも中断できること、④逐語録を確認しデータの削除ができること、⑤データは個人が特定されないように匿名化すること、⑥結果についてフィードバックを行うことを説明し、同意書へインタビューイ、研究者双方が署名し一部ずつ保管した。

#### 4-2-2 データの分析

フィールドノーツとインタビューデータの分析は、初めは独立に並行して行われ、その後、双方のデータの分析結果から得られた仮説を統合・修正するという流れで研究が進行した。分析には構成主義的グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Charmaz, 2008/2006) を援用し、具体的な分析方法はデータの種類に合わせて調整した。

##### (1) フィールドノーツの分析

例会の中での語りのデータについては、個々の語りの内容と語り方の両方を捉えるために、語りを意味のまとまりに分けて切片化した上で、語りの内容に照らしてコードをつけていった。その後、コードを吟味し、<この語りでは何がどのように語られているのか>という問いかけをしながら、似ている語りを集め、語りのカテゴリーとしてまとめた。さらに、語りのカテゴリー同士の関係性を検討し、「非行」がどのように語られているのかという観点から、3つの語りの類型として整理した。

表 4-2 語りデータのコード・カテゴリーの例

| 語りのデータ (「/」は切片化の区切りを示す)  | コード  | カテゴリー           |
|--|--|-----------------|
| 9年くらい前にいろいろ相談する中で、〇〇先生(会の代表)に相談し、この会に来るようになった。/自分は、学校の先生と一緒に子どもを注意していた。相談にもいろいろ行き、なんとか非行を止めようと、非行の芽を早くつもうと努力した。/この会にきて、それでも息子はすぐにはよくなり、会ではよくなるからという先輩のお話を聞いていて信じるしかないと思っていたが、自分の子はダメかもしれない、とも思っていた。/放任 | 会に来た経緯の説明<br><br>学校と同じように子どもを注意し、非行の芽をつもうとしていた<br><br>よくなるという話が信じられなかった<br><br>放任しているのでは | 子どもへの接し方を振り返る語り |

|   |                           |           |
|---|---------------------------|-----------|
| しているのではないかという気持ちと葛藤が続いた。／親は結局できないし、自分で見つけていくこと。 | ないかという葛藤<br>子どもが自分で見つけていく | 今後の方向性の語り |
|---|---------------------------|-----------|

(2) インタビューデータの分析

インタビューデータは初めに逐語録を作成し、それを読み込みながら、データを意味内容で切片化し、内容に即したコードをつけた。初期段階のコーディングでは、できるだけデータに忠実に、コードをつけていった(表 4-3 参照)。次にコードを類似した内容でまとめ、サブカテゴリーおよびカテゴリーを作成した。その後、カテゴリー間の差異や関係を検討するため、コードやカテゴリーを空間上に配置するクラスター化の作業を行った。これらの手続きをインタビューごとに行い、インタビュー同士の結果を比較した。例会や生活の中での体験の変化について参加者間で共通性が見えてきた時点で、特に、「参加者の語りや体験が変化するプロセス」に焦点を当て、コードやカテゴリーの修正と精緻化を行い、【行き詰まりや孤立と会への参加】、【気づきによる視点の拡がり】、【子どもへの見方や関わり方の変化】という 3 つのプロセスとしてまとめた。

表 4-3 インタビューデータのコード・カテゴリーの例

| インタビューデータ<br>(「/」は切片化の区切りを示す)  | コード  | サブカテゴリー<br>/カテゴリー       |
|--|--|-------------------------|
| IE: そうですね。初め、私が最初にア例会に行ったときには、/数人のお母さんがいまして、初めての人っていうのは私一人だったんですけども(はい)、/どんな風にして会が始まるのかっていうことにすごく不安があって(はい)、これからどんな風になるんだろうっていう、そういう気持ちで行ったんですね(はい)。/で、やはり最初に、今の例会のように、最初の司会のお母さんが話を始めて(はい)、/そのお母さんはもうずいぶんこう少し、先を行っているお母さんだったので、あの、こう子どもが中学の頃はこうでっていう、そういう話をされたときに、/あの、今の自分の状況が、本当に同じような感じだったので、/すごく、あの、気持ちが昂って(はい)、もう涙が止まらなくなったんですね、最初。 | 最初に行ったときの体験<br>初めての人は自分一人<br>これからどんな風になるのかという不安<br>司会の母親が最初に話す<br>先を行っている母親が以前のことを話す<br>今の自分の状況と同じ<br>気持ちが昂って涙がとまらない | 渦中のときに話を聞く体験/会で人の話を聞く体験 |

### (3) 分析結果の統合とメンバーチェック

フィールドノートおよびインタビューデータの分析で、暫定的仮説が生成された時点で、両者を統合した。フィールドノートの分析から得られた語りのバリエーションと、インタビューデータの分析から得られた語りや体験の変化についての結果を統合し、＜「非行」に巻き込まれる語り＞、＜「非行」を捉え直す語り＞、＜「非行」を受けとめる語り＞という3つの語りの類型とその関係性を軸として、仮のモデルを生成した。その後、参与観察とインタビューから追加のデータを収集し、モデルの修正・精緻化を行った。また追加インタビュー時や例会などの場で、インタビュイー、会のメンバー、事務局長に暫定的結果をフィードバックした。そこで得られた意見やコメントも分析結果の修正に用いられた。

## 第3節 結果と考察

---

本節では、まず、参与観察で収集したデータをもとに、例会で生み出される語りの特徴について明らかにしていく。例会で生じる語りは、「非行」がどのように語られているのかという観点から整理すると、＜「非行」に巻き込まれる語り＞、＜「非行」を捉え直す語り＞、＜「非行」を受けとめる語り＞という3つの類型として記述できると考えられた。次に、この3つの語りの類型と、参加者が日常生活や会の中で体験していることとの関連性について、主にインタビューにおける語りをもとに検討する。最後に、語りや体験が変化していくプロセスの個別性と共通性について、それぞれのインタビュイーの語りから検討を行う。

### 4-3-1 例会で生み出される語りの特徴

例会の語り合いの中では、参加者が順番に自分の体験や思いを語る。語り合いの場で、何をどのように語るかについては参加者各自に委ねられているが、多くの場合、参加者は、簡単な自己紹介をした後、子どもの問題が生じた経緯、会に参加した経緯や状況、それから現在に至るまでの過程などについて語っていく。

語りの具体的な内容は、参加者一人ひとり異なっているが、語られるテーマや語り方という視点で見ると、異なる参加者の間でも類似性が見出された。そして、「非行」がどのように語られているのかという観点から語りを整理すると、＜「非行」に巻き込まれる語り＞、＜「非行」を捉え直す語り＞、＜「非行」を受けとめる語り＞という3つの類型として記述できると考えられた。以下では、それぞれの語りの類型の特徴を明らかにし、その関係性について検討する。

#### (1) 「非行」に巻き込まれる語り

＜「非行」に巻き込まれる語り＞は、現在の子どもの困難な状況を訴え、自分のつらい気持ちを吐き出す語りの型である。この語りは、初めて会に参加した親や、会に参加するようになって間もない親の語りにおいてよく見られた。

**感情の吐き出し** この型の語りでは、子どもの「非行」が次々と訴えられるように表現され、語り手である親自身の現在のつらさや苦しさ、子どもに対する怒りなどの感情が吐き出され



る。例えば、次のような語りである。

〈抜粋 4-1〉 例会にて（フィールドノーツ X 年 4 か月）

子ども二人を一人で育ててきた。今は、一人ではやっていけない感じ。次第に荒れが広がり家庭内暴力が出てきた。警察を呼んだこともある。私に対する言葉の暴力がすごく、「死ぬ」「お前の責任だ」などと言う。諦めないとやっていけないところもある。

語りの中で参加者は、子どもに振り回される生活でたまった、つらさ、苦しさ、怒りといった感情を吐き出す。語り手の感情は、言葉を通して表現されるが、語り手の表情や涙が言葉以上に語り手のつらさや苦しさを聞き手に伝えることもある。例会では、話すときに泣き出して、涙が止まらず、ハンカチで目を抑えながら話をする参加者も見られた。また、語り手が「子どもが…をして…をして、さらに…をして」と問題行動を次々と述べる語り口から、子どもに対する怒りや落胆が伝わってくることもあった。

**現在や近い将来の出来事への不安** また、この語りの型では、つらい感情とともに、「非行」を止めたいが止められないという葛藤のなかで、現在や近い将来の出来事についての不安や心配が語られる。

〈抜粋 4-2〉 例会にて（フィールドノーツ X 年 5 か月）

（子どもが）友達から店長が給料を払わないと言っているという話を聞き、金額次第では殴り込みをかけると言っていて（給料の支払い日である）○日が来るのが怖い。

〈抜粋 4-2〉では、近い将来に起こるかもしれない出来事に対する具体的な不安が語られている。他にも、子どもが家に帰って来ておらず不安だ、犯罪に関わっていないか心配だといった、子どもの言動に対する不安や、それにどのように対処したらよいかわからないという悩みが語られることが多かった。このように、<「非行」に巻き込まれる語り>では、時間的な視野が現在を中心とした狭まったものになっているという特徴もある。この語りの型においては、語り手は、子どもが引き起こす「非行」を訴えたり、嘆いたりするようにして語り、語り手である親は、「非行」に巻き込まれた被害者のように立ち現れる。

（2）「非行」を捉え直す語り

<「非行」を捉え直す語り>は、自分を俯瞰したり、他者の視点を取り入れたりするなど時間的、空間的な視点の移動がみられ、その中で子どもへの見方や対応の仕方が捉え直される語りの型である。この語りは、子どもの荒れはまだ落ち着いていないが、会に参加してからある程度時間が経過している参加者が語るときによく見られた。

**過去と現在を比較する** この語りの型では、語りが生み出される現在の視点から過去を振り返り、以前の自分の気持ちや体験が対象化されるという特徴が見られた。

〈抜粋 4-3〉 例会にて（フィールドノーツ X 年 8 か月）

学校にいかないことがこの世の終わりのように思っていて、朝、布団を引っぺがして起こしていた。（…）今思うと学校にも家にも子どもの居場所をなくしていた。（傍点は筆者）

この抜粋のように、過去を振り返る中で、子どもへの接し方が反省的に語られる場合もある。こうした語りでは、「先生と一緒に子どもを注意していた」「非行の芽を早くつもうと努力した」など、学校や社会と同じ目線で行動していた以前の自分が、いくらか批判的に言及されることも多い。こうした語りからは、親の見方が、当時と、振り返りを行っている現在とで変化していることが窺える。

さらに、過去と現在の違いが変化として表現される場合もある。語られる変化の内容は多様であり、子どもの行動の変化、自分の考え方や子どもへの接し方の変化、子どもとの関係の変化などが、具体的なエピソードを交えて語られる。

〈抜粋 4-4〉 例会にて（フィールドノーツ X 年 3 か月）

最近自分も息子もちょっと成長したかなということがあって（…）（息子の話に対して）以前の私なら「貴方にも非があるんでしょう」みたいなことを言ったと思うが、（…）「うんうん、ひどいね」と聞いてあげられる自分がいた。

ここでは現在の自分や子どもが過去と比較され、違いが成長として語られている。子どもや自分の変化は、子どもや自分が成長しているという肯定的な形で語られることが多いが、「一年前の悪いときに戻っている」といったように状況の変化が否定的に語られる場合もある。変化を語るときには、良い変化として語る場合も、悪い変化として語る場合にも、前提として、以前と現在を比較するということが行われている。ここで語り手は、現在と過去の両方を一望する俯瞰的なポジションを獲得していると考えられる。そのポジションから過去と現在が対比され、過去と現在との間で視線が移動する。

**子どもの視点への言及** また、＜「非行」を捉え直す語り＞では、子どもの気持ちを推測し、それに言及することも見られる。

〈抜粋 4-5〉 例会にて（フィールドノーツ X 年 6 か月）

親として（学校側から）言われるような指導をして、子どもは学校も面白くないし、親もそうで味方がいないという気持ちだったのかもしれない。

〈抜粋 4-6〉 例会にて（フィールドノーツ X 年 6 か月）

本人も自分が今大変なときだと思っていて、自分が貴重な経験をしているということもわかっている。

ここでは自分の気持ちとは別の、子どもの気持ちが語りに現れ、子どもの立場で物事を捉え直そうとしているのが特徴的である。<「非行」に巻き込まれる語り>では、単に問題を起こす不可解な存在として表現されていた子どもが、ここでは、自分とは異なる心や内面をもつ存在として叙述されている。

**対応の模索** さらに、現在の子どもや自分の状況を踏まえて、今後の自分の子どもへの関わり方の方向性や決意が語られることも多い。

〈抜粋 4-7〉 例会にて（フィールドノーツ X 年 6 か月）

親としては、昼間まっとうなところで働いてほしいという気持ちだが。あまりこっちは言わないで、18とか20になったところで、「やりたいことがあれば自分でやってみろ」と言おうかと思う。

ここで語られているのは、今は親の方から手を出さず、子どもの様子を見守ろうという決意である。その決意は、自分の将来の行為ともつながっており、<「非行」に巻き込まれる語り>に比べ、語りがカバーする時間域が広がっていることがわかる。ただし、これらの語りの中には、子どもへの対応の仕方についての迷いや、自分の考えや気持ちの揺れが語られるものもあった。

〈抜粋 4-8〉 例会にて（フィールドノーツ X 年 10 か月）

（バイクを買うお金を出すという）以前は絶対やらないと思っていたことをやっちゃって、自分の判断に自信がなくなり、揺れてしまっている。今日はぶれないようになりたいと思って会に来た。

この抜粋に現れているように、子どもに一貫した対応をとることはしばしば難しく、自分の判断や関わり方への迷いが語られることも多い。しかし、こうした語りも、揺れている自分を認識して語るという部分では、複数の時点での自分を対象化している側面がある。

**語りの中でのユーモア** さらに、<「非行」を捉え直す語り>には<「非行」に巻き込まれる語り>には見られない特徴がある。それは、語りにユーモラスな表現や笑いが含まれる場合があるということである<sup>20</sup>。例会では、次の抜粋のように、語り手である親が、子どもの行動や様子をユーモラスに話し、周りから笑いが生じるということが時々見られた。

〈抜粋 4-9〉 例会にて（フィールドノーツ X 年 8 か月）

友達と遊ぶが彼の中で一番。(…)友だちが学校で遊べないときは布団に入って寝ている。昼夜

<sup>20</sup> 語りの中でのユーモラスな表現や笑いは、<「非行」を捉え直す語り>だけでなく<非行を受けとめる語り>においても見られる。笑いの持つ意義や機能については、第6章で改めて検討を行う。

逆転。「ナマケモノ」という動物園の檻に入れておきたいくらい（冗談っぽい言い方で笑いが起きる）。

ここでは子どもの怠惰な様子が「ナマケモノ」という動物に擬えて語られている。子どもの行動は親にとって望ましいものではなく、語り手は、子どもに怒りや苛立ちを感じている可能性もあるが、ユーモラスな表現が入ることで、「子どもが寝てばかりでどうしようもない」という怒りを直接吐き出すものとは違う語り方になっている。

また、親が自分自身の行動を話すときに、笑いが生じる場面も見られた。例えば、例会である参加者が「子どもから料金の支払いを頼まれ、初めは断ったものの、子どもが荒れたので、5分後に妥協して、支払先に電話だけしてあげた」という話をしたときに、5分後に対応を変えたという部分で、揺れてしまっている自分自身の様子を笑いながら話し、聞き手にもその様子が伝わり笑いが起きたことがあった。このように「非行」を捉え直す語りでは、子どもや自分を、時には笑うことができる対象として距離をとって提示するような語り方も見られ、ここでも「非行」の捉え直しが行われていると考えられる。

### （3）「非行」を受けとめる語り

＜「非行」を受けとめる語り＞は、子どもの「非行」という苦しい体験を思い返し、引き受け、自分の物語の中に位置づけていく語りの型である。「非行」の体験を自分の人生の文脈の中で意味づけたり、聞き手に自分の学びや成長を伝えたりするという特徴がある。この語りは、会に参加し始めてから5年や10年といったかなり長い期間が経過した参加者が語るときによく見られた。

**つらい時期を振り返る** この語りの型では、子どもの荒れが激しかった頃の出来事や、当時の気持ちが振り返られ、そのときの状況やつらさが語られる。

#### 〈抜粋 4-10〉 例会にて（フィールドノーツ X年 10 か月）

そのときは、みんなが家のことを知っていると思って、外に出られず、買い物にもいけず、目の前のことで精一杯で、こういうとき（今の落ち着いた状態）がくるとは全く思えなかった。

#### 〈抜粋 4-11〉 例会にて（フィールドノーツ X年 0 ヶ月）

タバコ、酒とどんどん変わっていく娘を、殺そうか、自分が死のうかと思っていた。

つらい出来事や気持ちが語られるという点は、＜「非行」に巻き込まれる語り＞と似ているが、それが現在の視点から、過去を振り返る形で語られる点が異なっている。ここでは、「私も当時はこういう状況だった。その後こういう経緯を辿り今はこうなっている」という形で、つらい時期を抜け出した現在の視点が加わって語りを展開される。ただし当時を振り返るときに涙を流す参加者もあり、ここで振り返られる当時の出来事や感情は、現在の語り手から遠く隔たったものではなく、それを語る現在も実感を伴って思い返されるものであると考えられる。現在は子ども

の問題が落ち着いている人も、自分も当時は苦しかったという形で、過去のつらい状況や気持ちを話すことがよく見られる。そこでは、〈抜粋 4-11〉のように、子どもに死んでほしいと思った、或いは、自分が死のうと思ったという深刻な思いが語られることもある<sup>21</sup>。

**自分の学びや成長を伝える** また、この語りの型では、つらかった時期が振り返られるだけでなく、その体験が、自分の学びや成長として語られる。

〈抜粋 4-12〉 例会にて（フィールドノーツ X 年 9 か月）

会でよく話される「I メッセージ」を（暴走族に出かける息子に）やるようになり、「行くな」ではなく、「私が心配だから行かないでほしい」と言った。すると、息子が「本当は俺も行きたくないんだ、でも仲間が大変なことになるから行かなきゃいけないんだよ」と言って、初めて弱音を話してくれた。言葉では言えないが、そのときに、子どもをありのまま受けとめるということが身体でわかった。

〈抜粋 4-13〉 例会にて（フィールドノーツ X 年 8 か月）

子どものおかげでここ（会）につながって、視野も広がって、社会的なことも考えるようになった。子どものおかげでそうなったので、それを大切にしたい。だから今でも会に来るようにしている。

〈抜粋 4-12〉では、会で学んだコミュニケーションの方法を実践して、子どもとの関係性に変化が生じたときの具体的なエピソードが語られている。〈抜粋 4-13〉では、子どもの「非行」による自分の変化が、学びや成長として、語り手の人生や社会的な文脈の中で肯定的に意味づけられている。〈「非行」に巻き込まれる語り〉では、受動的な被害者であった語り手は、ここでは、「非行」と向き合い、それを受けとめようとする能動的な存在として立ち現れる。

このような語りは、聞き手に語り手の体験を伝えるという意味も持っている。語り手それぞれの具体的な体験と結びつけられた、子どもへの向き合い方の変化に関する語りは、それを聞く他の参加者にとっても、自分自身の体験を振り返ったり、子どもの気持ちや行動を捉え直したりする際に参考になると考えられる。

**会に対する信頼や感謝** さらに、この語りの型では、自分の変化や成長と関連して、会に来ることの影響やその意義がより直接的に述べられる場合もある。例えば、次のような語りである。

〈抜粋 4-14〉 例会にて（フィールドノーツ X 年 1 か月）

この会で学び、たくさんのことを教えてもらった。つらいときは、例会で話すことで救われた。

こうした語りでは、「会に参加することで学びや気づきがあった」「会に来ることで救われた」と

<sup>21</sup> このような語りは、それを聞く今まさに苦しんでいる親にとっても意味があると思われるが、この点は第 5 章で検討する。

いった形で、会に対する感謝や信頼が示される。このような語りは、参加者の会に対する信頼を強め、会に参加し始めた人に対して、会に参加する意味を伝える効果があると思われる。他方で、参加者の中には、会に来た初めの頃は、会に否定的な印象をもったということ話す人もいた。

〈抜粋 4-15〉 例会にて（フィールドノーツ X 年 4 か月）

会に来ればすぐに子どもの非行が治る何かがあるだろうと考えていた。期待外れだったけれど、何度か足を運びながら、他の人たちの同じような苦しみを聴くことにより、悩み苦しんでいるのは自分だけではないのだと思うようになって、気持ちが軽くなってきた。

ここでは、参加者は今の時点では、会に来る意味を十分に認識しているのだが、会に来た初めの頃は、子どもの「非行」をすぐに改善するような方法を期待していて、期待外れに感じたということが話されている。「非行」への解決方法を求めてきた参加者の中には、会に物足りなさを感じる人もある可能性があるが、こういった語りを聞くことで、会に参加する意欲が続くといったことも考えられる。

#### （4）3つの語りの類型の関係性

ここまで見てきた3つの語りの類型は、「非行」がどのように語られるかという観点から例会の語りを整理したものであるが、実際の例会で語られる参加者一人ひとりの語りが、必ずしもどれか一つの語りの類型に分類できるということではない。例えば、語りの前半は、非常につらそうに感情を吐き出すような語り方をしていたが、後半には子どもの視点に言及する語りも見られたような場合には、＜「非行」に巻き込まれる語り＞なのか、＜「非行」を捉え直す語り＞なのか判断することは難しい。このように、3つの語りの類型は、それぞれ区分けされた別個なものではなく、重なり合う部分も存在する。

一方で、語り手の会への参加年数と語りの類型との関係に注目すると、概ね、＜「非行」に巻き込まれる語り＞は、会へ参加するようになって間もない親の語りにおいてよく現れる、＜「非行」を捉え直す語り＞は、子どもの荒れは落ち着いていないものの、会に参加してからある程度時間が経過している親の語りにおいてよく現れる、＜「非行」を受けとめる語り＞は、会に参加し始めてから5年や10年といったかなり長い期間が経過した参加者が語るときによく現れるという傾向が見られた<sup>22</sup>。ここから、仮説として、参加者の語りが、会に参加してからの時間の経過とともに、＜「非行」に巻き込まれる語り＞、＜「非行」を捉え直す語り＞、＜「非行」を受けとめる語り＞と変化していくのではないかということが考えられた。第3章のアンケート調査の結果では、親の認識として、時間の経過とともに、親子の関わりや関係性が変化するということが見られたが、語りに変化があるとすれば、その背景として、語り手である親の体験にも何らかの変化が生じていると思われる。そこで、次項では、この3つの語りの類型と、参加者が日常生活や会の中で体験していることとの関連について、主にインタビュー場面で語られた語りを

<sup>22</sup> この傾向は概括的なものであり、時には、会に初めて参加した人が、＜「非行」を受けとめる語り＞に近い語りを展開することもあった。

もとに検討する。

#### 4-3-2 語りの類型と参加者の体験が変化するプロセス

本研究における 5 人のインタビューは、会に参加してからの年数は異なっていたが、例会に参加し、例会や生活の中での体験が変化していくプロセスに関して共通性が見られた<sup>23</sup>。このプロセスを概観すると、以下のようになる。

子どもの荒れが始まり、激化していく「渦中」のときは、子どもに振り回される毎日が続く。多くの親が「非行」を止めようとするが、逆に子どもとの関係が悪化するという悪循環の中で、行き詰まりや、孤立を感じ、解決法を求めて会に参加する。【行き詰まりや孤立と会への参加】

会に参加し、他の参加者の話を聞いたり、自分の体験を話したりしていくなかで、参加者は、子どもに対するこれまでとは異なった見方や関わり方に気づいていく。これは、それまでの自分の子どもへの関わりを振り返り、自分と子どもとの関係性を見直す体験でもある。ただし、見方や関わりを変化させていくのには時間がかかり、こうした変化は、葛藤や迷いを抱えながら少しずつ生じていくものとして認識されている。【気づきによる視点の拡がり】

時間が経過していくなかで、例会で気づいたことや学んだことが、自分の子どもと関わる体験と結びつくということが生じていく。そうした体験が積み重なっていくことで、子どもに対する見方や関わり方、そして、子どもとの関係性が実際に変化していく。【子どもへの見方や関わり方の変化】

このように、参加者の体験の変化を大きく、【行き詰まりや孤立と会への参加】、【気づきによる視点の拡がり】、【子どもへの見方や関わり方の変化】という 3 つのプロセスとして整理すると、これらは前項の<「非行」に巻き込まれる語り>、<「非行」を捉え直す語り>、<「非行」を受けとめる語り>という 3 つの類型とそれぞれ関連し、語りが生じる背景となっているように考えられた。以下では、3 つのプロセスの特徴を明らかにしながら、語りの類型との関連性について検討していく。

##### (1) 【行き詰まりや孤立と会への参加】：<「非行」に巻き込まれる語り>の背景

「渦中」の体験：生活の混乱と対応の困難 「非行」が始まる経緯はそれぞれ異なるが、多くの場合、中学生から高校生の時期に学校や地域でトラブルを起し始め、それが次第にエスカレートしていく経過をたどる。「非行」の内容は、学校でのトラブル、家庭内の暴言や暴力、金銭問題、飲酒や喫煙、薬物、援助交際、ギャンブル、万引き、暴走族など様々である。学校や警察からの呼び出しも頻繁で、親は子どもの行動に振り回され、精神的に参ってしまうことも多い。Cさんは、子どもの荒れが激しくなっていた時期のことを次のように語っている。

##### 〈抜粋 4-16〉 Cさんインタビュー (1回目)

<sup>23</sup> インタビューの「ちょっと数年先をいっているお母さんたち」(Aさん)、「みんなこも同じだな」(Eさん)といった表現から、インタビューも体験やその変化のプロセスに共通性があることを認識していると考えられた。

すごくつらくて、大変な毎日で、ちょっとパニックって (…) 主人もいなくなり、ますます息子が荒れて、(…) おばあちゃんは入院してるんだけど、その家に行って、お金を盗んで息子が引っちゃったってというのが極めつけで、もう精神的に私はもう、落ちるところまで落ちたかなっていうか、相当ショックで、で、もう、ちょっとその辺りでもう、自分がおかしくなって、死にたくなっちゃったりとか (涙声で)。でも、下に二人娘がいるので、死ぬわけにもいかず (…)

子どもの荒れが激しくなっていく時期は、親は子どもの行動にショックを受け、不安や緊張で心が休まらない状態が続く。子どもが起こす毎日の出来事への対応で精一杯で、余裕が全くない。大変だった時期のことを A さん、B さんは次のように語っている。

〈抜粋 4-17〉 B さんインタビュー (2 回目)

あの、大変なときは、今日のことと精一杯、明日何が起こるか分からない。だから良くなるなんて思わなかった、うん。一年後にどうなってるだろうとかね、そんなこと思いもしなかったし。

〈抜粋 4-18〉 A さんインタビュー (2 回目)

ほんとに渦中のときって娘との対応とか、それで目いっぱい気持ちに余裕がないので、そのときに相手を、気持ちを思いやる余裕とか、そういうのが全然ない。

このように、この時期の親は、先の見通しを全く持てず、子どもの気持ちを視野に入れることも難しい。親たちの会では、参加者が、子どもの荒れが激しく、親も必死なときの状況を指して「渦中」という言葉を用いることがしばしばある。「渦」という表現は、子どもの「非行」に巻き込まれ、抵抗できない、また先も周りも見えないという親の体験している感覚をよく反映した比喩であると思われる。ただし、「渦中」という表現を使う参加者は、会に来てある程度期間が経った参加者であることが多く、今現在「渦」の中心にいる参加者は、自分が「渦中」にいると認識し、表現するような余裕もないと思われる。

**行き詰まりと孤立の感覚** 多くの親は、「非行」を止めるべきものとみなし、子どもを、叱ったり、追いかけたりする。しかし、こうした行動は逆に子どもとの関係性をしばしば悪化させる。C さんは、息子の喫煙を止めようとしていたときを振り返り、次のように話している。

〈抜粋 4-19〉 C さんインタビュー (1 回目)

「ダメだダメだ」って、ほんとに追っかけまわして、用もないのに夜中に突然ふらっとコンビニに行くときも、尾行してついてって、(…) そこで現場を取り押さえて阻止したこともあるし、そう、でも何をどうやっても、(…) どうにも、ごめんなさい (涙をふく)、どうにもならないし、そこですごい陰悪になって、もう「うざい」「死ね」がどンドンふくらんでくるばかりなわけです。そうやって、なんとかさせようって、追っかけまわせば追っかけまわすほど。



このように、必死で「非行」を止めようとする行動が奏功しない状態が続く中で、親たちは自信を喪失し、無力感を抱くようになり、「どうしたらいいかわからない」という行き詰まりを感じる。Bさんは会に来る前の状況を次のように話す。

〈抜粋 4-20〉 Bさんインタビュー（1回目）

あの、私が親としてできることは、わからなく、早い話がわからなくなっちゃって、どうしていいかわからない、あの、他の子たちと同じように学校生活を送らせたい私と、送らない息子、うん、の間がどうしても、なんていうのかな、意思の疎通ができないっていうか。

参加者たちが経験するのは子どもとの関係の悪化だけではない。学校や周囲の親との関係も変化する。親は周囲からの孤立を感じる。子どもの行動は周囲から見られており、親は周りから「あの子の親」として見られる。Dさんは、息子の傷害事件の後、加害者の親でいることが最もつらかったと言う。例会でも「買い物や人の集まる場所に行けなくなった」と話す人が多い。また、子どもの「非行」の話は、周りの友人や家族・親戚などに話したり相談したりすることも難しい。親たちは、周囲の人々とのつながりも制限され、孤立無援の感覚をもちがちである。

**会への参加と感情の吐き出し** 親たちが会を知るきっかけは、インターネット、新聞、会が出版している体験記、知人の紹介など様々である。会に参加する経緯には、会を知りしばらく経ってから参加する場合と、会の存在を知りすぐに会に参加する場合がある<sup>24</sup>。前者では、「すんなり連絡しにくくどうしようもなくなって連絡した」（Aさん）、「ちょっと怖くて行くのに勇気が必要だった」（Dさん）というように、会を知ってから参加することに不安や躊躇を感じるが、事態がどうしようもなくなって会に参加するという経緯を辿る。これに対して、後者では、「通信を送ってもらいすぐ入会を申し込んだ」（Bさん）、「待ち遠しかった」（Cさん）というように、会に来ることへの不安や躊躇は見られない。しかし、どちらのパターンでも会に来る前に行き詰まりを経験しているという点は共通する。

多くの参加者は例会に来ると、他では話せない子どもの様子を語り、生活の中でたまつらい感情を吐き出す。このときに展開される語り、＜「非行」に巻き込まれる語り＞であると考えられる。Aさんは、初めて例会に参加したときの様子を次のように語っている。

〈抜粋 4-21〉 Aさんインタビュー（1回目）

何をこう、どうしゃべっていいのかわからなくて、うまくこう話ができなくて、ただこうその自分が今つらいっていう、そういう気持ちをこう、言うことしかできなくて、言葉にならなくて、ただただ、なんかこう、あの、涙が止まらなくて、そういう状況でしたね

<sup>24</sup> 5人の研究協力者の中では、Aさん、Dさんが前者、Bさん、Cさんが後者のパターンである。Eさんは、先に妻が参加していて後から参加したという経緯なので二つのパターンからは外している。

会に参加し始めた頃に、つらい気持ちを吐き出す体験をしたということは、他のインタビューにも共通して語られた。また、Bさんは会に来た初めの頃の自分の様子を次のように振り返っている。

〈抜粋 4-22〉 Bさんインタビュー（1回目）

今こんなでどうしたらいいか、今こんなことをしている、それを止めるにはどうしたらいいか、やっぱり来たときは、どうやったらね、子どもを止められるかとか良くできるかとか。なんかあの、今すぐにでも、いい子にしたいみたいなね（笑）。

この語りから窺われるように、会に来始めた頃は、現在の状況への不安や「非行」をすぐに別のものに取り換えたいという思いが強く、時間的な視野も現在が中心で狭まったものになっている。Aさんは、当時は「子どもの気持ちを思いやる余裕がなかった」と言う。Dさんも、初めの頃は「自分が楽になりたいだけ」で、「人（他の参加者）のことは思いやっていない発言をばんばん言って」いたと言う。このように、会に参加し始めた頃の参加者は、子どもや他の参加者のことを顧みるようなゆとりや余裕がなく、時間的な視野も狭まった状況にあり、これが「非行」に巻き込まれる語り>の背景となっていると考えられる。

**グループによる感情的な支え** <「非行」に巻き込まれる語り>が展開される時、グループはその語りを受けとめる働きをしていると考えられる。参加者は、グループの他のメンバーが自分の語りを受けとめてくれるという感覚があるからこそ、安心して感情を吐き出すことができる。Cさんは、次のように話している。

〈抜粋 4-23〉 Cさんインタビュー（1回目）

攻撃されたりとか批判されたりっていうことがないっていう安心感があるので、みんななんにもいわなくても、「うんうん」って、「わかるわかる」っていうような表情だったり、まあ言葉だったりっていうところがあるからか、安心して吐き出せるかな。

中には、話をしながら、つらい感情が溢れて涙がとまらず、目を抑えて、声を詰まらせながら話をする参加者もいるが、そのようなときも、他の参加者は、時には一緒に涙を流しながら話をじっと聞いている。このような聞き手の態度は、語り手に、「自分の語りを聞いてもらえる」「わかってもらえる」という感覚をもたらし、行き詰まりや孤立を感じている親を感情的に支えると考えられる。実際、例会の中でも、「ここに来ると気持ちが落ち着く」「元気がもらえる」といった発言をする人は非常に多かった。Aさんは、会は親自身の「逃げ道」「避難場所」と感じたと言う。このように、「非行」に振り回されている親にとって、会は孤立の感覚を和らげ、苦しい生活から避難し、感情的に支えられる場所として捉えられている。

(2)【気づきによる視点の広がり】：<「非行」を捉え直す語り>の背景

**新しい関わり方や見方への気づき** 参加者は、例会に参加し、他の参加者の様々な話を聞く中で、子どもに対するこれまでとは異なった見方や関わり方に気づいていく。会の中では、例えば、子どもとのやりとりをする際に詰問調のメールでなく、「生きてる？」や「今日のご飯はカレーだよ」といったメールをすると子どもから返事が来たという体験が話されることがある。また、「～しなさい」ではなく「私はこう思う」という言い方をしたら、子どもが自分の気持ちを言ったという話もよくなされる。これらは言わば、会の中で伝えられる子どもとの関わり方のコツである。そうした体験を聞く中で、参加者は異なる関わり方を知り、それを自分の行動に取り込む試みを行う。

また、他の参加者の話を聞いて、子どもやその行動に対する見方や物語が修正・更新されることもある。Aさんは、参加者のコメントを聞いて、自分の娘が家を出ていった気持ちについて新たな気づきを得たと言う。

#### 〈抜粋 4-24〉 Aさんインタビュー (2回目)

最初はそんな未成年の子がね、他人の家に行っ、そんな学校も行かず、生活しているっていうの、どういうことなのっていう、(…) だけどやっぱり例会に来て、いろいろ話をして、そのとき誰かに「それってやっぱり娘さんがそういう選択、そういう方法を選んで、そういう風にしたんだね」っていう風になんか言われたことがあったんですね。で「あっそうかそうなんだ」って思っ。「それ以上家族と一緒にいたら、娘はもう、その、なんだろう、もう普通に生きていけない」っていうか、「たぶんもう苦しくて、それでああ出ていったんだ」っていう風に

ここでAさんは娘の行動を、単なる反抗や逸脱ではなく、苦しい状況に押されたやむを得ない選択と読み替えている。こうした新しい関わり方や見方は、子どもを指導や矯正の対象ではなく、理解し受容する存在とみるような捉え方を内包しており、参加者の子どもに対する見方や語り方にも影響を及ぼすと考えられる。

**自己像の修正** また、他の参加者の話を聞いたり、自分の話をしたりする中で、自分のこれまでの見方や関わり方を振り返り、それが自己像の修正をもたらすこともある。Cさんは、次のように話している。

#### 〈抜粋 4-25〉 Cさんインタビュー (2回目)

でもそのお母さんが、それ(=以前の自分の対応)を振り返って、「そのときそういう風にしたけれども、先生が目線で息子を追い詰めすぎてた」って、(…)「振り返って今はそう感じてる」って、おっしゃったときに、「ああ、そうだな」って。「私もそうだったなあ」って

Cさんは、「他のお母さん」と自分を重ねながら、自分の関わり方が「子どもを追い詰めていた」と再定義し、自分を被害者ではなく子どもを追い詰めていた側に位置づけ直している。

自分で話をするこも、自己の振り返りに促進的な効果をもたらしていると考えられる。Bさ

んは、例会で話すことで「ぐちゃぐちゃだった考え」が整理され、自分や子どもの気持ちに気づいたと言う。このような気づきや振り返りの過程において、展開される語りが「非行」を捉え直す語り>であると考えられる。参加者は、自分を振り返り、様々な気づきの体験をしていくことを通じて、現在と過去を比較したり、子どもの視点から出来事を捉えたりしながら、子どもの行動や自分の対応を捉え直していく語りを展開するようになると思われる。

**気づきや学びの難しさ** しかし、新たな見方や関係の構築に至るまでには時間がかかる。特に「非行」に振り回されている時期には、例会で話を聞いても意味が理解できないことや、違和感をもつことも少なくない。例えば、Cさんは次のように語っている。

〈抜粋 4-26〉 Cさんインタビュー (2回目)

よく、「子ども自身が一番苦しんでるのよ」って言われますけど、とてもその言葉をどういうふうに聞いても理解できなかった、私自身が。全然そんな風には見えないし、苦しんでるのは私ばかりで

子どもの荒れに振り回されている頃の参加者は、「子どもが苦しんでいる」ことは理解しがたく、被害者としての自分という物語に閉じ込められてそこから外に出ることが難しい。また、初めて会に参加したときなどに、会の子どもに対する受容的な雰囲気には違和感をもつ参加者もいる。

〈抜粋 4-27〉 Dさんインタビュー (1回目)

私が、あの、「保護観察がずっとついての方がいいわ」って言ったら、会の人たちが「なんでー？」って優しく、「早く取れた方が本人も楽よー」って言うんですね。「なんだろうこの人たち」って思っ

Dさんは、当時の自分は子どものつらさがわからず、自分の安心のために保護観察がついてほしいと思っており、子どものつらさを理解し、受容している会の親たちとの間にずれがあったと会に参加し始めたときのことを振り返る。このように、会で聞く話には、従来の見方や考え方と相反するものが含まれており、他の参加者の視点を取り込むためには自分の見方を対象化したり、そこから抜け出したりする準備が必要である。

**気づきを促し葛藤を受けとめる場としてのグループ** また、話の内容は理解しても、実際に自分の見方や関わり方を変えていくことは容易でない。会で色々な話を聞いても、「自分も変わらず子どもにも変化がない」という事実と直面すると、変化への志向は萎え、従来の見方に引き戻されることもある。Aさんは、子どもも自分も変わらない、変わらないときの葛藤を次のように言う。

〈抜粋 4-28〉 Aさんインタビュー (2回目)

ほんとに日々変化がない、良くならない、変わらない。で、なかなかいろいろな話を聞いて学

んでいるつもりだけでも、自分のやっぱり気持ちはなかなか変わらないっていう、そういう葛藤っていうか。

ここで語られているように、会の話その場ではわかっても家では実行できない場合や、実行しても迷いや葛藤があり継続できないことも多い。＜「非行」を捉え直す語り＞では、子どもへの対応の迷いや、自分の考えや気持ちの揺れが語られることもあった。そうした迷いや葛藤が例会の中で吐き出され、受けとめられることを通じて、参加者は気持ちの安定を保っていると言えるだろう。ここではグループは、新しい関わり方や見方を提供し、参加者の気づきや振り返りを促しながら、同時に、そこで生じる葛藤や迷いを受けとめる場としての役割をもっていると考えられる。

(3) 【子どもへの見方や関わり方の変化】：＜「非行」を受けとめる語り＞の背景

**時間の経過** インタビューでは、子どもへの見方や関わり方、子どもとの関係性に変化が生じてくるということが語られたが、その変化に影響する重要な要素として認識されているものの一つに時間の経過がある。Aさんは、子どもの苦しさを考えられるようになった変化の過程を振り返り、次のように話している。

〈抜粋 4-29〉 Aさんインタビュー（1回目）

うーん、やっぱりこの会でいろんな人の話を聞いて、(…) やっぱりこう何度も何度も聞いていくうちに、そしてやっぱり、時間、それで時間が経ったっていうのがまた、(…) それでまあ娘も、ある程度少しずつ成長して行って、それで、ようやく今に至っているのかなっていう（笑）感じがしますけど。

ここでは会で過ごす時間が積み重なる中で、子どもへの理解が変化してきたことが示唆されている。もちろん親が子どもに対する見方や関わり方を変えていくことは容易ではない。上の抜粋でAさんが述べているように、会に参加して自分のつらさを吐き出し、他の様々な参加者の話を繰り返し聞くということは、長い困難な時間の経過を待つ親の支えとなっていると考えられる。

**「苦しんでいる子ども」という認識** 前述したように会に参加し始めた頃は、参加者は会と言われる「子どももつらい」という言葉が理解できないと言うことが多い。しかし、時間の経過の中で、何かをきっかけにしてその言葉が自分の体験と結びつき、意味がわかるようになる。例えばBさんは、子どものつらさを「やりたいことがわからない」というところに結びつけたときにその意味が実感できたと言う。

〈抜粋 4-30〉 Bさんインタビュー（2回目）

〇〇先生（会の元代表）も、他のお母さんも言うけれども、「親も苦しいけれども子どもはもっと苦しい」の意味がわからなかったの。(…) それがほんとにね、結びついたのは、もうあの子(…) 18、9になった頃かな。(…) 「兄ちゃんはいいいよな」って、「小さいころからやりたいも

のがあって。俺はやりたいものがわからない」って言ったのが、言ったっていうのを子どもから聞いたときに、あの子はずっと幼稚園からずーとサッカーをやって、「高校行ってサッカーやって、Jリーガーになりたい」とか、そうずっと小学校の頃から言ってたんだけど、それがそういかなかったじゃないですか（…）そういう風に話をしたっていうのを聞いたときに、すっごくかわいそうだったの、ごめんね（涙を拭く）その、やりたいものを探せる環境においてやれなかったってというのがね。

ここでは、子ども自身が、自分と同様、或いはそれ以上に「苦しんでいる存在」として位置づけられている。Bさんの語りのように、子どもに対する見方が更新されると同時に、親自身の自己像も「わかってやれなかった自分」という形に修正される。このように子ども像の変化は、それと関わる親の自己像や、親子の関係性の認識にも影響を与えるのである。

**関係性の変化** 参加者は、例会の中で学んだ関わり方や見方を実際に試すことで、子どもの新たな側面に気づいたり、例会で言われたことを実感として理解したりすることがある。そのなかで親子の関係性も変化していったという物語が語られることが多い。Bさんは、息子への声のかけ方を変えたときのことを次のように話す。

#### 〈抜粋 4-31〉 Bさんインタビュー（2回目）

なんでもこう上からものを言わないで「私はこう思うよ」って言う（…）話をずっと聞いていて（…）息子があの暴走族やってて、夜行くときに、いや私は「行ってほしくない」って初めてそれが言えた時、「行くな」じゃなくて「行ってほしくないんだよ」って話をした時、彼はもうブーツはいてて、たすきなんかかけちゃって、私まだスリッパはいてて、（…）息子がね、「母さんはそう言うけど」って自分の思いを言ってきた。あのときに、ちょっとね、気持ちがね、なんか違ったんですよ。

このとき Bさんは、いつもは「うるせえな」と反応する息子の反応が変わり、普段と違う気持ちを感じたと言う。ここでは、親が自分の行動を変えることで子どもの行動が変わり、気持ちも含んだ関係のあり方が変化していることが窺われる。

こうした関係性の変化に密接に関連していると思われるのが、上述した、「苦しんでいる子ども」という子ども像である。Eさんはその見方を心がけることで、子どもの行動の裏にある気持ちが見えるようになってきたと言う。

#### 〈抜粋 4-32〉 Eさんインタビュー

いろんな方向から見るといろんなことが気づく。だから困っている子も、やっぱり悩んでいるんだな、悩みながら、友達同士で解決、なんとかしよう。親には言えない、言えないじゃなくて言わない時代。（…）仲間同士とか先輩で相談して、それでも満足できないときには、そういう仲間同士が集まる時、そこが癒しの場、居場所になって、集まる。（…）だから構造的には

すごい単純なの。あっこういう行動， こういう行動， 見えるわけ。 こういう気持ちで動いてんだなって。

Eさんは、自分の息子も親には無愛想だが、仲間には気を遣い、大事にするのだと思うようになった。また、親の言うことは聞かないので、最低限のことを伝えて放っておくように関わり方を変えたことで、親も子も楽になったと話す。このように親の見方や関わり方の変化は、親子の関係性の変化にもつながる。また、親はこうした自分の体験と結びつけることを通じて、例会で聞いたことを実感として理解すると考えられる。

**物語を生成・伝達する場としてのグループ** このような子どもへの見方や関わり方、関係性の変化を背景として展開されるのが、＜「非行」を受けとめる語り＞であると考えられる。インタビューのなかでは、Bさんが会への参加年数が10年半と一番長かったが、Bさんのように子どもの「非行」がある程度落ち着いた後も会に通い続ける人も多い。Bさんは、会に通い続ける理由として、「つらいときの自分の思いを忘れたくない」という気持ちや、「いろんな人の話を聞いて自分の頭をちゃんと働かせたい」という気持ちがあると話す。そして、実際に、Bさんは、会に通い続けることで、気づきや学びが深まったと言う。

#### 〈抜粋 4-33〉 Bさんインタビュー (2回目)

会に来て、通い続けて得るものっていうのは、たぶんどっかでうちの子落ち着いたからいいやで来なくなったら、気づくものってもっと少なかったと思うし、学ぶことも全然違ったんだろうなっていうのはすごく感じるの。落ち着いたよーくこう考えることができるのって、一人じゃその作業はなかなかたぶんできない。みんながいて、あのいろんな話してくれて、ね、その中から気づいていくのかな。

Bさんは、気づきや学びが深まる理由として、ほかの参加者の話を聞くなかで気づきが生じることや、自分の体験を話すことで考えが整理されていくことを挙げている。子どもの「非行」が落ち着いたとくると、自分の体験を語る意味も多少変容してくるようである。Bさんは、今も例会に参加し、自分の体験を話す意味として、「非行」が落ち着いたも子どもの生活への心配は続くため、それを話したいという気持ちのほか、自分の話が、今子どもが荒れていて大変な人にとって何らかの役に立てばという気持ちもあると言う。

#### 〈抜粋 4-34〉 Bさんインタビュー (2回目)

で、もしかしたら私なんか、あの頃がこんなで途中がこんなで今こんな風になっているっていうのも、あの、大変な人にとって、例えば同じようなことをしていた人でも、変わっていくんだとかね。ちゃんと今仕事しないで困ってるなんていう話も出てくるけれども、やっぱり時間が経つと変わっていくとかね。仕事したり、家庭をもったり、そういうことの、少し励みっていったらあれだけど、おこがましいけれども、そうにもなるんだっていうね、思いを持って

もらえたりしたら、それはそれで嬉しいし、未だにあんなのかっていうのもね

このように、現在子どもの荒れで困っている聞き手を意識するということは、会への参加年数が比較的長い A さん、D さんのインタビューでも語られた。このように、聞き手を意識しながら語ることで、自分の体験が整理され、新たな気づき生まれることもあると思われる。ここでグループは、自分の体験をストーリーとして整理しながら、他の参加者ともそれを共有し、伝える場を提供していると考えられる。

#### 4-3-3 語りや体験が変化するプロセスのバリエーション

ここまで、参加者の例会での語りや、時間の経過とともに、＜「非行」に巻き込まれる語り＞、＜「非行」を捉え直す語り＞、＜「非行」を受けとめる語り＞と変わっていくこと、そして、その背景として、【行き詰まりや孤立と会への参加】、【気づきによる視点の広がり】、【子どもへの見方や関わり方の変化】という参加者の体験が変化するプロセスがあることが考えられた。これは、例会やインタビューの語りや、そこで語られた体験の共通部分に着目して構築した仮説的なモデルである。インタビューや会のメンバーにフィードバックを行った際には、自分の体験と重なるというコメントが多く寄せられ、異なっている部分があるというコメントは得られなかった。そのため、このプロセスは、多くの参加者の体験と重なるものであると思われる。しかし一方で、変化のプロセスには、当然、参加者ごとに異なっている部分もあると考えられる。

そこで、本項では、インタビューごとに語られた変化のプロセスを見ていき、前項までに述べた変化のモデルとどのように重なり合うかを確認しつつ、取り上げられなかった個別的な文脈やバリエーションについても簡潔に検討する。

##### (1) A さん（参加年数 5 年）

A さんは、次女が中学生のときに荒れ始めて例会に参加するようになり、1 回目のインタビュー時点では、会に参加してから 5 年が経っていた。

語りの変化に関して、A さんは最初の頃は、今苦しい胸のうちを話したいという気持ちだったが、現在は、次女の荒れもずいぶんと落ち着き、当時を振り返りながら話をする余裕があると言う。これは、＜「非行」に巻き込まれる語り＞から、＜「非行」を捉え直す語り＞や＜「非行」を受けとめる語り＞への変化として捉えられる。会の中でよく言われる「子どもも苦しんでいる」という見方に関して、子どもが荒れていた当時はわからなかったが、今になって理解できるようになったと話す。A さんが具体的な子どもとの関係でこのことを語っていたのは、(抜粋 4-24) で取り上げたが、家を出ていった娘の行動に対する理解の変化である。A さんは、娘の行動が理解できなかったが、例会で他の人が「娘さんの選択」と言うのを聞き、それを苦しい状況に押されたやむを得ない選択として理解できるようになったと言う。

A さんは、こうした理解の変化に関して、自分が話をしたときの周りの人のコメントや、他の様々な親の話を聞くこと、「非行」体験者の話を聞くことなどが役立ったと話している。



〈抜粋 4-35〉 A さんインタビュー (2 回目)

例会で話をしているときに、あの、周りの方とかがそのときの娘さんの気持ちはこうだったんじゃないとか、そういう風に言われて初めて気がつくっていうか、そういうことがけっこうあったと思います。あと、違う他のお母さんたちの話を聞いて、そのときのそのお子さんの話とかを聞いたり。それと、(…) 体験者というか当事者の話を聞く機会がありますよね。それもすぐくためになったっていうか、それでやっぱり、ああそうなんだっていうのはありましたね

また、A さんはインタビューの中で、話を聞いて学んでも、自分の気持ちがなかなか変わらない葛藤があったことや、色々な人の話をたくさん繰り返し聞くことや、時間が経過することが重要だったことも語っている。ここからは、変化のプロセスは時間がかかるものとして感じられており、変化を感じることができない時期もあることが窺われる。

(2) B さん (参加年数 10 年半)

B さんは、次男が中学三年生のときに会に参加し、インタビュー時点では、会に参加してから 10 年半が経過していた。語りの変化について、B さんは、会に来た初めは「大変大変」と言っていたが、途中から、「あの頃よりはまあいいか」「このくらいだからまあいいか」など「まあいいか」というフレーズをよく使っていた時期があると言う。この「まあいいか」という語りも、現在の出来事や状況を、過去や他の出来事と比較しながら捉え直す意味を含んでおり、<「非行」を捉え直す語り>の一つとして考えられる。B さんは、その後「まあいいか」もいつからか言わなくなり、「まあいいかって思って楽になろうって思わなくてもよくなった時期がどっかであった」のではないかと振り返っている。また、B さんは、インタビューの中で、息子の荒れによって、自分は「親にさせてもらった」「人として成長させてくれた」とも語っており、こうした語りは、<「非行」を受けとめる語り>の特徴と共通していた。

B さんは、例会で人の話を聞くこと、自分が話をすること、また、例会で聞いたことを実際に子どもとの関わりで試してみるなどを通して、様々な気づきや学びを得たと言う。B さんも「子どもも苦しんでいる」という言葉がわからなかったが、〈抜粋 4-30〉で取り上げたように、息子が「やりたいものがわからない」と話していたことを聞いたときに、それが自分の中で結びついたと言う。

ただ一方で、B さんにとって「非行」の捉え直しは、現在も続いているようである。筆者は 1 回目と 2 回目のインタビューの間に、例会で B さんと一緒になったことがあったが、その際 B さんは、他の家族から最近聞いて知ったこととして、「親が思っていたことと、息子が求めていたことにはズレがあり、息子は褒められることが一番嬉しかったらしい。また、荒れていた当時、親からは全然そう見えなかったが、息子は家が嫌いだったことはなく、特に母は大好きだったと言っていたらしい」という、1 回目のインタビューの際には聞かなかった話をしていた。2 回目のインタビューでそのことを尋ねると、B さんは次のように話してくれた。

〈抜粋 4-36〉 B さんインタビュー (2 回目)

IR：そういう話をちょこちょこ聞いていく中で前より気づいていくというか、わかるようになっていく、変わっていくっていうか、そういうのはけっこうあるんですか

B：だと思っんですね、うん。やっぱり、自分の中で、例えば私たちが良かれと思ってしてたはずのことが、息子にとってはそれほどでもなくてっていうのも、気づかなかったじゃないですか、前は。そんなこと思いもしなかったし、息子がそんな風に思っていたっていうのも、だから、なんていうんだろう、やっぱりそれってこう話さないといけない

このように、「非行」の問題が落ち着いた後でも、子どもの行動や自分の関わりについての捉え直しが生じる場合もある。会では、「非行」が落ち着いて例会に参加しなくなる人もいる一方で、Bさんのように「非行」が落ち着いた後も参加を続けている人もいる。そして、そういった参加者の語りも、毎回少しずつ異なり変化をしている。その意味では、＜「非行」を受けとめる語り＞は、語りの終着点ではなく、更なる「非行」の捉え直しが生じ、＜「非行」を受けとめる語り＞自体も変化をしていくことが考えられる。

### (3) Cさん(参加年数1年半)

Cさんは、長男が高校2年生の時から会に参加した。1回目のインタビュー時には、それから1年半が経過していたが、5人のインタビューの中では最も参加期間が短かった。Cさんは、例会で語る体験について、1回目のインタビューでは、「吐き出したい一心で吐き出してる感じ」と述べており、仮説のフィードバックを行った2回目のインタビューでも、「たぶん、吐き出しているんでしょうね。(…)でも吐き出してちょっとずつ考えや感情の整理もし始めて、あともうちょっとがんばったらここ(「非行」を捉え直す語り)に来るんですかね」と話していた。

一方で、Cさんのインタビューでは、＜「非行」を捉え直す語り＞の特徴として取り上げた、過去と現在を比較する語り、子どもの気持ちへ言及する語り、対応を模索する語りなども多く見られた。また、会に参加して気づいたことや自分の変化についても、学校にとらわれすぎない方がいいことを学び、子どもの起こし方が少し変わった、「子どもは多面体」という言葉が印象に残り、子どもの違う面を見ようとするようになった、メールの出し方を変えてみたなど、多くの具体的なエピソードが語られた。その際には、既に荒れが落ち着いた親の話、自分と同じように渦中で苦しんでいる親の話、さらには会に関わっている専門家の話などを聞くことが、気づきのきっかけになったと言う。さらに、2回目のインタビューで、1回目からの変化について尋ねた際には、AさんやBさんのインタビューにおいても見られた「子どもが苦しんでいる」という言葉が少しわかるようになったということも語られた。

### 〈抜粋 4-37〉 Cさんインタビュー (2回目)

よく、子ども自身が、一番苦しんでるのよって言われますけど、とてもその言葉をどういうふうに聞いても理解できなかった、私自身が。全然そんな風には見えないし、苦しんでるのは私ばかりで(笑)、息子は好きなように好き勝手してるって思ってたんですけど、ちょっともしからしたら親の欲目で、感じて、変わらなくちゃと思うけど変わらないで、もしかしたら苦し

んでいるのかなって、私もそう思えるように変わったのかもしれないですけど

Cさんは、自分自身に余裕ができたことや、息子が以前ならキレていたところを自分で抑えようとしてふんばっている様子を感じられるようになったことが、そのような気持ちの変化に繋がっているのではないかと語る。このように、Cさんのインタビューでは、<「非行」に巻き込まれる語り>と<「非行」を捉え直す語り>の両方の要素が語られており、インタビューを行った期間にも現在進行形で、様々な気づきや捉え直しが生じている様子が窺われた。

#### (4) Dさん (参加年数3年)

Dさんは、長男が18歳の時に会に初めて参加した。例会には、できるだけ来るようにしていたが、家庭の状況などで来られないときもあり、毎回参加できたわけではなかったと言う。語りの変化について、Dさんは、初めの頃は、「私はこんなにつらいのよ」という話しかしていなかったが、今では、現在大変な人に、自分の体験を話すことが役立てばいいという気持ちが大きいと話していた。こうした変化は、<「非行」に巻き込まれる語り>から、<「非行」を受けとめる語り>への移行として捉えられる。

Dさんは、〈抜粋 4-27〉で取り上げたように、初めて会に参加したときには、会の子どもに対する受容的な雰囲気違和感をもったが、学業はできなくても仕事を一生懸命やっている子どもを応援していたり、子どもを産んだ娘を支えていたりする先輩の親の話の話を聞いているうちに、自分も子どもの味方になり、子どもを応援しようと思うようになったと言う。Dさんは、実際に働いている息子の様子を見に行ったときに、自分が持っていた偏見に気がつき、また、色々な人と隔たりなく一緒に仕事をしている子どもを偉いなあと話している。そして、自分の変化について、息子の荒れ、そして会につながったことで、いろいろなことに動じない、受容できる自分になれたと振り返っている。

また、Dさんのインタビューでは、会への参加に加えて、親たちの会と繋がりのある専門職や自分の友人に話を聞いてもらうことや、自分が好きな作家の本を読むことなども、気づきを得たり、心を落ち着けたりする上で助けになったということが語られた。

#### 〈抜粋 4-38〉 Dさんインタビュー (2回目)

だから本にも助けられたかな。(…) その人の本とか、うん、なんか、いっぱいそういうのを、なにしろね、読んで、だから自分の好きなことはそれだから、それで心を落ち着けてきたかな。うん、それがヒントだったのかもしれない

本研究では、会の中での体験や会に参加する影響を中心に話を聞いたこともあり、このような会以外のサポート要素は、他のインタビューではあまり語られなかったことではある。しかし、人によっては、Dさんのように周囲の人との関わりや趣味などが、会への参加と相まって気づきをもたらしたり、気持ちを落ち着かせたりする上で役立つ場合もあると考えられる。

#### (5) Eさん (参加年数2年)

Eさんは、長男が中学二年の頃から荒れだした。Eさんの妻が会を見つけて先に参加するようになり、Eさんも後から会に参加するようになった。

語りの変化について、<「非行」に巻き込まれる語り>の特徴である、感情を吐き出すということは明確には語られなかったが、Eさんも、話の内容が少しずつ変わってきて「落ち着いて話ができるようになってきた」と話している。Eさんは、会で学んだことは、子どもをどうこうするというのではなく、親の how to, すなわち、親がいかにか自分を上手にコントロールするかであったと言う。また、Eさんのインタビューでも〈抜粋 4-32〉で取り上げたように、「子ども自身も困っている」という見方を知り、視点を変えるようにしたということが語られた。

Eさんの場合、父親という点に加え、両親ともに会に参加しているという特徴がある。筆者が参与観察を行っていた例会でも、割合的には母親一人の参加が多く、父親一人の参加や、両親が揃って参加するという例は少数であった。Eさんは、会に参加した後、親同士で会話をすることが大事だったと言う。

#### 〈抜粋 4-39〉 Eさんインタビュー

で、そのためには、親同士の会話が大事。終わった後、「そうだったね」「こうだったね」、過去を振り返って「ああこのときはこうだったね」。(…)「ああ、そうだねー、ふーん、じゃあこれからはそういうふうにしてみようか」とかね。そういう風にあの、うんうんってうなずくわけよ。そうするとだいたいまとまってくる。考えとしてまとまってくる。で、そういう考えがまとまってくると、親がだいたい同じレベルの考えになるから、なんとなく安定するわけよ。

Eさんの場合は、親同士で会の感想を話し合うことが、お互いの考えを整理したり、まとめたりしていく上で役立ち、家庭の安定につながったようである。例会でも、子どもの話と関連して、配偶者など他の家族のことが話題に上がることがあるが、夫婦関係や家族に関する話題の語られ方は多様である。夫婦で協力して子どもの「非行」に向き合っているという話もあれば、配偶者との考え方や対応のずれや、配偶者に対する不満が語られることもある。母子または父子家庭で子育てをしている参加者もいる。本研究では十分に焦点を当てられていないが、参加者それぞれの家族や夫婦関係も、子どもへの見方や対応の仕方が変わっていくプロセスに関連していることが考えられる。

## 第4節 まとめ

ここまで、<「非行」に巻き込まれる語り><「非行」を捉え直す語り><「非行」を受けとめる語り>という3つの語りの類型を提示し、参加者の語りの特徴と変化、およびその背景にあると考えられる体験について検討してきた。表4-4は、それぞれの語りの特徴、語り手の位置づけ、視点、背景にある体験、グループの機能について整理したものである。参加者の語りが増え、変化していくプロセスは、語り手の視点が重層化するなかで、語りにおける視野や意味づけが拡大

し、ストーリーが変化していく過程として捉えられる。ここでは、先行研究の理論的枠組みと比較しながら、このプロセスについてより詳細な検討を加え、そこで親たちの会が果たしている機能について考察する。

表 4-4 参加者の語りの変化

|                | 「非行」に巻き込まれる語り          | 「非行」を捉え直す語り                      | 「非行」を受けとめる語り                      |
|----------------|------------------------|----------------------------------|-----------------------------------|
| 語りの特徴<br>(語り方) | 子どもの「非行」を訴え、感情を吐き出す    | 過去と現在の比較・子どもの気持ちへの言及・自分の振り返りが加わる | 渦中を振り返りながら、聞き手を意識して語る             |
| 語り手の位置づけ       | 「非行」という渦に巻き込まれている人     | 「非行」への対応を模索し、渦から抜け出そうとしている人      | 「非行」という渦の体験を受けとめている(受けとめようとしている)人 |
| 視点             | 現在の自分の視点に固定            | 子どもの視点、メタな視点が重なり始める              | 渦中の自分の視点とメタな視点との往復                |
| 語りの背景          | 行き詰まり・孤立の感覚            | 別の見方や関わり方への気づき、変化できない葛藤          | 子どもへの見方・関わり方・関係性の変化               |
| 語りに対するグループの機能  | 感情の吐き出しを受けとめる、孤立感を和らげる | 気づきや振り返りを促進する、変化に伴う葛藤や迷いを受けとめる   | 自分のストーリーを生成し、伝達するための場となる          |

#### 4-4-1 語りの拡がりや視点の重層化

参加者の語りが変化していく過程を整理し、理解する上で有用に思われるのは、語りにおける視点の変化という切り口である。浜田(2006; 2009)は、人は「身体の視点」「他者(相手)の視点」「神の視点」という3つの視点を絡み合わせながら生きていると言う。すなわち、人は自分の内側からの視点(「身体の視点」)で世界を体験すると同時に、他者の主体性を認め、目の前にいる他者の視点におのずと自分を移している(「他者の視点」)。さらに、生身の自他の視点を超え、時間軸・空間軸の中に自分を位置づけ、上から俯瞰する形でも世界を捉えている(「神の視点」)。参加者の語りが変化する過程は、「身体の視点」に「他者の視点」や「神の視点」が重なり、語りが重層化していくプロセスと考えられる。

<「非行」に巻き込まれる語り>では、語り手である親は、行き詰まりや孤立を感じており、つらい感情を吐き出しながら語る。ここでは、語りにおける視点が現在の自分の「身体の視点」に固定化しており、状況の捉え方も一面的になり、ストーリーも硬直的で動きにくくなっていると考えられる。この語りの型では、焦点が語り手のつらさや苦しさにあり、語り手は「非行」に

巻き込まれている被害者として立ち現れる。

<「非行」を捉え直す語り>では、親は今までとは別の見方や関わり方へ気づき始めており、過去と現在の比較や、子どもの視点からの意味づけ、自分を解釈・評価するメタな視点からの語りが見られるようになる。ここでは、親自身の「身体の視点」に重なり、子どもという「他者の視点」や、時間軸の中に自分を位置づける「神の視点」に近いものが語りに現れてきている。語り手はまだ「非行」という渦を抜け出してはいないが、「他者の視点」や「神の視点」から状況を捉え直すことで、「身体の視点」という限定された場所から見ていた頃とは異なる、オルタナティブな状況の捉え方や意味づけが探索される。例えば、「身体の視点」では、親として当然すべきこととされていた「非行」を止めようとする行動が、子どもという「他者の視点」でみると、居場所を奪われ追い詰められることだったかもしれないなどと複眼的に捉え直される。この型の語りでは、語り手は、渦に引きずられ揺れてしまう存在であると同時に、渦を捉え直し、新たな対応を試みる能動的な存在として立ち現れる。

<「非行」を受けとめる語り>では、既に子どもへの見方・関わり方・関係性などが変化しており、語り手は、渦中の体験を振り返りながら、広い視野で語りを展開する。語り手は渦を抜け出し、視野が広がった状況において、その体験を新たに意味づけるストーリーが語られる。ここでは、自分の体験を広い時間軸や空間軸上に位置づける「神の視点」に近いものがより明確に認められる。ただし、この「神の視点」はすべてに超越してではなく、「身体の視点」と往復しながら、それに重なるようにして語りに登場する。その意味で、この語りの型は、「身体の視点」を含んだものではあるが、その「身体」には以前のような拘束力は失われているとも言える。

人間は発達の過程で、自ずと「他者の視点」や「神の視点」を身につけ、自然に使いこなしているが、浜田（2006）は、その行き過ぎに警鐘を鳴らしている。すなわち、学校という教育制度では、将来を見渡す上空からの「発達」を期待する視線（「神の視点」）によって、子どものいまを生きるという渦中のまなざし（「身体の視点」）が覆い隠され、発達の自然なあり方が阻害される。そのため、渦中のまなざしによって、上空に浮いた世界を地面に引き下ろすことが時として求められると言う。

「非行」と向き合う親たちが「渦」から抜け出す過程は、浜田（2006）が重視する動きとは一見逆向きであるようにみえる。すなわち、<「非行」に巻き込まれる語り>では、子どもとの関係が悪化し、社会的にも孤立する中で、親は「身体の視点」に拘束されている。そこから解放されていくのは、「他者の視点」や「神の視点」を使えるようになり、複数の視点から状況を捉え直す中で、語りにおける視野や意味づけが広がっていくときである。このような変遷は、複数の視点が重なり、語りの厚みが増していく過程として捉えられる。つまり、問題は視点が「神の視点」に偏る場合と同様に、「身体の視点」に固定化する中でも生じる。そしていずれの場合も、複数の視点を活用しながら別のストーリーを生みだしていくことが問題を解消させる契機になると思われる。

#### 4-4-2 グループのナラティブがもたらす新しい視点

以上のような変化のプロセスは、参加者が、一人で自然に達成していくものではなく、Rappaport (1993) が指摘する「コミュニティ・ナラティブ」が個々人のストーリーに取り入れられていくという枠組みで捉えられる。コミュニティ・ナラティブとは、グループの多くのメンバーの間で繰り返し語られるストーリーである。それは、より広い社会で一般的に語られ、その時代・場所で生きる多くの人の価値観や信念に影響する、支配的な文化ナラティブとは異なった見方を提供する。グループの参加者はそれを利用して、自分のストーリーを肯定的なものへ書きかえ、オルタナティブなストーリーを生成すると考えられている (Mankowski & Rappaport, 2000)。

親たちの会で語られることは、「『非行』を止めようとするよりも親子関係を良くする方が大切」、「『非行』をしている子ども自身も苦しんでいる」など、社会の一般的な考えとは別の見方を提供する「コミュニティ・ナラティブ」である。会に来た当初は、参加者の多くが支配的な文化ナラティブに沿い、子どもの「非行」を止めようとするが成功せず、つらさをく「非行」に巻き込まれる語り>で吐き出す。しかし、参加者は会のナラティブに触れながら、別の視点に気づいていき、<「非行」を捉え直す語り>では、「他者の視点」で子どもの気持ちを推測したり、「神の視点」で自分を俯瞰したりする語りが見られるようになる。さらに<「非行」を受けとめる語り>では、「子どもも苦しんでいる」といった会のナラティブも用いながら、自分の見方や関わり方が変化した体験を語るようになる。このように、参加者は、会のナラティブがもつ見方を取り入れ、物語を書き換え、自らの生の状況についてオルタナティブ・ストーリーを構築していると考えられる。ラパポートの言うように、ここで親たちの会は、ナラティブを通じて参加者に新しい見方を提供し、視点の重層化や視野の拡大のきっかけを作る機能を果たしているように見える。

#### 4-4-3 グループのナラティブを「専有」する過程

ただし今述べたナラティブの取り入れが、どのようなプロセスで進むのかという点は、ラパポートの枠組みでは明らかではない。本研究では、参加者が会のナラティブを容易には受け入れられない場合があることが示唆されたが、この点についてもラパポートの枠組みだけでは捉えることができない。したがってここでは、親たちの会のナラティブが参加者の語りに取り入れられていくプロセスに関して、Wertsch (2002/1998) の概念を用いて検討する。

Wertsch (2002/1998) は、媒介された行為の議論において、行為者と媒介手段 (ナラティブ) との緊張関係に焦点を当て、媒介手段の「習得 (mastery)」と「専有 (appropriation)」とを区別している。ごく簡単に言えば、「習得」は、それを使用するための方法を知ることであり、「専有」は、他者に属する何かを取り入れ、自分のものとすることである。参加者が会で様々な話を聞き、自分と異なる見方や関わり方を知り、それを自分に適用することはナラティブの「習得」と考えられる。しかし参加者は、会に来た当初は、例えば「子どもはもっと苦しい」という言い方は知っていても、その意味を、実感を伴って理解しているわけではない。理解が可能になるのは自分の具体的な体験に即してであり、子どもの言動や様子と「子どもが苦しい」というナラティ

ヴが結びついたときである。参加者は、そのようにして理解したナラティブを自分の語りの中で主体的に使うようになるが、このときにナラティブの「専有」が生じていると考えることができる。

ここで「習得」と「専有」を区別することで見えてくることは二つある。一つは、参加者の語りの変化は、会で新しい見方や関わり方を知ること（習得）によってではなく、それが自分の体験、すなわち自分の物語と統合されること（専有）によって生じるという点である。このとき、ナラティブを「専有」して語られるストーリーは、多くの人が使える一般性を保ちつつ同時に個別的なものとなる。例えば、本研究では、全てのインタビューに共通して、「子どもはもっと苦しい」ということがわかるようになったという変化が語られた。しかし、そのナラティブの意味が理解されたのは、個別の具体的な体験に即してであり、自分の子どもの言動や様子と、「子どもも苦しい」というナラティブが結びついたときであった。4・3・3 で見たように、A さんの場合は、家を出ていった娘の行動と関連してそれが語られ、B さんの場合は、やりたいものがわからなかった息子のつらさと結びつけられて語られるなど、インタビューごとにその語られ方は異なっていた。このように、参加者は、自分自身の体験に即してナラティブを理解することを通じて、それを個別の自分の物語として語るができるようになると考えられる。

もう一つは、Wertsch (2002/1998) も指摘するように、語りの変化には抵抗や葛藤が伴うということである。親たちの会で、参加者が会のナラティブを自分のストーリーに取り入れていく過程でも、参加者は会で話されることに違和感を持つ、あるいは、話を聞いても実行できないといった葛藤を体験するなど、そのプロセスは決して平坦ではない。抵抗や葛藤を抱えながら、自分の見方や関わり方を捉え直し、再構築していく過程こそが、語りが変化していくプロセスの中核であると思われる。

親たちの会は、前項で述べたようにナラティブを通じて参加者に新しい見方を提供する機能をもつ。しかし会の機能はそれにとどまらず、参加者がナラティブを「専有」して、自分のストーリーを生成するまでの長い過程を支える場所をも提供する。これは、その場において参加者が自由に語り、新たな意味づけを模索できるという意味だけでなく、感情の吐き出しを受けとめ抵抗や葛藤をも吸収するという意味もある。会では、参加者に積極的に特定の見方や関わり方を教えたり、特定の傾向をもつ語りを奨励したりはしない。しかしそれが逆に、参加者が自分のペース・やり方で、能動的にナラティブを「習得」し「専有」する過程を促進しているとも考えられる。語りが変化していく過程で、参加者は、受動的立場から次第に「非行」と向き合う主体性を取り戻していくが、この変容は、ナラティブの「専有」における能動性とも連動していると考えられる。また、会に様々な段階の参加者がいることも、「習得」や「専有」の促進につながっていると思われる。会に来て間もない、主にナラティブを「習得」している段階にいる参加者にとって、ナラティブの「専有」段階にいる参加者の語りが役に立つ。逆に「専有」の段階にいる参加者にとって、「習得」段階にいる聞き手がいることは、自分の体験を聞き手に伝わるように話す動機を生み、「専有」が促進される。会のナラティブは、こうした「習得」と「専有」の相互作用のサイクルの中で生成、継承されていると考えられる。



#### 4-4-4 本研究の意義と課題

本章では、例会およびインタビューにおける語りの分析を通じて、参加者の語りや体験が関連しながら変化していくプロセスを検討した。提示した三つの語りの類型は、参与観察およびインタビューデータを用いたトライアングレーションによって、語りが変化するプロセスを推測し、構築したモデルである。このモデルは、親の語りや、その変化のプロセスを理解する上での一つの参照枠となると考えられる。しかし、本研究では、データの性質上、特定の参加者の語りについて、時系列的に実際の語りの変化を検討していくことはできなかった。実際の語りの語りの変化は直線的ではなく、行ったり戻ったりを繰り返しながら進み、その変化のプロセスは参加者一人ひとりによって違いがあると思われる。また、4-3-3 で見たように、家族関係や会以外のサポート資源など、参加者のもつ個別的な文脈もそのプロセスに影響することが考えられる。そのため、今後の課題として、語りの変化のプロセスを個別的・縦断的に検討していくことが挙げられる。

また本章では、参加者がグループのナラティブを取り入れながら語りを変化させていくプロセスについて検討し、そこで親たちの会が果たしている機能について考察した。その結果、親たちの会は、グループのナラティブを通じて参加者に新しい視点を提供するとともに、参加者が自分のストーリーを語り直していく過程を支える場として機能していることが示唆された。こうした機能は、他の SHG にもある程度共通すると考えられるが、グループの扱う問題の性質によっては、グループのナラティブと個人のストーリーの間の相互作用が明確には認められない場合もある。例えば、和田 (2007) は、アトピー性皮膚炎患者の SHG における参加者の心的変容プロセスを検討しているが、ここでは、グループに語りを聴いてもらい、受容されるという要素は見られるが、グループのナラティブを参加者が習得、専有していくといった面は希薄である。こうした SHG と比較すると、親たちの会は、ナラティブの「習得」と「専有」がより明確な形で生じる場となっている。「非行」については、「親は子どもの『非行』を止めないといけない」という社会的なドミナント・ストーリーが強く、広範であり、親はその見方に拘束され、視点や行動が硬直化してしまっている場合が多い。そのため、会が、新しい視点やストーリーを書き換えていく場を提供することが求められているのではないかと思われる。

また、親たちの会と同様にナラティブの「習得」と「専有」が見られる SHG も、グループごとにそのプロセスには多少異なっている可能性がある。例えば、アルコール依存者の SHG (AA や断酒会) でも、グループに特徴的なナラティブが存在し、それが参加者に伝達されているが (Davis & Jansen, 1998; 伊藤, 2009)、こうしたグループには、「12 ステップ」や「断酒の誓」などの明文化した規範が存在する。一方「非行」への対応には、明確で一貫した目標や手順がなく、参加者は、基本的に個別的具体的な目標や手法を会の中のやりとりから「習得」、「専有」していかなければならない。ここでは詳しい検討はできなかったが、求められるナラティブの違いによって、「習得」や「専有」のプロセスの態様も、変わってくる可能性が考えられる。

さらに、本章の課題として、語り合いの場や、そこでの参加者間の相互行為の特徴については十分に扱えなかったということがある。オルタナティブな語りが、具体的な語りの行為や、参加者同士のやりとりの中でどのように構築されているかという点は第3部で検討を行う。

## **第2部のまとめと第3部の課題**

**第2部のまとめ** 第2部では、子どもの「非行」と向き合う親たちの体験がどのようなものであるか、そして、親たちの会に参加する中で、語りや体験がどのように変化していくのかという点を検討してきた。

第3章では、アンケート調査の結果を用いて親の体験について検討した。その結果、①子どもが荒れているときには、多くの親が、子どもの問題行動や周囲からの非難や叱責の中で疲弊した状態にあること、②学校や相談機関が親の支えとなっている場合もあるが、逆に親を追いつけてしまっている場合も多いこと、③親子の関わりや関係性には変化が生じること、④親たちの会に参加する親にとって、会は感情的な支えや気づきを得られる場所として機能していることなどが示唆された。

第4章では、参与観察およびインタビューによって得られたデータを分析し、参加者の語りや体験が変化していくプロセスを明らかにし、そこで親たちの会が果たしている機能について検討した。その結果、親たちは、それぞれ、会で学ぶ視点を取り入れながら、自分自身の体験に即してオルタナティブな語りを構築していることが明らかになった。こうして生じる語りの変化は、日常生活における子どもへの見方や関わり方とも相互に関連しており、第3章で見られた親子の関わりや関係性の変化も、語りの変化と連動していると考えられる。また、その過程において、親たちの会は、グループのナラティブを通じて参加者に新しい視点を提供するとともに、参加者が自分のストーリーを語り直していく過程を支える場として機能していることが示唆された。

**第3部の課題** 第2部の結果からは、親たちの会がオルタナティブな語りの構築を支える場として機能していることが示唆された。Rappaport (1993) の枠組みで言うと、親たちの会はナラティブ・コミュニティとして、「コミュニティ・ナラティブ」を提供し、それを参加者が各々の「個人の物語」に取り入れ、アイデンティティの変化の基礎として機能させているということになる。しかし、第1部で述べたように、ナラティブ・アプローチに基づく先行研究では、グループに存在するコミュニティ・ナラティブや個人の物語の特徴を明らかにするという方向性をもつ研究が多く (Davis & Jansen, 1998; Humphreys, 2000 など)、そうしたナラティブが、どのように関係し合いながら、語り合いの場の中で構築されているのかという動的な視点からは十分に検討されていない。本研究においても、第2部では、オルタナティブな語りや、参加者同士のやりとりの中でどのように構築されているかという点は十分検討できなかった。そこで、第3部では、第2部で得られた知見をもとに、参加者のオルタナティブな語りや、親たちの会のコミュニティ・ナラティブが構築されていく場の文脈や、構築のされ方を検討していく。

また、第2部では、親の立場の参加者の語りに注目したが、親たちの会には、親以外の立場の人も参加し、グループにおける語りの構築に関わっている。第3部では、専門職などの親以外の立場の参加者が、語りの構築過程にどのように関わっているのかという点も合わせて検討し、親たちの会における語りの構築の在り様を明らかにしていく。

### 第3部 親たちの会における語りの構築

第3部では、第2部で見られたオルタナティブな語りが構築される文脈や、構築のされ方を詳細に検討し、提示する。語りは、特定の時と場所において特定の聞き手を前にして行われる行為としての側面を持ち、語り手だけでなく聞き手も語りの構築に関与している。また、社会や文化や周りの人が当然と思っているストーリー（ドミナント・ストーリー）など、社会文化的なディスコースも語りの構築に影響を与えている（能智,2006）。第5章では、社会で支配的なディスコースとの関係で、参加者がどのようにしてオルタナティブ・ストーリーを構築しているのかを検討する。第6章では、語りが行われる場面における参加者間のやりとりに着目し、それが語りの構築にどのように関連しているのかを検討する。また、親たちの会では、専門職など親以外の立場の人も会の活動に参加し、語りの構築にも影響を及ぼしていると考えられる。そこで、第7章では、専門職などの親以外の立場の参加者が語りの構築にどのように関与しているのかを検討する。

## 第5章（研究3）

### ディスコースの中での語りの構築

#### ——コミュニティ・ナラティブとの関係に注目して——

「非行」をしている子どもの親に対しては、「親がしっかりしていないから子どもが『非行』に走る」「親は子どもの『非行』を止めなくてはいけない」といった批判的な社会的ディスコースが存在する。一方で、第4章で見たように、親たちの会では、社会的ディスコースとは別の見方を提供するコミュニティ・ナラティブが醸成されており、参加者の語りの変化に影響していると考えられる。

本章では、親たちの会の参加者たちが、どのようにしてオルタナティブな語りを構築しているのかについて、社会的なディスコースやコミュニティ・ナラティブとの関係性に注目しながら検討する。

#### 第1節 目的

---

##### 5-1-1 コミュニティ・ナラティブと語りの構築

本章では、子どもの「非行」と向き合う親たちの会において、オルタナティブな語りやアイデンティティが構築されていくやり方を検討する。ここでは特に、社会的なディスコースやコミュニティ・ナラティブとの関係に焦点を当てる。

Rappaport (1993) によれば、SHGには多くの参加者によってくり返し語られる「コミュニティ・ナラティブ」があり、参加者は、それを各々の「個人の物語」に取り入れ、アイデンティティの変化の基礎として機能させる。また同時に、コミュニティ・ナラティブ自体も、参加者個人のストーリーによって構築され、改訂されていく (Mankowski & Rappaport, 2000)。このように、SHGでは、社会で支配的なディスコースとは異なった視点や価値観を持つコミュニティ・ナラティブが、参加者の物語の変化に重要な役割を果たしていると考えられている。しかし、参加者が具体的な語りの実践の中で、どのようにしてコミュニティ・ナラティブを活用して、オルタナティブな語りやアイデンティティを構築していくかについては、十分検討されていない。

第1章で述べたように、子どもが「非行」に走ったとき、その親に対しては、「親がしっかりしていないから子どもが『非行』に走る」「親は子どもの『非行』を止めなくてはいけない」といった見方がなされやすく、親に対する批判的なディスコースが存在する。また、第3章のアンケート調査の結果で示されていたように、親自身も自分の子育てに対して自責感を持ち、周囲からの目を気にして生活している場合が多いことが窺われる。

一方で、第4章で検討したように、親たちの会の参加者の語りは、会に参加して時間が経過

するにつれて、社会で支配的なディスコースに影響を受けた語りから少しずつ離れ、グループのナラティブの視点を取り入れたオルタナティブな語りへと変化していく。そして、そのプロセスでは、自分自身に関する新しい物語やアイデンティティを構築する作業が行われていると考えられる。第4章では、参加者の語りや体験が変化していくプロセスを検討したが、グループにおいてコミュニティ・ナラティブがどのように醸成されているのかという点や、具体的に参加者が語りを構築していくやり方については明らかにできなかった。そこで本章では、まず、親たちの会のコミュニティ・ナラティブの特徴や、それがどのようにグループの中で醸成されているのかという点を明らかにすることを試みる。そして、社会的なディスコースや、コミュニティ・ナラティブとの関係に着目しつつ、参加者がオルタナティブな語りを構築していくやり方について検討する。

### 5-1-2 コミュニティ・ナラティブの捉え方

コミュニティ・ナラティブは、コミュニティの多くのメンバーによってくり返し語られる語りであり、メンバーの集合的な経験や知識を表象する（Rappaport, 1995; Mankowski & Rappaport, 2000）。しかし、コミュニティ・ナラティブは、個人の語りと独立に観察可能な実体として存在するわけではなく、個人の語りにおいて姿を現すものであり、個人の物語と分かちがたく結びついているため、それをどのように捉えるかが問題となる。

伊藤（2013）は、共同体の物語（コミュニティ・ナラティブ）は人々の自己物語の筋や語り口などがもつ共通性や類似性によって把握できるとする。ただし、それは、SHGのメンバーたちによってはっきりと自覚されているとは限らず、むしろ共通性や類似性を観察して名指すことによって初めて輪郭づけられると言う。そのため、観察者の社会的・政治的立場や考え方が、どのような共同体の物語を名指すかということ自体に反映されることもあり得る。

また、Mankowski & Rappaport, (2000) は、コミュニティ・ナラティブを取り出す方法は一つではなく、観察、フォーカスグループインタビュー、半構造化インタビュー、グループとの継続的な関わりなど様々な方法による語りデータの収集や、多様なレベルでの分析が役立つと言う。そして、研究者がコミュニティ・ナラティブの表現を発展させていく方法として、グループのメンバーと協働し、参加者によって語られるストーリー、グループの実践の観察、人工的な創作物やパフォーマンス、参加者が書いたり、読んだりしているテキストなど様々な種類のデータに共通している側面を集めることを挙げている。

このように、コミュニティ・ナラティブを捉える方法として唯一のやり方は存在しないが、多様なデータを収集し、そこでの共通性に注目することが有用であると考えられている。また、1-3-3で述べたように、コミュニティ・ナラティブ自体も、参加者の語りや、そのやりとりの中で生成され、変化するダイナミックなものである。そのため、SHGのコミュニティ・ナラティブを検討する際には、そのストーリーや内容の特徴だけでなく、どのようにしてグループの中でコミュニティ・ナラティブが醸成され、共有されているのかという点にも注意を払う必要がある。例えば、荒井（2013）は、認知症家族会におけるさまざまなやり取りや、運営の仕方、ユーモ

アの活用などに注目し、コミュニティ・ナラティブがどのように醸成されているかを検討している。本研究においても、グループの運営のされ方、参加者間のやりとり、語られるストーリーの共通性といった複数の側面に注目し、親たちの会のコミュニティ・ナラティブの特徴やそれがどのように醸成されているのかを明らかにしていく。

### 5-1-3 語りの構築とポジショニング

本章では、社会的なディスコースや、コミュニティ・ナラティブとの関係に着目しつつ、参加者が語りを構築していくやり方を検討するが、その際にポジショニングという概念を活用する。ポジショニングという概念は、Davies and Harré (1990) によって、会話などのディスコース内で自らをある立場(ポジション)に位置付けようとする過程を表す用語として提唱されたものであり、ディスコース分析で用いられるアプローチの一つである。第2章でも述べたように、ディスコース分析には様々な立場があるが、ディスコースのどこに焦点を当てるかの違いから、大きく、ディスコース心理学と批判的ディスコース分析の2つに分けられることが多い(Willig, 2001/2003, 鈴木, 2007)。ディスコース心理学は、人々が社会的相互作用の中で対人的な目標を達成するため、どのようにディスコース資源を用いるかという点、すなわち、ディスコース実践に関心を持つ。これに対して、批判的ディスコース分析は、社会構造における力関係とディスコースの関係や、不平等の生産や再生産におけるディスコースの役割など、人々が利用するディスコース資源に焦点が当てられる。ポジショニング理論においては、ディスコース心理学が目指すディスコース実践と、批判的ディスコース分析が着目するディスコース資源の両方向からポジションを考える(綾城, 2015)。SHGにおける語りの構築を検討する際には、グループが取り組んでいる問題をめぐる社会的なディスコースや、そのグループが持つコミュニティ・ナラティブとの関係を考慮する必要がある。しかし一方で、個人のダイナミックなアイデンティティの構築を捉えるためには、具体的な語りの行為にも注目する必要がある。そのため、具体的に語りを構築していくディスコース実践と、そこで用いられるディスコース資源の両方を検討できるポジショニングという概念を用いることが適当であると考えられた。

ポジショニング概念の使い方や分析の仕方にも様々な立場がある(Bamberg, 1997; Harré & van Langenhove 1999; Hermans & Kempen, 1993 など)が、本章では、Bamberg (1997) のポジショニングの概念を活用する。Bamberg (1997) は、ポジショニングという概念を、語りを構造的に捉える伝統的なアプローチと、行為としての側面を重視したプラグマティックなアプローチとをつなぐものとして位置づけ、分析の3つのレベルを区別した。レベル1は、報告された出来事の中での登場人物間のポジショニングに注目する。レベル2は、語りが行われているこの場において、語り手が、聞き手に対して自分自身をどのようにポジショニングするか注目する。そして、レベル3は、その場の会話の状況を超えて、語り手がどのように自己の感覚を構築しているかに注目する。レベル3のポジショニングでは、語り手が支配的なディスコースとの関係において、自分をどのように位置づけるかという点も重要になる(Bamberg & Georgakopoulou, 2008)。個人は、社会に存在するディスコースによって規定される側面を持つ

が、同時に、ディスコースを使って主体的に自分自身を構築しているという側面も持っている (Bamberg, et al.,2011)。

Bamberg のアプローチは, Harré らのアプローチ (Harré & van Langenhove 1999) に比べ, 人々が主体的にディスコース上のポジションを構築していく面を重視している (Bamberg, 2003; Deppermann, 2013)。本章では, グループに参加した親たちが, どのようにしてオルタナティブな語りやアイデンティティを構築しているかという点を検討するため, Bamberg のアプローチが適していると考えられた。ポジショニングによる分析, 特に Bamberg のレベル3のポジショニングは, 今ここでのミクロな相互行為によるアイデンティティの構築に焦点を当てるアプローチと, ディスコースやイデオロギーとの関係といった, より広い社会的なプロセスに焦点を当てるアプローチとをつなぐ中間的な立場を提供する (De Fina, 2013)。そのため, 社会的なディスコースや, コミュニティ・ナラティブとの関連性を視野に入れながら, 具体的な語りの実践の中でアイデンティティが構築されるやり方を捉えることを可能にすると考えられる。

先行研究では, 癌患者のサポート・グループにおける実践について, ポジショニング分析を適用した研究として, Ussher et al. (2005) がある。ここでは, Davies & Harré (1990) のポジショニングの概念が使われていた。しかし, この研究では, 参加者の語りの中で, グループが, その他の援助との関係でどのように位置づけられるかという視点で分析が行われていた。そのため, 個人が支配的なディスコースに規定されたり, それに抵抗したりしながら自分自身に関するストーリーやアイデンティティを構築していくダイナミックな側面は捉えられていない。この点を捉えるためには, Bamberg のいうレベル3のポジショニングである, 支配的なディスコースとの関係で「私は誰か?」という質問にどのように応えていくかという点に注目し, 個人がどのようにして, 自分のストーリーやアイデンティティを構築していくかを明らかにする必要がある。本章では, ポジショニング分析を用いて, 親たちの会の参加者が, どのように自分自身に関するオルタナティブなストーリーやアイデンティティを構築していくのかを検討する。

## 第2節 方法

---

### 5-2-1 データの収集方法

本研究におけるデータの収集方法は, 第4章と同じであり, 参与観察および参加者に対するインタビューによって収集した。また, 会の通信の中に掲載されている例会の語りもデータとして用いた。第2章で述べたように, 例会の語り合いでは, 参加者の一人が記録者として, 語りの概要を記録している。そして, その内容をまとめたものが, 匿名化された形で毎月発行される会の通信に掲載される (表5-1参照)。何人の参加者の語りが掲載されるかは, 月によっても異なるが, およそ全参加者の半数ほど (10~15人程度) の語りが掲載される。また, 表5-1のDは筆者の語りだが, 通信においては, 親の立場の参加者の語りだけでなく, 親以外の立場の参加者の語りの概要も掲載される場合がある。



表 5-1 通信における語りの記載例

|  |
|--|
| <p>A さん（母親）：息子。会に入会して 10 年に。いろいろあったが今は、心配だった息子は結婚して 1 児の親になっている。この会で学び、たくさんのお話を教えてもらった。つらいときは、例会で話すことで救われた。今も心配なことはあるが、子どもの人生は子どものもので私の人生とは違うと割り切っている。自分が元気であることが 1 番良いと思っている。</p> <p>（B さん， C さんは省略）</p> <p>D さん（学生）：心理学を学んでいる。この例会に来ると、自分の知らない世界を知ることができ、たくさんのお話を学ぶことができる。</p> |
|--|

### 5-2-2 データの分析方法

#### （1）コミュニティ・ナラティブの分析

本研究では、語り合いの場、参加者間のやりとり、語られるストーリーという 3 つの側面に注目して、親たちの会のコミュニティ・ナラティブの特徴やその醸成のされ方について検討した。

まず、語り合いの場がどのように設定され、運営されているのかという視点からフィールドノーツのデータを読み返し、語り合いの場に影響していると思われる文脈について記述した。

また、参加者間でやりとりが見られた場面をフィールドノーツから取り出し、どのようなやり取りが行われ、それがどのように意味をもっているかという視点から、解釈的なコードを付けていった（表 5-2 参照）。その後、コードを吟味し、比較を行いながら、類似したやりとりのパターンを集積し、親たちの会で生じているやりとりの特徴について検討した。

表 5-2 やりとりの分析の例

| フィールドノーツのデータ   | コード   |
|--|---|
| <p>語りが一巡した後（一巡している間に「子どもに死んでほしいと思ったときがあった」ということを話した参加者がいた）、初めて会に参加した人（a さん）が、「さっき、死んでくれという話があって」とぼそっと言いかけると、他の参加者（継続して会に参加している親たち）が、すぐに反応して「そりゃあるよね」「消えてくれとは思わ」「みんなある」などと言う。「死んでくれと思っていた」「他の人の命を奪うのだけは怖かった」「だから一人でいてくださいという感じ（笑）」と口々に複数の参加者から共通するような気持ちが語られた。「でも、暴走から帰ってくると安心するでしょ」と別の参加者が尋ねると、「する。命があって良かったと思う」と返事があり、最後に、「子どもに死んでほしいときがあった」と語った参加者が、「でもね、別に死んでほしいと言っても、本当に思っているわけではなくて、やっぱり死</p> | <p>他の参加者の話への言及</p> <p>初めての参加者への同意や理解の言葉かけ</p> <p>共通する体験を話す</p> <p>別の意味づけが語られる</p> |

|  |  |
|--|--|
| <p>んだら悲しいから。そう思うくらいいっぱいになってしまっている、余裕がないってことだよね」と話される（aさんは涙を拭いていた）。</p> |  |
|--|--|

さらに、語られるストーリーについては、インタビューデータ、フィールドノートおよび会の通信に掲載された語りについて、複数の語りで共通して用いられているフレーズや語り方に注目し、類似したストーリーのパターンを集積していった。特に、「会でよく言われること」や「会で学んだこと」として語られた部分や、親たちの会以外の場所や人間関係と対比的に語られた部分に注目し、親たちの会のナラティブの特徴を検討していった。

## (2) 語りの構築とポジショニングの分析

語りの構築について検討する際には、Bambergのレベル3のポジショニングの概念を参考に、どのように語り手である親たちが、自分自身を語りの中で構築しているか、語りにおける親たちのポジションはどのようなものかを検討した。ポジショニング分析の過程では、具体的な状況における発話において、どのようなディスコースが関連し、重要なのかを明らかにしていく必要がある。その際には、コミュニティ内で何度も生じているパターンや、繰り返しに着目することが一つの有効な方法となる（De Fina, 2013; Georgakopoulou, 2013）。そこで、本研究では、インタビューや例会の中での語りについて、複数の語りにも共通し、頻繁に繰り返されている語り方のパターンや、そこで構築されている自己の共通した特徴に着目することにした。

まず、インタビューおよび例会の中の語りについて、<語り手がどのように自分自身を位置づけているか>という観点から、解釈的なコードを付けていった（表5-3参照）。その後、複数の語りのコードを比較し、共通しているポジションや、語り方のパターンを検討した。その結果、社会的なディスコースとの関係で自分を語るとき、グループで言われることとの関係で自分を語るときで、親としての自分の位置づけ方に違いがあることが見出された。そこで、親たちのポジションのバリエーションを社会的ディスコース、および、グループのナラティブとの関連でそれぞれ検討した。また、多くの語りにも共通して見られる語り方として、過去の自分と現在の自分を差異化し、対比的に語るという特徴が見出された。そこで、こうした語りにおいて語り手のポジションがどのように構築されているかをより詳細に分析し、このような語り方と社会的ディスコースやグループのナラティブとの関連について検討した。

表 5-3 解釈的なコードの例

| 語りデータ   | コード                                     |
|---|---|
| D: そうそう。ですね、だって、誰も（はい）やっぱり普通一般、昔の私もそうだと思うけど（はい、はい）、そんな女の子をね、泊めちゃだめよとかいう意見を私もきって言うたと思うのね（はい）、自分の子が荒れなければ（ああもし荒れなければ）。でもあそこは、受容してくれる場所だから（はい）、「大変だよね」とか | 普通一般の人（社会的ディスコース）や過去の自分と、グループを対比的に位置づける |

|  |                                  |
|--|----------------------------------|
| 「ママ偉いよ」とか言ってくれて、ああそうか、私偉いのかって<br>(はい) (笑), そう, だからすごい, 楽になりましたね (ああ) | グループの中では, 偉い自分, 頑張っている自分というポジション |
|--|----------------------------------|

なお, インタビューデータにおいてポジションの特徴を分析する際には, 鈴木 (2007) を参考にしてより詳細なトランスクリプトを作成し, 語りを検討した (使用した記号については表 5-4 参照)。これは, 語りにおけるポジショニングを検討する際には, 語りの内容だけでなく, どのような語り方をしているかなど, 発話行為に着目することが有効であり, より詳しいトランスクリプトが必要であると考えられたためである。

表 5-4 トランスクリプト記号

|       |                                      |
|-------|--------------------------------------|
| [     | 発話の重なりを示す                            |
| ]     | 重なりの終わりを示す                           |
| =     | 発話が途切れずに密着していることを示す                  |
| (1.2) | 音声途絶えている時間は丸括弧内にその秒数が示す              |
| (.)   | 0.2 秒に満たない短い間合いは丸括弧内にピリオドを打った記号で示す   |
| —     | アンダーラインは強調された語を示す                    |
| ::    | コロンは音の引き延ばしを示す。数が多いほど長いことを示す         |
| -     | 発話が途中で途切れたことを示す                      |
| 。     | 語尾が下がって区切りが付いたことを示す                  |
| ,     | 項目を読むようにイントネーションが続いていることを示す          |
| ?     | 疑問符は語尾の音が上がっていることを示す                 |
| ↑↓    | 極端な音調の上がり下がりには上向き矢印と下向き矢印で示す         |
| 語     | 大きく発話された語は太字で示す                      |
| ><    | 発話のスピードが速くなる部分は左向き不等号と右向き不等号で囲むことで示す |
| h     | 呼気音や笑いを示す                            |
| .h    | 吸気音を示す                               |
| 語 h 語 | 笑いながら話される場合は, 語の間に h を入れて示す          |
| ( )   | 聞き取り不能な箇所を示す。空欄が長いほどその時間も長い          |
| (語)   | 括弧内の語は, 聞き取り不能なため著者が推測した発話である        |
| (( )) | 二重括弧内には, 注記を記す                       |

注: 鈴木 (2007) に従い, 引用する語りは「抜粋」と表記する。抜粋内の番号は行番号を, IR はインタビュアーを, その他のアルファベットはインタビュイーをそれぞれ示す。

### 第 3 節 結果と考察

本節では、まず、親たちの会におけるコミュニティ・ナラティブの特徴や、それがどのように醸成されているのかという点を検討する。その後、語りにおける親のポジショニングのバリエーションを社会的ディスコースとの関係、および、グループのナラティブとの関係で整理し、参加者がオルタナティブな語りを構築していくやり方について明らかにしていく。

### 5-3-1 親たちの会におけるコミュニティ・ナラティブの醸成

本項では、語り合いの場、参加者間のやりとり、語られるストーリーという3つの側面から、親たちの会のコミュニティ・ナラティブの特徴や、それがどのように醸成されているのかを検討する。

#### (1) 語り合いの場

まず、第2章で述べた内容と重なるが、例会の語り合いの場が、どのような場として設定され、運営されているのかを確認しておく。この点は、親たちの会のコミュニティ・ナラティブについて検討する上でも、重要であると考えられるためである。

**語り合いの場のルール** 第2章で述べたように、例会では、初めの全体会のなかで会の趣旨が簡単に説明される。そこでアナウンスされることは、会の参加者の大半がわが子の「非行」の問題で悩んできた親であり、既に様々な方法を試している場合が多いので、批判や分析、安易なアドバイスなどはせず、お互いに自分の悩みを語り合い聞き合うことで、学び合おうというような内容である。

さらに、語り合いを始める前にそれぞれのグループの司会者<sup>25</sup>が例会の趣旨およびルールを説明する。中心的な内容は以下の4つである。

- ① 批判や中傷、討論、過度なアドバイスなどはせず、話を聞き合うことで学び合う
- ② 会で聞いたことは他言しない
- ③ 名前や住んでいる場所を言う必要はない、話したくない人は話さなくてもよい
- ④ 話の内容を匿名化して会の通信に載せることがあるが、記録してほしい人、載せてほしくない人は申し出てほしい

こうしたルールは、親が安心して例会に参加し、話をできるようにすることを保障するために設けられ、確認されていると考えられる。ルールの①は、多くのSHGで用いられている「言いつばなし、聴きつばなし」というルール（岡, 1999）の一つのバージョンであり、語られた話について他の参加者が余分な注釈や詮索、分析などをせず、それをありのままに認め、聴くというものである。親たちの会では、批判や分析だけでなく、基本的にアドバイスもしないということが確認される。親たちの会でも、アドバイスの意味をもつ発言が全くないわけではない。特に、参加者が差し迫った問題で困っているような場合には、他の参加者が、自分の語りの中で、「自分の場合はこういう対応をした」というように、参考になりそうな自分の体験を話すことがある。

---

<sup>25</sup> 第2章でも述べたように、司会は、会にある程度の期間継続して参加し、世話人になっている親が交代で担当している。司会者や記録者は、例会が行われる前に本人の立候補によって決められる。司会者によって運営の仕方に大きな差異は見られなかった。

ただし、そのような場合にも、「こういう風にしたらどうか」という言い方ではなく、「自分の場合はこうだった」という言い方がなされ、自分の体験を話すというやり方が用いられる。アドバイスが避けられるのは、既に語り手が試してダメだった方法であったり、語り手の状況においては適切でなかったり、実行が難しかったりする場合も多く、また、語り手のこれまでの対応を批判するような意味が含まれてしまう可能性があるからであると思われる。

また、「会で聞いたことは他言しない」(②)、「名前や住んでいる場所を言う必要はない」(③)といったルールも、親が自分の体験を語りやすくする意味を持っていると考えられる。また、親たちの会では、「話したくない人は話さなくてもよい」(③)というルールがあることで、参加者は無理に自分の話をしなくてもよく、話をしたくないときにも会に参加し、他の参加者の話を聞くことができるようになっている。実際、「今日は話ができないので聴くだけにします」という参加者も時々見られた。子どもの「非行」の問題では、親は子育てに関して批判を受けやすい立場にあるため、このようなルールは、親が安心して、会に参加し、自分の話ができる場を作るために重要であると考えられる。

**語りの順番** 語り合いは、司会者が自分の体験を語るところから始まる。その後は、司会者が一人ひとりに話の順番を振っていき、基本的には、席順で右回りまたは左回りで一人ずつ話をしていく。ただし、初めて参加した人に対しては、様子がわからず話しにくいことがあるので、初めての人が早い順番にあたる場合は、司会者が、今話す方がいいか後で話す方がいいかを尋ね、先に会に慣れている親が話をして、ある程度経ってから、初めての人に話をしてもらうようにすることが多い。

こうした語りの順番にも、特に初めて参加した親が安心して話をできるような配慮がなされており、ナラティブの醸成という点においても意味があると思われる。司会者は、自分の体験について、子どもが荒れ始めてから現在に至るまでの過程を丁寧に赤裸々に語る。語られる語りは、第4章で見た語りの類型で言うと、<「非行」を受けとめる語り>に該当することが多い。司会者や、会に慣れている親が先に自分の体験を語ることで、初めて参加した人は、この場で、自分の体験を率直に話してよいことや、他の参加者から批判などをされないことを感じることで、自分のことを語りやすくなると思われる。

**参加者の多様性と対等性** 親たちの会における例会の参加者の大部分は、子どもの「非行」で悩んでいる親である。会に参加している年数は様々で、10年以上前から例会に来ていて、子どもの問題は既に落ち着いているという人もいれば、初めて例会に参加して、現在まさに子どもが激しく荒れているという人もおり<sup>26</sup>、ばらつきが大きい。そのため、その子どもの年齢も、中学生や高校生という場合もあれば、既に成人して家庭をもっている場合もある。また、子どもの問題行動の内容や程度も様々であり、家庭や学校でのトラブルから、事件を起こして逮捕され、鑑別所や少年院にいる場合まで様々である。さらに、親たちの会では、子どもの「非行」の問題で悩んでいる親に限らず、様々な立場の人が会に参加することを認め、歓迎している。そのため、

---

<sup>26</sup> 初めて例会に参加する人の数は、月によって異なっていたが、1人～3人程度のことが多かった。

自分自身が「非行」を経験した体験者や、専門職、(元)教師、学生、ジャーナリストなど親以外の立場で「非行」に関心を持つ人が参加することもある。

会では、どのような参加者も対等な立場で語り合うということが重視されている。そのため、例会では、全ての参加者が、語り合いの中で一人一回は話をする機会を与えられる。司会が最初に話すことと、前述した初めて会に参加した人への配慮を除けば、語りの順番も、座っている順番に沿って進められる。こうした運営の仕方は、参加者間にヒエラルキーが生じるのを防ぐ意味も持っていると考えられる。司会者は、親以外の立場の参加者に対しても、自分の体験を話すように促すことが多く、学生が自分の親に対する気持ちや体験を語ったり、元教員や専門家が自分の子どもや家族の話をしたりすることもある。詳しくは第7章で検討するが、このように親以外の立場の人も含めて多様な参加者がいることも、親たちの会で構築される語りに影響を与えていると考えられる。

## (2) 参加者間のやりとり

次に、例会における参加者間のやりとりについて見ていく。前述したように、親たちの会では批判や中傷、討論、過度なアドバイスなどは行わないというルールがあるため、ある参加者の話について、別の参加者が意見やアドバイスを行うといった形でのやりとりは基本的に見られない。しかし、語り手とともに聞き手が涙を流したり、笑いを共有したり、あるいは、ある参加者の話に対して、他の参加者が言葉かけやコメントを行うなどのやりとりは見られることがあり、こうしたやりとりも、親たちの会のナラティブの醸成に寄与していると考えられた。

**涙の共有** 例会では、第4章で述べたように、感情が溢れて涙がとまらず、目を抑えたり、声を詰まらせたりしながら話をする参加者もいる。そのときに語り手だけでなく聞き手も共に語りの中で涙を流すこともある。次の抜粋はそのような語りの場面である。

### 〈抜粋 5-1〉 例会にて (フィールドノーツ X年0ヶ月)

参加者の母親：(警察に捕まった息子を迎えに行き一緒に帰ってきたというエピソードを話されて) その後珍しく息子から手紙がきて、ひらがなだらけの小学生のような手紙。「母ちゃん、こんな俺でも見捨てないでくれてありがとう」という内容。私も返事を書いた(自分の息子だから見捨てないよという内容)。そうしたらその手紙だけはちゃんととっている。(筆者のメモ：手紙のやりとりのところは涙ぐみながら話され、聞き手も涙ぐんでいた。自分も聞いていて親子の絆を感じてじーんとした)

手紙のやり取りの部分で、語り手の母親は涙ぐみながら話をして、話を聞いている他の参加者も涙ぐみながら話を聞いていた。この場面では、筆者も、語り手の子どもへの想いや子どもの親に対する想いを感じて涙が出そうになった。同じように子どもの問題で悩んでいる親は、自分と重なるところもあり、筆者以上に、親の想いを感じたのではないかと思われる。

例会の中では、このように語る人も、聞く人も共に涙ぐむ場面が時々あった。語り手を感じている想いと、聞き手が感じる想いととは全く同じものではないが、同じ涙を流すという情動的な体

験が共有されることで、語りの内容だけでなく、語りの中で言語化されていない感情や情動も、聞き手に伝わり共有されているのではないかと考えられる。また、語り手も、聞き手が涙を流す様子を見ることで、自分の語りや感情が受けとめられ、共有されたことを感じられるのではないかと思われる。例会の中では、涙だけでなく、笑いが共有されることもあるが、これは、第6章で詳しく検討を行う。

**同意や共感の言葉かけ** また、例会の中では、語り手に対して、他の参加者から「同じ」や「わかる」といった同意や共感、理解を示す言葉がかけられることが比較的多く見られた。言葉かけのタイミングとしては、語り手の話の途中や、話が終わった直後に言葉がかけられる場合と、自分の語りの番のときに相手の話に言及する場合があった。

話の途中で同意や共感を示す場合、短い言葉で共感や同意が示される。例えば、ある参加者が、息子からのお願いを体調が悪かったので断った、断わることができたという話をしたときに、他の参加者が「断るのって大変」という言葉をかけたり、ある参加者の「初めは非行なんていうものは親が悪いと思っていた」という語りに対して、他の複数の参加者たちが「うんうん」と言ったり、うなずいたりする場面などが見られた。これらの言葉かけやうなずきは、語りの途中でその場の瞬間的な反応としてなされることが多く、語り手の話はそのまま続いていく。

他方で、自分の語る順番のときに、前に話をした参加者の話に言及し、共通するような自分の体験を語りつつ、共感や理解の気持ちが示されることもあった。例えば、次のような語りである。

〈抜粋 5-2〉 例会にて（フィールドノーツ X年5か月）

（語りの中で別の参加者が話した、ホームで泣いていたという話に触れて）泣かれているというの、わかります。私も仕事で帰るとき誰もいないから自転車に乗りながら一と泣いていて、近所で知り合いが通るところだけさっと涙を拭いて通り抜けていた。

これらの言葉かけがなされる背景には、子どもの「非行」に悩んでいる親たちの体験に共通する部分があり、他の参加者の話が、自分の共通する気持ちや体験に触れて、「よくわかる」という共感の思いが生まれてくるのだと思われる。共感する対象は、行動（同じ行動をしていた）、出来事（同じような出来事があった）、感情（同じ気持ち）など多様であるが、「自分のたどったプロセスだと感じた」というように、個別の行動、出来事、感情などよりも大きな、親としての体験プロセス全体に対して共感や理解が示されることもある。こうした言葉かけは、ある程度会に継続して参加し、会に慣れている参加者が行う場合が多い。

また、例会では語りが一巡して時間が残っているときには、話したい人が適宜発言しながら語り合いが続けられるが、そうした場面では、ある参加者の発話に対して複数の参加者が反応し、ある程度長いやりとりが行われることもあった。次の場面は、初めて会に参加した親が言いかけた言葉に対して、複数の参加者が反応し、共感の言葉が投げかけられたシーンである。

〈抜粋 5-3〉 例会にて（フィールドノーツ X年1か月）

語りが一巡した後（一巡している間に「子どもに死んでほしいと思ったときがあった」ということを話した参加者がいた）、初めて会に参加した人（aさん）が、「さっき、死んでくれという話があって」とぼそっと言いかけると、他の参加者（継続して会に参加している親たち）が、すぐに反応して「そりゃあるよね」「消えてくれとは思う」「みんなある」などと言う。「死んでくれと思っていた」「他の人の命を奪うのだけは怖かった」「だから一人でいってくださいという感じ（笑）」と口々に複数の参加者から共通するような気持ちが語られた。「でも、暴走から帰ってくると安心するでしょ」と別の参加者が尋ねると、「する。命があって良かったと思う」と返事があり、最後に、「子どもに死んでほしいと思っていたときがあった」と語った参加者が、「でもね、別に死んでほしいと言っても、本当に思っているわけではなくて、やっぱり死んだら悲しいから。そう思うくらいいっぱいになってしまっている、余裕がないってことだよ」と話される（aさんは涙を拭いていた）。

子どもに対する「死んでほしい」という気持ちは、一般的には親としてもってはいけないもの、良くない気持ちと考えられており、話す側にとっても口に出すことが困難であり、聞く側にとっても受けとめることが困難なものである。しかし、特に、子どもが暴走族のような危険な行動をしているときには、そういった思いを抱く親も多い。この場面で、まず、aさんは、一巡している間に他の参加者が、そういう気持ちを持ったときがあったと語っていたためにこの話を切り出すことができたと思われるが、「さっき、死んでくれという話があって」と直接自分の気持ちとしては言いにくそうな様子があった。それを他の参加者が察して、「自分も同じ」「みんなそう思っている」ということを伝えたと思われる。会に継続して参加している親たちが、共通する気持ちを示してaさんの言葉を受けとめたことで、aさんは、おそらく持つてはいけないと感じていた「死んでほしい」という気持ちが、「みんなある」こととして肯定され、安心できたのではないと思われる。筆者も、「死んでほしい」という気持ちが表出されたときには、何となく落ち着かない気持ちになったが、一連のやりとりや、「本当に思っているわけではなくて、(…)余裕がないってことだよ」という言葉を聞き、そういうことなのかと腑に落ち、ほっとすることができた。このように、「同じ」や「わかる」といった同意や共感、理解を示す言葉かけは、語り手との気持ちや体験の共通性を示すことを通じて共感的な雰囲気を作り出し、他の場所では語りにくい話題や気持ちを表出させやすくしたり、それを受けとめたりする意味を持っていると考えられる。

**子どもを褒める／親をねぎらう** また、同意や共感の言葉以外では、聞き手が、語り手の子どもの行動や態度をほめるようなコメントがなされたり、語り手である親をねぎらう言葉がかけられたりすることもあった。

〈抜粋 5-4〉 例会にて（フィールドノーツ X年 7か月）

（子どもが仕事には）一年半起こさなくても6時に起きてきて働いていた（「すごい」という声が2,3人の参加者からあがる）。それは本当にすごいと思う。そういうすごい部分がたくさんあ



る。

この語りでは、子どもが一年半、朝早く起きて仕事に通ったという語りに対して、他の参加者から「すごい」という声があがり、語り手もそれを取り入れながら、「それは本当にすごいと思う」と子どもを褒めている。他にも、例えば、ある参加者が、整形するという娘と久しぶりに衝突したというエピソードを語ったときに、司会者が「自分で整形のお金を貯めてというのは偉いですね」と子どもを褒めるコメントしたことがあった。「非行」をしている子どもは、一般的には「悪い子」「困った子」というイメージが持たれがちであり、例会でも、そのように子どもの行動が語られることもある。しかし、他方で例会の中では、他の参加者から「すごい」「偉い」「頑張っている」など、子どもの良い部分に焦点を当てる声かけが行われることもよく見られる。

また、例会の中では、語り手である親の頑張りをほめ、ねぎらう言葉がかけられることも多い。例えば、ある参加者が、息子の彼女が一年間家に住んでいてずっと面倒を見ていたという話をしたときに、他の参加者が「よくやっていたね」と声をかけたり、子どもが夜中に出かけるため、眠れずに待っていて、早朝に帰ってきたときに怒りの気持ちを抑えながら、「お帰りなさい」と迎えて、ご飯を食べさせていたという話に対して、後で他の参加者が「私ならそこまでできなかったな」とその話に言及したりする場面が見られた。これらの言葉では、対応が良いとか悪いということではなく、語り手が、その人のやり方で精一杯子どもと向き合っている姿に対する尊敬やねぎらいの気持ちが示されていると思われる。「非行」をしている子どもやその親は、社会では否定的に見られがちだが、会の中では、こうした言葉かけによって、肯定的な面に焦点を当てたり、頑張りをエンパワーしたりする雰囲気が醸成されている。

### (3) 語られるストーリー

最後に、語られるストーリーについて見ていく。グループの中では、参加者一人ひとりが自分の体験に基づいて、子どもへの関わりや、子どもの行動の理解について話をする。それぞれの語りは、当然個別的なものであるが、複数の参加者に共通し、類似性を感じられる語りや、「会でよく言われること」として言及されるストーリーがあり、これらはグループのコミュニティ・ナラティブとして捉えられる。ここでは、複数の参加者で共通して見られる語りや、「会で言われること」として言及されるストーリーに注目する。

よく言及されるナラティブには、話しかけ方やメールの送り方といった具体的な子どもとの関わり方から、「子どもとの関係を良くする」「子どもは子どもの、自分（親）は自分の生き方がある」「親が元気に楽しく生きることが大切」といった「非行」との向き合い方、「子ども自身も苦しんでいる」「子どもは多面的な存在である」といった子ども理解の仕方、さらには「会は親の居場所である」といった会に参加する意味について述べるものなど、様々なものがある。ここでは、子どもとの関わり方・向き合い方、子ども理解の仕方、会に参加する意味という3つの側面に焦点を当てて、多くの語りに現われる共通した特徴を記述する。

**子どもとの関わり方・向き合い方** 会の中でよく語られる子どもの「非行」への対応は、一般的に言われがちな「非行」を止めるという関わり方とは異なっている場合が多い。むしろ、

必死になって「非行」を止めようとしても「非行」は止められないということが、語り手自身の具体的な体験を伴って語られる。

〈抜粋 5-5〉例会にて（通信）

「親は意地でも外泊させてはいけない」とか「親だから頑張りなさい」と言われるが、そのとおりやっても子どもに突き飛ばされるだけ。

そして、「非行」を止めようとするよりも、親子関係を良くして、子どもが居心地良く感じられる場所や関係性を作ることが大切だったということが語られる場合が多い。会では、メールを送るときに「生きてる？」や「今日のご飯は〇〇です」といった言い方をしてみる（生きてるメール／ご飯メール）、子どもに話すときに「～しなさい」ではなく「私はこう思う」という言い方をしてみる（Iメッセージ）、夜、遊びや暴走族に出かける子どもを「行ってらっしゃい」と見送って「お帰りなさい」と迎えてみるといったことを試してみると、子どもの反応が変わったという体験がしばしば語られる。こうした具体的な関わり方のコツも、会のナラティブの一つであり、親子関係や家の居心地を良くする意味を持っていると考えられる。

また、会の中では、「子どもは子どもの、自分（親）は自分の生き方がある」「親が元気に楽しく生きることが大切」といった、子どもと距離をとるような語りも見られる。例えば、次のような語りである。

〈抜粋 5-6〉例会にて（フィールドノーツ X年 4か月）

（子どもが）20歳を超えたので、こちらからあれこれはもうしないつもり。不安な気持ちもあるが、自分がどうやって楽しく生きるかということを考えてやっている。10年で少しずつそうなってきた。

〈抜粋 5-7〉例会にて（通信）

今も心配なことはあるが、子どもの人生は子どものもので私の人生とは違うと割り切っている。自分が元気であることが1番良いと思っている。

「親が元気で楽しく生きることが大切」という語りは、子どもと関係を断つということではなく、親が元気に生きている方が、子どもにとってもいいという意味を含んでいる。また、似たような語りとして、「親は子どもを応援することしかできない」「(できる範囲で) 子どもを応援していきたい」といった語りもしばしば見られる。語り手によって、子どもの状況や子どもとの距離（同居しているか別居しているかなど）は異なっているので、少しずつ語りのニュアンスは違っているが、こうした語りでは、子どものことを心配しつつも、そこから少し距離をとり、自分の生き方を充実させていこうという決意や方向性が語られる点が共通している。こうした語りは、前述した親子関係を良くするというナラティブとはまた別の要素を含んでいるが、一般的に言われがちな、子どもの「非行」を止めるという関わり方と異なっている点は共通している。

他にも、子どもとの向き合い方としては、「子どもを受けとめる」「子どもを信じる」「期待をしない」といったことも複数の参加者に共通して語られた。このように、親たちの会では、様々な言い方で、子どもとの関わり方や向き合い方が語られており、実際の具体的な子どもとの関わり方も、参加者それぞれの状況によって少しずつ異なっている。会の中でも、「すぐには解決しない」「特効薬はない」という言い方がしばしばなされ、どのような場合にも有効な解決策は存在しないということが言われる。

**子ども理解の仕方** 第4章でも何度か触れたが、親たちの会で頻繁に語られることとして、「子どもも苦しんでいる」という子ども理解がある。会の中では、怠学、喫煙、飲酒、夜遊び、家出、無免許運転、暴走族、傍若無人な言動など、活発で荒々しい一般的な「非行」のイメージと近いと思われる子どもの様子も語られる。しかし、一方で、学校の中で、地域の中で、あるいは家庭の中で居場所がなかったり、自分のやりたいことが見つからず、苛々したり自信を失ったりしている子どもの姿も語られる。

#### 〈抜粋 5-8〉例会にて（通信）

（息子は）中学に入って、部活もレギュラーになれず勉強にもついてゆけず受験に失敗し、建設業で働きながら定時制高校に行くが、その生活に自信を持たず家に閉じこもり昼夜逆転の生活になる。父親の自分はそんな子どもに説教ばかりで妻を責めていた。息子は悩みを打ち明ける場所がなく、ガラスを割ったり喫煙をしたり荒れていった。

〈抜粋 5-8〉では、子どもの荒れた言動と関連させて、子ども自身が、自信を持てなかったこと、悩みを打ち明ける場所がなかったことが語られている。第4章でも述べたが、このような「苦しんでいる子ども」という理解は、親自身の子どもの関わり方の捉え直しや変化にもつながる。

また、会の中では「子どもは多面体である」というフレーズもよく用いられる。これは、「非行」に走っているときは、どうしても子どもの悪い面ばかりが目立って見えるが、子どもは様々な面をもっており、色々な視点から子どもを見て理解していく必要があるという意味である。会の中では、子どもが学校を辞めても仕事を頑張っている様子や、親に甘えてくる様子、仲間に対して優しいところなど、様々な子どもの側面が語られる。また、前述したように、それに対して、他の参加者から子どもを褒める、ポジティブなフィードバックがなされることもある。

**会に参加する意味** 最後に、親たちの会に関するナラティブを見ておく。第4章で述べたように、<「非行」を受けとめる語り>の中では、自分の変化や成長と関連して、会に来ることの影響やその意義が述べられることがあった。次の抜粋もそのような語りの例である。

#### 〈抜粋 5-9〉例会にて（通信）

家出、男女関係など親の言うことを聞かない娘に、親はとげの言葉を投げかけていた。会につながって、ひとりではないとわかって楽になった。待つということは本当につらかったけど、自分が変わると娘も変わり会話ができた。この会に救われた。

ここでは、会に参加するようになったことが、ひとりではないと気づいたり、自分の気持ちや子どもへの対応が変化したりするきっかけとして語られている。このように、自分の気づきや変化のきっかけや、それを媒介したものとして、会のことが言及されることはしばしばある。また、ここでは、会に参加するようになったことを指して、「つながる」という表現が用いられているが、これも多くの参加者に共通していた。この表現からは、会が、自分を支えてくれる絆やネットワークのように捉えられていることが窺われる。

また、会のことを指して「居場所」という表現もよく使われる。

#### 〈抜粋 5-10〉 例会にて（通信）

夫にも親にも妹からも非難され、会が一番の居場所だった。

〈抜粋 5-10〉のように、会以外の場所や人間関係と対比される形で、会が居場所であると感じられたことや、会に参加することで楽になったという感想が述べられることも多い。これは、逆に言うと、会以外の場所では、非難されたり、批判されたりすることが多く、心が休まらないということでもある。こうした会に関するナラティブは、参加者の会に対する信頼を強めたり、会に参加し始めた人に対して、会に参加する意味を伝えたりする効果があると考えられる。

さらに、会に関するナラティブは、子どもとの関わり方や、子ども理解に関するナラティブと結びつけて語られることもある。次の抜粋は、親の直接の語りではないが、副代表である元家裁調査官が、例会の初めの挨拶の中で、親の語りと言及したものである。

#### 〈抜粋 5-11〉 例会にて（フィールドノーツ X+3 年 11 か月）

ここで聞いた親の話で、「会に来るようになって初めて、ここが私の居場所だと思えた。そうしたら、あの子の居場所はどこだろうと思った。家でもないし、学校でもないし、あの出ていく溜まり場だと思ったら、『止めなさい』と言わなくなった。次に『行ってらっしゃい、お帰りなさい』と言えるようになった」という話があった。調査官が聞いたら 100 人中 100 人が驚く話。自分もここで学び直しをさせてもらっている。

ここで引用されている話では、会が自分の居場所だと思えたことが、子どもに対する理解を変え、子どもへの関わり方の変化にもつながったという形で、自分が体験したエピソードを通して 3 つのテーマに関するナラティブが統合されている。このように、子どもへの関わり方・向き合い方、子ども理解、会に参加する意味という 3 つのテーマに関するナラティブは、ばらばらなものではなく、相互に関連していると考えられる。

### 5-3-2 語りの構築とポジショニング

次に、語りにおける親のポジショニングを、社会的ディスコースやコミュニティ・ナラティブ

との関連で検討する。まず、親のポジショニングのバリエーションを、社会的ディスコースとの関係、および、グループのナラティブとの関連で語られるときに分けて整理する。その後、過去の自分と現在の自分とを差異化するポジショニングについて、社会的ディスコース／グループのナラティブとの関連を含めて検討する。

#### (1) 社会的なディスコースとの関係におけるポジショニング

まず、社会的なディスコースと関連して語られるときのポジショニングについて見ていく。子どもが「非行」に走った場合、その親に対しては、しばしば「親は子どもの『非行』を止めないといけない」「子どもを『非行』に走らせた親はダメな親である」といった見方がなされがちである。親たちの語りの中でも、このような社会的な視線やディスコースについて言及する語りが数多く見られる。こうした語りにおいて、語り手である親は、「子どもを『非行』に走らせてしまい、それを止められない無力な自分」や、「『非行』の子どもの親として非難される自分」として位置づけられることが多い。

例えば、次のような語りである。

#### 〈抜粋 5-12〉 例会にて（通信）

家庭裁判所の審判のときに「監護能力のない親」と言われ、立ち上がれないような思いをした。同時期に弟は不登校になり、自分に人間として大きな欠陥があるのではないかと思わされた。

ここでは、子どもの審判の場面で、裁判官から「子どもを監護する能力のない親」と言われた体験が語られている。親の監護能力は、子どもの処遇を検討する際の一つの考慮要素であるが、この発言の背景には、「親は子どもの『非行』を止めるべきであり、本来それができなければならない」という社会的なディスコースが存在すると思われる。このようなディスコースの影響下では、子どもが「非行」に走ったとき、親は、自動的に「監護能力のない問題のある親」として位置づけられてしまう。

この語りの後半では、弟の不登校のことが言及され、「人間として大きな欠陥があるのではないかと思わされた」という発言につながる。ここで子どもの不登校という事実が、「問題のある親」というポジションを強化する働きをしている。ここで、「思わされた」という受動態の表現が使われているように、社会的なディスコースと関連して語られる場面では、語り手である親は、受動的な存在として登場することが多い。

親たちの語りでは、審判という場面だけでなく、学校の先生との関係、児童相談所や病院その他の相談機関との関係、地域の周囲の親や世間との関係などにおいても、同じように、非難や批判を受けるポジションに位置づけられる語りが多く見られる。以下の語りは、インタビューデータからの抜粋である。

#### 〈抜粋 5-13〉 Dさんインタビュー（1回目）

1 D: だって非難を浴びるでしょ

- 2 IR : はい
- 3 D : そういうことをした人の親ってあつげらんとしてると
- 4 IR : ああ
- 5 D : だから街を歩くときにはそんなあつげらんとはできないけど huh(1.0)
- 6     でも今はそうですね, あの頃はやっぱりそれが悪いことかなっていうか
- 7     世間の人にはちっちゃくなっていないといけないし
- 8     でも息子に対しては大丈夫よって言っている親でいなきゃ
- 9     こそそしてちゃいけないでしょ
- 10 IR : はい(.)じゃあなんかその息子の前ではそう大丈夫
- 11 D : 大丈夫よって
- 12 IR : 世間の前(.)世間というか外に出るときはやっぱりちょっと
- 13 D : はあー
- 14 IR : はあってなってしまう
- 15 D : 加害者の親でいるでしょ↑
- 16 IR : はい
- 17 D : うーんだからそれが一番うーん(1.5)つらいし

これは、D さんの息子が傷害事件を起こした後の当時の状況について話していた場面の語りである。D さんは、子どもの前では気丈に振る舞うようにしながらも、世間からの目があり、つらかったと言う。ここで D さんは、自分について 3 行目では「そんなこと（傷害事件）をした人の親」、15 行目では「加害者の親」と表現している。また、そうした親は「非難を浴びる」（1 行目）、「世間の人にはちっちゃくなっていないといけない」（7 行目）と言う。ここでも、親は、「悪い」ことをした子どもの親として位置づけられ、そこには周囲や社会から非難を浴び、行動を制約される受動的な性格が付与されている。

#### (2) グループのナラティブとの関係におけるポジショニング

次に、グループでの体験やグループのナラティブと関連して、語られるときの親たちのポジショニングを見ていく。グループの中での出来事としてよく語られるのは、自分の話を聞いてもらい安心したという体験や、頑張りを労われたといった体験である。また、他の参加者の話を聞く中で、様々な子どもへの見方や関わり方を学び、それを実行してみたということもしばしば語られる。こうしたナラティブと関連して語られるときには、親たちは、「頑張っている親」「子どもに新しい関わり方を試みている親」など、子どもに向き合っている存在として、より主体的な性格が付与される。

次の抜粋は、D さんのインタビューにおいて、例会で自分の子どもへの関わりが他の参加者から労われた体験が語られた場面である。

#### 〈抜粋 5-14〉 D さんインタビュー（1 回目）

- 1 D : へなへななときはそうやって会に行かせてもらったりしてましたね
- 2 IR : 会に行かれるとなんかその元気がもらえるというか
- 3 D : そうそう(.)ですね。だって誰もやっぱり普通一般昔の私もそうだと思うけど  
そんな女の子をね::泊めちゃだめよとかいう意見を私もきって言ったと思うのね
- 4 IR : はい
- 5 D : 自分の子が[荒れなければ
- 6 IR : [ああもし(.)はい
- 7 D : でもあそこは受容してくれる場所だから
- 8 IR : はい
- 9 D : 大変だよね:とかママ偉いよ:とか言ってくれて。ああそうか私偉いのかって  
haha だからすごい楽になりましたね

ここでDさんは、「普通一般」に言われることと、「受容してくれる場所」であるグループでの反応を対照的に示している。Dさんは、息子の彼女を家に泊めていたことについて、「普通一般」であれば、親としてそんなことを許したらダメだという意見を言われると思うが、グループでは、「大変だよね」「ママ偉いよ」と労われて、すごく楽になったと言う。5-3-1で述べたように、こうした言葉かけは例会でもよく見られ、グループのナラティブの一つと捉えられる。この語りの後半では、グループの参加者からの言葉に支持されて、語り手は、「大変ながらも頑張っている偉い親」として、自分自身を位置づけている。

例会では、自分の子どもへの具体的な関わり方についてもよく語られるが、そこでグループのナラティブに即した関わりが、ポジティブな結果を生み出したとする語りも多い。例えば次のような語りである。

〈抜粋 5-15〉 例会にて（フィールドノーツ X年9か月）

例会でよく「Iメッセージ」という話があるが、それをやるようになり、暴走族に行こうとする息子に「行くな」ではなく、「行かないでほしい」と言った。息子が「本当は俺も行きたくないんだ。でも仲間が大変なことになるから行かないきゃいけないんだよ」と言って、初めて弱音を話してくれた。言葉では言えないが、そのときに、子どもをありのまま受けとめるということが身体でわかった。その後は、「気をつけて行ってらっしゃい」「お帰りなさい」と声をかけるようになり、息子も「いってきます」「ただいま」と言うようになった。

ここで言われている「Iメッセージ」とは、子どもに自分の気持ちや言いたいことを伝えたいときに「～しなさい」という命令形ではなく、「私は～してほしい」や「私は～と思う」と自分自身の希望や考えとして伝えるというやり方である。ここで、語り手も、実際に自分がIメッセージの伝え方を試みたときの体験を語っている。そのときに息子が普段言わない弱音を話し、語り手は、子どもを受けとめるということが身体感覚として分かったと言う。ここでは、語り手

である親は、グループで語られていた子どもへの関わり方を試み、それを習得する主体的・能動的な存在として語られている。

5-3-1 で述べたように、グループでよく語られるナラティブには、具体的な子どもとの関わり方だけでなく、子どもとの向き合い方や、子ども理解の仕方など、様々なものがある。こうした語りで登場するグループのナラティブは、親の子どもへの関わりを支持したり、関わりや子ども理解のためのアイデアを提供したりして、親の自信を回復させ、親の主体的なポジショニングをサポートする役割を果たしていると考えられる。また、こうしたグループのナラティブに言及する語りは、聞き手にとっては、グループのナラティブを取り入れる契機になり、語り手にとっては、自分自身の体験とグループのナラティブとの結びつきを強化する契機になると考えられる。

### (3) 過去の自分と現在の自分との対照的なポジショニング

親たちの語りの中では、過去の自分と現在の自分を差異化し、対比的に語るという語り方の特徴が見出された。これは、特にグループへの参加期間がある程度長い参加者の語りによく見られた。逆に、会に初めて来た参加者や、来てからの期間が短い参加者の語りにはこうした特徴は見られなかった。こうした語りでは、「現在の自分とは違っていた過去の自分」あるいは「過去の自分から変化した現在の自分」という形で、現在の自分と過去の自分が差異化され、対照的にポジショニングされる。これもまたオルタナティブなストーリーを構築するための一つのストラテジーとして捉えられる。

次の語りは、会に来てから10年以上経つBさんのインタビュー中に語られたものである。Bさんの場合、息子の問題は既に落ち着いている。この語りは、息子の「非行」の経験を振り返り、「それがあったからこそ自分がものを深く考えられる人間になった」と話した後に語られたものである。

#### 〈抜粋 5-16〉 Bさんインタビュー (1回目)

- |   |   |
|---|---|
| 1 | B: すごくあの子のいろんなことをやってきた本当に凝縮された何年間           |
| 2 | それで私はすごくねえ あの親にさせてもらった                      |
| 3 | 親っていうか(2.5)人として成長させてくれたのかなっていう思いを           |
| 4 | 今だから言えますけど                                  |
| 5 | IR: はい                                      |
| 6 | B: huhuhu あの[当時はこれさえいなければみ(h)た(h)い(h)に[huhu |
| 7 | IR: [はい [huhu                               |
| 8 | B: 思ってたけど                                   |

この語りでは、自分が、子どもの「非行」の経験によって親として成長したということが語られている。ここで、注目したいのは、「今だから言えますけど」や「あの当時は」という表現である。語り手は、「今だから言えますけど」という表現を使い、昔は見えていなかった当時の体験の価値に言及している。ここでは、その価値を評価できる自分と評価できなかった自分が暗黙



のうちに对比されている。また、すぐ後の「あの当時は」から始まる発話で、過去の自分は、息子のことを「これ」とモノであるかのように言及しつつ、否定的なもの、いなくなってほしいものと思っていたと自分を特徴づける。ここで示されているのは、「現在の自分とは違っていた過去の自分」や「過去の自分から変化した現在の自分」である。こうした「昔は～だった」「今は～である」という語り方は、例会での参加者の語りや、他の参加者への声かけの中にもしばしば見られた。例えば、例会に初めて参加した人が涙を流しながら話をした後に、参加年数が長い他の参加者から「私たちも今は笑っているけど来たときはぼろぼろだったから」といった声かけがなされたことがあった。

このような、過去の自分／現在の自分の対照的なポジショニングと、前述した社会的ディスコース／グループのナラティブとの関係におけるポジショニングには、密接な関連が見られる。語りの中で、過去の自分は、社会的なディスコースに従って行動していた自分、或いは、グループのナラティブを理解できていなかった自分として位置づけられ、一方で、現在の自分はグループのナラティブを理解できるようになった自分、或いは、社会的なディスコースから距離をとっている自分として位置づけられることが多い。次の語りは、会に来てから2年ほどが経過したCさんのインタビュー中に語られたものである。Cさんは、例会で他の参加者の話を聞くときに、様々なことに気がつくということだった。これは、そうした体験の一つについての語りである。

〈抜粋 5-17〉 Cさんインタビュー (2回目)

- |    |   |
|----|---|
| 1  | C: でも(3.0)人のものを盗ったり人に迷惑をかけたりするのと違って       |
| 2  | タバコはまあ自分が体が害になる                           |
| 3  | IR: はい                                    |
| 4  | C: ことで確かに法律にはね(.)触れるの[かもしれないけど:           |
| 5  | IR: [はい                                   |
| 6  | C: でも: そこは(3.2)いい(.)いいんじゃないっていう huhuhu 会で |
| 7  | IR: はい                                    |
| 8  | C: 誰かが言ってるのを聞いて(h)そ…う(.)かあ…って思って(1.0)うーん  |
| 9  | そうですね(.)なんか(1.5)その会のお母さんたちはもっと(1.0)       |
| 10 | たばこよりも[もっと大変なつらい[もっとね大変なことを知っているから        |
| 11 | IR: [はいはい [はいそうですね                        |
| 12 | C: まあたばこぐらいは目をつむって                        |
| 13 | たばこで血眼になって親子の関係が悪くなっちゃうぐらいだったら(2.3)       |
| 14 | その辺は目をつぶってでもコミュニケーションが[とれる方が全然ましよね        |
| 15 | IR: [はい                                   |
| 16 | C: っていう意味[ですよね[でも一般的な普通のお母さんたちにしたら        |
| 17 | IR: [はい [はい                               |
| 18 | C: 十分コミュニケーションもとれてるわけだし全然違うから(1.0)        |

- 19 そりゃタバコはだめでしょまだ高校生なんだからって  
 20 それは親が注意すべきでしょってなりますよね  
 21 で自分は(2.0)なんかこう一般のお母さんと同じ目線で  
 22 同じように子どもに必死に対応していたけど  
 23 余計なんか食い違っちゃっていただけなのかなあってそのとき思って  
 24 で(1.0)全然あのタバコがいいとか全然今でも思ってないし  
 25 IR : はい  
 26 C : あれなんですけど(2.0)でもタバコ吸うのはもうほんつとに許せないみたいな  
 27 血眼になって夜中に尾行して追いかけていって(.)で息子にうざがられて  
 28 外で大声で俺に自由はないのかとかいって hahaha 暴れられて haha  
 29 高校生にタバコを吸う自由はありませんみたいな[hahahahahaha  
 30 IR : [hahaha  
 31 C : 馬鹿なことやってたなとか今は思いますよね

ここでCさんは、例会で他の参加者が「タバコぐらいはいいんじゃない」と話すのを聞き、「そうかあー」と驚き、自分を振り返ったエピソードを話している。Cさんは、高校生の息子の喫煙を必死に止めようとして、夜中出ていく息子を追いかけて阻止していたと言う。16行目までは、Cさんは、例会における他の参加者の発言とその趣旨を説明している。ここで説明されている「タバコはぐらいい目をつむってもいいのではないか」という考え方は、無理に「非行」を止めようとするよりも、親子の関係を良くするという方向性を持っており、前述したグループのナラティブの一つの表現と考えられる。しかし、この考え方は、子どもが『非行』に走っていない一般の親からは受け入れられにくい。Cさんは、16行目から20行目で、参加者の発言と対照的な一般的な親の考え方を説明している。この考え方は、「親は子どもの『非行』を止めないといけない」という社会的ディスコースに沿った考え方であると思われる。

ここで特に注目したいのは、21行目以下の部分である。Cさんは、過去の自分の言動について、「一般のお母さんと同じ目線で」対応していたが、余計に食い違ってしまった。馬鹿なことをやっていたなと今は思うと語っている。31行目の「今は思います」という言い方に明確に現れているように、ここでは、語り手の現在の視点から、過去の自分の言動が振り返られている。そして、過去の自分は、「一般のお母さんと同じ目線で」、すなわち社会的ディスコースに沿って行動していたと位置づけられ、それが反省的に振り返られている。逆に、現在の自分は、既にその社会的ディスコースに従っていた過去の自分から離れ、それを違った視点から捉えられるポジションに立っていると考えられる。この語りのように、過去の自分と現在の自分は、社会的ディスコースとグループのナラティブとの対照的な構造と組み合わせでポジショニングされることが多い。ここで、グループのナラティブの取り入れは、過去の自分の対応を社会的ディスコースと関連づけ、そこから変化した現在の自分をグループのナラティブに結びつけることを通じて、言説的に達成されていると考えられる。

ただし、こうした語りにおいて、社会的なディスコースの価値が全面的に否定されているわけではないことにも注意しておく必要があると思われる。Cさんは、24行目から26行目において、「全然あのタバコがいいとか全然今でも思っていないし、あれなんですけど」と述べており、「未成年がタバコを吸うことは良くない」という価値に対しては、Cさん自身も当然賛成していることが示されている。12行目の「たばこぐらい」(傍点筆者)という言い方にも表れているように、ここで参照されているグループのナラティブも、子どもの全ての問題行動を許容するという意味ではない。ここで、グループのナラティブの役割は、社会的ディスコースを全面的に否定することではなく、異なる視点を提示することで、その絶対性や支配力を弱めることにあると考えられる。そして、親たちはグループのナラティブを参照することや、過去の自分/現在の自分の対照的なポジショニングを通じて、社会的なディスコースと折り合いをつけながら、オルタナティブな語りを構築していると考えられる。

## 第4節 まとめ

---

本節では、前節の結果をまとめ、親たちの会において、どのようにコミュニティ・ナラティブが醸成されているのか、そして、それがオルタナティブな語りの構築にどのように影響しているのか整理する。また、本研究で用いたポジショニング分析のSHG研究における有用性についても検討する。

### 5-4-1 親たちの会におけるコミュニティ・ナラティブ

本研究では、まず、語り合いの場、参加者間のやりとり、語られるナラティブに注目し、親たちの会のコミュニティ・ナラティブの特徴やそれがどのように醸成されているか検討した。ここでは、他のSHGに関する先行研究とも比較しながら、親たちの会のナラティブの特徴について整理する。

SHGのコミュニティ・ナラティブは、社会で支配的なディスコースとは異なった視点や価値観を持っており、社会で支配的な物語との関係で捉えられることが多い。例えば、荒井(2013)は、認知症家族会においては、社会で支配的な物語である「献身的介護」の対極をなす「手抜き介護」というコミュニティ・ナラティブが醸成され、他では語りにくい話題を引き出したり、「献身的介護」の影響を強く受けた物語の書き換えを促したりすることを指摘している。すなわち、「家族が認知症患者を介護する」という行為については、患者に寄り添い、心を込めて介護をすることが望ましいという「献身的介護」が強い影響力を持っている。これに対し、認知症家族会では、様々なやりとりの中で、「献身的介護」から逸脱する「手抜き介護」について話してもよいという雰囲気を作られたり、笑いやユーモアが活用されて「献身的介護」の行動規範の影響が無効化されたりするということが行われていると言う。

親たちの会では、まず、語り合いのルールが設けられ、親が非難や批判をされずに、安心して会に参加し、話ができるようにするということが重視されていた。「非行」の子どもを持つ親は、

社会的には批判や非難を受けやすい立場にあるため、こうしたルールは、そうした関わりや関係性が会の中に持ち込まれることを防いでいると思われる。また、親たちの会で語られるナラティブには様々なものがあるが、いずれも、「親は子どもの『非行』を止めないといけない」という社会で支配的なディスコースとは、異なる視点やアイデアを提供するものであった。そして、親たちの会では、涙の共有や、同意や共感の言葉かけといったやりとりがあり、参加者間の気持ちや体験の共通性が示され、他の場所では語りにくい話題や気持ちを表出しやすいような場が作られていた。さらに、子どもを褒めたり、親をねぎらったりするコメントによって、子どもの肯定的な面に焦点を当てたり、親の頑張りやエンパワーする雰囲気も醸成されていた。こうした意味で、親たちの会の場の雰囲気や、そこで語られるナラティブは、「非行」をしている子どもやその親に対する批判的な見方や、「親は子どもの『非行』を止めないといけない」という支配的なディスコースに対抗し、その影響力を弱めるものであると考えられる。

ただし、他方で、「献身的看護」に対する「手抜き看護」のように、親たちの会のナラティブを一つの物語として名指すことは難しいと思われた。親たちの会で語られるナラティブは、例えば、子どもとの関わり方・向き合い方を見ても、具体的な子どもとの関わり方のコツから、子どもとやや距離をとるような語りまで様々なものがある。また、SHG によっては、AA における「12 ステップ」や断酒会における「断酒の誓」のように、回復への道筋や規範が定められているのに対し (Davis & Jansen, 1998; 伊藤, 2009)、親たちの会では、明文化された規範はなく、特定の方法やステップが推奨されることもない。さらに、これらのナラティブは、抽象的な命題としてではなく、語り手の個別の体験やエピソードを通して語られるため、その語られ方も参加者の体験の違いが反映されることによって、多様なものとなっていた。そのため、親たちの会のナラティブは、共通性や類似性が認められるものの、同時に、多様かつ流動的な性質も持っていると考えられる。

また、このようなグループのナラティブを醸成する上で重要な役割を果たしていると思われるのは、長い期間、継続してグループに参加しているメンバーである。こうしたメンバーは、司会を務めて語り方の例を提示したり、言葉かけやコメントを積極的に行ったりしている。また、自分の体験を語ることを通じて、子どもの「非行」と向き合う中で獲得したナラティブをグループに提供する。このような個人の体験に根ざした語りやグループの中で複数回投げかけられたり、他の参加者たちの言語的・非言語的な賛同に支えられたりすることで、グループのナラティブとして定着していくと考えられる。〈抜粋 5-11〉では、親の語りを副代表が引用した例を提示したが、このように、ある参加者の語りや、他の参加者によって取り入れられたり、形を変えて繰り返されたりすることによって、グループのナラティブは蓄積されていく。また、例えば、同じ「子どもも苦しんでいる」というナラティブに対しても、個別の体験の違いによって、そのナラティブの理解のされ方や、語られ方は変わってくる。多くの参加者が自分の体験を様々なグループのナラティブと結び付けながら語ることによって、グループのナラティブは多様でバリエーションの豊かなものになっていくと考えられる。

#### 5-4-2 オルタナティブな語りの構築

次に、社会的なディスコースや、コミュニティ・ナラティブとの関係で、参加者がどのようにして、オルタナティブな語りを構築していくのかという点を検討する。

「非行」の子どもを持つ親に対しては、親を批判する社会的なディスコースが存在し、親たちは、そうしたディスコースとの関係では、「子どもを『非行』に走らせてしまい、それを止めることができないダメな親」というポジションに位置づけられがちである。そうしたポジションを抜け出す上で役立っていると考えられるのが、グループのコミュニティ・ナラティブであった。グループのナラティブには様々なものがあるが、親の頑張りを肯定したり、具体的な子どもへの関わり方のアイデアや、子どもを理解する視点を提供したりする。こうしたグループのナラティブとの関係では、親たちは、より主体的に子どもと向き合っている存在としてポジショニングされる。これは親に責任がなくなるということの意味しているわけではない。グループのナラティブは、子どもと関わり、子どもを理解していくことや、自分の関わり方を見直していくことを促すこともある。しかし、親たちは、社会的ディスコースとの関係では、子どもが「非行」をしているという結果のみによって、「ダメな親」というポジションが規定されてしまうのに対し、グループの多様なナラティブとの関係では、「頑張っている親」や「子どもに新しい関わり方を試みている親」など、オルタナティブな自己のポジションを構築していくことができる。ここで、グループのナラティブは、親たちのポジショニングの幅を拡げる働きをしていると考えられる。

もう一つ、オルタナティブなストーリーを構築していく上で重要だと考えられるのが、過去の自分と現在の自分を差異化するポジショニングである。これは、Bamberg らが唱えたアイデンティティ・ワークにおける3つのジレンマのうち一貫性 (constancy) と変化 (change) の次に該当する (Bamberg et al., 2011)。Bamberg らによれば、アイデンティティを構築していく際に、変化が全くなければ退屈なものになるが、急激な変化は混乱や予測の不可能さをもたらすため、一貫性と変化の間でバランスをとることが求められる。過去の自分と現在の自分を差異化するポジショニングでは、どちらかというに変化の側面が強調されている。そこでは、過去の自分は、社会的ディスコースに沿っていたものとして位置づけられる。一方、現在の自分は過去の自分とは差異化され、過去の自分やその背景にある社会的ディスコースから距離をとり、それを冷静に眺められるポジションを獲得する。このように自分自身を時間軸上で比較し、位置づける作業において、人は過去の自分とも現在の自分とも違う、自分自身を外から捉える第三の自分を見出していると考えられる。この視点からは、〈抜粋 5-17〉のように、社会的ディスコースに沿った考え方と、グループのナラティブの考え方の違いを外から捉え、その両方の視点を含んだオルタナティブなストーリーやアイデンティティを構築していくことが可能になる。

また、グループに長く来ている参加者にとって、こうしたポジショニングには別の意義もあると考えられる。それは、現在の自分と差異化された過去の自分を提示することによって、グループに参加し始めた参加者に対して、彼らとの共通性や連続性を示すことができる点である。「私たちが今は笑っているけど来たときはぼろぼろだったから」という声かけは、その典型的な例であると思われる。

### 5-4-3 SHG におけるナラティブ実践へのポジショニング分析の適用

本章では、SHG において語りが構築される実践について、ポジショニング分析を適用するということを試みた。SHG に対するナラティブ・アプローチでは、グループに存在するコミュニティ・ナラティブの特徴を明らかにするという方向性をもつ研究が多い (Davis & Jansen, 1998; Humphreys, 2000 など)。こうしたアプローチは、SHG の特徴や機能を捉える上で有意義であるが、参加者が実際にコミュニティ・ナラティブをどのように取り込み、活用しているかという点については十分検討ができない。ポジショニング分析を適用することによって、さらに進んで、参加者がグループのナラティブを活用し、オルタナティブな自分を構築している具体的なやり方を明らかにすることができる。

本章では、グループのナラティブが、社会的ディスコースとの対比の中で新たなポジショニングの可能性を提供することや、参加者は、過去の自分と現在の自分の差異化を用い、それを対象化する第三のポジションを見出しながら、自分自身のアイデンティティを再構築していることが明らかになった。このようなポジショニングのバリエーションは、他の SHG のナラティブ実践においても観察できると思われる。例えば、Humphreys (2000) の研究では、AA に特徴的である「The Drunk-A-log」というストーリーのタイプは、「過去私達はどのようであったか、そして何が起き、今私達はどのようであるか」を説明するものとされている。このストーリーでは、過去の自分と現在の自分との対照的なポジショニングが使われているだろう。しかし、他方で AA や断酒会では、アルコールックとしての継続したアイデンティティが強調される。その意味では、むしろ過去の自分と現在の自分が接近し、連続したものとしてポジショニングされる可能性も考えられる。ここでは、一貫性と変化のジレンマがより顕著な形で現れる。このように、ポジショニング分析は、そのグループに特有のアイデンティティ構築の仕方を、ポジショニングの違いを通して明らかにすることができる。このような分析の視点は、SHG の多様性やその機能を検討する上でも有用であると考えられる。

### 5-4-4 本研究の意義と課題

本研究では、親たちの会の持つコミュニティ・ナラティブの特徴やそれがどのように醸成されているかを明らかにし、また、それがオルタナティブな語りの構築にどのように影響しているのかを検討した。

本研究で明らかにした親たちの会のナラティブについては、幾つか注意しなければいけない点がある。まず、伊藤 (2013) は、観察者の社会的・政治的立場や考え方が、どのような共同体の物語を名指すかということ自体に反映することがあると述べているが、本研究で取り上げたコミュニティ・ナラティブにも、研究者である筆者の視点が反映していることが考えられる。本研究では、「会でよく言われること」や「会で学んだこと」として語られた部分や、親たちの会以外の場所や人間関係と対比的に語られた部分に注目した。そして、親を批判する社会的なディスコースとの差異が明確で、グループの中で共通性や類似性が認められた、子どもとの関わり方・

向き合い方、子ども理解の仕方、会に参加する意味という 3 つの側面について、会のナラティブとして取り上げた。本研究で取り上げた社会的なディスコースと、コミュニティ・ナラティブの対照的な関係は、比較的多くの参加者の語りに当てはまると思われるが、人によっては、そもそも親を批判するディスコースを支配的に感じない場合もあるかもしれない。

また、親たちの会の語りの中には、参加者間の語りの違いが大きいため、語りの類似性や共通性を見出しにくかったり、社会的なディスコースとの差異がはっきりしなかったりするテーマも存在する。例えば、例会の語りの中では、学校や先生が登場することがある。こうしたテーマについては、学校や先生の対応によって、非常に嫌な思いをしたり、子どもの荒れが激化する要因となったりしたというネガティブな形で語られることがある一方で、学校の先生の対応のおかげで高校を卒業できたなど、ポジティブな形で語られることもあった。また、配偶者など他の家族のことが話題に上がることもあるが、夫婦関係や家族に関する話題の語られ方も多様であり、グループの中での語りの類似性が共通性を捉えにくく、社会的なディスコースとの差異も明確ではなかった。本研究で行ったように、社会的なディスコースと、親たちの会のナラティブの違いを明らかにすることは、親たちの会の持つ援助特性を考える上で重要であるが、全ての語りが、社会的なディスコースと、会のナラティブという対照的な軸で捉えられるわけではないことにも注意しておく必要がある。

さらに、親たちの会のナラティブは、会の発足後、少しずつ構築されてきたと考えられる。しかし、筆者が会に参加するようになったのは、会が発足してから 10 年以上が経った後であり、本研究では時系列的な変化という観点からは分析を行わなかったため、コミュニティ・ナラティブの時代的な変遷については検討できなかった。コミュニティ・ナラティブが構築される過程では、特定の参加者のインパクトのある語りが他の参加者にも受け入れられ、それがコミュニティ・ナラティブとして定着していく場合もあると思われる。例えば、本研究でも取り上げた「会は親たちの居場所」というナラティブに関連して、会が出版した本では、ある参加者が、「娘にも居場所が必要で、コギャルの仲間が今は彼女の居場所なんです。それをやめさせることはできない。だったら私も居場所がほしい。私の居場所は、この会、この例会です」と、突然の『居場所宣言』をしたというエピソードが書かれている（能重・浅川・春野, 2004, p76）。当時は、この宣言は多少驚きを持って受けとめられたようだが、現在は、多くの参加者が、会は自分の居場所であると語っている。今回は、このように特定の語りが、コミュニティ・ナラティブとして定着するというような変遷は捉えられなかったが、こうしたコミュニティ・ナラティブの変遷について検討していくことも今後の課題である。

加えて、オルタナティブな語りの構築という点では、SHG の参加者は、必ずしも常にグループのナラティブに親和的な語りを行うとは限らず、グループのナラティブに疑問を抱き、そこから距離をとるような語りも存在する可能性がある。本研究では検討できなかったが、ポジショニング分析では、そうした個人差も含めて、SHG 内部の多様性を描き出すことも可能であると考えられる。今後の課題として、語りの構築におけるポジショニングのあり方について、個人差や

バリエーションに注目して検討していくことが挙げられる。



## 第 6 章（研究 4）

### やりとりの中での語りの構築

#### ——笑いの共有に焦点を当てて——

第 6 章では、語り手と聞き手とのやりとりの中で、語りがどのように構築されているのかを見ていく。特に、語り手と聞き手とのやりとりの中で現れる笑いという現象に注目し、笑いが生じるプロセスを明らかにすると共に、笑いを共有するというやりとりが、親たちの会における語りの構築にどのように影響しているのか検討する。

#### 第 1 節 目的

---

##### 6-1-1 親たちの会における笑い

親たちの会の例会では、基本的な約束事として、討論やアドバイスは行わず、参加者一人ひとりが他の参加者の話を聞いて学び合うということがある。そのため、ある参加者の話について、別の参加者が意見やアドバイスを行うといった形でのやりとりは基本的に見られない。しかし、第 5 章で見たように、語り手とともに聞き手が涙を流したり、笑いを共有したり、あるいは、他の参加者から同意や共感、ねぎらいなどの言葉がかけられるといったやりとりはしばしば生じることがある。本章では、このような参加者間のやりとりの中でも、特に笑いという現象に焦点を当てる。

例会では、深刻な内容の語りが多く、語り手が泣きながら話をし、聞き手も一緒に涙を流すことも多い。しかし、他方で、参加者の間で笑いが生じ、場の空気が和らぐ瞬間も多く見られた。筆者が、例会に参加して驚いたこととして、子どもの「非行」という深刻な問題に向き合っているにも関わらず、会の雰囲気明るいがあつたが、このように感じられた理由の一つに笑いがあると思われる。また、筆者が親たちの会の参加者に行ったインタビューの際にも、笑いが生じる場面が多くあつた。非行少年を抱える家族、特に親は、少年の犯罪や問題行動に振り回される上、周囲からも非難を受けるなど疲弊、苦衷が甚だしい（生島，2002）。日常生活では笑う余裕がなく、また世間体や他者の視線を意識して笑うことが難しい場合も多い。一方で、参加者が「外では笑えないが会では笑える」「笑うことで救われる」などと話すこともあり、例会で生じる笑いには、会に参加している親たちにとって重要な意味があるのではないかと思われた。

また、笑いは、語りを構築していくプロセスにも関連していると考えられる。第 4 章では、参加者の語りが増変していくプロセスと関連して、＜「非行」に巻き込まれる語り＞＜「非行」を捉え直す語り＞＜「非行」を受けとめる語り＞という 3 つの語りの型を提示したが、＜「非行」を捉え直す語り＞や＜「非行」を受けとめる語り＞には、語りにユーモラスな表現や笑いが

含まれる場合があるという、＜「非行」に巻き込まれる語り＞には見られない特徴があった。

本章では、笑いがどのように生成され、どのような意味を持つのかという点を明らかにし、それが親たちの会における語りの構築にどのように関与しているのかという点を検討することを目的とする。笑いを共有するというやりとりは、親たちの会における特徴的な実践として考えられ、笑いの意味や機能を検討することは、親たちの会という SHG が持つ特徴や機能を明らかにすることにもつながると考えられる。

### 6-1-2 笑いの捉え方

笑いという現象は身近なものであり、学問的にも様々なアプローチがある。Glenn (2003) は、①笑いを言語的・視覚的なものとして捉える身体的アプローチ、②笑いを外的な刺激と心的なメカニズムによって生じるものとして捉え、両領域における変数を明らかにしようとする心理学的アプローチ、③笑いを対人間で生じるものと捉え、影響する要素を同定しようとする社会的アプローチの3つに整理している。こうしたアプローチではいずれも、笑いを受動的に生成された従属的な変数として扱う傾向がある。これに対して、人々は、特定の目的を成し遂げるために、やり取りの中で、主体的に笑いを作り出すという見方も可能である。このアプローチでは、笑いは、コミュニケーションという社会的な相互行為として捉えられ、私たちはどのように笑いを作り出し、笑いは私たちに何をもたらすのかに関心が向けられる。

本稿では、このアプローチを採用し、笑いを社会的な相互行為の実践として捉える。というのは、親たちの会における笑いは、語り手と聞き手の双方に見られ、やり取りの中で生成され、笑いが生じることによって、何らかの効果が達成されていると考えられるからである。

### 6-1-3 笑いに影響している文脈

笑いを社会的な相互行為の実践として捉える際、笑いに影響を与えている文脈には、様々なものが考えられる。笑いが生じる際の語りの内容、語り手と聞き手とのやりとり、語り手・聞き手の状態や関係性、語りの場の雰囲気、そして、社会的なディスコースといった多様な要素が笑いの生成に影響する可能性がある(図 6-1)。先行研究では、これらのいずれかの側面と笑いとの関係性が検討されている。

笑いを社会的相互行為として捉えるアプローチでは、主に会話分析の手法が用いられ、やり取りの中で笑いが生成されるプロセスが検討されてきた (Glenn,2003; Jefferson,1979; 桐田・遠藤,2003 など)。会話分析では、音声データを文字化したトランスクリプトが作成される。ここでは、笑いの有無だけでなく、笑いが生じた場所、長さ、音の特徴、他の発話との関連などを可視化できる。ただし、トランスクリプトを作るためには録音した音声データが必要で、使用範囲は限られる。また、会話分析を用いた研究では、主に笑いが生じるプロセスや、やり取りのルールへ関心があり、笑いが語りや語り手・聞き手にどのような影響を及ぼすかという点は検討されないことが多い。

一方で、語りの内容や話者との関係で笑いの効果や機能を検討している研究として、心理面接

における笑いの効果の検討を行ったものがある(吉良,1994; 椎野,2008 など)。例えば吉良(1994)は、3例の自責的なクライアントとの面接過程を示し、笑いが臨床的意義をもつことを論じている。こうした研究では、語りの内容と照らし合わせ、笑いの対象を明らかにして、笑いが個人に及ぼす効果を検討している。ただし、笑いがやり取りの中で生成される側面は検討されておらず、笑いの効果についても、臨床家や研究者から見た効果が論じられているが、クライアントの体験をデータから直接検討したものではない。

また、社会的なディスコースと笑いやユーモアとの関係に焦点を当てているものとして、伊藤(2010)、荒井(2013)、Ayashiro(2015)などがある。伊藤(2010)は、パーキンソン病のSHGにおけるナラティブの一つとして「病いを笑う語り」を提示している。この語りは、パーキンソン病の症状である手の振るえを題材に、否定的にとらえられがちな経験を滑稽に描くものであるが、同時に症状を否定的にしか捉えられない常識的な見方や世界観を相対化するものと捉えられている。ここでは、SHGにおける笑いが、社会で支配的な見方や言説を揺るがすものとして機能している可能性が示唆されている。また、荒井(2013)も、認知症家族会におけるユーモアの活用について検討し、ユーモアが、社会的なディスコースの下では語りにくい話題を語りやすくすることに貢献していると考えられている。さらに、Ayashiro(2015)は、息子が引きこもり状態にある母親との臨床面接場面を取り上げ、自嘲的なユーモアの使用が、支配的なディスコースを脱構築することを示している。

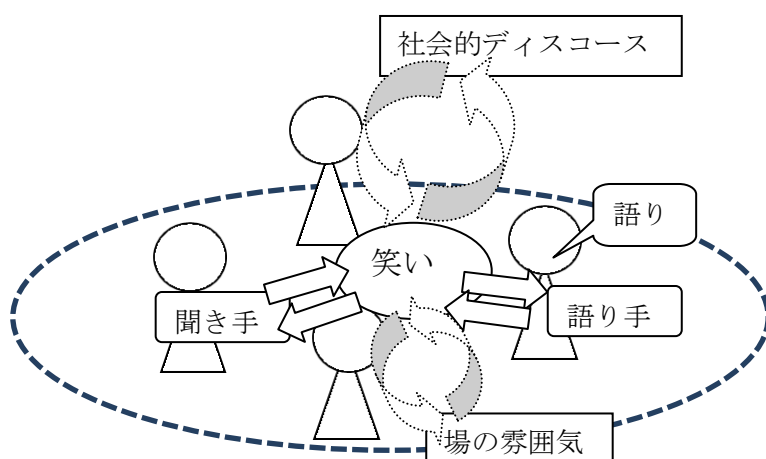


図 6-1 笑いに影響する文脈

#### 6-1-4 本研究のアプローチ

本章では、子どもの「非行」と向き合う親たちの語りの場面で、笑いがどのように生じ、語りや会話の参加者に対してどのような機能をはたしているかを検討する。その際、先行研究を参考にして、やり取りの中で笑いが生じるプロセス、語りの内容と笑いとの関連、参加者にとっての笑いの体験、さらに社会的なディスコースとの関係といった複数の側面から笑いの持つ機能を検

討する。

Maynard (1989) は、制度的状況についての研究を、①伝統的な参与観察やインタビューを用いるエスノグラフィックなもの、②制度的状況に生起するディスコースの研究、③両者を結びつけるもの、という三つに分けた上で、③のアプローチ、すなわち、会話分析的研究をエスノグラフィーに結びつけることを主張している。また、好井 (1999) も、制度的状況の会話分析においては、会話に焦点を当てながらも、会話の〈外部〉を構成するエスノグラフィックな諸要素や、人々の生活を構成する「歴史性」をどのように分析実践の中に取り込むのかが、分析者にとって重要な問題になると指摘している。本章では、エスノグラフィーのアプローチと会話分析の手法を組み合わせ、やりとりの中で笑いが生成されるプロセスに注目すると同時に、語り手・聞き手、場の状況、社会的なディスコースといった会話の外部にある文脈にも焦点を当てる。

## 第 2 節 方法

### 6-2-1 データの収集

本研究におけるデータの収集方法は、第 2 部第 4 章と同じであり、参与観察および参加者に対するインタビューによって収集した。

### 6-2-2 データの分析

フィールドワークによる観察データとインタビューデータについて、まず、笑いが生じていた場面の語りを抽出した。それぞれの場面について、「どのようなエピソードについての語りで笑いが生じているのか」という観点から検討し、解釈的なメモを付けながら整理した(表 6-1 参照)。その後、多くのエピソードに共通しているパターンを探索し、親たちの会に特徴的と考えられる笑いのパターンを同定していった。

その上で、インタビュアーとインタビュー어의やりとりの詳細を検討するため、インタビュー中に笑いが生じていた場面の一部については、会話分析の手法でトランスクリプトを作成し、その前後におけるインタビュアーとインタビュー어의やりとりの詳細を分析した。また、インタビューの中で、参加者が笑いに関して言及している部分を抽出して、笑いが生じる際の参加者の体験についても検討を行った。なお、インタビューのトランスクリプトは、第 5 章と同様、鈴木 (2007) を参考にして作成した (前掲表 5-4 参照)。また抜粋の中では、インタビューについては大文字の A~E で、フィールドノートの中の登場人物については、小文字の a~e で表した。

表 6-1 解釈的なメモの例

| 語りデータ  | メモ                   |
|--|----------------------|
| 友だちが学校で遊べないときは布団に入って寝ている。昼夜逆転。「ナマケモノ」という動物園の檻に入れておきたいくらい | 例会場面<br>子どもの怠惰な様子を比喻 |

|  |  |
|--|--|
| （「ナマケモノ」のところで笑いが起きる）。  | を用いて表現   |
| B：そうですね、ちょうど、えっと息子が荒れ始めたっていうか、次男坊が、荒れ始めたのが、なんていうのかな、学校で、ここの学校に出すのが心配っていうか、そういうことが中学1年の後半ぐらいから始まって、中学2年、3年ってずっと引き続いていくんですけども、その中学3年の秋に、そこに辿り着くまでに、あのやっぱり息子の、あの万引きだとか、お友達とけんかをするとか、物を壊すとか、学校を抜け出すだとか、朝、学校は絶対行くんですけど（あっはい）、休まない、皆勤賞もので（笑）（はい笑）、学校は行くんだけど、朝きちんといかない。 | インタビュー場面<br>子どもが荒れ始めたときの様子<br>学校を休まないことを「皆勤賞」という非行と一見合わない言葉で表現 |

### 第3節 結果と考察

本節では、まず、笑いが生じる際の語りの文脈や、笑いが生成されるプロセスについて、例会場面、インタビュー場面の順に整理する。次に、笑いが生じることによって、語りにどのような影響があるのかを検討する。最後に、参加者の笑いに関する体験について整理し、参加者が笑いの生成にどのように関与し、どのような影響を受けているかを検討する

#### 6-3-1 笑いが生じる語りの文脈とプロセス

##### （1）例会場面での笑い

例会では、ある程度会への参加期間が長い参加者が話をしているときに、現在や過去の子どもの様子や、自分の行動について、ややユーモラスな表現や語り方をして、笑いが生じるということがしばしば見られた。

##### 〈抜粋 6-1〉 例会にて（フィールドノート X 年 8 月）

友だちが学校で遊ばないときは布団に入って寝ている。昼夜逆転。「ナマケモノ」という動物園の檻に入れておきたいくらい（「ナマケモノ」のところで笑いが起きる）。

##### 〈抜粋 6-2〉 例会にて（フィールドノート X 年 8 月）

息子は中学のときはタバコを一本くわえて、一本耳にさして、近所中に挨拶して学校へ行っていた（語り手も笑いながら話し、聞き手から笑いが起きる）。

##### 〈抜粋 6-3〉 例会にて（フィールドノート X 年 7 月）

（料金の支払いをしておいてくれという子どもに）「計画的に言ったよねー、自分でパチン

コに使っちゃったんだよね」ということを荒れるだろうなと思いながら言ったら、やっぱり荒れた。それで、5分後に（笑いが起こり、語り手も笑う）親権者として聞いてみてあげると言って電話をしたら（…）

〈抜粋 6-1〉では、現在の子どもの怠惰な様子が、「ナマケモノ」という動物のメタファーを使って語られ、笑いが生じていた。〈抜粋 6-2〉は、過去の子どもの様子を語っている場面だが、タバコをくわえるという行動と、近所の人に挨拶するという行動のちぐはぐな感じが「近所中に」と強調して語られ、笑いが生じていた。木村（1983）は、笑いの中には、自明とされる思考様式や世界観にズレを仕込んで、世界を笑いのうちに「脱物象化」しようとする根源的な仕掛けが存在すると言う。また、Bateson（1972/2000）は、ユーモアは、異なった論理レベルや、異なったコミュニケーション・モードをひとつに圧縮したメッセージを用いることで生じるとする。〈抜粋 6-1〉では、子どもが、動物園の「ナマケモノ」という異なった世界に属するものに喩えられ、〈抜粋 6-2〉では、子どもの「非行」と、挨拶という礼儀正しい行動が結びつけられることで、そのズレから可笑しさが生じていると考えられ、多くの人が笑いを理解できると思われる。

他方、〈抜粋 6-3〉では、〈抜粋 6-1〉や〈抜粋 6-2〉に比べるとズレがそれほど明確ではない。ここでは、語り手が、自分自身の対応について、一貫せず、「5分後に」対応を変えてしまったことを語ったときに笑いが起きていた。荒れている時の子どもへの対応は難しく、揺れてしまう語り手の気持ちが伝わり、聞き手も「自分と同じ」「わかる」と感じる中で笑いが生じたのではないと思われる。

ここまで見てきた場面では、語り手も笑いながら話をしており、ある程度笑いが生じる可能性を予期したり、自覚したりしながら語っていると思われる。一方、語り手が笑いの発生を予期していないのに、笑いが生じたと考えられた場面もあった。

#### 〈抜粋 6-4〉 例会にて（フィールドノーツ X年7ヵ月）

初参加者の発言。「外出する気が出なくて、今日もやっと出てきた。来る途中の電車の中で、母親同士が子どものことで悩んでいるような話をしていた。『受験がどうだこうだ』という話で、『なんでそんなことで悩んでいるのよ。こっちがどこに行くのか知ってるの』（ここでどっと笑いが起き、語り手もつられて笑う）と思いながら来ました」。話の最後に語り手が「笑うつもりじゃなかったんですけど（笑）」と言い、聞き手から、「わかる」「同じよ」「私たちも今笑っているけどぼろぼろになってきていたから」といった声かけがなされた。

例会に初めて参加する人や、参加回数が少ない人は、つらさを吐き出すような語りが多く、笑うことも比較的少ないが、この抜粋は、笑いが生じたやや珍しい場面である。〈抜粋 6-4〉の語り手は、自分が笑うつもりも、また聞き手を笑わせる意図もなかったと思われるが、聞き手がどっと笑ったところで、つられて笑ってしまったようである。この場面のように、例会では、聞き手が笑うことで語り手もつられて笑い、結果として笑いが生じることもある。

また、語り手と聞き手という立場が明確ではないが、他の人の話で笑いが起きる中でつられて笑い、自分も笑いながら話すようになるといった相互作用の中で笑いが生じる場合もあった。次の抜粋は、例会で、参加者全員の話が一通り終わり、話したい人が適宜発言する形で語り合いが行われていた場面である。

〈抜粋 6-5〉 例会にて (フィールドノーツ X+3 年 4 か月)

a さん「うちの息子も、安く車を買ったらバックができなくて、廃車にするのが大変だったみたい」(バックができないというところで、他の参加者が「えー」「危ない」などと言ってどっと笑う。その後 b さんが発言)  
b さん「うちでは深刻な話もここだと笑い話になる (笑いながら)」  
a さん「過去の話だとね。振り返ってみると笑える (笑いながら)」

b さんは、会に来始めて年月が経っていない参加者で、自分の番で話をしたときは、子どもがバイクの売買でトラブルになりそうだとすることを心配そうに語っていたが、〈抜粋 6-5〉で a さんの話で参加者たちが笑った後に、自分も笑いながら「うちでは深刻な話もここだと笑い話になる」と話していた。

(2) インタビュー場面における笑い

語り手が子どもの様子や自分の対応を語っているときにユーモラスな表現や語り方をして、笑いが生じることは、インタビューの中でも頻繁に見られた。

〈抜粋 6-6〉 B さんインタビュー (1 回目)

1 B: そこに辿り着くまでに  
2 IR: はい  
3 B: あのやっぱり息子のあの万引きだとか、  
4 IR: はい  
5 B: あの(1.7)友達とけんかをする[とか]物を壊す[とか],学校を  
6 IR: [はい] [はい]  
7 B: =抜け出すだとか(.)朝(.)学校は絶対行くんです  
8 =[けど(.)休ま(h)な(h)い  
9 IR: [ああはい(.)行くんで(h)す(h)ね  
10 B: 皆勤賞もので[.]フフフ学校は行くんだけれども  
11 IR: [は(h)いフフフ

〈抜粋 6-7〉 C さんインタビュー (1 回目)

1 C: 夜中とかも私息子を>探し回って街中走り回って(.)たむろしてる

|    |                                       |
|----|---------------------------------------|
| 2  | =公園に[行って<へへ [こうやって(h)もうすっごい[大勢        |
| 3  | IR: [フフ [フフ [フ                        |
| 4  | C: =たむろしている中に行って息子に(.)>いい加減にしなさいよ<    |
| 5  | =とか言って今考えると怖ろしいこと                     |
| 6  | =して[たんですけどハハハハハ                       |
| 7  | IR: [フフフフフフフ                          |
| 8  | C: (.)こともあった[し:                       |
| 9  | IR: [はい                               |
| 10 | C: =路上であの宴会やっているところとかくね               |
| 11 | 執念で探しちゃうんですよ[私(.)夜中じゅう(h)             |
| 12 | IR: [はいフフ                             |
| 13 | C: =は[h]し[h]り[h]まわってフフフ(.)相当うざかったと(h) |
| 14 | IR: [すごいハハ                            |
| 15 | C: =おもいますけど                           |

〈抜粋 6-6〉では過去の子どもの様子が、〈抜粋 6-7〉では子どもへの自分の対応が語られている場面で笑いが生じているが、語りの中で笑いが生じる箇所は、例会の場面と似ている。〈抜粋 6-6〉では、10行目の「皆勤賞もので」という発言後に笑いが生じているが、7～8行目の「学校は絶対行くんですけど休まない」という発話の中に、呼気音が含まれ、語り手は笑い始めている。インタビュアーは9行目で「ああはい、行くんですね」とAさんの発言を確認するが、その発話にも呼気音が含まれ、聞き手も笑い始めている。その後に「皆勤賞もので」という、「非行」とは一見合わないようなユニークな表現があり、両者が声をあげて笑う。

〈抜粋 6-7〉では、6行目や13行目のBさんの発言の箇所で笑いが生じている。ここでは、2行目のBさんの発言の途中でインタビュアーが先に「フフ」と笑い、Bさんも「へへ」と笑っている。これは、「探しまわって街中走りまわってたむろしている公園に行つて」という発話が、スピード感があり、笑いを誘うような語り方だったことが影響していると思われる。どちらの抜粋でも、一連の流れの中で、聞き手も相槌をうったり、語り手の笑いに応じて一緒に笑ったりと笑いの生成に関与している。

ジェファーソン (Jefferson, 1979) は、笑いが共有される場合の多くは、会話者の一人が、笑いの誘いを行い、他の会話者が受け入れることで生じると言う。〈抜粋 6-6〉や〈抜粋 6-7〉では、語り手のユーモラスな表現や語り方、そして語り手自身の笑いが「笑いの誘い」となり、聞き手のインタビュアーがそれを受け入れて笑いが生じていると見られ、ジェファーソンの特徴づけたパターンに沿って笑いが共有されていると考えられる。このパターンは、例会での〈抜粋 6-1〉から〈抜粋 6-3〉における笑いにも共通すると思われる。

ただし、インタビュー場面では、「笑いの誘い」となるような手がかりがない場合に、聞き手が先に笑い、つられて語り手が笑うような場面は見られなかった。また、インタビューは1対1



で行われたため、〈抜粋 6-5〉のように参加者間のやり取りで笑いが生じる場面も見られなかった。こうした違いは、例会とインタビューにおける聞き手の立場や会話の構造の違いに由来すると思われる。

### 6-3-2 笑いが生じることによる語りへの影響

次に笑いが生じることで語りにどのような影響があるのか検討する。子どもの様子や自分の対応を語る中で笑いが生じた場合と笑いが生じない場合では、語りの流れや雰囲気が変わってくる。C さんに対する同じインタビューの中で、〈抜粋 6-7〉と似た内容だが、笑いが生じなかった場면을提示し、両者を比較しながら違いを検討する。

#### 〈抜粋 6-8〉 C さんインタビュー (1 回目)

- |    |  |
|----|--|
| 1  | C : コンビニにタバコ吸いにいってるんだっていうのがわかって                      |
| 2  | コンビニに夜中ふらっていくときについて                                  |
| 3  | そこで現場を取り押さえて阻止したこともあるし                               |
| 4  | IR : はい  |
| 5  | C : (1.0)そう(.)でもなんか何をどうやっても                          |
| 6  | IR : はい  |
| 7  | C : とにかく(.)ず:っと四六時中見張っているわけには                        |
| 8  | : いかない[ので(1.0)どうにも(.)ごめんなさい((涙を拭く))                  |
| 9  | IR :       [はい                                       |
| 10 | C : どうにもならないし:そこですごい険悪になって                           |
| 11 | IR : はい  |
| 12 | C : もう <u>うざい</u> (.) <u>死ね</u> がどんどんふくらんでくるばかりなわけです |

〈抜粋 6-8〉でも、〈抜粋 6-7〉と同様に息子を追いかけていた自分の行動が語られているが、語りのトーンがかなり異なっている。〈抜粋 6-7〉では、間が少なくテンポ良く語りが続いたのに対し、〈抜粋 6-8〉では、語りの途中に短い間が入り、「四六時中見張っているわけにはいかないの」というところで、C さんは、声を詰まらせ涙を拭かれている。ここでは、語り手のつらさや苦しさが語り口から直接伝わってくる。インタビュアーも、〈抜粋 6-6〉や〈抜粋 6-7〉では時々内容を確認する言葉を挟むことがあったが、〈抜粋 6-8〉では「はい」という相槌のみで語りを聞いている。例会でも、〈抜粋 6-8〉のような語り口は多く見られ、語り手が自分のつらさを吐き出すことができるという意味で非常に重要だと思われる。ただ、こうした語りでは、状況が深刻に語られたり、子どもや自分を責めるような方向へ語りが進んだり、語りの流れが悲観的な方向へ進む場合も多い。他方で〈抜粋 6-7〉では、同じような内容が語られているが、笑いが入り、語りが悲観的な方向へ進んではない。

ただし、笑いと言りの関係は、笑いが語りの方向性に影響を与えるという一方向的なものでは

ない。逆に語りの流れや文脈が、笑いの生成に影響する面もあると思われる。〈抜粋 6-7〉と〈抜粋 6-8〉の前後の話題を見てみると、〈抜粋 6-7〉は、自分が息子を更生させようと頑張るパワフルな親だったことを話している中で語られ、〈抜粋 6-8〉は、タバコの話をしていたときに関連して語られていた。〈抜粋 6-7〉では、「パワフルな親」だったことを提示するという文脈があったから、自分の行為を強調するような語り方になり、結果として笑いが生じたと解釈することも可能である。このように笑いは、実際には語りの文脈と相互作用しながら、語りの方向性に影響すると考えられる。

こうした語りへの影響は、他の笑いが生じる場面にも共通すると思われる。もう一つ、参加者間でのやり取りの中で笑いが生じた場面の例として、例会後に、希望者が食事をしながら会話をしていたときのエピソードを挙げる。

#### 〈抜粋 6-9〉 例会後の食事会（フィールドノーツ X 年 5 か月）

c さんが、娘の小学校時代のエピソードを話し、「目立ちたい子だったのね。そのときに気づいていればね」と言うと、d さんや e さんが、「でも c さんがそのとき気づいていてもどうしようもないよ」と笑いながら指摘し、「そうなのよね」と c さんも笑いながら答えた。その後 d さんが、「あのときああしていればと思うことはたくさんあるけれど、二番目の選択肢を選んだことはない。そのとき一番だと思ったことをやってきた」ということを言われた。

ここで、c さんの「そのときに気づいていればね」という発言は、小さいときに子どもの性格に気づいていれば、「非行」を止められたかもしれないという意味と思われ、例えば「もっと早く気づいていれば良かった…」と、後悔や自分を責める方向へ語りが進む可能性も含んでいる。しかし、ここで聞き手だった d さんや e さんの「気づいていてもどうしようもないよ」という笑いを伴った発言が入る。これは、c さんがたとえ子どもの性格に早めに気づき、「非行」に走らないように頑張ったとしても、止められないときは止められないよという趣旨ではないかと思われる。c さんも笑って同意し、語りの流れも、「～していれば」という後悔や自責の方向へは進まなくなる。さらにその後、d さんの、そのとき一番だと思ったことをやってきたという発言で、逆に自分の過去の行動を認める方向へ語りを展開している。c さんの発言や、d さんの「ああしていればと思うことはたくさんある」という発言から分かるように、参加者の多くは、子どもとの関わりを振り返り、自分を責めることも何度も体験していると思われる。しかし、ここでは、聞き手の発言と笑いが入るなかで、語りが、これまでの対応を認める方向へ進んでいる。ここでも、笑いは、語りが自責的・悲観的な方向へ進むことを緩和し、過去や現在の語り手自身を肯定する方向で影響を与えていると考えられる。

#### 6-3-3 参加者にとっての笑い

次に、参加者の笑いに関する体験について整理し、参加者が笑いの生成にどのように関与し、どのような影響を受けているかを検討する。

**笑いへの習熟** 笑いが生じるプロセスでは、聞き手も笑いの生成に関与するが、常に聞き手の全員が笑いに加わるわけではない。では聞き手はどのようなときに笑うのだろうか。参加者が、笑いが生じるときに重要だと認識しているのは、共感や「わかる」という感覚である。

〈抜粋 6-10〉 Cさんインタビュー（2回目）

C：でも、共感できているときですよ。笑える、笑うときって。「えーありえない」とか、例えばですけど、そんな風に思ったことないですけど、共感してないときは笑いませんよね。「え、わかる、わかる」って、「それってわかる」って思ったときに、笑いますよね、自分もそうだけど。だから自分の話を人が笑ってくれるときってけっこう、共感してくれてるからかなって思えるのかな。笑われて嫌な気持ちになったことないですよ。

ここでCさんは、語り手の話が「わかる」とき、「共感できている」ときに笑うと言っており、他のインタビューにもこうした感覚は共通していた。つまり、聞き手が笑うのは、子どもや親の行動が単純に面白いからではなく、行動や気持ちが理解できる感覚があるからだと考えられる。この感覚は、子どもの「非行」で悩んでいる親同士という立場の共通性ゆえに生じるという面もあるが、それだけではなく参加者たちは、会に参加する中で、「わかる」という感覚を理解し、笑うこと自体に習熟していくのではないかと思われる。例えばDさんは、最初に例会に参加したときは、「笑っていること自体がおかしいよ」と笑いに違和感をもったが、次第に共感する部分やわかる部分が増え、笑うことが増えてきたと言う。笑いに対する認識も次のように変わったと言う。

〈抜粋 6-11〉 Dさんインタビュー（2回目）

D：「わかるよね、それ同じだよねー」っていう感じ。そこで救われたと思うんですよ、自分だけじゃないんだなって。そんな感じです。

IR：初めの頃はちょっとまあ変な感じだったのが、そうやって、わかって、同じだからわかって笑えるっていうような。

D：あと人に対する思いやりで笑っているのかなって。結局、「そうよ深刻よ」ってやられちゃったらその人そこに来てもっと深刻になって帰るでしょ。（…）だから不真面目の笑いじゃないと思います、あの会は。思いやりの笑いかな。

笑いへの習熟に関しては、Dさんのように初めは違和感を持つ人もおり、個人差もあると思われるが、例会場面の様子を見ると、Dさんに限らず、会に来始めた頃の人は笑うことが少なく、会に長く参加している人の方が、笑う回数が多い傾向が見られた。また、笑いが徐々に増えていくことは、他のインタビューにも共通して語られ、会に参加して5年になるAさんは、「最初に来た頃と比べれば、気持ちもずいぶんほぐれて」笑う頻度が増えたと話していた。

また、「わかる」「共感できる」という感覚は、似た体験をしている当事者間で強く感じられる

ものだが、立場が異なる人もある程度共有し、笑いに加わることが可能である。例会には、元教師や元家裁調査官など親以外の立場の人も参加する場合があるが、そういった人も笑いに加わっている。筆者自身も、初めは例会で笑うことは非常に少なかったが、参加を重ねるに連れて笑う機会が増えたと感じている。このように、会の参加者は、親以外の立場の参加者も含めて会への参加を重ねるなかで、会における笑いに習熟していくと考えられる。Lave & Wenger (1991/1993) は、その場の状況と結びついた学習を、実践共同体における参加のプロセスとして定式化しているが、参加者の笑いに対する習熟も、グループへ参加するプロセスと密接に結びついていると思われる。

**笑いが参加者にもたらすもの** 次に、笑いが参加者に何をもたらすのかを検討する。笑いが生じるときには、「わかる」「共感できる」という感覚がベースにあり、逆に笑いが生じることで共感が伝わるという側面もある。〈抜粋 6-10〉で C さんが言うように、自分の話に聞き手が笑うことは「共感してくれてる」印として受けとめられる。また、〈抜粋 6-6〉で D さんが「そこで救われた」と言うように、参加者は、笑いが起きたことで、自分の体験が理解され、似た体験をしている人がいることを実感でき、気持ちが楽になると思われる。

また、笑いは、参加者の状況や自分の行動の捉え方とも関連していると思われる。A さんは笑うときの気持ちについて次のように話している。

#### 〈抜粋 6-12〉 A さんインタビュー (2 回目)

A: 自分がすごくこだわっていたこととか、気にしてることがすごくちっちゃなことに思えて、滑稽に思うことありますよね。人の話を聞いてて。そういうときに笑い飛ばしてやれとか、そういう気持ちがあるんじゃないでしょうかね。

A さんが「笑い飛ばしてやれ」と言うように、笑いは、自分の行動や考え方を捉え直し、笑いの対象としてしまう。ここには、状況や自分自身に対する見方の転換が含まれている。こうした見方の転換には、時間の経過という要素が関連する場合もある。会に参加して 10 年半になる B さんは、「今思うと笑っちゃうよねっていうのもある」と話しており、当時は笑える状況になかったことも、時間が経った今の自分の視点から振り返ると、滑稽に思えて笑うことができる場合もある。見方が変わることで笑えるようになるという側面がある一方、笑いが生じることによって、状況や自分自身への捉え方が変化していくという側面もあり、ここでの笑いを見方の変化との関係も循環的であると考えられる。

**笑顔を取り戻す** 笑うという行為は、子どもの「非行」の渦中で深刻に悩んでいる親にとっては、非日常的な行為である。日常生活では、子どもの「非行」に振り回されて余裕がなく、また、周りの視線や世間体から、「笑っていてはいけない」と感じている場合もある。B さんは次のように話している。

#### 〈抜粋 6-13〉 B さんインタビュー (1 回目)

B: だから、状況はつらいけれども、ここ（会）に来ると笑える。うちだと笑えない。それに、あんなことをしている子の親が笑っているよって、思われるかなっていう。やっぱりまだ、うちにいると世間体がいっぱい。

会に来ている間だけでも笑うことは、親たちにとって苦しい現実をやり過ごす重要なツールとなっている。Cさんは、次のように言う。

〈抜粋 6-14〉 Cさんインタビュー（2回目）

C: なんだろう、なんかけっこう笑えるんですね。（…）すごく、人になんか言いたくないような嫌なことで、恥ずかしくて、こんな風に育てちゃった自分が悪いって責めて苦しくて、ようなことなんだけど、なんかこう面白い。「それって息子面白いよね」とか、「えーそんなところまで追いかけてったの。Cさん面白い」とか言って、「えーそれはうざいよね」みたいな。（…）お互いに面白がって、救われるっていうか。そういうときってすごくありましたね。ありますね、今も。けっこう笑い、笑いにしちゃうしかないみたいな（笑）

Cさんは、子どもの「非行」の話は、人に言いたくない、自分を責めて苦しくなることだが、笑いにしてしまうことで救われると言う。これは前述した笑いが自責的・悲観的な方向を緩和することとも関連していると思われる。「笑いにしちゃうしかない」という言い方には、そうせざるを得ないというニュアンスが含まれ、「笑い」は苦しい生活をやり過ごすサポートとなっていることが窺われる。また、社会で常識的な見方との関係で笑いを捉えると（例えば、伊藤, 2010）、笑うという行為自体が、「非行の子どもを持つ親は笑ってはいけない」という社会的な見方を相対化する実践になっているとも考えられる。〈抜粋 6-13〉の「ここに来ると笑える」という発言にも見られるように、親たちの会は、普段制約されている笑いを許容し、それを取り戻す場となっている。

## 第4節 まとめ

本節では、親たちの語りにおける笑いの生成プロセスの特徴について整理し、笑いを共有するやりとりが、参加者がオルタナティブな語りを構築していく過程において、どのような機能をもっているのか検討する。

### 6-4-1 笑いの生成プロセスの特徴

親たちの語りにおける笑いは、語り手と聞き手とのやりとりによって生成されており、前述したようにジェファーソン（Jefferson, 1979）の特徴づけたパターンにほぼ沿ったものと考えられる。ただし、その生成プロセスにはなお特殊性があると思われる。Glenn（2003）は、語り手がトラブルについて話しているような状況では、語り手が笑っても、聞き手は一緒に笑わず真

剣に話を聞くと。笑いには、語り手と共に笑う友好的な笑い (laughing with) と、語り手を対象にして笑う非友好的な笑い (laughing at) があり、こうした状況で聞き手が笑うことは、トラブルを真剣に扱うことを拒否し、語り手を対象にして笑う非友好的な笑いにつながる可能性があるためである。親たちの語りの内容は、子どもの「非行」の問題であり、まさにトラブルについての語りである。しかし、ここでは語り手と共に聞き手も笑いに加わる。それは、聞き手が語り手の気持ちや体験に共感しており、トラブルについての語りであっても、語り手と共に笑う (laughing with) ことができるからであると考えられる。

特に当事者の親同士の場合、聞き手は、語り手の話に自分の体験を重ね合わせ、同時に自分自身をも笑っているという見方も可能である。笑いが生成される時第一にイニシアチブを持つのは語り手であるが、例え場面で見られたように、同じ立場である聞き手がイニシアチブを持つ場合もあり、それはこの笑いの二重性と関連していると思われる。逆に筆者のような親という立場でない参加者は、笑いに加わることは可能だが、イニシアチブをとることは難しいと思われる。

#### 6-4-2 参加者の変化と笑い

次に、語りの中で生成される笑いが、参加者にとってどのような意義や機能を持っているかを検討する。吉良 (1994) は、自責的なクライアントとの面接過程を分析し、笑いの意義として、①常同的な体験様式をゆるめ、②自責的な体験から心理的距離が生じ、自発的・能動的に動き出す活力がもたらされる、③自責感なく破壊的な感情を表出する機会を提供する、④うちとけた関係性を作る、という4つを挙げている。また、椎野 (2008) は、外在化技法における笑いが、「自我と問題との距離」「客観化」「認知の転換」といった効果を促進する可能性があると言う。こうした笑いの意義は、親たちの会の参加者にも当てはまる。日常生活で笑う機会が少ない親たちにとって、会で笑うことは、日常の常道的な体験様式から離れる貴重な機会となっている。親たちの多くは、子どもの「非行」を止められないことに責任を感じ、子育てに自責の念を抱いている。6-3-2 で述べたように、笑いは語りの流れに影響を及ぼす。語りの中で笑うことを通じて、親たちは、自責的な体験から距離をとり、気持ちが楽になったり、状況や自分の行動の捉え方を変化させていったりすることが可能になると考えられる。しかし、ここで強調しておきたいことは、このような参加者の変化は、笑いへの習熟や、笑いの生成に参加するプロセスの中で、循環的に生じてくるという点である (図 6-2)。その意味で、参加者にとって笑いが持つ意義や機能も、参加者が笑いの生成に参加する過程と切り離して考えることはできない。

第4章では、グループに参加した親たちの語りが変化する過程は、会で新しい見方や関わり方を知り (ナラティブの習得)、それを自分の体験と統合し、自分の語りの中で主体的に用いる (ナラティブの専有) プロセスとして捉えられると述べた。本章で見た、参加者が笑いに習熟していく過程も、参加者がグループのナラティブを習得し、専有していく過程と重なっていると考えられる。6-3-3 で述べたように、笑いに習熟し、参加する過程では、共感や「わかる」という感覚が重要になる。こうした感覚は、自分と他の参加者の体験を重ね合わせ、他の参加者の語りからのナラティブの習得を促進したり、自分の体験を他の参加者に伝わるように話す動機を生み、

「専有」を促進させたりする意義を持つと考えられる。このように、笑いの共有を含んだ参加者間のやりとりは、グループのナラティブの習得や専有を促進していると考えられる。

ただし、6-3-3 で見た D さんのように、特に会に来たばかりの参加者は、笑いに対して違和感をもつ場合もある。本章では、参加者間のやりとりの中で、特に笑いの共有に注目したが、親たちの会では、第 5 章で見たように、語り手とともに聞き手も黙って涙を流す、共感的な言葉をかけ合うといったやりとりも見られる。まだ余裕がなく笑いが共有しにくい人には、そうした涙の共有や、共感的な言葉がけといったやりとりがより重要になる場合もあると思われる。

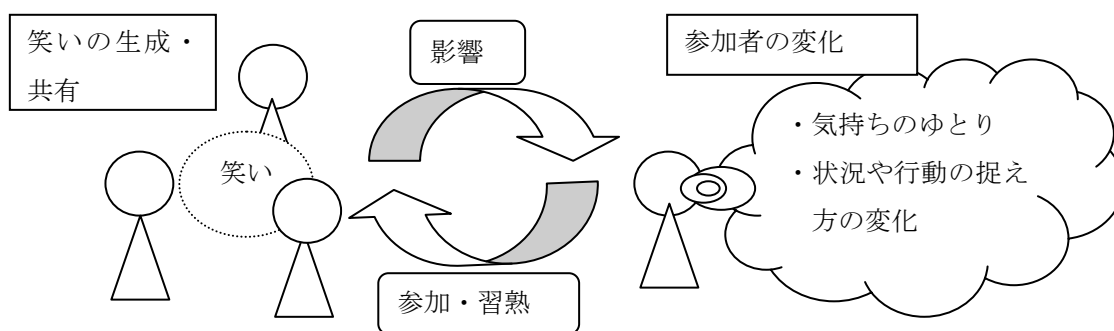


図 6-2 笑いの生成と参加者の変化

#### 6-4-3 支配的なディスコースの脱構築

最後に、笑いを共有するやりとりが、グループにおけるオルタナティブな語りを構築していく過程で、どのような機能をもっているのかを整理する。

親たちの会における笑いは、グループにとっても重要な意義を持っている。本章では笑いという現象に注目したが、第 4 章で述べたように、親たちの会は、つらい感情を吐き出す語りを受けとめる場としても機能している。しかし、親たちの会は、つらさの吐き出しを受けとめるだけでなく、語りを転換していく作用も持っており、そこで笑いは重要な役割を果たしていると考えられる。

Ayashiro (2015) は、自嘲的なユーモアの使用が、否定的な影響を与えている支配的なディスコースを脱構築し、支配的なディスコース上でのオルタナティブなポジショニングの可能性をもたらすと言う。これは、自嘲的なユーモアが、支配的なディスコースの力を可視化することや、自分自身で自己をポジショニングすることで主体性が生じることによる。また、荒井 (2013) も、認知症家族会の交流会における笑いやユーモアは、コミュニティ・ナラティブの醸成と関わりがあり、支配的なディスコースの影響の下では語りにくい話題を語りやすくすることに貢献していると指摘している。伊藤 (2010) も、パーキンソン病患者の「病いを笑う語り」を常識的な見方や世界観を相対化するものとして描いている。

親たちの会における笑いは、自嘲的なユーモアに限られないが、同様に、常識的な見方や、支

配的なディスコースを脱構築する機能を持っていると考えられる。ここで脱構築とは、支配的なディスコースから離れたり、それを明らかにする機会が提供されたりすることによって、個人の人生に対するディスコースの影響が明らかになる過程を指す（White, 1992; Winslade & Monk, 1999/2001）。6-3-3 で述べたように、笑いは、自分の行動や考え方を捉え直し、笑いの対象とする。ここには、状況や自分自身に対する見方の転換が含まれている。笑いは、『非行』は深刻な問題だ」「親（自分）の子育てが悪かった」といった常識的な見方から距離をとり、語りが自責的・悲観的な方向へ進むことを緩和する。ここで笑いは、自分の体験や困難な状況を、支配的なディスコースとは別の視点から捉え直し、オルタナティブな意味づけを模索することを促進していると考えられる。

また、親たちの会においては、笑うという行為自体が、支配的なディスコースに緩やかに対抗する機能を持つと考えられる。常識的な見方からすれば、「なぜ子の『非行』がおかしいのか」「親に笑っている余裕などがあるのか」となるかもしれない、親自身もそのように考えている場合も多い。また、実際に、子どもの問題行動に振り回される生活の中で笑うことができない場合も多い。しかし、実はそのような見方やディスコースこそが、親を追い詰めて、状況を硬直化させてしまっている可能性がある。その意味では、親たちの会における笑いは、笑うという行為自体が、『非行』の子をもつ親は笑ってはいけない、笑ってなどいられない」という支配的なディスコースに対抗する実践であるとも捉えられる。しかし、これは本章で見てきたように、一人のできる実践ではなく、参加者間で笑いを共有することで初めて成り立つものである。

#### 6-4-4 本研究の意義と課題

本研究では、「非行」と向き合う親たちの SHG における笑いを社会的な相互行為の実践と捉えて検討した。笑いを相互行為の実践として捉えると、笑いの生成が、語りの文脈や参加者と密接に関連し、相互に影響を及ぼし合っていることが見えてくる。今回検討した親たちの語りにおける笑いの生成プロセスや機能も、グループの文脈との関係で理解する必要があり、他の SHG への適用を考える際には、グループごとの検討が必要である。

一方で、笑いやユーモアは、他の SHG においても重要な役割を果たしていることが窺われるため（例えば荒井,2013）、笑いやユーモアという視点は、SHG の特徴や機能を理解していく上で有用であると思われる。今後の課題として、親たちの会における笑いの特徴や機能をより明確化するためには、笑いのテーマや生じるプロセスについてのより詳細な分析、笑いの習熟や生成に関する個人差の検討、日常場面や他の SHG における笑いとの比較、親たちの会における他の相互行為との関連性の検討などを行っていくことが必要だと思われる。



## 第7章（研究5）

### 親以外の参加者の語りの構築への関わり

#### ——「ともに」学び，語り合う実践——

第7章では，専門職などの親以外の立場の参加者が語りの構築にどのように関与しているかを検討する。

### 第1節 問題と目的

---

#### 7-1-1 親以外の立場の参加者の語りの構築への関与

本章では，子どもの「非行」を体験している親以外の立場の参加者が，「非行」と向き合う親たちの会における語りの構築にどのように関わっているのかという点を検討する。

SHGは，「同じ体験をした人」（岡，1998）や，「共通の問題に見舞われた個人」（三島，1998a）が集まって作られるものである。そのため，SHGのメンバーは，基本的には，同じ体験をし，共通した問題を抱えている本人になる。「非行」と向き合う親たちの会では，子どもの「非行」の問題で悩んでいる，あるいは悩んだ体験をした親がこれに該当する。グループによっては，同じ体験をした人以外の参加を原則的に認めない場合もあるが，親たちの会では，子どもの「非行」の問題で悩んでいる親に限らず，様々な立場の人が会に参加することを認め，歓迎している。元々親たちの会は，親が専門家の援助のもとで原因や解決の方法を見つけていくというやり方や，親だけが集まって語り合うというやり方のどちらでもなく，「親が，親以外の人とも自由に対等に語り合うことを通して，力を得，自ら学び向き合い，乗り越えていく」ための会でありたいという願いをもって作られた（春野，2006）。会の名称も「親の会」ではなく，「親たちの会」になっており，「親たち」という言葉は，単に複数を示す接尾辞ではなく，親以外の立場の人を含意している。会則の[活動]の項にも，「親と教師が手をつないで，専門家をはじめ，『非行』問題に関心のある個人や団体とともに，この問題について経験交流し，学習し合います」という文言がある。

実際，親たちの会には様々な立場の人が参加し，関わっている。筆者が参加した例会の中でも，教師や元教師，元家庭裁判所調査官，保護司，弁護士，臨床心理士，社会福祉士，研究者，報道関係者，学生などが参加することがあった。また，「非行」を体験した本人が参加し，自らの体験を語ることもあった。筆者が主に参与観察を行った例会では，20人～30人の参加者のうち，親以外の立場の参加者は，筆者を含めて2人～5人程度のことが多かった。会への参加年数は様々だが，親の立場の参加者と同じで，初めて例会に参加する人もいれば，会が作られた頃から20年近く参加している人もいる。1回あるいは数回の参加に留まる人もいるが，頻度は様々である

が、継続して例会に参加する人も多い。例会の語り合いの中では、親以外の立場の人も、一人の参加者として自分のことを語る機会が与えられる。また、会で発行されている通信の中でも、親の語りだけでなく、親以外の立場の参加者の語りも掲載されている。さらに、会では、例会以外の活動として、学習会や、年に1回、全国各地から参加者が集う「非行」を考える全国交流集会を開催しているが、そこでは、より多くの親以外の立場の人が参加したり、講師として関与したりしている。例えば、2017年3月時点で17回目の開催になる全国交流集会では、少しずつ親以外の立場の参加者が増加し、現在は200名程度の参加者のうち、半数程度は親以外の立場の参加者になっている。

このように、様々な親以外の立場の人が会に関わっていることは、ここまで検討してきた親たちの会における語りの構築にも影響を及ぼしていると思われる。例えば、インタビューの中では、「〇〇先生（会の元代表）も、他のお母さんも言うけれども、『親も苦しいけれども子どもはもっと苦しい』の意味がわからなかった」（第4章〈抜粋4-30〉）といったように、『親も苦しいけれども子どもはもっと苦しい』といった会のナラティブを語る人として、親以外の立場の参加者への言及がなされたり、親以外の立場の参加者のコメントが子どもの気持ちを考えるきっかけになったということが語られたりした。

SHGは、同じ体験をした人同士が気持ちや情報、考え方などをわかちあうという特徴を持つ（岡,1999）。親たちの会も、参加する人の多くは子どもの「非行」の問題で悩んでいる、あるいは悩んだ体験を持つ親であり、そのようなSHGとしての側面を持っている。しかし他方で、親たちの会では、親以外の立場の人も参加を認められ、語る機会を与えられており、語り合いの場や、そこでコミュニティ・ナラティブが醸成されるプロセスに関わっている。第4章から第6章では、主に親の立場の参加者の語りに注目してきたが、本章では、親以外の立場の参加者の語りや関わりに注目し、それが、親たちの会におけるオルタナティブな語りの構築にどのような影響を及ぼしているのかを検討する。

## 7-1-2 先行研究

SHGにおいて、問題を抱えている本人以外の立場でグループに関わる人は、医師、看護師、ソーシャルワーカー、心理士などの専門職であることが多く、先行研究では、SHGと専門職との関係として論じられている。そこでは、専門職の内側にある構えや専門職中心主義が持ち込まれることや、専門職が専門性を放棄し、グループのアプローチを理想化することが問題として指摘され（三島,1998a）、援助専門職がグループと対等な関係を築くことの意義や条件が論じられている（蔭山,2002; Katz,1993/1997; 中田,2000; 松田,2006など）。しかし、第1章で述べたように、専門職の人々は、SHGにおいて常に「専門家」という固定した立場で振舞っているわけではない（石川,2005; 松田,2006; 2010; 赤阪・サトウ,2015）。彼／彼女らが、グループの中で具体的にどのように振舞い、その活動にどのように関与しているのかを検討していく必要がある。

また、先行研究では、専門職のSHGへの関わりや援助として、①物質資源の援助、②新しいグループを創る（設立の支援）、③SHG活動に関する研究・調査、④政策策定支援者としての役

割, ⑤コンサルタントとしての援助, ⑥グループへのメンバーの紹介といったことが挙げられてきた(三島,1998a; 陰山 2002)。こうした SHG の活動を側面から支えるサポートもグループにとって重要なものではあるが, SHG をナラティブ・コミュニティとして捉えた場合, 専門職がグループにもたらす影響は, ここに挙げられたものに留まらない。グループへの具体的な参加や関与の仕方が, グループで構築されているナラティブにも影響を及ぼすと考えられる。

Rappaport (1998; 2000) は, 心理学者や研究者の役割として, 社会的に弱い立場にあり, 文化的に支配的なナラティブしか利用できない人々が, オルタナティブなナラティブを発見し, 創造し, 利用できるようにするのを援助することを挙げている。そして, コミュニティ心理学者や社会科学者の使命は, 人々が “恐怖の物語” を, “喜びの物語” に転換していくことを援助することであり, そのためには, “恐怖の物語” を聞き, それに気づくことや, 対象となる人々と協働して “喜びの物語” を広く知らせていくことが必要だと言う (Rappaport, 2000)。また, その際には, データの収集プロセスそのものが, 参加者をエンパワーする効果を持つように, 信頼がおける敬意を示したものである必要がある (Rappaport,1998)。ここでは, 心理学者や研究者が, コミュニティと関わるプロセスを通じて, オルタナティブな語りが構築されるプロセスを促進したり, 活性化したりすることが期待されている。しかし, ナラティブ・アプローチに基づく研究においても, 問題を抱えた本人以外の参加者が, 具体的に SHG に対してどのような関わり方をしているか, およびどのような関わり方をすれば, SHG のオルタナティブな語りの構築を促進することができるのかという点は十分に検討されていない。これは, SHG の種類や, そのナラティブの特徴とも関連するものであり, グループの性質に応じた検討が必要となる。

### 7-1-3 本研究の目的

本章では, 以上の問題意識を踏まえて, 「非行」と向きあう親たちの会において, 親以外の参加者が語りの構築にどのように関与しているのかという点を検討することを目的とする。具体的には, 親以外の立場の参加者が, グループ中で何を語り, どのようにグループと関わっているのか, また, 逆に親の立場の参加者は, そういった語りや関わりを含め, 親以外の立場で会に関わる人をどのように受けとめているのかを明らかにし, 親以外の立場の参加者が, 語りの構築に影響する条件や文脈について検討する。

こうした親以外の立場の参加者の関与について検討することは, 親たちの会の特徴や, そこで生じる語りの構築プロセスの特徴をより明確にすることになると考えられる。会への参加者は専門職に限られないため, 本研究では, 筆者自身を含め, 親以外の立場の参加者全般の語りや関わりを分析の対象とする。ただし, その中には, 教師, 司法・矯正施設の関係者, 臨床心理士, 保護司などの専門職が多く含まれている。そのため, 本研究の結果は, 専門職の SHG への関与のあり方を検討する上でも役立つと考えられる。

## 第 2 節 方法

---

## 7-2-1 データの収集

本章では、フィールドノーツ、会で発行されている通信、会の参加者へのインタビューの中で、特に、筆者自身を含めた親以外の立場の参加者の語りや行動について記述されている部分をデータとした。

### (1) フィールドノーツ

第4章と同様に、参与観察を行って作成したフィールドノーツをデータとして用いた。本研究では、筆者が会に参加してから6年間分のフィールドノーツを分析対象とした。フィールドに入ってから1年分のデータは、第4章に記述したものと同様である。フィールドに入ってから2年目以降は、特に例会の中で印象に残った語りややりとりについて記録した。また、2-3-1で述べたように、筆者は例会だけでなく、学習会や全国交流集会、電話相談、学習支援、研究調査活動など、様々な活動に参加しており、そうした活動に参加する中で気がついた点や、印象に残った点もフィールドノーツに記録した。フィールドノーツは、A5版のノートで440頁程度であり、その中から筆者を含む親以外の立場の参加者の語りや行動、それに対する他の参加者の反応について記述されている部分（56個の記述やエピソード）を抜き出し、分析の対象とした。

### (2) 会の通信

第5章（表5-1）で述べたように、毎月発行される会の通信では、例会における参加者の語りの概要をまとめたものが掲載される。何人の参加者の語りが掲載されるかは、月によっても異なるが、およそ全参加者の半数程度の語りが掲載される。

本研究では、筆者が参加してから6年間分の通信を分析対象とし、筆者が継続して参加している例会について記載された部分の中で、親以外の立場の参加者の語りを抽出した。通信の中では、「Aさん（親）」「Bさん（保護司）」など、参加者の立場が記載されている場合が多いため、その記載や語りの内容を見ながら、親以外の立場の参加者の語りに該当するかどうかを判断した。6年間で合計823人分の語りが掲載されていたが、そのうち親以外の参加者の語りは、167人分と約2割程度になっていた<sup>27</sup>（表7-1）。

表7-1 通信に掲載された親以外の参加者の語りの数

|        | 掲載されている語り | 親以外の参加者の語り（筆者の語り） |
|--------|-----------|-------------------|
| X年     | 164       | 31 (3)            |
| (X+1)年 | 149       | 26 (3)            |
| (X+2)年 | 134       | 22 (4)            |
| (X+3)年 | 123       | 21 (6)            |
| (X+4)年 | 122       | 32 (5)            |
| (X+5)年 | 131       | 35 (1)            |

<sup>27</sup> なお、「非行」の子どもの祖父という立場の参加者の語りが存在したが、孫の「非行」に関する悩みを語るものであったため、親の立場の参加者に準じるものとして、親以外の立場の参加者の語りにはカウントしなかった。

|    |     |          |
|----|-----|----------|
| 合計 | 823 | 167 (22) |
|----|-----|----------|

また、親以外の立場の参加者の語りについて、参加者の立場ごとに見ていくと、専門職が最も多く、次いで学生、非行体験者、記者・報道関係者の順番に数が多かった（表 7-2）。専門職の中でも、元代表（元教師）、副代表（元家庭裁判所調査官）については、「Aさん」ではなく、「○○さん」と個人名で記載されることが多く、立場も「代表」「副代表」と書かれていることが多かったため、他の専門職の参加者とは、区別してカウントした。専門職の参加者の立場は様々で、教師、元教師、元家裁調査官、元児童自立支援施設寮母、元少年院長、相談員、セラピスト、臨床心理士、ソーシャルワーカー、弁護士、保護司、大学教員の語りが掲載されていた。

表 7-2 参加者の立場

| 専門職（代表・副代表） | その他専門職 | 学生 | 非行体験者 | 記者・報道関係者 | その他 | 合計  |
|-------------|--------|----|-------|----------|-----|-----|
| 42          | 50     | 49 | 14    | 4        | 8   | 167 |

### （3）インタビュー

まず、第 4 章第 2 節で述べた、A～E さんへのインタビューのうち、親以外の立場の参加者について語られている部分を抜き出して、分析の対象とした。また、追加のインタビューとして、親以外の立場で会に関わっている F さん、G さんと、親の立場である会の世話人 H さん、I さんにインタビューを実施した。

F さんと G さんは、筆者が親たちの会に参加している中で知り合い、直接インタビューを依頼した。F さんは、保護司の活動を長くしている。インタビューの 1 年ほど前から会の活動に参加するようになり、例会にも比較的頻繁に参加していた。G さんは、教員を 30 年務めた後、臨床心理士に転向した人である。約 15 年前から会の活動に関わっており、現在は例会にはあまり参加していないが、会のメンバーによる合唱や相談活動などで、会の活動に継続して関わっている。インタビューでは、会と関わるようになった経緯やきっかけ、会との関わり方、自分の仕事と会の活動との関連性などについて尋ねた。

表 7-3 追加のインタビュー（親以外の立場）

|      | 会に関わっている年数 | 仕事                      | 年齢   | 性別 | インタビュー時間  |
|------|------------|-------------------------|------|----|-----------|
| F さん | 約 1 年      | 保護司（10 数年）              | 60 代 | 男性 | 1 時間 46 分 |
| G さん | 約 15 年     | 教員（30 年）<br>→臨床心理士（5 年） | 60 代 | 女性 | 1 時間 16 分 |

H さんと I さんは、自分の子どもの「非行」の問題で、会に参加するようになった。その後、

会の世話人になり、行政が主催し、親たちの会が運営を行っている公開の学習会の運営に 5 年間<sup>28</sup>にわたり取り組んでいる。この学習会では、講演やシンポジウムの形式で、「非行」を体験した当事者や、子どもの「非行」を体験した親が体験を語ることもある一方、「非行」や思春期の子どもと関わる専門職が話をする場合もある。また、講演やシンポジウムの後には、参加者同士がグループに分かれて例会と同じように語り合う、交流の時間がとられている場合が多い。筆者もその学習会に何度か参加したことがあり、H さん、I さんがその運営の仕事をしていることを知っていた。筆者は、H さんから、学習会の講師など親以外の立場の人とのやりとりについて聞く機会があり、より詳しく話を聞きたいと思い、インタビューを依頼した。H さんが I さんにも声をかけてくれて、H さん、I さん二人一緒にインタビューを行った。インタビューでは、現在までの会との関わり、学習会の運営をしてきて感じたこと、親以外の立場の参加者との関わりの中で良かった体験や嫌だった体験など、親以外の立場の参加者と関わった体験について幅広く尋ね、H さん、I さんは、お互いに補い合いながら、それぞれの体験や思いを語った。

表 7-4 追加のインタビュー（親）

|      | 会への参加年数 | 世話人をしている年数 | 子どもの性別・年齢<br>(参加開始時→現在) | 性別 | インタビュー時間  |
|------|---------|------------|-------------------------|----|-----------|
| H さん | 10 年    | 6 年        | 女性 (16 歳→25 歳)          | 女性 | 2 時間 48 分 |
| I さん | 15 年    | 13 年       | 男性 (15 歳→29 歳)          | 女性 |           |

全てのインタビューは、研究協力者の承諾が得られた上で、IC レコーダーで録音された。また第 4 章で行ったインタビューと同様に、インタビューを行う際には、インタビューの自由意思を尊重し、研究への参加・中断を自由に決定できるように倫理的配慮を行った。

## 7-2-2 データの分析

フィールドノーツのデータについては、親以外の立場の参加者の言動やそれに対する反応について記述されている部分を抜き出し、<どのような言動ややりとりが行われているか>という観点から、コードをつけた（表 7-5 参照）。その後コードを吟味し、内容の似たエピソードを比較しながら、親以外の対場の参加者がどのような言動をしているか、また、親の立場の参加者との間でどのようなやりとりが生じているかを検討した。

表 7-5 エピソードとコードの例

| エピソード   | コード         |
|---|-------------|
| 会の開始時に副代表が挨拶。「家庭裁判所調査官として働いてきたが親の気持ちはわかっていなかった。この会ができて 9 年くらい | 学び手として自己を示す |

<sup>28</sup> インタビューを行った当時の年数である。

|  |
|--|
| 経つが、ここで話を聞いて働いてきたときにはわからなかったことも学んでいる」という内容だった。 |
|--|

会の通信から抽出した親以外の立場の参加者の語りについては、それぞれ語りのテーマや内容に照らして、語りを表すコードをつけていった。語りのテーマが複数あると考えられた場合は、複数のコードをつけた（表 7-5 参照）。その後、コードを吟味し、〈この語りではどのようなことが語られているか〉という問いかけをしながら、似ている語りを集めて分類し、語りの共通した特徴とバリエーションを特定していった。最終的に、【立場の表明】、【参加した感想】、【自分の子ども時代や家族の話】、【少年や親との関わり】、【子どもを理解する視点や関わり方】、【専門的知識】の6つの枠組みにまとめられた。

表 7-5 語りとコード，枠組みの例

| 語り   | コード                                 | 枠組み                      |
|--|-------------------------------------|--------------------------|
| （学生）精神科医を目指す学生。実家が精神科の病院で、小中学生がいじめやリストカット・虐待などで受診しているのを見てきた。彼らがどうしているのかを考えて、何を訴えているのか知りたくて来た。  | 自己紹介，会に参加した理由                       | 【立場の表明】                  |
| （相談員）子どもたちはそれぞれに家庭を持って暮らしている。娘がその子ども（私の孫）を保育所に入れたとき、子どもの持ち物をたくさん手作りしなくてはいけないところだったので、とても大変だった。仕事があるから保育所に預けるのに、手作りの時間をとるのは通常は無理なこと。どうして、若い人たちに優しくない社会なのかとつくづく思う。この会で、さまざまなお話を聞いていると、この社会がおかしくなっているのを変えていくのは、非行の子とその親たちだと思う。苦しんだ分、世の中を切り拓く力を持っていると思う。 | 娘の子育ての苦労（子育てに優しくない社会）／非行の子や親，会へのエール | 【自分の子ども時代や家族の話】／【参加した感想】 |

インタビューデータについては、第4章（研究2）と同様の方法で分析を行った。ただし、コードをつける際には、本研究のリサーチクエスションである、〈親以外の参加者が語りの構築にどのように関わっているか〉という観点を意識してコードをつけた。A～Eさんのインタビューデータについても同様の観点からコードの修正を行った。その後、関連性のある見出しを集めて、インタビューの内容について整理を行った。

その後、フィールドノーツ、通信に記載されていた親以外の立場の参加者の語り、およびインタビューデータのつながりや関連性を検討し、親以外の参加者の語りや関わりの特徴と、それが親たちの会における語りの構築にどのように影響しているかを検討した。

## 第3節 結果と考察

---

本節では、まず、親以外の立場の参加者が、グループで何を語り、どのように参加者の語りやグループのナラティブが構築されるプロセスに関わっているのかについて記述する。次に、親の立場の参加者が、親以外の立場の参加者の語りをどのように受けとめ、そこでどのようなやりとりが生じているのかを見ていく。最後に、親以外の立場の参加者が、語りの構築に影響する条件や文脈について検討を行う。

### 7-3-1 親以外の参加者の語りや関わりの特徴

#### (1) 語りの特徴

例会における親以外の参加者の語りの枠組みを整理すると、【立場の表明】、【参加した感想】、【自分の子ども時代や家族の話】、【少年や親との関わり】、【子どもを理解する視点や関わり方】、【専門的知識】の大きく6つに分けられた。一人の参加者の語りの中に複数のテーマが現われる場合もあるが、ここでは、それぞれのテーマごとに語りの特徴を記述する。

**【立場の表明】** 【立場の表明】は、自分の名前や立場、どうやって会を知り、なぜ会に参加したのかといったことを説明する語りである。これは、専門職、学生など立場の違いを問わず、親以外の立場の参加者全てに共通して見られた。例会では、参加者同士が初対面であったり、他の参加者のことをよく知らなかったりする場合も多い。親の立場で参加する人は、「〇歳の息子と〇歳の娘がいて、息子のことで会に来るようになり、〇年になります」といったように、子どもの年齢や、会に参加してから期間などを述べて話を始めることが多い。一方で、親以外の立場の人は、自分の立場や職業、会を知った経緯、会に参加した理由などを話すことで自分の立場を説明する場合が多い。〈抜粋 7-1〉、〈抜粋 7-2〉は、通信に掲載されていたそのような語りの例である。

#### 〈抜粋 7-1〉 例会にて（通信）

（学生）精神科医を目指す学生。実家が精神科の病院で、小中学生がいじめやリストカット・虐待などで受診しているのを見てきた。彼らがどういうことを考えて、何を訴えているのか知りたくて来た。

#### 〈抜粋 7-2〉 例会にて（通信）

（保護司）（保護司として）少年を担当することが多く、1つひとつの問題は重いと感じている。実践を通して勉強していこうと、痛切に感じる。こういう会で学びながら、自分のやっていることに別の角度から光を当てないとダメだと思う。会の本を読んでいる。

このように自分の立場や、参加の理由を述べることは、自分が何者であり、なぜ会に参加して



いるかを参加者に伝えるという意味を持ち、会に参加する上で重要な行為である。会に参加した理由としては、親の話を聞いて学びたくて参加したと述べる人が多かった。専門職や、専門職を目指す学生にとって、子どもの「非行」に最も身近に接して、悩んでいる親の生の声を聞けることは貴重な機会である。また、学校や相談機関などで、専門職の言葉や対応に傷ついた体験が語られることもあり、そうした体験を聞くことは、専門職が自分の実践を振り返る上で役立つものである。〈抜粋 7-2〉は、インタビューを行った保護司の F さんの語りであるが、F さんは、インタビューの中でも、自分の保護司としての実践を反省的に振り返るために、会に参加して親の話を聞くことが大切だと話していた。

#### 〈抜粋 7-3〉 F さんインタビュー

ああいうお母さんたちの声を聞かないと、起こりがちなのは私たちが、上から目線でね、関わっていく。無意識のうちにやりがちなんですよ。よっぽど自戒しないと。

〈抜粋 7-3〉では、専門職が上からの目線で関わるのではなく、親と同じ目線に立つために、会で親の声を聞くことが大切だということが語られている。このように、自分自身が学ぶために会に参加するという姿勢は、継続して会に参加している参加者にも共通しており、会の発足当初から参加していた元代表や副代表（元教師や元家裁調査官）も、挨拶や自分の語りの際に、「自分自身が会で学んでいる」ということをしばしば話していた。

会に参加した理由としては、他に、話したい、話を聞いてもらおうと思って参加したということ述べる人もいた。

#### 〈抜粋 7-4〉 例会にて（通信）

（弁護士）息子 2 人。夫とはいろいろなことがあったが 2 人の子どもは特に問題なく育ち、仕事にもやりがいを感じている。下の子どもも大学を卒業し、さてこれから自分の生き方を真剣に考えて悩んでいる今、悩みの内容は違ってもやはり悩みながらも真剣に考え模索している人の話を聞いて、自分も話したいと思って参加した。

〈抜粋 7-4〉では、語り手自身も子どもの「非行」の問題ではないが悩みを持っており、それを話したいということが語られている。他にも、「話を聞いてもらおうと思ってきた」と述べ、自分の悩みを話す専門職もいた。ここでは、専門職としてというよりも、悩みを持つものとして同じ立場にある存在として、自分の立場が提示されている。

**【参加した感想】** 【参加した感想】は、会に参加した感想を述べる語りである。感想として述べられる内容は様々であるが、一番多いものは、参加して話を聞くことで、親の気持ちがわかったというものである。

#### 〈抜粋 7-5〉 例会にて（通信）

(非行体験者) 今は親とは普通に話をしているし、頼りたいときには頼っている。親からは自分が悪かった当時、どんな思いでいたかなんて聞いたことがなかった。親の人たちの話は自分の親の言葉として聞かせてもらった。今日は自分への親の気持ちを知ることができた。

特に非行体験者や学生は、〈抜粋 7-5〉のように、自分の親とも重ね合わせながら、参加者の親たちの語りを聞くことが多いようである。話を聞いたことで、「親にはとても申し訳なく思った」「親は親なりに私を思ってやってくれていたんだなということがわかった」など、自分の親に対する気持ちの変化が述べられる場合もある。

また、親やその語りに出てくる子どもを労ったり、エンパワーしたりするような感想が述べられる場合もある。

#### 〈抜粋 7-6〉例会にて (通信)

(相談員) 子どもたちはそれぞれに家庭を持って暮らしている。娘がその子ども (私の孫) を保育所に入れたとき、子どもの持ち物をたくさん手作りしなくてはいけないところだったので、とても大変だった。仕事があるから保育所に預けるのに、手作りの時間をとるのは通常は無理なこと。どうして、若い人たちに優しくない社会なのかとつくづく思う。この会で、さまざまなお話を聞いていると、この社会がおかしくなっているのを変えていくのは、非行の子とその親たちだと思う。苦しんだ分、世の中を切り拓く力を持っていると思う。

「えらい」「よくやられている」など直接的な労いの言葉がかけられる場合もあるが、〈抜粋 7-6〉のように、非行の子やその親たちを、社会を変えていく力を持つ存在として位置づけるような語りも見られた。さらに、「温かい会である」「居心地がいい」など、会について肯定的な感想が述べられることもあった。

**【自分の子ども時代や家族の話】** 例会では、親以外の立場の参加者も、自分のことを話すことが求められる。筆者が参加した際にも、司会の人から、「何でもいいので自分のことを話してください」「親以外の人も自分の家族のことや会に来た経緯を話してください」などと、声をかけられることがあった。

参加者の年齢や立場によっても異なるが、親たちの会では思春期・青年期の子どもや家族の問題が話されることが多いため、語り手自身の子どもの時代や家族の話が語られることが多い。

年齢の若い学生や「非行」の体験者の語りでは、次の 2 つの抜粋のように、子ども側の視点から、思春期・青年期のときの気持ちや、親に対する思いが話される。

#### 〈抜粋 7-7〉例会にて (通信)

(当事者, 24 歳女性) 中学のころ児童自立支援施設に入り、少年院も経験した。摂食障害で苦しんだこともある。現在は結婚して 3 人の子どもの母親。何不自由なく育ったあなたがなぜ？と言われることもあるが、母親との関係、大人への不信感など苦しくて生きづらかった。今、

小1の子どもの友達で、私の家に入り浸る子がいて、イヤだな、心配だな、と思う時もあるが、自分が大人に不信感を持った経験から、自分はその子にとって信頼できない最初の大人にはなりたくないと思って、接している。今も母親との葛藤はあるが、3人の母となって、親も大変だったんだなと思えるようになった。自分の経験から、非行に走っている子どもには、こうしなさいと押しつけるのではなく、私だったらこうするかなという意見を言ってほしかった。

〈抜粋 7-8〉 例会にて（通信）

（学生）仕事をしながら福祉系大学の通信制で学んでいる。私自身高校生の頃に過干渉の母親にすごく反発した。今は親との関係は落ち着いている。皆さんの話を聴いていて、泣きそうになった。これからも参加したいと思う。

〈抜粋 7-7〉は、自身が「非行」を経験した女性の語りである。この語りのように、例会では、「非行」を体験した本人が参加し、「非行」をしていた時の自分の体験について話すこともあった。時には、例会の前にミニ学習会という形で、「非行」から立ち直った本人の体験談を聞くこともあった。また、〈抜粋 7-8〉のように、参加した学生が、子ども時代のつらかった体験や親に対する反抗や葛藤について語ることもあった。

一方、年配の専門職などの参加者の語りでは、次の抜粋のように、自分の子どもとの関係や子育てでの悩みが話されることが多かった。

〈抜粋 7-9〉 例会にて（通信）

（相談員）成人した3人の子どもの父親である。親子だから通じていると思っていたが、今になってみればそうではないことが多い。教師の時は生徒には客観的な見方ができたが、息子にはそうできない。2番目の長女は兄のことを感情的に許せないでいる。勉強も仕事もうまくやっているとと思っていたが、大学時代、リストカットをしていたことを知った。今、教育相談室で相談員をしているが、こんな自分が相談員をしていいのだろうかとも考える。

〈抜粋 7-9〉は、元教師で相談員をしている男性の語りだが、自分の子育てや子どもとの関係を振り返る内容になっている。この語りのように、「非行」ということではないが、自分の子どもとの問題や子育てでの悩みや苦勞が語られる場合も多い。こうした語りでは、語り手は、親として子育てで悩んでいるという点では、「非行」の問題で悩む親たちと共通する立場にあることが示される。インタビューを行った臨床心理士のGさんも、例会に参加していたときは、子どもが不登校になっていた時期で、自分も不登校の問題で悩んでいる親であるという点が重なっており、例会で、子どもの話をしたことがあったと言う。

**【少年や親との関わり】** 【少年や親との関わり】は、仕事や社会的活動などで思春期・青年期の子ども達や、その親と関わっている語り手が、関わりの中で体験した苦悩や喜びを、自分の実践を振り返る形で語るものである。この語りの枠組みは、保護司、教師、臨床心理士など、

子どもと関わっている専門職の語りに多く見られた。非行少年やその親との関わりが語られる場合が多いが、必ずしも非行少年に限られず、他の様々な問題を抱えた子どもとの関わりが語られることもある。

〈抜粋 7-10〉 例会にて（通信）

（保護司）今回で 3 回目。保護司をしていて、少年本人は元より親のケアが必要と実感し、勉強のために参加。親と一緒に悪戦苦闘している。少年院から帰ってくる子の受け取りを拒否する親もいる。2 ヶ月に 1 回の面会では、その子がどんどん良くなっていることがわかるが、出てきた後どうなるのか、どうやったらいいのか悩んでいる。非行の子を抱える子どもの親はなんとかしたいと葛藤している。

〈抜粋 7-11〉 例会にて（通信）

（教師）高校で教員をしている。〇〇先生（会の元代表）を尊敬して会に入会した。今は、非常勤なので子どもと接するのは授業時間のみになってしまい、子どもと心を通わせるのが難しく、私自身が苦しい思いでいる。子どもといかにつながるか、気持ちを合わすかは私の課題。会の親ごさんが苦しみながらも子どもと真正面から取り組んでゆく姿勢をすごいなあと感じている。子どもと裸でぶつかったり向き合って一步一步やっている。言葉の一つ一つが本物で重く感じられ、聞くだけでも糧になる。子どもとの関係を苦しく感じるときには、こちらが変わらなくちゃいけないと思う。

〈抜粋 7-10〉は、保護司の語りであるが、担当している少年や親との関わりの中での悩みが語られている。「親と一緒に悪戦苦闘している」といった表現では、親と専門職が対等な立場であることが示唆される語り方になっている。〈抜粋 7-11〉は教員である参加者の語りである。語り手自身の苦しい思いが語られるとともに、自分の課題と結びつける形で、糧になるものとして親の言葉や姿勢について言及がなされている。【少年や親との関わり】では、語り手が、保護司、教師、家庭裁判所調査官、臨床心理士、学生などそれぞれの立場で、少年やその親と関わったときの体験が語られるが、〈抜粋 7-11〉のように、会で聞く親の語りと関連づけながら、自分自身の少年との関わりを振り返り、その中での課題について述べることもしばしば見られた。

**【子どもを理解する視点や関わり方】** 【子どもを理解する視点や関わり方】は、「非行」に走っている子どもを理解する視点や、子どもとの関わり方のアイデアを提示する語りである。会の代表・副代表など、会に長く参加している専門職の語りに多く見られた。

〈抜粋 7-12〉 例会にて（通信）

（元教師・代表）親の思い通りにはならない。思いがけない行動、自分の思いからはみ出した行為を許容することができるか。たくさんの期待を子どもにかける、そういう状況にのみ込まれて喘いでいる子どもたち。それを何かのかたちで表しているのが非行の子ではないか。その

子たちはつらくてつらくてやってられない。でも本人自身に、それが意識できていないし、言葉でうまく表現できない。自分を守るために非行に走ったと言葉で言える子はごくわずかで、みんな自分で自己責任にしてしまう。

〈抜粋 7-13〉 例会にて（通信）

（元調査官・副代表）家裁の調査官を 36 年間やってきた。子どもの反乱は思春期に上手に子どもを自立させられなかった結果ともいえる。「うるせえ」「うざい」「死ね」という言葉は嘘だろうと思うだろうが、その時は本気だ。でない自分が自分でなくなってしまうと思っている。親がいつまでも「親づら」をしているのが嫌でたまらないのだ。上から視線を捨て、対等、平等に、その子の尊厳を大事にしないとダメなのだが、その時に親が孤立しないことがとても大事だと思う。親が「この会で自分の居場所を見つけたら、子どもの居場所が仲間の所にあったんだなと気づいた」という話をこの会で聞いてハッとすることがあった。今も私自身、そういう気づきがあったりして、この年になっても人は成長できるのだ、と感じている。

〈抜粋 7-12〉や〈抜粋 7-13〉では、「非行」に走っている子どもの気持ちについて言及がなされており、それと関連する形で親のあり方、関わり方が述べられている。これらの語りで提示されている見方や関わり方は、第 4 章や第 5 章で言及したように、「親もつらいが『非行』をしている子どもはもっとつらい」、「『非行』を止めようとするよりも親子関係を良くする方が大切」などのグループのナラティブと重なる内容になっており、「『非行』は悪いものである」「親は子どもの『非行』を止めなければいけない」といったドミナント・ストーリーとは異なるものである。会に継続して参加している親達も、同じような視点や関わり方について語る場合があるが、これらの語りは、親の語りとはやや視点が異なり、親子関係について少し距離をとって眺めるような語りとなっている。そして、会のナラティブを補強したり、その射程を広げたりする意味を持っていると考えられる。こうした見方や関わり方は、語り手が、非行少年との関わりの中で学んだこととして語られる場合もあるが、〈抜粋 7-13〉のように、会で親の話聞いてきた中で学んだこととして語られることもある。そこでは、親が語ったストーリーが、違った視点からパラフレーズされる形で語り直されているとも考えられる。

**【専門的知識】** 【専門的知識】は、法律に関する知識や司法機関・矯正施設の仕組みなどについて、専門職が知識を伝達する語りである。例会の中で、こうした語りが見られる機会は多くはなく、特定の参加者から質問がなされたり、疑問が提起されたりした場合に、それについて知っている専門職が答えるという形で語られる形で見られた。

〈抜粋 7-14〉 例会にて（通信）

（元家裁調査官・副代表）警察の身柄拘束で家庭裁判所へ連れて行かれたら鑑別所に行くことになるが、在宅なら調査官が調書を受け取って話を聞いて、交通保護観察だろう（被害者がいる交通事故は別）。無免許運転を繰り返すと、免許が取れなくなることは伝えた方がよい。

〈抜粋 7-14〉は、裁判所の処遇について元家庭裁判所調査官が説明した語りだが、バイクの交通事故が家庭裁判所ではどういう処分になるのかという前の参加者の話を受けて、それに答えたものである。他にも、例会の中では、保護観察制度についての質問に保護司が答えたり、人格障害や発達障害の話題が出て、筆者も診断の仕方について少し説明をしたりしたこともあった。ただし、このような質問がある機会はさほど多くはなく、質問に対して、関連した体験をしている親が自分の体験を基に答える場合もあった。また、そのような質問や疑問の提起がない場合に、専門職が専門的知識を語る場面はほとんど見られなかった。

## (2) 語りの構築への関わり方

ここまで親以外の立場の参加者の語りの特徴を見てきたが、それを踏まえて、親以外の立場の参加者が、グループにおける語りの構築にどのように関わっているのかを簡単に整理する。語りの構築への関わりという点で見ると、親以外の立場の参加者は、聞き手、語り手という大きく2つの立場で、語りが構築される場やプロセスに関与していると考えられる。

まず、親以外の立場の参加者は、親の語りの聞き手となっている。そして、話を聞く際には、【立場の表明】で見たように、親にアドバイスをしたり、指導的に関わったりするのではなく、語りを聞くことで自分自身が学ぶという姿勢がとられている。三島(1998a)は、専門職が臨床場面で展開するような「援助する側—される側」といった関係の枠組みを一方的に持ち込めば、それだけで専門職による指導や支配が展開されることになる」と指摘している。親の語りを聞いて学ぶという姿勢は、専門職が親を援助するといった非対称的な関係が作られることを避けるという意味でも重要であると思われる。また、【参加した感想】の中では、親やグループに対して肯定的な感想が述べられるときもあり、親以外の立場の参加者は、親の語りやその構築プロセスを価値づけ、エンパワーする役割も果たしていると思われる。

もう一つ、親以外の立場の参加者は、語り手としても語りの構築に関わっている。彼／彼女らの語りは、自己紹介をしたり、感想を述べたり、また質問があった場合に専門的知識を伝えたりすることに留まらない。【自分の子ども時代や家族の話】【少年や親との関わり】【子どもを理解する視点や関わり方】といったテーマについて語り、語りの構築により能動的に関わる場合もある。こうした語りも会の通信にはかなりの数が掲載されており、会のナラティブを形作る一つの要素となっていると考えられる。

そこで、次節では、このような親以外の立場の参加者の語りや関わりが、親の立場の参加者にどのように受けとめられており、語りの構築にどのように影響しているのかという点を検討する。

### 7-3-2 親の立場の参加者の受けとめ

まず、親の立場の参加者は、親以外の立場の参加者をどのように受けとめているのだろうか。例会では、批判や討論、過度なアドバイスなどはしないという約束事があるため、親以外の立場の参加者の語りに対しても、他の参加者が何か意見を言うといった場面は基本的に見られない。

そのため、親以外の立場の参加者の存在やその語りが、聞き手にどのように受けとめられているのかは、明確には分からない場合も多い。しかし、その場で言葉にはされないにしても様々な思いが引き起こされていることが考えられる。Iさんは、親以外の参加者がいることについて次のように語っている。

〈抜粋 7-15〉 Hさん Iさんインタビュー

IR: 何か親の方の立場から見て、やっぱり例会にそういういろいろいらっしゃる方とか、それってどうなのかなって。話しづらかったりしないのかなとか、自分が話すことってどうなのかな、でも話した方がいいのかなとかあるんですけど。なんかもしそれで思うこととかがもしあったら

I: ああ、以外の人がいることでね。どうなんだろうな

IR: あんまり気にならないっていうのも

I: いや気にならないことはないですよ、全然。ならないことはなくって。どうなんだろうな。・・・でも最初の約束事っていうのがあるからね。

H: うん

I: あのほら、批判しないとか分析しないとか、聴くこと、聴いて学ぶっていうことをひたすらっていうので。まあそういう約束事があるからたぶん話せるのかなって思いますよね。であとほら、以外の方はご自分の話をしてくださいってよく言うじゃないですか

IR: はいはい

I: そういう意味では、けっこううちの会に来ている、親以外の人たちって、わりと自分のことを

IR: そうですね、基本的に

I: 語るじゃないですか。自分のその、なんていうか、自分も苦しかったみたい。すごい学歴があっても、なんかその中で自分の気持ちみたい。ちゃんと言ってくれるので、そういう意味では、安心して話ができるところかなって、うんうん、思いますね。

ここでIさんは、親以外の立場の参加者の存在は気になるが、約束事や親以外の立場の参加者も自分の話をするので、安心して話ができると話している。例会の中では、第2章で述べたように、会の開始時に司会者が約束事を伝えるようにしており、そこで「他の人の話に対して批判や分析をせず、お互いに話を聴いて学び合う」ということを確認する。この約束事は、参加している親同士の間でも大切なことであるが、親以外の立場の人が参加するときにも重要になる。専門職や研究者が、親に対して批判や分析、アドバイスなどをしてしまうことを防ぐためである。そして、親以外の立場の参加者が自分自身の話をすることも、安心につながるという意味で肯定的に捉えられている。

例会の中では、教員、法務教官、家裁調査官などを志望している学生の参加者に対して、「また来て勉強してください」「良い先生になってください」などと励ましの言葉がかけられること

があった。このような学生は、親の語りを聞いて学び、それを将来の仕事の中で活かしていくことで、会で学んだナラティブを社会に伝えていく存在としても眼差されていると考えられる。そして実際に、学生時代に会に参加していた保護観察官、臨床心理士、研究者などが、会に久しぶりに参加することもあった。

また、時々、親以外の立場の参加者の語りに対して、関心をもった参加者から質問がなされたり、労いの言葉がかけられたりといったやりとりが生じる場面も見られた。以下では、そのようなやりとりが生じた場面や、インタビューの中で親以外の立場の参加者の語りについて言及された部分を取り上げ、主に、7-3-1 で整理した【自分の子ども時代や家族の話】【子どもを理解する視点や関わり方】【少年や親との関わり】の3つのテーマの語りについて、語りがどのように受けとめられているか検討する。

まず、「非行」の体験者が、【自分の子ども時代や家族の話】をした際には、聞き手の親たちから様々な質問が出されて、やりとりが生じる場面が見られた。

〈抜粋 7-16〉 例会にて（フィールドノーツ X年 2ヶ月）

ギャンブル依存の問題を抱えていて、施設長の紹介で参加したというjさんの番になり、自分自身の体験として、ギャンブルにはまった経緯や、家族との関係、ギャンブルをなかなかやめられず、今は施設に入っているがギャンブルをしない自信はまだないといったことを語った。その後、親の立場である司会者や他の参加者から質問ややりとりがあった。「施設には何年いられるのか?」「親はお金を渡さない方がいいのか?」といった質問があり、jさんは「〇年間いられる」「親は自分にお金を渡さないようにしているし、その方がいい」などと答えて、jさんと他の参加者の間でやりとりがあった。別の参加者（親の立場）からは、jさんが「自分は母親がうっとうしかった、がんばろうとしているときにがんばれと言われるとやる気がなくなる。がんばれという言葉はつらい、無理しないで気長にやろうと言われると安心する」と話したことに触れて、「息子も『がんばれと言われるとつらい』と言う。がんばっているのに、まだ更生していないという目で見られるからだろうか。そういうところは（息子と）同じように感じた」といった話もあった。jさんは用事があるということで、終了時間の前に退出したが、他の参加者から、「貴重な話をありがとう」「また来てほしい」といった声かけがなされた。

〈抜粋 7-16〉は、ギャンブル依存の体験者が参加し、自分の体験を話したときの例会場面の様子である。ここでは、jさんの語りに対して、他の参加者が関心を持ち、様々な質問が出された。「そういうところは（息子と）同じように感じた」という感想が述べられているように、親の立場の参加者は、jさんの話を、子どもの様子と重ね合わせたり、共通点を見出したりしながら聞いていることが窺われる。jさんの場合に限らず、「非行」を体験した人の語りに対しては、親の立場の参加者から、「非行」をしていた時の気持ちや、親の対応の仕方など、様々な質問がなされることがあった。

また、インタビューの中では、「非行」の体験者や学生の話聞くことが、子どもの気持ちを



理解する上で良かったということが語られた。Aさんは、会でしばしば言われる「親はつらいけど子どもはもっとつらい」ということを理解する上で、体験者の話を聞く機会があったことが役立ったと言う。また、Bさんは、司会をするときには、学生にもできるだけ自分の話をしてもらうようにしているが、「非行」の体験に限らず、自分の子どもと年齢の近い学生の話を書くことは面白いと言う。

〈抜粋 7-17〉 Bさんインタビュー (2回目)

B: 学生さんも、「お勉強に来ました」って、お勉強に来る学生さんはたいていね、非行とは無縁のところから来る方多いから。そしたら、やっぱり自分の周りにいた、そういう子たちの話とか、その頃思ったこととか。そうすると、親の気持ちもこう響きやすいかなとか。でもほんとにね、学生さん、よく話してくれますよね。

IR: はい、そうですね。

B: 自分の話をね、うん。そうすると私たちからしてみたら、自分の子たちに年の近い子の思いを聞けるのは、すごくいいと思うので。ね、親の話しを聞いて、学生さんも、なんか思ってくれるものがあれば。(…)あの学生さんの話はすごく面白い。あの、学生さんとか若い子が話をしていると、親ってこうやって一生懸命聞いているでしょ。

IR: ああ、そうですね。

B: だからやっぱりいいと思う。あの全国集会なんかでも、若い人来てくれるし。そういうところで話してくれる、非行とは無縁の学生さんでも。やっぱりね、すごく私は、そういう若い人の話もいっぱい聞きたいし。自分の子からそんなにね、聞かないし。

例会の中では、自分では「非行」を体験していない学生も、子ども時代の体験や親に対する気持ちを語ることがあるが、こうした語りも、親の立場の参加者から関心を持って聞かれている。Bさんが、「自分の子からそんなにね、聞かないし」と述べているように、親が自分の子どもから、直接気持ちを聞く機会は多くはない。特に子どもが荒れているときには、コミュニケーションをとることで自分が困難な場合も多い。「非行」の体験者や学生の語りは、親の立場の参加者にとって、自分の子どもの声の代弁者のような意味を持ち、子どもの気持ちを想像したり、理解したりするきっかけの一つになっていると思われる。

また、インタビューでは、親以外の立場の参加者の【子どもを理解する視点や関わり方】についての語りが、子どもの気持ちを考えるきっかけになったということも語られた。

〈抜粋 7-18〉 Aさんインタビュー (1回目)

A: ただ、私が何度もこう例会で、参加して、私が話したことに対して、批判とかアドバイスではないんですけども、こうだったんじゃないとか、ああだったんじゃないとか、そういうふうにちょっとこう、意見っていうんですかね、そういうのをちょっといただいて。やっぱり自分がふっと気がついたこととか、そういうことってあったので。(…)私のためには、すごくそ

ういうちよつとした、一言っていうんですか、いただいた言葉。例えば〇〇先生（元代表）とか、〇〇先生（副代表）とかにいただく言葉ってやっぱりすごく、大きかったかなっていうふうに思いますね。

IR：ちょっともしかまわなければなんか、なんか一言のどんな感じ（笑）だったのか

A：えーちょっと具体的にはちょっと思い出せないですけど、やっぱりこう。そう、自分がつらくてしょうがないときは自分のその思いしか語ることができないんですけども、やっぱりそこで、そのときの非行をしている子ども自身の気持ちとか。そういうことをまだ他の第三者の人に、「こうだったんじゃない」っていうふうに言われることによって、やっぱりずいぶんはつと我に返ることとか、自分のことしか思いが及ばなかったの。その子どもの気持ちを考えるきっかけ作りっていうんですか、そういうふうにはなったと思いますね。

Aさんは、会に参加した専門職などの第三者の立場の人から、子ども自身の気持ちについて言及するような一言をもらったことが、子どもの気持ちを考えるきっかけになったと言う。Aさんが言うように、子どもが荒れているときは、親自身がつらくて、自分の思いを語ることしかできない場合が多い。専門職などの第三者が語る【子どもを理解する視点や関わり方】では、「非行」に走っている子ども自身もつらいといった、親からは気づきにくい子どもの気持ちや、それを基にした関わり方のアイデアが語られるため、それが子どもの気持ちを考えたり、気づいたりするきっかけになることもある。他のインタビューでも、親たちの会が開催した交流会や学習会などの場で、専門職が語った「子どもは多面体である（親や専門職から見えない面がたくさんある）」「ドアは中からしか開かない（親や第三者が外から無理やり開けることはできない）」といった言葉が印象に残り、子どもへの見方や関わり方が変化したということが語られた。

では、「非行」の体験者や学生が語る【自分の子ども時代や家族の話】や、専門職が語る【子どもを理解する視点や関わり方】は、親の語りの変化や、会のナラティブの構築にどのように影響しているのだろうか。第4章では、＜「非行」に巻き込まれる語り＞から、＜「非行」を捉え直す語り＞に語りが変化していく際の特徴の一つとして、子どもの視点が語りに含まれていくことを挙げた。「非行」の体験者や学生が語る【自分の子ども時代や家族の話】や、専門職が語る【子どもを理解する視点や関わり方】は、親が、子どもの気持ちに気づき、子どもの視点から状況を捉え直すきっかけとなる場合があり、語りの変化を媒介する要素の一つになっていると考えられる。また、これらの語りは、会のナラティブの中に、親の気持ちを語り、聞き合い、理解するというに加えて、「非行」に走っている子ども自身の気持ちについても考え、理解しようとする視点を持ち込み、会のナラティブの視点や意味づけに多層性や広がりをもたらしている。「親はつらいが子どもはもっとつらい」といった会のナラティブには、こうした視点の多層性が反映されていると考えられる。

さらに、親以外の立場の参加者が語る【少年や親との関わり】に対しても、親の立場の参加者から反応やコメントが寄せられた場面があった。次の〈抜粋 7-19〉は、筆者の語りであり、〈抜粋 7-20〉は、その時のフィールドノートである。筆者は、この例会の前に、会の事務所で勉強

を教えていた女の子から手紙を受け取り、その子との関わりや手紙をもらって嬉しかったことを話したが、話した後に、他の参加者から多くの言葉をかけてもらった。

〈抜粋 7-19〉 例会にて（通信）

k さん（大学院生）：この独特の例会の空気がいい。通信高校の非行の少女に勉強を教えてきた。初めて会った時は少女の化粧や格好にビックリした。17 歳には見えなかった。勉強もすっぽかされたり、寝ていたり、本当に驚くことがばかりだったが、何とか高校を卒業できた。その少女から手紙が来て、嬉しく思っている。希望した専門学校に進学し頑張っているようだ。

（記録係の人のコメント）k さんの話を聞いて、その少女が 1 年間 k さんと共に勉強できたことは、これからの人生の大きな自信になるだろうと思う。（…）皆でそんな子どもの『ガンバツテイルとき』を話し合いました。

〈抜粋 7-20〉 例会にて（フィールドノーツ X+3 年 2 ヶ月）

手紙の中で「(以前勉強したときの) ノートを見返したとき、あの頃の自分はんぼってたから、今、がんばれないことはないんだと、はげまされる」と書いてあり、彼女が自分で「がんばった」と思える体験になったことが嬉しいということと話したところ、その後に他の参加者（親）から以下のようないろいろな労いの言葉をかけてもらった。

l さん（親）：自分の娘も「あのとき高校受験頑張っていたよね」と言っていて、親から見るとえーっと思うが子どもなりに頑張っている。北村くんも頑張っていた。不思議な顔をして話を聞いて。勉強だけじゃなくて話も聞いていたよね。

m さん（記録・親）：すごくいい話。娘さんにとってすごくいい体験になった。親でもああいう子と向き合うのは大変。人生の方向が変わるような大きな体験。お母さんも感謝していると思う。

北村：僕も彼女に、ものさしが広がるというか、自分を広げてもらった。僕も忘れられない子。会に来てこういう体験ができて感謝。

n さん（司会・親）：北村さんもものさしを広げてもらったと言ったけど、支えるってそういうことだね。上から目線ではなくて。

o さん（親）：こうやって褒められると嬉しいよね、大人でも。

このときは、筆者も他の参加者から声をかけられる中で、自分の関わりを労われて嬉しい気持ちと共に、他の参加者にも自分の嬉しい想いが伝わり、他の参加者につながれたような感覚があった。ここで筆者は、「非行」傾向のある子どもに勉強を教えたり、話を聞いたりする、子どもと関わる人としての立場で話をしている。筆者が支援者として子どもと関わる時の立場は、当然親とは異なるが、子どもとの関わり方に悩んだり、子どもを理解しようとして苦労したりしているといった点では、親の体験や気持ちと重なる部分がある。〈抜粋 7-19〉における l さんの「親から見るとえーっと思うが子どもなりに頑張っている」や、m さんの「親でもああいう子と向

き合うのは大変」といった言葉かけの背景には、子どもとの関わりという共通点を基盤にした、親あるいは支援者といった立場の違いを越えた重なり合いが生じていたのではないかと考えられる。〈抜粋 7-18〉では、記録の人が「皆でそんな子どもの『ガンバッテイルとき』を話し合いました」と書いているように、この後、「(「非行」をしている) 子どもも頑張っている」ということが他の参加者からも話された。このように、親以外の立場の参加者の【少年や親との関わり】についての語りや、それを聞いた親の似たような体験についての語りを触発し、『非行』に走っている子どもも頑張っている」といった、会のナラティブが構築され、共有される一つのきっかけとなる場合もある。

7-3-1 では、【少年や親との関わり】の中で、会で聞く親の語りに関連づけながら、語り手自身の実践が振り返られる場合があることを述べた。専門職にとって、親の語りを聞くことは、自分の実践を振り返る機会となるが、他方で、専門職の実践についての語りや、親が自分の子どもに対する見方や、子どもとの関わりを振り返る機会になる場合もあると考えられる。こういった機会も、親の立場の参加者の視点を広げ、オルタナティブな語りの構築を促進する可能性を持つ。そして、『非行』に走っている子どもも頑張っている」という見方は、親という立場に限定されず、共有され得るものであるように、ここで構築され、共有されるナラティブは、親だけに当てはまるものではなく、専門職を含めた子どもに関わる人皆に当てはまるものとして、その射程範囲に広がりを持っている。このように、親以外の立場の人が語る【少年や親との関わり】は、会のナラティブを構築する触媒となったり、会のナラティブの射程を広げたりする意味を持つと考えられる。

### 7-3-3 語りの構築に影響する条件や文脈

7-3-2 では、親以外の立場の参加者の語りに対して、主に親の立場の参加者から反応や言及があった部分を取り上げ、それがどのように受けとめられ、語りの構築に影響しているかを見てきた。親以外の立場の参加者の語りは、親の立場の参加者にとって、子どもの気持ちや子どもに対する別の見方に気づくきっかけになることがあり、親の視点を広げ、オルタナティブな語りの構築を促進する可能性を持つと考えられる。

しかし、親以外の立場の参加者の関わりが、常に語りの構築を促進するとは限らない。さらに、場合によっては親以外の立場の参加者の言動が、親の立場の参加者を傷つけ、語りの構築を抑制する方向に働いてしまう可能性もある。筆者が参加していた例会では、親以外の立場の参加者の割合もそれほど多くはなく、その存在や語りによって、大きなトラブルが生じるような場面は見られなかった。ただ、会の学習会や全国交流集会などの場面で、親以外の立場の参加者と多く関わってきた H さん I さんへのインタビューの中では、親以外の立場の参加者、特に専門職の言動によって傷ついたというネガティブな体験も語られた。学習会や全国交流集会においても、グループでの語り合いの時間が設けられており、例会と同じやり方で実施されている。ただし、これらの会では、初めて参加する親以外の立場の参加者の割合も多く、よりオープンな特徴を持つため、

例会では見られないような刺激や関わりがもたらされる場合もある。そこで、ここでは、例会場面に限らずインタビューで語られた二種類の体験を取り上げて、それを参考にしながら、どのような場合に親以外の参加者との関わりの中で、語りの構築が抑制されたり、促進されたりするのかという点を検討する。

**傷つく体験** HさんIさんは、学習会の運営に携わる中で、行政や講師となる人など会の外部の人ともやり取りを行っているが、その中で、連絡をとっても返答をもらえず直前に仕事を断られたり、勝手に言葉を直されたりと、無理解な言葉や対応に傷つくことがしばしばあったと言う。そして、親であるHさんやIさんは言葉に敏感になっている分、特に親以外の立場の人の言葉に傷つくことが多いと言う。

〈抜粋 7-21〉 HさんIさんインタビュー

I: だからたぶんそういう意味ではこう、なんていうのかな、(親である自分たちは) すごく研ぎ澄まされている部分があるので、言葉とかに傷つくよね (笑) 親以外の人の言葉に

H: しょっちゅう泣いてるんだよ、だから (笑)

I: 普通の人がね、なんでもない言葉でも、こう研ぎ澄まされているので、たぶん言葉にすごい敏感なんじゃないかなって。だから相手はね、傷つけて言ったわけではないことでも、なんかこう傷ついちゃうっていうのはあるよね。向こうは何でもないことかもしれない。でもそういうことって大事。言葉を発するときって。言葉って戻せないから。だから考えて、aさんと向き合ってるときとbさんと向き合っているときと、考えながら言葉って発することってやっぱり大事だなんていうのは、すごい学んでますよね。

H: 自分もね

I: 自分自身も

〈抜粋 7-21〉でIさんは、相手に傷つけるつもりがなくても、傷ついてしまう場合があると話しているが、このように、親以外の立場の人が自覚なく、親を傷つける言葉を言ってしまう場合もあると思われる。ただ、HさんやIさんは、言葉で傷つく、傷つける可能性を親以外の立場の人から親に対する言葉に限定しているわけではなく、自分が言葉を発するときも含めて考えている。

また、親以外の立場の人との関わりの中で傷ついたり、嫌な思いをしたりした体験の一つとして、専門職から親として評価されることが語られた。

〈抜粋 7-22〉 HさんIさんインタビュー

I: (…)(全国交流集会で、少年院の教官と話したときに) 教官の人が、「ここに来ているお母さん達は特別ですよ、みたいに言われたんですよ。「特別なお母さんですよ」って言われて。「いや、もううちの方に面会に来る親は、金髪だし、外でタバコを吸って、そのまま吸殻をそこに落としておくし、もうどうしようもないですよ」っていう風に言われたときに、ああこ

の人わかってないなって (笑)。なんか学んでいってよ、みたいなさ。そういう親だって、やっぱりつらい思いしてるし、一生懸命がんばって生きてるしっていう。ああ、そこもまだこの教官の人は見えてないし、私たち特別じゃない。で、よく保護司さんもよく言うんですよ。特別だって言うんですよ

H : O (O という場所で開かれた学習会のこと) のときにね

I : O のときにも言われたし。「こういう私 (保護司である自分) が受け持っている親は全然ダメなんですよ。だからここ (親たちの会) に来ているお母さん、もうほんと特別ですよ。そうじゃない、みんな同じ。私もかつてはそうだったし、そういう目でなんか見てるっていうのが、とてもその専門家の人たちが。それはなんかすごく嫌だと思っし、そうじゃないんだっていうことをなんか伝えたいし。特別じゃないんだって、私特別じゃないしみたいな、同じです。そこもなんか伝えたいなっていうのはありますよね、すごく

H : だいたい評価するっていうのが間違っているよね、根本的に。合ってる合っていない、できてきてない。人間をね。

I : そう、去年か一昨年のやっぱり保護司さん、(…) びっくりしたのは、A から段階で A,B,C で非行の子をもった親は、こういう親は A で、こういう親は B で、こういう親は C でみたいにすごい評価したんです。そのときは猛烈に (笑) ちょっと言ってしまいましたけど、そうやって非行の親に A,B,C,D みたいなね。少年院に面会に来ないのは C みたいなさ (笑)。こういうところにね、こういう全国交流集会みたいなところに出る子の親は A

IR : …それは・

H : だから理解じゃなくて評価するっていうのは明らかに立ち位置が違う

IR : そうですね

I : それはちょっと私も許せないっていうか、そうじゃないんだっていうことはちょっと伝えさせてもらいましたけど。評価しないでほしいっていうことだけは伝えましたけど。みんな一緒ですって (笑)、同じですって、ここに来られない事情もあるんですって (笑)

親を A,B,C,D と段階をつけて評価するというのはやや極端な場合であるが、「ここに来ているお母さん達は特別ですよ」という言い方にも、親を評価し、区別する視点が含まれている。親たちの会に参加している親は"良い"親であり、参加しない親は"ダメ"な親というような見方である。こうした発言をした少年院の教官や保護司からすると、普段仕事のときに接している親たちの姿と、会の場で出会った親たちの姿が異なって見えて、「特別」という言葉が出てきたのかもしれない、悪気があったわけではないかもしれない。しかし、集まりに参加する親は「特別」であり、金髪でタバコを吸って吸い殻を捨てていく親は「どうしようもない」と評価してしまうと、それ以上にその人への理解を深めていくことはできなくなってしまう。I さんが「私もかつてはそうだった」と言うように、現在、会に参加している親も、参加できなかった時期があったり、子どもに上手く関われなかったり、つらく苦しんだ体験をしている。逆に、突っ張っているように見える親も、同様につらい思いを抱えながら頑張っているかもしれない。「特別」あるいは「ど

うしようもない」と親を評価することは、その人の気持ちや状況、そこに至る過程などを理解しようとすることなく、親を決めつけることにつながってしまう。また、評価するという行為は、親を外部から対象化し、特定の評価規範に当てはめる一方的な行為である。

Iさんは、親以外の立場にある専門職や支援者には、評価ではなく、理解する努力をしてほしいと言う。

#### 〈抜粋 7-23〉 Hさん Iさんインタビュー

I: (… ) 少しでも息子のことを理解するというこの努力は、やっぱりこの会ですごく学んで。理解できてるって言ったら、それはできてないって私はまだ思ってるから、それは一生たぶん学ぶことかもしれないけど、それはやっぱりこの会でこう学ばせてもらっていることで、要するに支援っていうのもやっぱりそこだと思うんですね。そののなんていうのかな、理解する気持ち、学んでちゃんとこう理解してくれなくてもいいから、その理解をしようという気持ちっていうか努力というか、そういうことを親以外の人には、なんていうのかな、それをしてほしいじゃないけど、そういう場であるんじゃないかなって、この会はって思っていて。やっぱり伝えること。だからわかってもらいたいっていう思いは強いかなっていう。

ここでは、Iさん自身も、子どものことをまだ十分に理解できていないが、理解しようと努力していることが述べられ、親以外の立場の人も、親の気持ちを理解できなくてもいいので、理解しようという気持ちを持ち、その努力をしてほしいという願いが語られている。HさんとIさんは、学習会を開催している中で、①情報を知らせたい、②参加した親を温かい気持ちにしたいということに加え、③親以外の人に理解してほしい、わかってほしいという気持ちが強くなってきたと話す。そして実際、親の気持ちや体験を話すことで、学習会に参加した保護司や鑑別所の職員などの専門家から「親の気持ちを聞けてすごく良かった」と言われることも多いと言う。

これに対して、〈抜粋 7-22〉でHさんが言うように、良い・悪いと親を上から評価する姿勢は、学ぼう・理解しようとする姿勢とは立ち位置が異なっている。親の立場の参加者にとっては、評価する目線で見られること自体が嫌な体験になり、自由に自分の気持ちを語ることが難しくなる。専門職がこのような評価する姿勢で参加していると、オルタナティブな語りの構築が阻害されると考えられる。

**つながる体験** 一方で、HさんIさんへのインタビューの中では、会に関わる親以外の立場の人とつながる感覚を持ったという体験も語られた。講師の言葉や体験談が印象的で心に残ったことや、講師と学習会の打ち合わせをしているときにお互いに納得し合える感覚を持てたことが多くあったと言う。次の抜粋は、そのような例の一つで、依存の問題を専門としている講師2人と、講演のテーマや内容について打ち合わせをしていたときの様子について語られたものである。

#### 〈抜粋 7-24〉 Hさん Iさんインタビュー

I: で、××さんの場合は、失敗から学んだことは、なんていうのかな、みんな違うじゃない、それぞれ違うのに同じマニュアルでやるっていうのはおかしくて、失敗をしたというのはその発達障がいをもった若者が来たときに、やっぱりそう思ったんですって。「なんでみんながわかることがなんでこの子には伝わらないんだろう」っていうのから、発達障がいっていうのを親に聞いて、「ああ、そっか」って。

H: お母さんが甘やかしすぎてるんだって思ったけど、やっぱりできないものはできない。

I: 甘やかしてるとか、最初はそうやって親を批判したりして。その話をやっぱりしてくれたんですよね。その失敗から学んだこと。「その子の持った特性みたいなものをやっぱりちゃんと見なきゃいけないっていうのを思い知らされた」っていうようなことを言ってましたよね。だから発達障がいの子でいっぱい学んだんだと思います、××さんは。

H: なんか打ち合わせしてて、「ああそうそう」っていう。なんていうか、相手は先生だし、こっちは親なんだけど、なんかすどんってお互い落ちるような、話をしている落ちるようなところがあって、そこを話してほしいなってお願いをするんですよ。

I: そう、だからなんか専門家って、こう打ち合わせをしたときに専門家っていう眼じゃなくて、なんていうの、人間同士みたい。人間として、みたいところで4人で話したので、人生みたいな(笑)。そんなことで話したので、ここはすごく良かったですよ。その中でこういうテーマをお二人が示してくれてね。すごいいいなあと思って。

ここでは、講演のテーマとして「失敗から学んだこと」というテーマが示され、専門家自身が失敗しながら学んできた体験が話された。「すどんってお互い落ちる」、「人間同士」という表現がなされているように、この話は、専門家や親という立場の違いを越えて分かり合い、共有できるものであったと思われる。HさんやIさんは、講演の時には、そのような立場の違いを超えて共有できる話をしてほしいとお願ひしているという。

他方で、専門職の講演が、親が求めているものと異なる場合もある。ある学習会では、学校の授業のように、参加者がプリントの空欄を埋めながら話を聞くやり方で講演が行われたときがあった。その時は、Iさんは、講師の先生が言っていることはよくわかるが、講演の進め方が上から目線に感じたと話している。講演中も、プリントに答えを書き込むことに必死で、ゆっくり話を聴いて、身を噛みしめることができなかったと言う。そのような講演は、専門的な知識を伝えるという意味では、効率的で分かりやすいと思われる。しかし、HさんやIさんのような親の立場の参加者が求めているものは、マニュアル的な専門的知識を一方的に教えてもらうことではなく、前述したような「すどんってお互い落ちる」話であり、自分自身の経験とつながり、響き合うような体験を共有し、学び合うことではないかと考えられる。これらのエピソードは、学習会における講演の内容についてのものだが、例会の中での専門職の語りにも重なると思われる。すなわち、専門職に求められていることは、一方的な知識の教授ではなく、自分自身の失敗や学びの体験をオープンに語り、それを分かち合うことでないかと思われる。

Hさんは、このような体験を「通じる」「つながる」という言葉で表現している。



〈抜粋 7-25〉 H さん I さんインタビュー

H：私でも支援とかそういうんじゃないで、通じるっていう

IR：通じる。

H：その通じる材料は、一般的に考えられている、こう非行っていう、あつてはならないことみたいな感じがするけど、でもやっぱりなんていうのかな、そういうとっても大きな、なんていうかどうしたらとか、どうやって生きていったらいいのかとか、そういうなんか揺さぶるような体験っていうのは。それがマイナス、例えば病気とかね、心臓病を患った人は、心臓病を患った人同士でしか通じない何かがあるだろうし、そこに治してくれたお医者さんとか関わることもあるだろうから。私にとっては、その、非行の子を育てたっていうか、一緒に暮らしたっていうのがすごい大きな経験で、それが他の人とつながる、なんていうか、手段と言うと変だけど、つながる大切な経験なのね。それは、誰とつながるかっていうと、同じ経験をした人とは一番つながりやすいけど、でもそれに関心を寄せてくれる人とも、どういう立場であれ、その点だったら男だろうが女だろうが、立場とかその位置みたいなのが違っても、そこでなら、人間同士としてつながれる大切なところだと思っているので、それはやっぱり自分の、まあ失敗だったり、至らなさだったりも含んでいるけど、そこが勉強したいとか、学びたいとかいう、なんか炎みたいなものだし、誰かとつながる道でもあるなと思っているから、うん、大事にしたいと思ってる。

IR：でもじゃあやられてきて、やっぱりその通じるとか、そういう感覚っていうか。それはたぶん講演に来た方かもしれないし、それを聞きに来た人かもしれないし、うん

H：なんかその通じたって思ったときに、一番なんか、楽しいとか嬉しいとかじゃなくて、なんかこうすとんって。なんか生まれて良かったみたいな（笑）良かったなみたいな。なんかそういうような感じがするよ。

ここで H さんは、「非行」の子どもと暮らした経験は、自分が揺さぶられる大きな体験であるが、それが他の人とつながる道にもなっていると言う。ここで、「つながる」「通じる」というのは、相手の話が単に理解できるということに留まらず、自分自身が経験したと響き合うという意味を含んでいるのではないかと思われる。そして、この「つながる」「通じる」感覚は、相手の語りに影響を受けて、自分の見方や語りが変化する 1 つの条件になっているのではないかと思われる。7-3-2 では、親以外の立場の参加者の語りが、親の立場の参加者の視点を多様化し、オルタナティブな語りの構築を促進する可能性があるとして述べたが、それは、聞き手である親自身の経験と「つながった」ときに、生じやすくなると思われる。C さんも、インタビューの中で、専門職が語った【子どもを理解する視点や関わり方】の話が、何かあったときに、自分の体験とつながっていく中で、子どもへの見方が変化していったと話していた。

〈抜粋 7-26〉 C さんインタビュー（2 回目）

IR：ああ、じゃあそういう話があって、まあそのときはああそうかっていう感じで、その多面体っていう話もまあ、思って、思って

C：思ったけど、でも私にはこっちの面しか見えないしみたいなの。(…) そのときには、ほんとその通りねっていうところまでいかないんだけど、なんかこうひっかかりながら、そうなのかなあって思いながら、だんだんこうじわじわーって、ああこれがそういうことなのかなあって、思えるようになってきたのにすごく似ているかなって、多面体の話 (…)

IR：そのいつもいつも意識っていうより、なんかどっかにちょっとひっかかったりして残っているのが

C：でもすごく強烈にちゃんといろんなことがとか、いろんなものが残ってて、何かあると、こう、ああ、こういうことかなあって、こうつながる (笑) みたいな

ここで、Cさんは、「子どもは多面体である」という専門職の語りが、そのときは完全には理解できなかったが、後から少しずつ自分の体験とつながっていったことを話している。このように、他者の語りが後から自分の体験とつながる場合もある。

また、〈抜粋 7-25〉でHさんは、相手として一番つながりやすいのは、同じように「非行」の子どもと暮らした体験をした親ではあるが、それに限らず、関心を寄せてくれる人であれば違った立場の人であってもつながることができるという。ここでも〈抜粋 7-24〉と同様に「人間同士としてつながれる」という表現がされており、そのつながりは親や専門家といった立場を超えたところで生じるものとされている。SHGでは、同じ体験をしたもの同士だからこそ、分かり合え、気持ちや体験を分かち合えるというのが基本的な考え方であるが(岡,1999)、ここでは、それを超えたつながりの可能性が示されている。

例会の中でも、「非行」を体験した参加者が、自分自身の体験を語った後に、「親の話をお聴いて、両親の気持ちや思いを考えられるようになった。例会に参加している人たちの顔を見ると“母の人生を無茶苦茶にしたんだ”という思いが強くなった」と涙ながらに語り、それを聞いた親や学生、専門職などの参加者たちも思わず涙を流す場面があった。このような場面では、「非行」の体験者、親、学生、専門職といった立場の違いを越えて、語り手の親に対する気持ちや、親の子どもへの思いが共有され、気持ちや体験の分かち合いが生じていると思われる。

**語りの構築を促進する関わり方** Hさん Iさんのインタビューで語られた傷つく体験やつながる体験は、例会以外の場面の体験も多く含まれているが、例会での親以外の参加者の関わりや、どのような関わり方が語りの構築を促進するかを考える上で役立つと考えられる。

まず、専門職などの親以外の参加者が、親を評価するような語りや関わり方をしてしまうと、語りの構築が阻害される可能性が高い。7-3-1では、親以外の立場の参加者は、語りを聞くことで自分自身が学ぶという姿勢をとっていることを述べた。親に対して何かをしてあげるという姿勢ではなく、自分自身が学ぶ主体として参加するということは、評価を行う立場に自分を置くことを避け、自由な語りの構築を阻害しないためにも重要であると思われる。

また、親以外の立場の参加者が自分の話をするということにも意味がある。親以外の立場の参加者が

らすると、自分の話をすることに難しさを感じる場合もある。例会では、親以外の立場の参加者が、「何を話したらいいかわからないのですが」「あまり話すことがないのですけれど」などと前置きをしてから話す場面もしばしば見られた。臨床心理士の G さんも、インタビューの際に、例会で自分が何を話すかということにはとても困ると話していた。筆者自身も、自分は「非行」と呼べるような体験がないため、特に会に参加し始めた頃は、どのような話をしているかわからず、戸惑うことが多かった。

しかし、どのような話であれ、親以外の立場の参加者が、自分自身の気持ちや体験を語るということは、〈抜粋 7-15〉で見たように、親の立場の参加者を安心させることにつながる。これは、【立場の表明】によって、その人がどういう立場の人で、なぜ会に参加したかが分かるということに留まらない。親以外の立場の参加者も、【自分の子ども時代や家族の話】や【少年や親との関わり】の中で、自分自身の苦しさや悩みなどを語る。時には、「非行」とはあまり関係のない悩みが語られる場合もあるが、そのような話も関心を持って共感的に聞かれる。次の抜粋は、若手の臨床心理士の参加者が、「子どもの立場から話をします」と言って、父のリハビリに関わる悩みについて語ったものである。

#### 〈抜粋 7-27〉 例会にて（通信）

（臨床心理士）父が倒れ、手術をして意識は回復し、半年ほど専門病院でリハビリをやったが思うように動けない。家には戻ったが父はリハビリをしない。医師からはここ半年が機能回復の勝負と言われているのに、本人は受け入れていないのか「痛い」と言ってやらない。母とも衝突し、母の方が持たなそう。家族としては焦るし、もどかしい。本人もつらいのだろうが、家族はギリギリだ。自分も、親の介護についてはいずれとは思っていたが、仕事が軌道に乗りにかけたこのタイミングとは思ってなくて、とても心が穏やかではいられない。今日はこの例会で、話をきいてもらおうと思ってきたが、やはり、来てよかった。

このときも、語りの後に、他の参加者から、「家族だけでは支えられないよね」「お父さんも痛いからやらないよね」「(苦しい気持ちを) 吐き出しに来てくれて良かったよ」などとたくさんの言葉かけがなされた。家族の似たような体験を話す参加者もあり、語り手も「来て良かった」と話していた。悩みの種類は違うものの、家族に関する自分自身の悩みを吐き出し、他の参加者に話を聴いてもらうというあり方は、親たちが会に参加するあり方と共通している。

このように自分自身の体験を語るときには、親以外の立場の参加者自身が、自分の体験を素材にして、語りの構築に関与することになる。傍観的な関わり方や、親を観察・評価する姿勢ではなく、同じように自分自身の体験を語るという参加のあり方が、親に安心感を与えるのではないかと思われる。また、親以外の立場の参加者が、自分の体験を語ることは、7-3-2 で述べた立場を越えたつながりや体験の重なり合いを生じさせることにもつながり、親の語りの構築にも影響を及ぼす。親以外の立場の参加者も、親と同様に、自分自身が学ぶ主体として、また、語る主体として参加するというあり方が、親の語りの構築を阻害せず、促進する上では重要であると考え

られる。

## 第4節 まとめ

---

前節では、親以外の立場の参加者が、様々な形でグループにおける語りの構築に関与していることが明らかになった。親以外の立場の参加者は、親の語りを聞いて学ぶことに加え、自分自身の体験を語り、主体的に語りの構築に関与していた。そして、そこでは、立場の違いを越えたつながりや体験の重なり合いが生じ、親以外の立場の参加者も、ある種の当事者性を持って語りの構築に参加している場合が見られた。この点は、親たちの会における重要な特徴と考えられる。そこで本節では、まず、親以外の立場の参加者の関与のあり方を当事者性という観点から検討する。そして、それが親たちの会における語りの構築にどのような影響を及ぼしているのかを整理する。また、親たちの会において、専門職は、どのような専門性を発揮しているのかという点も合わせて考察する。

### 7-4-1 親たちの会における当事者性

まず、親以外の立場の参加者の関わり方を当事者性という観点から検討する。本章では、ここまで当事者／非当事者という用語を用いてこなかったが、SHGにおいては、同じ体験をし、共通した問題を抱えている本人たちのことを当事者と呼び、それ以外の参加者を非当事者と呼ぶことがある（岡・Borkman, 2011; 石川, 2005 など）。親たちの会で言えば、子どもの「非行」の問題で参加した親が当事者であり、それ以外の立場の人は非当事者ということになる。

SHGは、同じ体験をした人や同じ立場の人が集まることに意義や価値があるため、当事者であることが重要な意味を持つ場である。親たちの会の例会の中でも、第3章や第5章で見たように、語り手に対して、聞き手から共感や理解の言葉がかけられる場面や、笑いが共有される場面が見られた。会に参加した親は、同じ体験をした人の語りを聞いたり、同じ立場の聞き手から共感的な反応を受けたりする中で、「一人ではない」という気持ちや「わかってもらえる」という安心感を持ち、それが自由に自分の気持ちを吐き出し、語りを構築していくための基盤となっていた。SHGは、同じ体験をした当事者同士であるからこそ、安心して自由にお互いの気持ちや情報、考え方などをわかちあえるという特徴があり（岡, 1999）、親たちの会においても、それは同様である。しかし、本研究の結果では、親という立場の参加者同士の間だけでなく、親以外の立場の参加者との間においても、Hさんが「通じる」「つながる」という言葉で表現したように、気持ちや考え方のわかちあいが生じる場面が見られた。このような当事者／非当事者という立場の違いを越えたつながりや、わかちあいはどのように成立しているのだろうか。

石川（2005）は、当事者ではなく「ひきこもり」に関わる人々が、“現場”にいる根拠を説明し、正当化していくやり方を検討しているが、その一つとして、“当事者／非・当事者”という区別を無効化することを挙げている。それは、自分をひきこもっている当事者と単純に同化するのではなく、“ひきこもっている彼ら／ひきこもっていない私”という線引き自体を解消し、“若

者”や“人間”，“現代社会の成員”といったより広範なカテゴリーに位置づけなおすことによって，当事者との同質性を確保するというやり方である。

親たちの会における，親以外の立場の参加者の語りや振舞いにも，これと似た部分が見られる。例えば，専門職の参加者が，自分の子どもの問題や子育てでの悩みや，仕事で子どもと関わる中での苦勞を語るときには，語り手は，“子どものことで悩む親”や“思春期・青年期の子どもとの関わりで苦勞している人”といった，ある側面では，親の立場の参加者と共通するポジションに立っている。また，「非行」の体験者や学生が，自分の体験や家族との関係について語るときにも，親の視点か子どもの視点かという意味で語りの視点は異なるが，“「非行」に関わる自分の体験を語る”“自分の家族の問題を語る”といった点では，親の立場の参加者と重なる部分がある。さらに，より広い意味では，“会に参加して学ぶ”という姿勢や，“自分自身の体験や悩みを語る”という姿勢も，親の立場の参加者と共通している。親以外の立場の参加者は，“親として子どもの「非行」について悩む”という体験を持たず，同じ体験をしているという意味での当事者にはなれないが，親と何らかの形で共通し，つながりを持つようなポジションに立つことで，『非行』について悩む親」という属性とは別の形の当事者性を獲得し，会に参加することが可能になっているのではないかと思われる。

阪本（2007）は，「当事者」という言葉は，ある体験世界を特別視して閉鎖的に囲い込み，越境不可能な「内側」という領域を切り分けかねないと指摘する。すなわち，「内側（当事者）」と「外側（非当事者）」の画限をもたらし，「（当事者ではない）あなたには関係がない」「あなたにはどうてわかりっこない」などという形で，内側と外側を分断し，「外側」を排除する力を生む可能性がある。阪本は，「きんしゃい通り商店街」という場所における自身の体験を振り返り，当事者という言葉，個人的属性のようなカテゴリー的区分を越えて，「同じ＜場所＞にいること」として場所論的に再考している。この「同じ＜場所＞にいる」とは，ただ同じ場所に身を置くという意味や，何かの立場でくられるようなものではない。その局面において，商店街の「よそ者」（outsider）ではなく，「商店街の人」（insider）として存在していたということであり，＜場所＞の生きられ方の問題，実在の様態を意味している。そして，「当事者」という言葉を，個人的に与えられている権利や資格あるいは宿命のようなものに結びつけることを離れ，当該の問題（問い）をただならぬおのれの問題として抱えざるをえない＜場所＞に存在していることとしてとらえることで，より多くの人が立ち寄り対話できる問題へと開かれるのではないかと論じている。

このように場所論的に当事者性を捉えることは，親たちの会における親以外の立場の参加者の関わり方を考える上でも示唆的である。グループの「内側」にいるのか，「外側」にいるのかという画限は，その場の生きられ方によって決まるものであり，局面に応じて変わるものである。親の語りを傍観したり，評価したりするような姿勢で参加をしているときには，親の立場の参加者と「同じ＜場所＞にいる」ことにはならない。しかし，“会に参加することで自分自身が学ぶ”“自分自身の体験や悩みを語る”といった，阪本の言う「当該の問題（問い）をただならぬおのれの問題として抱えざるをえない」という姿勢で参加したときに，親以外の立場の参加者も，場

の当事者として、親と対等な立場で語りの構築に関わることが可能になると思われる。親たちの会においては、そのような、当事者である親／非当事者である親以外の立場の参加者、という区分けを越えた当事者性の拡張が生じており、「非行」という問題について、多くの人が対話できる場が作られていると考えられる。

#### 7-4-2 語りの構築プロセスへの影響

次に、前項で見た親以外の立場の参加者の関与やそのあり方が、親たちの会における語りの構築プロセスや、グループのナラティブに対して、どのような影響をもたらしているのかを整理する。

まず、親以外の立場の参加者は、親の語りを聞き、そこから自分自身が学ぶことによって、構築される語りを価値づけている。これは、直接的な語りの構築プロセスへの関与ではないが、親の個別の語りや会のナラティブが、親以外の立場の人にとっても聴かれ、共有される価値があることを示し、語りの構築をエンパワーしたり、構築されたナラティブの射程を拡げたりする意味を持つと考えられる。第3章のアンケート調査の結果でも見られたように、学校や相談機関などでは、教師や相談員などの専門職から責められたり、批判されたりする体験をしている親も多い。しかし、専門職も、自分自身が学ぶという姿勢で参加することで、構築される語りの聞き手・受け手となることができる。こうした関与は、親の立場の参加者に、専門職からも語りを尊重される感覚や、〈抜粋 7-23〉でIさんが話していたような親以外の立場の人にも理解してほしいという気持ちを生じさせることにつながり、間接的に親の語りの構築を促す意味を持っていると考えられる。ナラティブ・アプローチにおいては、新しく作られたオルタナティブなストーリーの聞き手のことを「好意的な聴衆 (appreciative audience)」と呼ぶ (Winslade & Monk, 1999/2001; 野口, 2005)。オルタナティブなストーリーは、誰かに向かって語られることではじめて「社会的現実」となり、そのリアリティは、語りを「理解し評価する」ひとびとの存在に支えられている (野口, 2005)。親以外の立場の参加者も、親の立場の参加者ととも、語りの聞き手となることで、構築されたオルタナティブな語りのリアリティを支えていると考えられる。

さらに、親たちの会におけるより重要な特徴として、親以外の立場の参加者が語りの構築に当事者性をもって加わることにより、グループのナラティブが、多様な視点を内包した豊かなものになっているということが考えられる。「非行」の体験者や学生の語りは、親の視点からは気づきにくい、思春期・青年期の葛藤や親への思いを提起する。また、専門職の語りは、親とは違った立場からの子どもに対する見方や、関わりの体験をグループへと持ち込む。これらの語りによって、会のナラティブは、親の視点に加えて、子どもの視点や、第三者や支援者の視点を含み込み、より多様な意味づけに開かれたものになっていると考えられる。会に参加している親にとっては、他の親の参加者の語りに加えて、こうした親以外の立場の参加者の語りも、子どもの「非行」や自分自身の体験の意味づけを拡げていく際の資源となると考えられる。

佐藤 (2008) は、SHG においてピアの話を聴くことから生じる自分自身に対する効果として、定着した自己の物語の固定性に裂け目を生じさせ、物語を持続的に語り直していく生成への端緒

を活性化させる点を挙げている。松田（2010）は、これを踏まえ、他の人の物語と自分の物語の部分的な重なりから生じる共感を「響き」と呼び、それが通路となって、新しい体系との「出会い」が生じ、自分自身の物語の固定性に裂け目が生じると考察している。こうした物語の重なり合いや「響き」は、SHG では同じ体験をした本人同士であることによって生じやすくなる。しかし、親たちの会においては、親以外の立場の参加者も、自分自身の体験を語り、親と何らかの形で共通し、つながりを持つようなポジションに立つことで、「響き」が生じる場合がある。松田（2010）は、共感や「響き」は、両者がまったく同じ物語を生きていることの確認としての意味を持つのではなく、異質な物語との「出会い」のきっかけを提供するという意味を持つという。親以外の立場の参加者の語りは、ピアである親の語りに比べ、物語の異質性も大きいのが、定着した物語の固定性に裂け目を生じさせ、新たな語りの構築を活性化させる可能性も持つと考えられる。

#### 7-4-3 親たちの会に関わる専門職の専門性

専門職が SHG に関わる際には、SHG の文化や自律性を尊重することが求められる（岡・Borkman,2011; 影山,2002 など）。そのような専門職のあり方として、例えば、岡・Borkman（2011）は、SHG のメンバーではないが、SHG の自律性と優れた点を認める専門職や行政担当者等のことをセルフヘルプ・サポーターと呼び、その役割として、SHG の独立性と自律性を尊重し、グループ自身が必要と感じた支援を行うことや、SHG が公共の場でもっと発言できるように支援をしていくことなどを挙げている。また、その際に重要なこととして、SHG から学ぶこと、治療的ではなく仲介的役割を取ることを挙げている<sup>29</sup>。ここでは、専門職がグループの外側に位置し、その自律性を尊重しつつ、グループから学んだり、必要に応じたサポートを行ったりして、グループと社会をつなぐような役割を担うことが想定されていると思われる。ここで求められる専門性は、SHG の意義や特徴を理解し、尊重できる態度や、自らの知識、資源、スキルを SHG が利用できるようにし、SHG が社会的なサービスや資源を利用できるように仲介していく能力である（岡・Borkman,2011）。

親たちの会においても、このような専門性は大切な役割を果たしている。専門職は、必要があるときに専門的な知識を伝えたり、親の語りから学び、それを自分の仕事や活動に活かす中で社会に伝えていったりする役割を担う。また、その際には、親の語りを尊重し、会をコントロールしたり、会の中心を占めてしまったりすることで、親が参加しづらい、語りづらいという状況が生じないようにしなければならない。このような関わり方を図にすると図 7-1 のようになる。

---

<sup>29</sup> 岡・Borkman（2011）では、ソーシャルワーカーを念頭において議論がなされているが、他の専門職においても、SHG から学ぶことや仲介的役割をとることはあり得ると思われる。

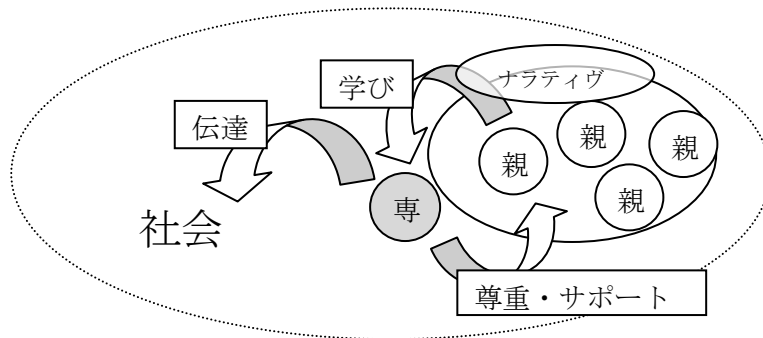


図 7-1 専門職の関わり方①

しかし、親たちの会における専門職の関わり方は、図 7-1 のようなグループの外側からの関わりだけには留まらない。親たちの会では、専門職も、親と対等な立場で語り合いに参加し、グループのナラティブの構築に共同して関わっている。そこで求められる専門性とはどのようなものだろうか。

会の副代表であり、元家庭裁判所調査官である浅川（2010）は、長く会に参加している先輩の親や、専門家が例会の中で果たすべき役割として、「吐き出し合い、耳を傾け合い、共感し合い、学び合うこと」を率先して行い、場の雰囲気を作り出し、維持し続けることを挙げる。また、その際には、人の話に真剣に耳を傾けて、追体験を試み、感情移入に努力することなどを通して、「人の苦悩を共感的に理解する、その姿勢や、その場面で発揮され得る専門性(共感がより深く、的を射ていること)」が求められると言う。

前項では、親以外の立場の参加者の語りも、親がオルタナティブな物語を構築していく際の資源となる場合があると述べたが、そのためには、それが親の体験とつながり、響き合うものである必要がある。松田（2010）は、物語の重なり合いによる「響き」は、他の人の物語に登場する人びとやことがらを置き換えてみることによって生じると言う。「響き」を生じさせるためには、自分自身の語りや体験と、他の参加者の語りや体験を重ね合わせていくが必要になる。具体的には、語るときには、他の参加者ともつながるような自分自身の体験を語り、話を聞くときには、第三者の目線で語り手を分析・評価するのではなく、自分自身の体験や課題と重ね合わせながら相手の語りを理解しようとしていく姿勢である。このように親と同じ姿勢で、専門職が参加していくことで、本研究で見たような親・専門職といった立場の違いを超えたつながりが生じ、会のナラティブが豊かになっていくと考えられる（図 7-2）。ここで必要となる専門性とは、専門職自身も、親と同様に「語る」「聴く」「共感する」「学ぶ」ことを行いながら、親の立場の参加者が自由に語りを構築できる場を壊さず、共に作っていく態度や能力である。



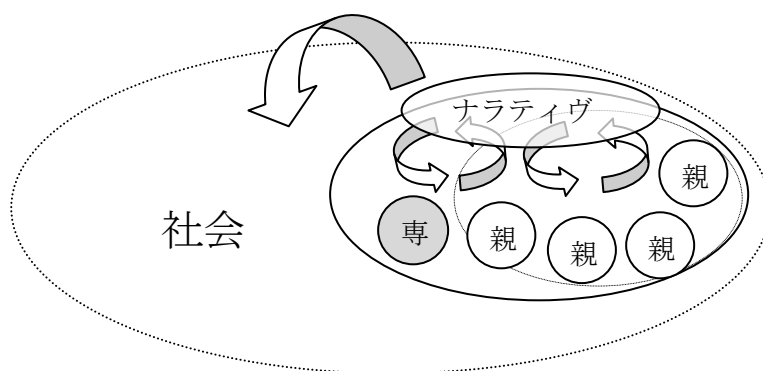


図 7-2 専門職の関わり方②

松田（2000）は、専門職と SHG との関わり方の態様として、SHG に「ついて」学ぶことと、SHG と「ともに」学ぶことを区別して論じている。SHG に「ついて」学ぶとは、SHG の外側から、専門職者として用いている言葉を用いて SHG で生じていることがらを分析し、理解することである。一方、SHG と「ともに」学ぶとは、SHG のメンバーが用いている言葉を使って自分自身のあり方について問い直すことであり、メンバーの物語と自分自身の物語を重ね合わせることで共感し、自分自身の物語を書き換えることであるとする。図 7-2 のように、親と共にナラティブを構築していくあり方は、松田の言う SHG と「ともに」学ぶ関わりと重なるものである。ただし、松田（2000）は、SHG と「ともに」学ぶ過程では、専門職者として SHG に関わるのではなく、他のメンバーと同じ、生活上の課題を抱える一人の人間として SHG に関わる必要とされると言う。そして、専門職が自分の抱える問題に気づき、メンバーとして SHG に参加することを勧めている。松田の言うように、仕事や専門性から離れて、自分の生活上の課題をテーマとしている SHG を探して参加するというのも一つのやり方である。ただし、本研究の結果からは、その問題の狭義の当事者に限らず、専門職も一定の構えをとることで、SHG と「ともに」学ぶことも可能ではないかと考えられる。もちろん、これは、SHG が扱っている問題の種類や運営の仕方にもよるところも大きい。親たちの会の場合は、「非行」という、親子関係や教育、社会の問題にもつながり得る、広がりを持った社会的現象をテーマとしており、親以外の立場の参加者も歓迎するという運営の仕方をしているため、専門職も親とともに学んでいくことが可能になっていると思われる。

#### 7-4-4 本研究の意義と課題

本研究では、「非行」と向きあう親たちの会において、親以外の立場の参加者が、語りの構築にどのように関与しているのかという点を検討してきた。親たちの会においては、親以外の立場の参加者も、当事者性をもって語りの構築に関わっており、それが語りの構築を活性化させ、会のナラティブを豊かにしていく意義を持つことが考察された。このような関与の仕方が成り立つ背景には、会が作られた経緯や運営の仕方、「非行」というテーマの特徴などが関係していると思われる。SHG においては、問題を抱えた本人以外の参加者も何らかの形でグループのナラテ

ィヴの構築に関わり、影響を及ぼしていると考えられるが、本研究の知見が、他の SHG にどの程度当てはまるかは今後検討が必要である。

また本研究では、専門職の SHG への関わり方として、図 7-1 のようなグループを外側からサポートするような関わり方に加えて、図 7-2 で表したように、グループの中に入って親と共にナラティブを構築していく関わり方を提示した。ただし、この 2 つの関わり方は、互いに排他的なものではない。親たちの会に関わっている専門職も、状況や場面に応じて、両方の関わり方をしていると思われる。本研究では、十分に取り上げられなかったが、F さんや、G さんのインタビューを見ると、専門職の会に対する関わり方は多様であり、また、時間が経つ中で変化していくことが考えられる。筆者も、会に参加し始めたときは、何を話せばいいかわからず、一方的に学ぶことしかできていなかったが、会に参加している中で、少しずつ図 7-2 のような SHG と「ともに」学ぶあり方に慣れていったように感じている。専門職の関わりの変化や多様性についても、今後検討していきたい。

## 第 4 部 総括

第 4 部では、まず、第 8 章で、第 1 部で提出したリサーチクエスチョンに答えながら本研究の結果をまとめ、「非行」と向き合う親たちの SHG が、ナラティブ・コミュニティとしてどのような特徴や機能を持っているのかについて検討する。また、第 9 章では、本研究の知見が臨床心理学や SHG 研究においてどのような意義があるのかということを検討し、本研究の限界と今後の課題について論じる。

## 第 8 章 本研究のまとめ

### ——「非行」と向き合う親たちの SHG の特徴と機能——

#### 第 1 節 本研究のまとめ

---

第 1 部では、本研究の目的として、「非行」と向き合う親たちの SHG において、参加者の語りや体験がどのように変化し、また、その変化の過程において、グループがどのような影響を及ぼしているのかをナラティブ・アプローチの視点から質的に検討すること。特に、オルタナティブな語りを構築する実践の特徴や、それに影響している文脈に注目し、「非行」と向き合う親たちの SHG が、ナラティブ・コミュニティとしてどのような特徴や機能を持っているのかを明らかにすることを挙げた。そして、その目的を探求するために、以下の 3 つのリサーチクエスチョンを立てた。

- ① 親たちの会に参加することで親の語りや体験はどのように変化するのか
- ② 参加者はどのようにしてオルタナティブな語りを構築しているのか
- ③ 専門職は親たちの会における語りの構築にどのように関わっているのか

本節では、リサーチクエスチョン①～③に答える形で、第 2 部・第 3 部の結果をまとめる。

<リサーチクエスチョン①:親たちの会に参加することで親の語りや体験はどのように変化するのか>については、第 3 章および第 4 章で検討を行った。第 3 章で見たように、子どもが「非行」に走ったとき、多くの親は、子どもの「非行」を止めたいと思いながらも、子どもの言動が理解できず、どうしたらいいかわからないという困惑や苦悩を体験する。また、自分の子育てに対して自責感をもったり、周囲からも批判や叱責を受けたりする中で、精神的に疲弊してしまっている場合も多い。さらに、学校や相談機関との関わりが、親の支えとなる場合もあるが、逆に、学校や相談機関の対応によって、親がより追いつめる体験をしている場合もあることが明らかになった。

また、第 4 章で検討したように、SHG に参加する中で、親の語りは、<「非行」に巻き込まれる語り><「非行」を捉え直す語り><「非行」を受けとめる語り>と変化していく。これは、語り手の視点が重層化するなかで、語りにおける視野や意味づけが拡大し、固定化していたストーリーが変化していく過程として捉えられた。そして、この過程の中で、参加者はそれぞれ、会のナラティブの視点を取り入れながら、自分自身の体験に即してオルタナティブな語りを構築していることが明らかになった。また、こうした語りの変化は、日常生活における子どもへの見方や関わり方とも関連しており、語りの変化と連動して、親子間の関わりや関係性も変化していることが示唆された。

リサーチクエスチョン②<参加者はどのようにしてオルタナティブな語りを構築しているの

か>については、主に第5章および第6章で検討を行った。第5章では、社会で支配的なディスコースやグループのナラティブとの関係で、参加者がどのようにしてオルタナティブ・ストーリーを構築しているのかを検討した。「非行」の子どもの親に対しては、親を批判するディスコースが存在し、親たちは、そうしたディスコースとの関係では、「子どもを『非行』に走らせてしまい、それを止めることができないダメな親」として規定されがちである。それに対し、親たちの会では、多様なグループのコミュニティ・ナラティブが醸成され、親のポジショニングの幅を拡げる働きをしていることが明らかになった。また、語りの中で、過去の自分と現在の自分を差異化するポジショニングが用いられることで、過去の自分と結びつける形で社会的なディスコースが外在化され、オルタナティブな意味づけやストーリーを構築することが可能になっていることが示唆された。

さらに、第6章では、語りの中で生じる笑いの共有という現象に着目し、参加者間のやりとりが語りの構築にどのように影響しているのかを検討した。親たちの会における笑いは、「わかる」「共感できる」という感覚をベースに生じ、語りが自責的・悲観的な方向へ進むことを緩和する。そして、自分の体験や困難な状況を、「『非行』は深刻な問題だ」「親（自分）の子育てが悪かった」といった常識的な見方とは別の視点から捉え直し、オルタナティブな意味づけを模索することを促進していると考えられた。また、笑いの共有を含んだ参加者間のやりとりは、グループのナラティブの習得や専有を促進する意義を持つことも考察された。

リサーチクエスチョン③<専門職は親たちの会における語りの構築にどのように関わっているのか>については、第7章で検討を行った。第7章では、親以外の立場の参加者が、グループで何を語り、どのようにグループと関わっているのか、また、逆に親の立場の参加者は、そういった語りや関わりをどのように受けとめているのかを明らかにし、親以外の立場の参加者が、語りの構築にどのように影響を及ぼしているのかを検討した。その結果、親たちの会においては、親以外の立場の参加者も、当事者性をもって語りの構築に関わっており、それが語りの構築を活性化させ、会のナラティブを多様で豊かなものにしていく意義を持つことが考察された（以上の本研究の流れは図8-1に示した）。

## 第1部 研究の展望

### 第1章 問題と目的

- ・「非行」に走った子どもの親に対する批判的なディスコースと SHG の存在
- ・ SHG に関する先行研究
- ・ ナラティブ・アプローチの意義と課題：参加者の語りが変化するプロセスや、オルタナティブな語りがどのように構築されているのかは十分検討されていない、専門職が語りの構築にどのように関わることができるのかという点も明らかにされていない

**目的**オルタナティブな語りを構築する実践の特徴や、それに影響している文脈に注目し、「非行」と向き合う親たちの SHG が、ナラティブ・コミュニティとしてどのような特徴や機能を持っているのかを明らかにする

**RQ**①親たちの会に参加することで親の語りや体験はどのように変化するか、②参加者はどのようにしてオルタナティブな語りを構築しているのか、③専門職は親たちの会における語りの構築にどのように関わっているのか

### 第2章 方法論とフィールド

本研究全体に係わる理論的枠組み、調査フィールド、フィールドとの関わり

## 第2部 親たちの会における参加者の語りの変化

### 第3章 研究1：子どもの「非行」で悩んだ親たちの体験

### 第4章 研究2：「非行」と向き合う親たちの語りの変化

RQ①への答え：SHGに参加する過程で、語りにおける視野や意味づけの可能性が拡大し、子どもとの関係性も変化していく

## 第3部 親たちの会における語りの構築

### 第5章 研究3：ディスコースの中での語りの構築

### 第6章 研究4：やりとりの中での語りの構築

### 第7章 研究5：親以外の参加者の語りの構築

への関わり

RQ②への答え：グループのコミュニティ・ナラティブや、笑いの共有などの相互行為が、支配的なディスコースを脱構築し、オルタナティブな語りの構築を促進している

RQ③への答え：親以外の参加者も当事者性をもって参加することで、語りに多様性をもたらす

## 第4部 総合考察

### 第8章 本研究のまとめ：「非行」と向き合う親たちの SHG の特徴と機能

### 第9章 本研究の意義と課題

- ・ 臨床心理学的意義と SHG 研究における意義
- ・ 限界と今後の課題

図 8-1 本研究のまとめ

## 第2節 「非行」と向き合う親たちの SHG の特徴と機能

---

本節では、ここまでの結果を踏まえて、本研究で目的とした、「非行」と向き合う親たちの SHG はナラティブ・コミュニティとしてどのような特徴や機能を持っているのかという点について検討する。

本研究では、Rappaport (1993) の提唱したナラティブ・アプローチの枠組みに基づいて、「非行」と向き合う親たちの会をナラティブ・コミュニティとして捉え、その意義や機能を明らかにすることを試みた。特にこれまで十分に検討されてこなかった SHG の「語りの共同体」としての側面、すなわち、SHG でオルタナティブな語りがどのように構築されているのかという点を検討してきた。本節では、まず、語りの構築に関わる親たちの会の機能について、語りを受けとめる作用と語りを促す作用という2つの側面から整理し、両者の関係性について検討する。次に、親たちの会のコミュニティ・ナラティブの特徴や、それがグループにおける語りの構築にどのような影響をもたらしているのかという点を検討する。

### 8-2-1 語りを受けとめる作用と語りを促す作用

伊藤 (2009,2013) は、ナラティブ・コミュニティとしての SHG は、物語の聞き手として、物語を受けとめる側面と、物語を促す側面の機能を持っていることを指摘している。親たちの会も、参加者の語りを受けとめて親を支える作用と、参加者にオルタナティブな語りの構築を促し、ストーリーを転換していく作用を持っていると考えられる。そこで、以下、語りを受けとめる作用と促す作用という二つの側面から、親たちの会の持つ特徴や機能について検討する。

**語りを受けとめる作用** 語りを受けとめるというのは、外見上は何もしないで聞いている状態であるため、平凡であり、受動的で消極的であるようにも見える。しかし、伊藤 (2009) は、特に死別体験の SHG において、このような聞き手の態度の重要性を指摘している。死別体験の SHG においては、どのような語りであっても、ひとまずは受けとめるという態度がとられる。そのことによって、ネガティブな感情、自責、悔恨といった社会生活一般の中では話すべきものではないとされる話題についても語る事が可能になる。また、上手く話すことができない場合にも、じっと耳を傾ける聞き手がいることで、語り手は、物語の筋が混沌として、整理されていない物語について語る事が可能になる。

本研究で見てきた「非行」と向き合う親たちの会も、混沌とした語りや、語ることに抵抗を感じる語りを受けとめる、聞き手としての意義を持っていると考えられる。第3章や第4章で見たように、親は、周囲との関わりの中で、責められたり批判されたりする体験を数多くしている。そのため、子どもの「非行」のことを率直に話すこと自体が非常に難しい。一方で、第5章で見たように、親たちの会では、「批判や中傷、討論、過度なアドバイスなどはせず、話を聞き合うことで学び合う」という約束事があり、語り手に対して他の参加者から批判や「～した方が良い」といった意見が述べられることはない。第4章で、インタビューの C さんは、親たちの会では、「攻撃されたりとか批判されたりっていうことがないっていう安心感があるので(…)

安心して吐き出せる」(抜粋 4-23)と語っていた。このように、子どもの「非行」の問題で悩んでいる親にとって、攻撃や批判、意見などを言われずに、自分の話をそのまま受け止めてもらえるということが、非常に重要であると考えられる。

**語りを促す作用** 語りを促す作用は、語りを引き出すという意味を持つが、それに留まらず、社会で支配的なディスコースとは異なる視点を提供することで、その影響を相対化し、オルタナティブな語りの構築を促すことも含んでいる。例えば、荒井(2013)は、認知症家族会においては、社会で支配的な物語である「献身的介護」の対極をなす「手抜き介護」というコミュニティ・ナラティブが醸成され、他では語りにくい話題を引き出したり、「献身的介護」の影響を強く受けた物語の書き換えを促したりすることを指摘している。

第5章で見たように、「非行」と向き合う親たちの会においても、参加者間のやりとりや、そこで醸成されるコミュニティ・ナラティブが、他の場面では語る事が難しい語りを引き出したり、オルタナティブな語りの構築を促進したりしていると考えられる。親たちの会では、初めに司会者が自分自身の体験を率直に話し、グループのナラティブがある程度醸成されてから、初めて参加した親に話をしてもらったり、初めての参加者が語りやすくなるような工夫が行われている。また、語り手と共に聞き手も涙を流したり、聞き手から同意や共感、理解を示す言葉がかけられたりする中で共感的な雰囲気を作られている。こうしたやりとりは、語りを受けとめているというメッセージを示すのと同時に、他では語りにくい子どもの「非行」についての話題を許容し、語りを促す側面も持っていると考えられる。さらに、親たちの会で語られるナラティブは、「親は子どもの『非行』を止めなければいけない」といった社会で支配的なディスコースの影響力を相対化する。そして、『非行』をしている子ども自身も苦しんでいる、『非行』を止めようとするよりも親子関係を良くする方が大切」といった別の多様な視点を提示し、親の子どもに対する見方や、親自身のポジショニングの幅を広げる働きをする。また、第6章で検討した親たちの会における笑いも、子どもの「非行」や親自身の体験を支配的なディスコースとは別の視点から捉え直し、オルタナティブな意味づけを模索することを促進している。このように、親たちの会は、支配的なディスコースの影響力を緩和し、それとは異なる視点を提示することで、オルタナティブな語りの構築を促していると考えられる。

**2つの作用の関係** 語りを受けとめる作用と語りを促す作用は、相互に関連し、相補的な役割を果たしていると考えられる。語りを受けとめることは、SHGにおいて基本的なことだが、それだけで参加者が自分の体験を率直に話せるようになるとは限らない。親たちの会においては、語りを促す作用があり、社会で支配的なディスコースの影響力が緩和されることによって、他の場面では語りにくい親の気持ちや体験が語りやすくなっていると考えられる。そして、他では語りにくい率直な語りを引き出すことができこそ、SHGの語りを受けとめる側面が生きてくると考えられる。

また逆に、語りを受けとめる作用も、語りを促す作用を補う役割を果たしている。第4章で見たように、親たちの会に参加した親は、それぞれ、会のナラティブの視点を取り入れながら、自分自身の体験に即してオルタナティブな語りを構築していると考えられる。しかし、同時に、



参加者が会のナラティブを容易には受け入れられない場合もあり、語りの変化には抵抗や葛藤が伴うこともあった。親たちの会は、感情の吐き出しを受けとめ、抵抗や葛藤をも吸収することを通じて、参加者がナラティブを「専有」して、自分のストーリーを生成するまでの長い過程を支える場所を提供する機能を持っていると考えられる。また、聞き手として他の参加者の語りを受けとめることは、自分とは異なる考え方や関わり方に気づき、新しい語りの構築を促すきっかけにもなる。

しかし、この2つの作用は、場合によっては対立する可能性も含んでいる。例えば、酒井・宮坂（2013）は、アルコール依存症者のSHGである断酒会において、「言いつばなし、聴きっぱなし」という規則と、グループのもつ断酒継続という規範がどのように両立しているのかという疑問を提起している。そして、断酒会においては、「言いつばなし、聴きっぱなし」の規則が守られながらも、飲酒に結びつく内容が含まれている発言に対しては、直接性や批判性を緩和したやわらかい修正が行われることがあることを指摘する。また、荒井（2013）も、認知症家族会において、参加者の「献身的介護」の物語に対して、司会者やベテラン介護者から、批判的とも取れるようなかなり強い介入がなされ、物語の「書き換え」が試みられた事例を記述している。このような介入は、社会で支配的なディスコースから距離を取る上で効果的であるが、その参加者の介護経験を否定し、傷つけてしまうリスクも持っている。このように、SHGにおいては、グループの規範や、そのナラティブに沿って語りを促す働きかけが行われることで、それに沿わない語りが受けとめられなくなってしまう危険性が存在する。そのため、語りを受けとめる側面と、促す側面のバランスをどのようにとっていくかが重要な課題となる。

**2つの側面のバランス** 両者のバランスのとり方は、SHGによって異なっており、扱っている問題の性質やグループの特性によっても変わってくると思われる。例えば、AAや断酒会のようなアルコール依存症者のSHGには、断酒の継続という明確な目的があり、参加者に断酒の継続を促すための規範が文章化され、SHG活動に参加する個人と、集団としてのSHGのあり方を提供している<sup>30</sup>（酒井・宮坂, 2013）。これに対し、親たちの会では、5-4-1でも述べたように、「非行」への対応について明確で統一された目標や手順が定まっているわけではない。参加者はそれぞれ、会のやりとりやグループのナラティブから、自分に適した見方や関わり方を「習得」、「専有」していく。そのため、親たちの会においては、断酒会における飲酒に結びつく内容の語りのように、コミュニティの規範に反する語りが明確に存在するわけではない。しかし、親たちの会においても、社会で支配的なディスコースとは異なる視点を持つナラティブが醸成されており、コミュニティ・ナラティブに沿うような働きかけがなされる中で、それに合わない語りが受けとめられず、排除される可能性は存在する。それでは、親たちの会では、どのようにして2つの作用のバランスをとっているのだろうか。

このことを検討する上では、第4章で検討した3つの語りの関係を考えることが役立つ。親たちの会のナラティブには、『非行』をしている子ども自身も苦しんでいる、『非行』は止め

---

<sup>30</sup> 断酒会では「断酒新生指針」と「断酒規範」が、それぞれ個人と集団の規範を文章化している（公益社団法人全日本断酒連盟, 2016）。

られない、時間がかかる」、『非行』を止めようとするよりも親子関係を良くする方が大切」といった内容が含まれるが、その意味では、＜「非行」に巻き込まれる語り＞こそが、会のナラティブの視点とは合わない語りであるとも考えられる。＜「非行」に巻き込まれる語り＞では、子どもの困難な状況を訴え、自分自身のつらい気持ちを吐き出す中で、「子どもの『非行』を早く止めたい」という気持ちも語られるからである。しかし、親たちの会において、＜「非行」に巻き込まれる語り＞は、他の参加者から特に傾聴され、共感される。そして、より会のナラティブに沿う視点を含んだ＜「非行」を捉え直す語り＞や＜「非行」を受けとめる語り＞も、＜「非行」に巻き込まれる語り＞を否定したり、修正したりするものではない。これらの語りの中でも、＜「非行」に巻き込まれる語り＞と同じように、自分が体験してきたつらい出来事や気持ちが語られる。ただし、これらの語りでは、現在の視点が加わり、以前の自分の行動や考え方、子どもの「非行」が違う視点から捉え直されたり、自分の見方や体験の変化が語られたりするという点が異なっている。つまり、＜「非行」を捉え直す語り＞や＜「非行」を受けとめる語り＞は、＜「非行」に巻き込まれる語り＞を修正する語りではなくて、それを含みつつ、より多様な意味付けに開かれた語りであると考えられる。したがって、この三つの語りを、語りが含む意味付けという観点でみると、図 8-2 のような関係が見られる。

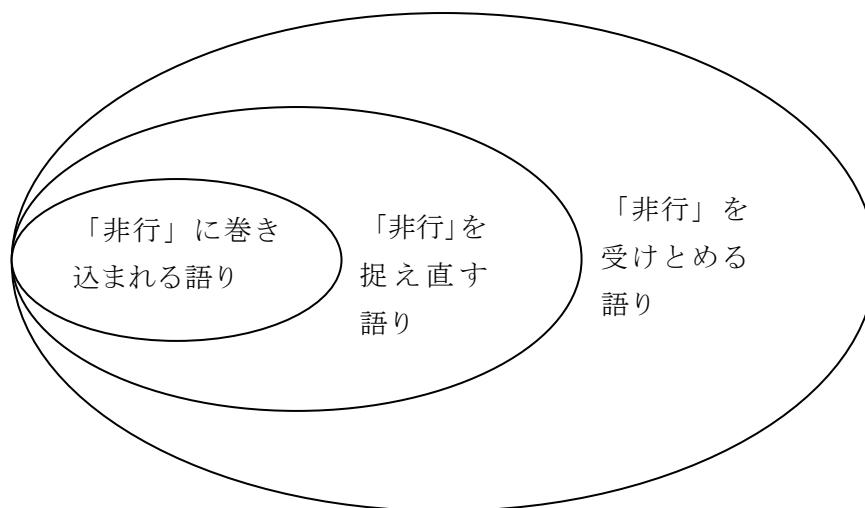


図 8-2 語りの類型の関係性

このような語りの関係性が保たれていることで、親たちの会では、基本的に、語りの修正が行われることなく、語りを受けとめる作用と語りを促す作用が共存し、機能していると考えられる。＜「非行」に巻き込まれる語り＞と＜「非行」を受けとめる語り＞では、子どもに対する見方や、「非行」に対する見方が異なるが、＜「非行」を受けとめる語り＞は＜「非行」に巻き込まれる語り＞を内包した語りであるため、それを修正することなく、新たな意味づけの探索を促すことが可能となるのである。第 5 章では、オルタナティブ・ストーリーを構築していくやり方とし

て、過去の自分と現在の自分を差異化する語り方に注目した。この語り方も、オルタナティブな意味づけを探索しやすくすると共に、グループに参加し始めた頃の<「非行」に巻き込まれる語り>との共通性や連続性を示すという両方の要素を含んでいる。

ただし、親たちの会でも、<「非行」に巻き込まれる語り>と<「非行」を受けとめる語り>が対立する可能性が全くないわけではない。それは、会に長く参加している親が、自分が苦しんだ渦中の体験を忘れて、思い出さなくなったりした場合である。本研究が対象とした親たちの会では、そういうことは見られなかったが、もし、長く会に来ている参加者が、自分の渦中の体験から離れて、変化した後の視点のみで、渦中の人に対してアドバイスをしたり、何かを教えようとしたりした場合には、語りの対立が生じる可能性も考えられる。

### 8-2-2 コミュニティ・ナラティブの役割と特徴

前項では、親たちの会の特徴や機能について、語りを受けとめる作用と語りを促す作用という視点から検討した。本項では、親たちの会のコミュニティ・ナラティブが語りの構築にどのような影響をもたらしているのかという点を整理し、語りの構築という視点から見たときのコミュニティ・ナラティブの果たしている役割や特徴について検討する。

Rappaport (1993; 1998; 2000) の提唱したナラティブ・アプローチによれば、SHG には、多くのメンバーによって繰り返し語られるコミュニティ・ナラティブがあり、参加者の物語に取り入れられ、個人のアイデンティティの変化の基礎として働く。その際、コミュニティ・ナラティブは、支配的な文化ナラティブによって形作られたものとは異なる、オルタナティブなやり方で、個人の物語を構築するやり方を提供すると考えられていた (Monkowski & Rappaport, 2000)。本研究でこれまで見てきたように、親たちの会で醸成されているコミュニティ・ナラティブは、「親は子どもの『非行』を止めなければいけない」といった社会で支配的なディスコースの影響を相対化し、それとは別の見方を提供する。そして、親が多様な視点を取り入れたり、視野を広げたりするきっかけを作り、オルタナティブな語りの構築を促進する働きをしていた。その意味で、本研究の結果は、Rappaport のコミュニティ・ナラティブについての仮説を実証的に示したものと言える。

しかし、その一方で、コミュニティ・ナラティブという概念は、1-3-3 で述べたように、それが SHG において目指すべき目標として捉えられてしまうことで、弊害をもたらす危険性も指摘されていた (伊藤, 2013)。また、SHG について、コミュニティ・ナラティブが支配的になることで、「オルタナティブ・ストーリー」という名の「ドミナント・ストーリー」を再生産しているだけではないかという見方も存在した (野口, 2005)。そこで、以下では、そのような批判的な視点も考慮しながら、親たちの会におけるコミュニティ・ナラティブの役割やその特徴について検討する。

**オルタナティブな語りの構築とは** まず、親たちの会におけるオルタナティブな語りの構築とはどのようなものかということから整理する。第 4 章や第 5 章で見たように、グループに参加した親の語りには変化が見られたが、それは、「A」というストーリーから、「B」という別

なストーリーへの単純な移行ではない。前項で述べたように、＜「非行」を捉え直す語り＞や＜「非行」を受けとめる語り＞は、＜「非行」に巻き込まれる語り＞と対立するものではなく、それを含みつつ、より多様な意味付けに開かれた語りである。そして、語りが変化していくプロセスも、支配的なディスコースに沿ったストーリーから、グループのナラティブに沿ったストーリーへと、物語が置き換わるという単純なものではない。まず、第4章で見たように、語りが変化し、グループのナラティブを「習得」「専有」していく過程では、それが語り手自身の具体的な体験と結びつき、個別性を帯びたものになる必要があった。また、第5章で見たように、オルタナティブな語りを構築する際には、過去の自分と現在の自分を差異化するポジショニングが用いられ、過去の自分と現在の自分、社会的なディスコースに沿った考え方とグループのナラティブの考え方が、第三者的に外から捉えられ、その両方の視点を含んだ語りが構築されていた。そこでは、社会的なディスコースが全面的に否定されるのではなく、その支配力が弱められ、それと折り合いがつくようなオルタナティブなポジションが模索されていた。

このようなプロセスの中で構築されていくオルタナティブな語りは、ドミナント・ストーリーを単に否定するものではなく、ドミナント・ストーリーやこれまでの自分自身の視点を相対化し、視点や意味付けの自由度が高くなった語りを意味する。本研究で取り上げてきた「非行」の親に対するドミナント・ストーリーの典型的なものとして、「親は子どもの『非行』を止めなければいけない」という親の責任を問うストーリーがあるが、親たちの会で語られるナラティブは、親の責任を否定したり、それを他に転嫁したりするものではない。親たちの会では、「子どもの『非行』を止める」という単一のものではない、オルタナティブな形で子どもの「非行」の向き合うやり方が見出され、ドミナント・ストーリーを相対化し、それと折り合いをつけるということが行われている。また、そこで構築される語りは、完成し固定化した物語ではなく、常に新しく改訂されていく性質のものである。親たちの会では、10年・15年と例会に参加し続けている親も少なからずいるが、4-3-3で見たように、そのような参加者の語りも、毎回違いがあり、常に変化し続けている。このように、オルタナティブな語りの構築とは、視点を多様化し、様々な意味付けを加えながら、自分の体験や語りを編み直していく継続的なプロセスであると考えられる。

**コミュニティ・ナラティブの多様性と流動性** では、そのような語りの構築プロセスの中で、コミュニティ・ナラティブの果たす役割や備えるべき特徴はどのようなものだろうか。

親たちの会におけるコミュニティ・ナラティブは、「『非行』は止めなければいけないものである」「親には子の『非行』を止める責任がある」といった社会的なディスコースの支配性に挑戦する。ナラティブ・カウンセリングにおいて、支配的なディスコースから離れたり、ディスコースを明らかにする機会が提供され、その影響が明らかになる過程を脱構築と呼ぶが（White, 1992; Winslade & Monk, 1999/2001）、親たちの会のナラティブは、脱構築を生じさせやすくし、新しい意味付けの探索や、オルタナティブな語りの構築を活性化させることに意義がある。そして、その際には、コミュニティ・ナラティブが多様で、固定化していないことが重要な意味を持っていると考えられる。第5章で述べたように、親たちの会のナラティブは、具体的な子どもとの関わり方から、より抽象的な子どもとの向き合い方、子どもの理解の仕方について述べるも

のまで様々なものがあり、その語られ方も語り手一人ひとりの体験に基づいて異なっている。このようにナラティブが多様であることは、参加者がこれまでとは異なる視点や見方を模索し、語りにおける意味づけや視野を拡げていく上で役立つ。会に参加している親は、参加年数もばらばらであり、会のナラティブを「習得」「専有」していくプロセスも一人ひとり異なっている。そのため、参加者によってその時の自分の体験に合う視点や意味づけは異なってくる。会のナラティブが多様であることは、多くの参加者が、自分の体験に結びつく視点や意味づけに出会う機会を増やし、ナラティブの「習得」や「専有」のプロセスを促進すると考えられる。

また、会のナラティブが多様であるということは、ある特定のナラティブが一つの支配的な目標になってしまうことを防ぐという意味も持つ。もし、会のナラティブが単一で固定的なものになってしまうと、それに当てはまらない人の語りを排除してしまう可能性がある上、新しい語りを生み出す活力も生じにくくなってしまう。親たちの会のナラティブは、多様性や流動性という特徴を持つことで、特定の語りが支配的になることを避け、オルタナティブな語りの構築を活性化していると考えられる。

**ナラティブに多様性や流動性をもたらすもの** それでは、親たちの会において、コミュニティ・ナラティブの多様性や流動性はどのようにもたらされ、保たれているのだろうか。これには、親たちの会における参加者の構成や、例会の持ち方など、グループのあり方による影響が考えられる。

グループの側から見ると、ナラティブの多様性を保つ上では、参加するメンバーの構成が多様であることが重要である。第 5 章で述べたように、親たちの会には、様々な参加年数の親が参加している。親たちの会には、一定の割合で、新しく会に参加してくる親がいる。第 3 章のアンケート調査では、親たちの会の存在を知ったきっかけとして、HP（ホームページ）、新聞・テレビ、知人の紹介、会の著作物に加えて、電話相談、学校の先生からの紹介、少年院での講演、鑑別所、児童相談所、教育相談所などでの紹介、図書館、不登校の親の会など、様々なものが挙げられていた（表 3-11 参照）。親たちの会では、「非行」の問題で困っている親が、会の存在を知れるようにと、HP の活用、新聞・テレビ等の取材の引き受け、無料の電話相談の開催、学習会の開催、少年院での講演、著作物の出版、様々な機関へのチラシの配布など、様々な形で広報活動を行っている。こうした広報活動も含めて、新しい参加者を獲得していることが、参加者の多様性や流動性を保つことに繋がっていると考えられる。

また、会には子どもの「非行」が落ち着いてからも、参加を続けている親も多い。こうしたメンバーは、交代で司会や記録を引き受けて例会の運営に携わっている。また、例会では、第 5 章や第 6 章で見たように、同意や共感の言葉かけ、涙の共有、笑いの共有といったやりとりが生じていたが、その際にも、長く参加しているメンバーが言葉かけを行ったり、笑いが生じるきっかけを作ったりという役割を果たしていた。さらに、こうした親たちは、自分の体験を語ることを通じて、子どもの「非行」と向き合う中で獲得したナラティブをグループに提供する。グループにとって、こうした親の存在は、グループを存続させ、多様なナラティブを蓄積していく上で重要である。

こうした親たちは、「会にとどまって、もっと学び続けたい」という思いを持っているようである(浅川,2004)。4-3-2 で見たように、本研究のインタビューの B さんも、会に通い続けている理由として、当時の自分の思いを忘れたくない、色々な人の話を聞いて自分の頭を働かせて考えることを続けたい、自分の話が他の人の役に立つかもしれない、といった理由を挙げていた。これと関連することとして、親たちの会では、例会だけでなく、全国交流集会、公開学習会、シンポジウムなどの開催も行っており、メンバーが学ぶ機会を広く設けている。第 7 章のインタビューであった H さん I さんのように、これらを企画し、運営するのも当事者である親たちである。このように、親たちの会では、学びを深めていく機会を自分達で作出し、そこで学びを深めていくという循環を作っている。このような「学び続けていく」というグループのあり方も、「非行」が落ち着いた後も親が継続して例会に参加することに繋がっていると思われる。

さらに、第 7 章で見たように、親以外の立場の参加者の関わりも意味がある。会は、専門職や学生、記者など、様々な親以外の立場の人の参加も歓迎している。これは、一方では、親を批判するような社会的なディスコースが持ち込まれ、オルタナティブな語りの構築が阻害される可能性も持っている。しかし、他方で、このような参加者は、会のナラティブに多様性や流動性をもたらす契機にもなっている。7-4-2 で述べたように、親以外の立場の参加者の語りは、ピアである親の語りに比べ、物語の異質性も大きいが、定着した物語の固定性に裂け目を生じさせ、新たな語りの構築を活性化させる可能性を持っている。

このように、様々なメンバーが集まるなかで、例会では、どの参加者も対等に話をするということが重視されている。司会を含めた会に長く参加している親や専門職も、会に来始めたばかりの親に対して、アドバイスなどは行わず、自分の体験を語ることを通して、そのような参加者の役に立とうとする。これは、例会のルールや運営の仕方によって守られている部分だが、このように参加者の個々の語りが尊重されることで、特定の語りが支配的になることが避けられていると思われる。

さらに、語りに多様性や流動性をもたらしている要素としては、参加者それぞれの語りが変化することも挙げられる。第 4 章で見たように、参加者の語りは、<「非行」に巻き込まれる語り>から少しずつ、<「非行」を捉え直す語り>、<「非行」を受けとめる語り>へと変化していくと考えられる。さらに、4-3-3 で述べたように、長く参加している参加者の語りも、毎回違いがあり変化が見られる。これは、親たちの会が、前述した、学習会や全国交流集会の開催など様々な学びを深めていく機会を作っていることとも関連していると思われる。このように、個々の参加者の語りが、完成し固定化した物語としてではなく、常に変化を伴って語られていくことも、会のナラティブの流動性に繋がっていると考えられる。

**「非行」というテーマとの結びつき** このように親たちの会のナラティブの多様性や流動性は、参加者の多様性、例会の持ち方、参加者の語りの変化などによってもたらされていると思われるが、子どもの「非行」というテーマとの関連性も考えられる。多様性や流動性といったコミュニティ・ナラティブの特性は、SHG によって異なる。例えば、福重(2013)は、ギャンブル依存者の SHG である GA (Gamblers Anonymous) と、情緒的問題を抱えた人たちの SHG

である EA (Emotions Anonymous) に並行して参加した人の事例を検討している。そして、コミュニティ・ナラティブが比較的一様で明確な GA に対し、EA はコミュニティ・ナラティブが曖昧でメンバーの語りの多様性に寛容なため、その人に「馴染みやすさ」を感じさせたのではないかと分析している。

このようにコミュニティ・ナラティブの特性は SHG によって異なるが、その SHG の目的や扱っているテーマに適していることが望ましい。親たちの会で扱われている「非行」への対応や向き合い方については、全ての状況や場合に適用するような目標や手順、アプローチなどが見出しにくい。そのため、会のナラティブの中で、様々な関わり方や視点が提供され、多様な意味づけや語りが許容されることが有用である。このように、親たちの会のナラティブの多様性や流動性は、子どもの「非行」というグループが扱っているテーマとも結びつき、親たちの会の語りの構築プロセスを支えていると考えられる。

## 第9章 本研究の意義と課題

本章では、本研究の意義と課題について論じる。第1節では、本研究の知見の持つ臨床心理学的意義について、実践および研究の面から論じる。第2節では、SHG研究における本研究の意義を論じ、第3節では、本研究の限界と今後の課題について述べる。

### 第1節 本研究の臨床心理学的意義

---

本節では、本研究の持つ臨床心理学的な意義について論じる。第1章では、SHGについて研究する臨床心理学な意義として、①参加者が変化していく過程を明らかにして臨床場面における援助に活かすこと、②個人の問題と社会的なディスコースとの関連性を捉え、社会的なディスコースの支配性への対処の仕方を検討できること、③臨床心理学的な支援を批判的に省察できること、④SHGの活動をエンパワーし、SHGと協働していくあり方を検討できることの4点を挙げた。本節では、まず、①～③に関連して、臨床面接の場面において本研究の知見をどのように活用できるかを論じる。次に、④に関連して、臨床心理士のSHGとの関わり方について検討する。

#### 9-1-1 臨床面接における本研究の知見の活用

本研究で見出された知見は、スクール・カウンセリングや心理相談などの場面で、子どもの「非行」や問題行動で悩んでいる親を援助する際の参照枠として用いることができると考えられる。

**「非行」と向き合う親の変化のプロセス** 本研究では、親たちの会に参加した親の語りや体験がどのように変化していくかを明らかにした。子どもの荒れが始まり、激化している最中には、<「非行」に巻き込まれる語り>が語られる。この語りの背景には、多くの親が、子どもの「非行」を止めたいと思い、そのように行動しながらも、子どもの言動が理解できず、子どもとの関係が悪化する中で、親としてどう行動していいかわからないという行き詰まりや、周りの人々からの孤立を感じているという状況があった。そしてグループに参加し、自分の体験を語り、他の参加者の語りを聞く中で、参加者の語りは、<「非行」を捉え直す語り>、<「非行」を受けとめる語り>へと少しずつ変化していくと考えられた。そして、その背景には、子どもや自分に対する視点が拡がり、生活における子どもへの見方や関わり方が変化していくことがあった。

子どもの「非行」や問題行動で悩んでいる親と面接を行う際にも、こうした変化のプロセスを頭に置いておくことは役立つと思われる。第3章のアンケート調査の結果では、スクールカウンセラーについて不満が残った理由として、「ただ聞くだけで時間のムダだった」「しばらく様子をみましょう、見守りましょう等、定型の言葉しかなかった」「『本人が話しに来るまで待ちましょう』といって、結局終わりだった」などの回答があった。子どもの「非行」が始まり、激化し



ていくときには、親は、目の前の子どもの行動の対応に追われ、語りにおける視点も、自分の気持ちや現在に集中し、先の見通しが持てない状態にある。相談を受けるセラピストは、少し先の見通しを持ちつつ、親の感情の吐き出しを受けとめながら、子どもの言動や気持ちの理解を一緒に考えるなど、少しずつ親の視点が広がるようなサポートをしていくと良いと思われる。「非行」の場合、問題行動をしている本人が来談することは非常に難しい場合が多い。「子どもを連れてきてほしい」など親ができなくて悩んでいることを要求しても実現できないことが多く、親を相談から遠ざけることになってしまうこともある。本人との面接ができなくても、セラピストが親の支えになることができれば、親子の関わりや関係性が変化し、間接的に「非行」をしている本人にも影響が及ぶことを認識しておくが良いと思われる。

**支配的なディスコースへの対処** また、本研究の結果からは、「非行」の問題をめぐる社会的な文脈やディスコースが、問題の維持や拡大に影響していることが指摘できる。下山（2000）は、心理臨床活動を物語過程として捉え、個人的物語である〈語りとしての物語〉は、常に社会的物語である〈劇としての物語〉を背景にして生ずる構造となっていると述べ、心理臨床活動における社会的関係の重要性を論じている。第5章で見たように、親の語りの中では、社会的な視線やディスコースについて言及がなされ、語り手である親は「子どもを『非行』に走らせてしまい、それを止められない無力な自分」や、「『非行』の子どもの親として非難される自分」として位置づけられることがしばしばあった。これは、「親は子どもの『非行』を止めないといけない」「親に問題や責任がある」といった社会で支配的なディスコースとの関係で、生じてきた物語であると考えられる。このような物語は、親が学校や地域、家族や親戚から孤立したり、自分自身を責めたり、子どもの「非行」を無理に止めようとして子どもとの関係性がさらに悪化するといった形で、問題の維持や拡大にも影響を及ぼしている。

支配的なディスコースは、物事の一つの側面を強調し、それが真実だと思わせ、他の解釈の可能性を抑圧する（Ayashiro, 2015）。そして、人々は自分の知識や意志をディスコースがどのように拘束するのか気づいていないことが多いため、オルタナティブな、好ましい生き方は隠されたままになる（Winslade & Monk, 1999/2001）。本研究の結果からは、子どもの「非行」の問題に悩む親へのサポートを考える際に、「親に問題や責任がある」といった社会的なディスコースの支配性にどのように対処するかという視点も重要になるとと思われる。

「非行」と向き合う親たちの会では、会のナラティブや、笑いの共有といったやりとりが、社会的なディスコースを相対化し、その支配性を弱める役割を果たしていた。会のナラティブや笑いの共有は、親同士の体験の分かち合いの中で生じていたものであるため、スクール・カウンセリングや心理相談の場面で、親たちの会と同じことを実現するのは難しい。しかし、臨床心理士が社会的なディスコースに敏感になり、少なくともそのディスコースを再生産、強化しないように心掛けることは可能である。第2章のアンケート調査の結果では、相談機関に行くことで親がより自分を責めて、苦しくなってしまう場合が見られた。相談を受ける側が社会的なディスコースに無自覚であると、「親は子どもの『非行』を止めなければいけない」という社会的なディスコースを再生産し、親をさらに追いつめて状況を悪化させてしまう可能性がある。また、綾城

(2014) は、クライアントの語りをセラピストが支配的ディスコースを参照せずに聞き、応答することで、クライアントが否定的にポジショニングされることなく自身の「問題」を語る機会を設けることを提案している。支配的ディスコースは援助場面でも再生産されやすいものの、セラピストの応答の仕方によっては、クライアントが支配的なディスコースとは異なった文脈で問題を語ることも可能ではないかと思われる。例えば、親たちの会においては、親の子どもへの関わり方は、「子どもの『非行』を止める」という単純なものではなく、「子どもとの関係を良くする」、「子どもの苦しさを理解する」、「子どもを多面体として捉える」、「子どもと距離をとる」、「子どもを応援する」など多様な形で語られる。臨床面接の中でも、セラピストが「『非行』を止める」という文脈から離れることで、支配的なディスコースを弱め、オルタナティブな語り方、生き方を模索できる可能性があると思われる。

**SHG の紹介** また、臨床心理士にできるサポートとして、子どもの「非行」の問題に悩む親に SHG を紹介するということもある。親たちの会に参加することの意義の一つとして、自分以外にもたくさん子どもの「非行」で悩んでいる親がいることに気がつき、孤独感や孤立感が和らぐことや、その活動に参加するなかで、グループが自分の居場所として感じられるということもある。グループの中でのやりとりや関係性に支えられることで、無力感をもち、自殺しようというくらい思いつめていた親たちが、子どもが荒れから立ち直っていくまでの長い期間、子どもを支え続ける力を発揮していくことができる。心理臨床が基本的に構造化された枠のなかで行われるのに対し、SHG は、参加者同士が生活の場に近い環境で関わりあう空間であり、一種の継続的なコミュニティである（岡・Borkman, 2011）。「非行」の問題に悩む親は、家族や親戚、学校や地域などのコミュニティから孤立しがちであり、このような場の存在は重要であると思われる。三好（2014）は、構造化された心理臨床と SHG のような生活モデルに近い資源を協働的に活用していくことを提案しているが、臨床心理士は、このような SHG の機能を認識し、それをより積極的に活用していくことが求められる。ただし、第 3 章のアンケート調査の結果にもあったように「会の様子や雰囲気は自分と合わない」と感じる人もいる。可能であれば、自分自身も地域の SHG に参加し、会の雰囲気を知っておき、その様子を伝えながら SHG を紹介することが望ましい。

### 9-1-2 臨床心理士の SHG との関わり方

第 1 章で述べたように、コミュニティ心理学の観点からは、専門家と当事者が協働し、SHG のようなコミュニティにある地域社会資源を活用していく必要性が主張されている（高島, 2011）。先行研究では、SHG と協働していく上で、SHG を支配することなく、対等な関係性やパートナーシップを築いていくことが重要であることが指摘されていたが、具体的にどのようにして、SHG と対等な協働的關係を築いていけばよいかということについては十分に明らかにされていなかった。

本研究では、第 7 章において、専門職を含む親以外の立場の参加者のグループへの関わりや、それが語りの構築にどのように影響を及ぼしているのかを検討した。親たちの会においては、専

専門職も、「親の声を聞くことで自分自身が学ぶ」「自分自身の体験や悩みを語る」といった、坂本（2007）の言う、「当該の問題（問い）をただならぬおのれの問題として抱えざるをえない」という姿勢で参加することで、その場の当事者として、親と対等な立場で語りの構築に関わることが可能になっていることが明らかになった。そして、専門職も、構築されるオルタナティブな語りの「好意的な聴衆」（Winslade & Monk, 1999/2001）となったり、会のナラティブに支援者の視点を加え、その意味づけをより豊かにしたりするといった役割を果たしていると考えられた。これは、臨床心理士を含む専門職が SHG と協働的な関係を築いていく際の一つのあり方として参考になると考えられる。

第7章で述べたように、ここで必要とされる専門性は、専門職自身も、親と同様に「語る」「聴く」「共感する」「学ぶ」ことを行いながら、親の立場の参加者が自由に語りを構築できる場を壊さず、共に作っていく態度や能力である。このような態度や能力をどのようにして身につけ実践していくかという点は本研究では十分に検討できなかった。ただし、本研究からは、臨床心理士がこのような専門性を発揮していくために必要な態度について、幾つかの提案を行うことができると思われる。

一つ目は、SHG において、参加者の語りを聴くときに発揮される態度である。親たちの会において、専門職は「親の声を聞くことで自分自身が学ぶ」という態度をとっていた。そこで専門職に求められるのは、親の気持ちや体験を理解しようとし続ける姿勢である。これを考える上では、Anderson & Goolishian（1992/2014）の提唱した「無知の姿勢（Not-knowing approach）」が参考になる。「無知の姿勢」とは、セラピストの旺盛で純粋な好奇心がその振舞いから伝わってくるような態度ないスタンスのことである。セラピストは、クライアントによって、たえず「教えてもらう」立場にあり、この姿勢が会話の領域を拓き、新たな物語を展開させていく基盤となる。クライアントは自分の考えを主張したり防御したり説得したりする必要がなくなり、自由に会話が展開する空間が用意される。セラピストに課されるのは、分析することではなく理解しようとする、たえず変化しているクライアントの経験の視点から理解しようとする、理解の途上にとどまり続けることになる。このような聞き手の存在によって、新しい意味の生成が継続していく。SHG においては、聞き手がこのような「無知の姿勢」をとることが、オルタナティブな語りの構築を活性化していく上で重要であり、臨床心理士は、そのような態度を発揮することで、語りの構築を促進することが可能ではないかと思われる。

二つ目は、Schön（1983/2001）の言う、「反省的实践家」としてのあり方である。これは、専門家の専門性について、専門的知識や科学的技術を合理的に適用することではなく、活動過程における知と省察それ自体にあるとする考え方である。反省的实践家としての専門職とクライアントとの関係は、文字通り反省的な対話のかたちをとる。通常、専門家は自らの専門的な熟達を秘匿し、神秘的なままにしておくことを期待されるのに対し、ここでは自分の「実践の中の知」を公に反省し、自らをクライアントと向き合うことのできる存在にすることが期待される。

専門職も当然だが万能ではないし、失敗しながら成長していく。親たちの会において、専門職は、自分の体験を失敗も含めて語りながら、自分自身の視点や実践を反省的に振り返る。そのよ

うな省察によって生まれた語りは、会のナラティブを豊かにし、親が自分自身の子どもの関わりを振り返る際のリソースにもなる。松田（2000）は、専門職は、SHG と関わり、自らのあり方を問い直すことことで、“専門職者は万能でなければならない”という物語から“専門職者も一人の人間である”という物語への書き換えを行うことが可能になると言う。このように、専門職が一人の人間として自らの実践を反省的に振り返り、それを共有していくことは、SHG において、当事者と共に学ぶ関係を作るために重要であると思われる。

## 第 2 節 本研究の SHG 研究における意義

---

本節では、本研究の SHG 研究における意義について述べる。本研究では、「非行」と向き合う親たちの SHG において、参加者の語りや体験がどのように変化し、また、その変化の過程において、グループがどのような影響を及ぼしているのかをナラティブ・アプローチの視点から質的に検討した。特に、語りが構築されていくやり方やプロセスに焦点を当て、ナラティブ・コミュニティとして SHG が果たしている機能や意義を明らかにした。

まず、本研究は、Rappaport（1993）の提唱したコミュニティ・ナラティブが参加者の語りやアイデンティティに影響していくという理論的な仮定を、「非行」と向き合う親たちの SHG において、具体的に参加者の語りや体験が変化していくプロセスを明らかにすることを通じて、実証的に示したものと言える。

また、本研究では、参加者の語り方や参加者間のやりとりに注目し、これまで十分に検討されなかった SHG で語りや構築されるダイナミックなプロセスについて検討した。その結果、オルタナティブな語りを構築する実践は、単に社会的なディスコースの影響を受けた物語から、コミュニティ・ナラティブに沿った物語へと、語りの内容が置き換わっていくのではなく、コミュニティ・ナラティブに含まれる多様な視点を活用し、これまでの自分自身の見方を相対化しながら、語りに含まれる意味づけを拡げていくことであると考えられた。

野口（2005）は、SHG は、単にひとつの物語を共有し再生産するのではなく、それを新たに展開させていく場であり、「新しい語り」「いまだ語られなかった物語」を生み出すための場として捉えられると言う。本研究では、ポジショニング分析（研究 3）や会話分析（研究 4）の視点を活用しながら分析を行ったが、こうしたアプローチは、語りや構築される実践を明らかにし、語りを生み出す場としての SHG の機能を捉える上で有用であると考えられる。

さらに、本研究の結果は、コミュニティ・ナラティブの理解の仕方にも示唆を持つ。コミュニティ・ナラティブは、「共同体の物語」と訳されることが多いが、それは必ずしも定型的で固定化した物語ではない。伊藤（2013）は、「共同体の物語」という概念について、SHG における物語を特徴づけ、SHG を社会の流れの上に位置づけたり、個人の営みに対して踏み込んだ解釈を行ったりするのに役立つ一方で、「共同体の物語を語れるようになれば癒される」という安易な見方や、「早く共同体の物語を語れるようになりなさい」という圧力につながりかねないという弊害を指摘している。コミュニティ・ナラティブという概念は、単一の目指すべきモデル・スト

一リーとしてではなく、多様な意味を含み得る流動的なものとして捉えた方が、SHG の実践をより適切に記述できる場合があるのではないと思われる。

最後に、本研究では、SHG における当事者と専門職の協働のあり方を考える上でも役立つ知見を含んでいる。向谷地（2009）は、当事者と専門家の関係の変化について、当事者が「自分の専門家になる」ということが日常化してきたことを指摘している。そして、精神障害をもつ人たちの地域活動拠点「浦賀べてるの家」の実践の中で生まれてきた一つの流れとして、「自分のことは、自分がいちばん“わかりにくい”ことを知っている人」としての当事者（専門家としての当事者）と、「当事者と同じような状況に遭遇したら同様に戸惑い困難に陥るであろうことを知っている人」としての専門家（当事者としての専門家）という 2 つの「無力」に支えられているという立場を挙げている。この立場は、「専門職の権威化」と、「経験の権威化」を防ぎ、当事者と専門家の連携やパートナーシップの基盤になると言う。ここで「専門職の権威化」は、専門家がその知識や地位を利用して優位な立場に立つことを意味し、「経験の権威化」は、当事者としての経験がある種の権威性を帯びる事態を指している。

親たちの会における親と専門職の対等な関係も、「専門職の権威化」と「経験の権威化」を避けることで成り立っていると考えられる。親たちの会において、専門職がとっていた“自分自身が学ぶ”“自分自身の体験や悩みを語る”姿勢は、「当事者と同じような状況に遭遇したら同様に戸惑い困難に陥るであろうことを知っている人」という当事者としての専門家像を構築し、「専門職の権威化」を防いでいると考えられる。また、研究 5 で H さんが語っていた「通じる」「つながる」という体験や、親たちの会で見られた「同じく場所>にいる」ことから生じる当事者性は、固定した属性としての当事者／専門職という区分的を超えて、当事者と専門職が協働していく可能性を示している。近年、SHG においても当事者と専門職の協働の重要性が指摘されているが（三好, 2013）、本研究は、SHG における協働の一つのあり方を提起した意義を持つと考えられる。

### **第 3 節 本研究の限界と今後の課題**

---

最後に本研究の問題点や限界および今後の課題について述べる。

#### **9-3-1 本研究の知見の適用範囲**

まず、本研究におけるデータ収集や研究協力者の選択の特徴を踏まえて、本研究の結果の適用範囲について述べる。本研究は、「非行」と向き合う親たちの会という一つの SHG を対象とした。また、インタビュー調査を行った研究協力者の特徴として、インタビューを行った時点において、会に継続的に参加している人が中心だったということがある。これは、会の機能を捉えるという目的からすると有効であったと思われるが、例会に稀にしか参加しない人や、例会に来なくなる人の体験プロセスは、本研究が明らかにした知見と異なっている可能性がある。これらの人の体験を把握することは難しいが、本研究で得られた知見から、いくつかのことを推測することは可能である。

第3章で取り上げたアンケート調査の回答の中では、「仕事があり、例会や講座に参加することはできなかったが、通信をずっと読み続け、たくさんのことを勉強できた」「地方在住で仕事も持っているので、例会に参加することは難しいが、ホームページにはいつも助けられています」(NPO 法人非行克服支援センター, 2013, p85,86) といった回答があり、仕事や居住地の事情で例会に参加できないものの、会の通信やホームページを読む形で会とつながっている人もいる。例会の中でも、会のことを以前から知っており、毎月会の通信を読むことを励みに頑張っていて、子どもの問題が少し落ち着いてきたので、例会に初めて来たと話す参加者もいた。こういった例からは、会の通信やホームページを読み、同じように子どもの「非行」で悩んでいる親たちの存在を知ること自体が、親の支えとなる可能性があることがわかる。本研究の研究協力者は、特に子どもの「非行」が激しかった時期は、毎月例会で苦しさを吐き出さないと、自分を保てなかったと話す人が多かった。例会に稀に来る人は、物理的に参加が難しいといった事情があることのほか、他に気持ちを吐き出せる場(相談者・相談機関など)があるといった可能性も考えられる。

また、例会から離れていく理由として、第3章のアンケート調査の結果からは、子どもの問題が落ち着いたり、ある程度自分で子どもに対応できるようになったりして、例会に来なくてもよくなるというパターンが多いと考えられた(表3-15参照)。また、忙しくなり、会に参加する時間がとれなくなるなど、時間や距離的な問題で例会に参加できなくなる場合も見られた。一方、回答者の割合は多くはなかったが、参加した例会が自分と合わないと感じて参加しなくなる人もいた。SHGから離れていく人の体験は、本研究では十分に検討できなかった部分であるが、アディクションの問題を抱えた当事者が複数のSHGをたどり歩く事例も報告されており(福重, 2013)、今後の課題としたい。

さらに、本研究の知見が他の「非行」の親たちのグループにも当てはまるかということも問題になる。第1章第1節や第2章第2節で述べたように、本研究が対象とした親たちの会は、「非行」と向き合う親たちのSHGの中でも日本で最初に設立されたグループの1つであり、他の地域の会もそれに倣って設立され、基本的に、「親たちの会」と同じ趣旨ややり方で例会を行っているところが多く、類似した性格をもつ(木村・能登原・足立, 2009)。そのため、本研究の知見は、他の「非行」の親たちのSHGにもある程度妥当すると思われる。実際、「非行」を考える全国交流集会では、様々な地域の会に参加している親たちが集まり、運営にも参加するが、全国交流集会で行われる語り合いでも、そのやり方や、話される内容、雰囲気などは、「親たちの会」の例会と大きな違いはなかった。ただし、グループによる差異も当然、ある程度存在すると思われるため、個々の会の特徴について見ていく必要もあるだろう。

### 9-3-2 データの性質に基づく限界

次に、各研究で課題として述べた内容とも重なるが、本研究におけるデータの性質に基づく限界について述べる。本研究では、インタビュー、参与観察、そして会の通信などの文書資料をデータとした。例会での参与観察では、自由に話ができる場という雰囲気を壊してしまう可能性が考えられたため、録音やその場での詳細なメモ取りは行わなかった。筆者は、4-2-1で述べたよ

うに、現場を離れた後に可能な限り早くフィールドノーツを作成するようにしたが、以下に挙げるような限界には注意をしたい。

第一に、フィールドノーツの作成は記憶の再生に頼る部分が大きく、どの語りや相互行為のエピソードを記憶しているかは、筆者の関心が影響したと考えられる。研究者は、例会に参加する際には、基本的に、現在までの分析結果や仮説を頭におき、「これまで見出されなかった特徴的な語りややりとりはないか」ということを意識していた。しかし、本研究の結果が、すべての観察可能な語りややりとりを含んでいるということは主張できない。

第二に、記憶が残っているうちに記録をつけるように最大限努力をしたといっても、録音を行ったり、その場で逐語的なメモをとったりした場合に比べ、記録の精度が落ちている。結果として、ノーツに記録される語りは形の整った文章的なものになるため、会話分析やディスコース分析に用いることはできず、例会の中でのやりとりや、そこでナラティブが作られていく過程について、そのような詳細な分析を行うことができなかった。また、個人が特定されないように匿名化を行っていたため、特定の参加者の語りの変遷を検討することもできなかった。

こうした限界を踏まえ、本研究では、インタビューデータや会の通信に掲載された語りを活用しながら分析を行った。

### 9-3-3 個別性やバリエーションの検討

本研究では、会に参加した親の語りや体験が変化していくプロセスや、オルタナティブな語りを構築していくやり方について検討したが、主に多くの参加者に共通する特徴に焦点を当てた。そのため、参加者一人ひとりの語りの個別性や多様性を描き出すことは十分にはできなかった。

第4章では親の語りや、＜「非行」に巻き込まれる語り＞、＜「非行」を捉え直す語り＞、＜「非行」を受けとめる語り＞と変化していくというモデルを提示したが、実際の語りの変化は、必ずしもモデルに沿った直線的なものではないと思われる。また、本研究では、参与観察および回顧的なインタビューによるデータを基に分析を行ったため、例会における語りの変化を実際に縦断的に検討することはできなかった。実際の語りの変化は直線的ではなく、行ったり戻ったりを繰り返しながら進み、その変化のプロセスは参加者一人ひとりによって差異があると考えられる。加えて、第5章で検討したオルタナティブな語りの構築の仕方や、第6章で見た笑いに対する習熟のプロセスに関しても、同様に、参加者によって個別的な違いやバリエーションが存在する可能性がある。そのため、今後の課題として、語りの変化や、語りの構築について個別に見ていき、その差異やバリエーションに焦点を当てて検討していくことが挙げられる。

### 9-3-4 他のSHGとの比較

最後に、本研究で見出された知見やアプローチは、他のSHGにも適用できるかという課題がある。本研究で検討したオルタナティブな語りの構築のあり方は、「非行」の子を持つ親に対する社会的なディスコースや、親たちの会の運営のあり方、コミュニティ・ナラティブの特徴などの影響を受けており、他のSHGでは、異なる語りの構築のあり方が見出されることが考えられ

る。そのため、本研究で見出された語りの構築のあり方は、他の SHG に直ちに当てはまるわけではない。

第1章で述べたように、海外にも、Toughlove という子どもの「非行」や問題行動に悩む親のサポート・グループが存在するが、Toughlove においては、「10 の信条」と呼ばれる基本的な原則があり、子どもの捉え方や、親の対応の指針を定めている (York et al,1982)。ここでは、特に、子どもを自分の行動の結果に直面させて、子ども自身がその責任を負うことが強調されている。Hollihan and Riley (1987) においても、Toughlove のミーティングの重要なテーマの一つとして、子どもが守るべき限界線 (bottom lines) を設定し、それを子どもが守らなかった場合には、家から追い出すことを含めて適切な罰を課すことが語り合われると言う。こうした限界線を設けてそれを厳しく守らせるというアプローチは、親たちの会においては、必ずしも多くは語られておらず、同じ子どもの「非行」に悩む親の自助グループであっても、コミュニティ・ナラティブに違いがあると考えられる。今後の課題として、Toughlove のような海外のグループとの比較を行いながら、親たちの会のコミュニティ・ナラティブや語りの構築の特徴をより明確化していくことが挙げられる。

また、社会的なディスコースとの関係や、参加者の相互行為に注目して、語りの構築のあり方を捉えるアプローチは、子どもの「非行」の問題に悩む親の SHG に限らず、語りを生み出す場としての SHG の機能を捉える上で有用であり、他の種類の SHG にも適用していくことが可能であると考えられる。他の種類の SHG における語りの構築のあり方を明らかにし、本研究で見出された知見と比較していくことで、オルタナティブな語りの構築のバリエーションを検討していくということも今後行っていきたい。



本論文に含まれる各研究および本論文の参考とした各研究は、以下に示す形ですでに発表されている。

<著書>

1. 北村篤司 (2015). 子どもの「非行」と向き合う親たちの語りにおける笑いの機能 鈴木聡志・大橋靖史・能智正博 (編) ディスコースの心理学——質的研究の新たな可能性のために ミネルヴァ書房 pp.195-213.

<論文 (査読あり) >

2. 北村篤司・能智正博 (2014). 子どもの「非行」と向き合う親たちの語りの拡がり——セルフヘルプ・グループにおけるオルタナティヴ・ストーリーの生成に注目して 質的心理学研究, **13**, 116-133.
3. Kitamura, A. (2014). How are alternative stories created in a self-help group? : Applying positioning analysis to narrative practice. *Narrative Inquiry*, **24**(1), 97-113.

<論文 (査読なし) >

4. 北村篤司 (2015). 「親たちの会」におけるやり取り——笑いの持つ不思議な力 ざゆうす, **15**, 18-24.

<学会発表・シンポジウム>

- 北村篤司 (2010). 子どもの「非行」と向き合う親たちの語りの変容プロセス——セルフヘルプ・グループにおける語り合いの体験に注目して 日本質的心理学会第7回大会抄録集, 75.
- 北村篤司 (2012). 子どもの「非行」と向き合う親たちの語りにおける笑い——相互行為における意味や機能の検討 日本質的心理学会第9回大会プログラム抄録集, 62.
- 北村篤司 (2014). 「非行」と向き合う親たちのセルフヘルプ・グループにおけるオルタナティヴ・ストーリーの構築 日本質的心理学会第10回大会プログラム抄録集, 81.
- 北村篤司 (2014). セルフヘルプ・グループにおける非当事者の参加のプロセス——「非行」と向き合う親たちの会における研究者自身の語りの変化に着目して 日本質的心理学会第11回大会プログラム抄録集, 58.
- 能智正博・鈴木聡志・大橋靖史・北村篤司・古井(橋本)望・森直久・五十嵐靖博 (2015). 子どもの「非行」と向き合う親たちの笑いの機能 日本心理学会第79回大会シンポジウム “ディスコースの心理学の展開” 話題提供者
- 松嶋秀明・伊藤哲司・荘島幸子・遠藤野ゆり・北村篤司 (2015). 子どもの「非行」と向き合う親たちの“レジリエンス” 日本質的心理学会第12回大会シンポジウム “「レジリエンス」は私たち(=質的研究者)に何をもたらすのだろうか?” 話題提供者

<学位論文>

北村篤司 (2011). 「非行」と向き合う親たちのセルフヘルプ・グループのエスノグラフィー——  
一語りの生成と変化のプロセスに注目して (2010年度東京大学大学院修士学位論文)

## 引用文献

- 赤阪麻由・サトウタツヤ (2015). 慢性の病いをもつ研究者が主宰する病者の集いの場で生成される意味 質的心理学研究, **14**, 55-74.
- Anderson, H. ,& Goolishian, H. (1992). The client is the expert. In McNamee, S. & Gergen, K. J. (eds.) *Therapy as social construction*. Sage. pp.25-39. (野口裕二・野村直樹 (訳) (2014) クライエントこそ専門家である——セラピーにおける無知のアプローチ ナラティブ・セラピー——社会構成主義の実践 金剛出版. pp.43-64.)
- Antze, P. (1976). The role of ideologies in peer psychotherapy organizations: Some theoretical considerations and three case studies. *Journal of Applied Behavioral Science*, **12**, 323-346.
- 荒井浩道 (2013). 〈聴く〉場としてのセルフヘルプ・グループ—認知症家族会を事例として 伊藤智樹 (編) ピア・サポートの社会学——ALS, 認知症介護, 依存症, 自死遺児, 犯罪被害者の物語を聴く 晃洋書房. pp.33-68.
- 浅川道雄 (2010). 「親たちの会」の例会の持ち方と専門家の役割について ざゆーす, **9**, 34-37.
- 綾城初穂 (2014). 人はディスコースの「支配性」にどのように対処するのか——臨床心理学におけるポジショニング理論の応用に向けて 博士学位論文. 東京大学.
- 綾城初穂 (2015). 「受動的」な子どもをどう援助するか——ポジショニング理論による事例研究 教師教育研究, **8**, 167-176.
- Ayashiro, H. (2015). Deconstructing Dominant Discourse Using Self-deprecating Humor: A Discourse Analysis of a Consulting with Japanese Female about Hikikomori and NEET. *Wisdom in Education*, **5**(2), article2.
- Bamberg, M. (2003). Positioning with Davie Hogan :Stories, Tellings, and Identities. In C. Daiute & C. Lightfoot (Eds.), *Narrative analysis: Studying the development of individuals in society* (pp. 135-157). London: Sage
- Bamberg, M. (2012) Why narrative? *Narrative Inquiry*, **22**(1), 202-210.
- Bamberg, M. (1997). Positioning between structure and performance. *Journal of Narrative and Life History*, **7**, 335-342.
- Bamberg, M., De Fina, A. & Schiffrin, D. (2011). Discourse and identity construction. In K. Luyckx, S. Schwartz & V. Vignoles (Eds.), *Handbook of identity theory and research*. Berlin: Springer. pp. 177-199
- Bamberg, M., & Georgakopoulou, A. (2008). Small stories as a new perspective in narrative and identity analysis. *Text & Talk*, **28**, 377-396.
- 板東充彦 (2008). ひきこもりのセルフヘルプ・グループ代表者との協働に関する事例研究——「代表者グループ」における援助者性と当事者性への関わり コミュニティ心理学研究,

- 12(1), 49-64.
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**(2), 191-215.
- Bateson, G. (1972). *Steps to an ecology of mind*. Chicago: The University of Chicago Press. (佐藤良明訳(2000). 精神の生態学 新思索社.)
- Berger, P. & Luckmann, T. L. (1966). *The social construction of reality*. New York: Doubleday/Anchor. (山口節郎(訳) (1977). 日常世界の構成——アイデンティティと社会の弁証法 新曜社.)
- Borkman T. (1976) Experiential knowledge: a new concept for the analysis of self-help groups. *Social Services Review*, **50**, 445-456.
- Bruner, J. S. (1990). *Act of meaning*. London: Harvard University Press. (岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子(訳) (1999). 意味の復権——フオークサイコロジーに向けて ミネルヴァ書房.)
- Burr, V. (1995). *An introduction to social constructionism*. London: Routledge. (田中一彦(訳) (1997). 社会的構築主義への招待——言説分析とは何か 川島書店.)
- Case, A. D., Todd, N. R., & Kral, M. J. (2014). Ethnography in community psychology: Promises and tensions. *American Journal of Community Psychology*, **54**(1-2), 60-71.
- Charmaz, K. (2006). *Constructing grounded theory : A practical guide through qualitative research*. CA:Sage Publication. (抱井尚子・末田清子 (訳) (2008). グラウンデッド・セオリーの構築——社会構成主義からの挑戦 ナカニシヤ出版.)
- Davies, B. & Harré, R. (1990). Positioning: The Discursive Production of Selves. *Journal for the Theory of Social Behaviour*. **20**(1), 43-63.
- Davis, D. R. & G. G. Jansen (1998). Making meaning of Alcoholics Anonymous for social workers : Myths metaphors, and realities. *Social Work*, **43**(2), 169-182.
- De Fina, A. (2013). Positioning level 3: Connecting local identity displays to macro social processes. *Narrative Inquiry*, **23**(1), 40-61.
- Deppermann, A. (2013). Editorial: Positioning in narrative interaction. *Narrative Inquiry*, **23**(1), 1-15.
- Everts, J. (1990). Critical issues in the development of Toughlove as a self-help programme in Australasia: an empirical investigation. *Australian Journal of Marriage & Family*, **11**(3), 158-164.
- Flick, U. (1995). *Qualitative forschung*. Rowohlt Taschenbuch Verlag Gmb. (小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子 (訳) (2002) 質的研究入門——〈人間の科学〉のための方法論 春秋社.)
- Frank, A. W. (1995). *The wounded storyteller*, University of Chicago Press. (鈴木智之 (訳) (2002) 傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理 ゆみる出版.)

- Froland,C., Pancoast,D.L., Parker,P. (1983). Introduction. In D.L.Pancoast, P.Parker, & C.Froland(Eds.) *Rediscovering self-help : its role in social care*. Beverly Hills:Sage, 9-23.
- 藤原綾子・辻川昌登 (2009). 我が子の非行と向き合った親の心理的プロセスに関する心理臨床学的研究——関係性から非行の積極的な意味を探る 発達心理臨床研究, **15**, 121-131.
- 藤田弘人 (1992). 犯罪・非行研究における家族の問題 犯罪と非行, **93**, 26-49.
- 福重清 (2013). 複数のセルフヘルプ・グループをたどり歩くことの意味 伊藤智樹 (編) ピア・サポートの社会学——ALS, 認知症介護, 依存症, 自死遺児, 犯罪被害者の物語を聴く 晃洋書房. pp.69-92.
- Gartner, A. & Riessman (1977). *Self-help in the human service*, San Francisco : JosseyBass. (久保紘章 (監訳) (1985) セルフヘルプ・グループの理論と実践——人間としての自立と連帯へのアプローチ 川島書店.)
- イェルガコポロ (2013). ナラティブ分析 佐藤彰・秦かおり (編) ナラティブ研究の最前線——一人は語ることで何をなすのか ひつじ書房. pp1-42.
- Georgakopoulou, A. (2013). Building iterativity into positioning analysis: A practice-based approach to small stories and self. *Narrative Inquiry*, **23**(1), 89–110.
- Gergen, K.J. (1999). *An invitation to social construction*. Sage. (東村知子 (訳) (2004) あなたへの社会構成主義 ナカニシヤ出版.)
- Glenn, P. J. 2003 *Laughter in interaction* Cambridge : Cambridge University Press.
- 浜田寿美男. (2006). 「将来」によって食いつぶされる「いま」——「発達」という視線. 荻谷剛彦(編), いまこの国で大人になるということ (pp.95-113) 紀伊國屋書店.
- 浜田寿美男. (2009). 心はなぜ不自由なのか PHP 研究所(PHP 新書).
- Harper, G. W. ,Lordon, C. ,Rappaport, J., Bangi, A., Contreras, R. & Pedraza, A. (2004). Community narratives: The use of narrative ethnography in participatory community research. Jason, L.,Keys, C.,Balcazar, Y.,Taylor, R. &Davis, M.(eds) *Participatory community research: Theories and methods in aciton*. Washington: American Psychological Association. pp199-217.
- Harré, R. & van Langenhove, L. (Eds.). (1999). *Positioning theory: Moral contexts of intentional action*. Massachusetts: Blackwell.
- 春野すみれ (2001). 親たちが「非行」のわが子と向き合う時 教育, **51**(7), 66-69.
- 春野すみれ (2006). 「非行」と向き合うなかで 教育, **56**(2), 26-33.
- 春野すみれ (2007). 揺れる親たちのための居場所を——「非行」と向き合う親たちの会の活動から 教育, **57**(9), 55-60.
- Hermans, H. J .M. & Kempen, H. J. G. (1993). *The dialogical self: Meaning as movement*. Sand Diego, CA: Academic Press. (溝上慎一・水間玲子・森岡正芳 (訳) (2006).対話的自己——デカルト／ジェームズ／ミ

- ードを超えて 新曜社)
- 「非行」と向き合う親の会 (2002). 絆 親・子・教師の「非行」体験第2集 新科学出版社.
- 「非行」と向き合う親の会 (2006). 「非行」 親・教師・調査官が語る子どもたちの「いま」 新科学出版社.
- Hollian ,T. & Riley, P. (1987). The rhetorical power of a compelling story: a critique of a “Toughlove” parental support group. *Communication Quarterly*, **35**(1), 13-25.
- 方仁成 (2006). 断酒会におけるアルコール依存症者の回復過程 心理臨床学研究, **24**(4), 464-475.
- Humphreys, K. (2000). Community narratives and personal stories in Alcoholics Anonymous. *Journal of Community Psychology*, **28**, 495-506.
- Humphreys, K., & Rappaport, J. (1994). Researching self-help/mutual aid groups and organizations: Many roads, one journey. *Applied and Preventive Psychology*, **3**, 217-231.
- 石川良子 (2005). 「ひきこもり」に関わる人々が“現場”に居続けるための実践 好井裕明 (編) 繋がり と 排除の社会学 明石書店. pp265-304.
- 伊藤智樹 (2005). ためらいの声——セルフヘルプ・グループ「言友会」へのナラティブ・アプローチ ソシオロジ, **50**(2), 3-18.
- 伊藤智樹 (2009). セルフヘルプ・グループの自己物語論——アルコリズムと死別体験を例にハーベスト社
- 伊藤智樹 (2010). 英雄になりきれぬままに——パーキンソン病を生きる物語といまだそこにある苦しみについて 社会学評論 **61**(1), 52-68.
- 伊藤智樹 (2013). ピア・サポートの社会学 晃洋書房
- 岩田泰夫 (1994). セルフヘルプ運動とソーシャルワーク実践——患者会・家族会の運営と支援の方法 やどかり出版.
- Jefferson, G. (1979). A technique for inviting laughter and its subsequent acceptance declination. In G. Psathas (ed.), *Everyday language: Studies in ethnomethodology* New York: Irvington.. pp.79-96
- 陰山正子 (2002). セルフヘルプ・グループへの専門職の関わり 保健の科学, **44**(7), 519-524.
- 金子絵里乃 (2007). 小児がんで子どもを亡くした母親の悲嘆過程——「語り」からみるセルフヘルプ・グループ/サポート・グループへの参加の意味 社会福祉学, **47**(4), 43-59.
- Kats, A. H. (1993). *Self-help in America : A social movement perspective*, New York: Twayne Publihers. (久保紘章 (訳) (1997) セルフヘルプ・グループ 岩崎学術出版.)
- Kats, A. H. ,& Bender, E. I. (1976). Self-help groups in western society : History and prospects, *The Journal of Applied Behavioral Science*, **12**(3), 265-282.
- 木村隆夫・能登原裕子・足立真理子 (2009). 非行の子をもつ親たちの, 自助グループのあり方

- を考える 司法福祉学研究, **9**, 154-160.
- 木村洋二 (1983). 笑いの社会学 世界思想社.
- 吉良安之 (1994). 自責的なクライアントに笑いを生み出すことの意義——クリアリング・ア・スペースの観点から 心理臨床学研究, **11**(3), 201-211.
- 桐田隆博・遠藤光男 (2003). 面接場面の笑い——笑いながら話す現象(laugh-speak)とその機能 電子情報通信学会技術研究報告 HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎 **102**(734), 13-18.
- 北村篤司・能智正博 (2014). 子どもの「非行」と向き合う親たちの語りの拡がり——セルフヘルプ・グループにおけるオルタナティブ・ストーリーの生成に注目して 質的心理学研究, **13**, 116-133.
- 公益社団法人全日本断酒連盟 (2016). 断酒のすすめ  
(<http://www.dansyu-renmei.or.jp/susume/index.html>) (2016年10月10日)
- 久保紘章・石川到覚 (編) (1998). セルフヘルプ・グループの理論と展開——わが国の実践をふまえて 中央法規.
- Lave, J. & Wenger, E. (1991). *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge [England]; New York: Cambridge University Press. (佐伯胖(訳) (1993) 状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加 産業図書)
- Levy, L. (1976). Self-help groups: Types and psychological processes. *Journal of Applied Behavioral Science*, **12**, 310-322.
- Lohman, J. (1986). Comparison of the York's Toughlove concepts with Adlerian theory and practice. *Journal of Adlerian Theory, Research & Practice*, **42**(2), 225-233.
- 前田雅英 (2004). 問題行動と親の責任 青少年問題, **51**(9), 10-14.
- Mankowski, E., & Rappaport, J. (2000). Narrative concepts and analysis in spiritually based communities. *Journal of Community Psychology*, **28**(5), 479-493.
- Maynard, D. M. (1989). On the ethnography and analysis of discourse in institutional settings. In Holstein, J.A. & Miller, G. (eds.) *Perspectives on social problems Vol.1*, London: JAI Press. pp.127-146.
- 松田博幸 (2000). セルフヘルプ・グループと「ともに」学ぶこと——専門職支配からの脱却 伊藤克彦・川田誉音・水野信義 (編) 心の障害と精神保健福祉 ミネルヴァ書房. pp97-110.
- 松田博幸 (2006). セルフヘルプ・グループの文化が援助専門職者に与える影響——あるリカバリング・ソーシャルワーカーからのインタビューより 社会問題研究, **55**(2), 65-101.
- 松田博幸 (2010). ソーシャルワーカーはセルフヘルプ・グループから何を学ぶことができるのか?——自己エスノグラフィーの試み 社会問題研究, **59**, 31-42.
- McLeod, J. (1997). *Narrative and psychotherapy*. CA: Sage Publication. (下山晴彦 (監訳) (2007). 物語りとしての心理療法——ナラティブ・セラピーの魅力 誠信書房.)
- McLeod, J. (2001). *Qualitative Research in Counseling and Psychology*. CA: Sage

- Publication. (下山晴彦(監訳)(2007). 臨床実践のための質的研究法入門 金剛出版.)
- McNamee, S. & Gergen, K. J. (eds.) (1992). *Therapy as social construction*. CA: Sage  
Publication. (野口裕二・野村直樹(訳)(2014). ナラティブ・セラピー 社会構成主義  
の実践 金剛出版.)
- 三島一郎 (1997). セルフヘルプ・グループの機能と役割——その可能性と限界 コミュニティ  
心理学研究, **1**(1), 82-93.
- 三島一郎 (1998a). セルフヘルプ・グループと専門職との関わりについての検討 コミュニティ  
心理学研究, **2**(1), 36-43.
- 三島一郎 (1998b). セルフヘルプ・グループの機能と役割 久保紘章・石川到覚(編)セルフヘル  
プ・グループの理論と展開——わが国の実践をふまえて 中央法規. pp.39-56.
- 三島一郎 (2001). 精神障害回復者クラブ——エンパワーメントの展開 山本和郎(編) 臨床心  
理学的地域援助の展開——コミュニティ心理学の実践と今日的課題 培風  
館. pp.164-182.
- 三好真人 (2014). セルフヘルプ・グループ運営者の抱える問題の検討 臨床心理学, **14**(5),  
693-703.
- 向谷地生良 (2009). 技法以前——べてるの家のつくりかた 医学書院.
- 内閣府政策統括官(共生社会政策担当) (2010). 第4回 非行原因に関する総合的研究調査 2010  
年3月 (<[http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikou4/pdf\\_index.htm](http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikou4/pdf_index.htm)> (2016年10月  
10日)
- 中田智恵海 (1997). セルフヘルプ・グループと専門職との関連について——先行研究の批判的  
検討 武庫川女子大学紀要(人文・社会学編), **45**, 39-47.
- 中田智恵海 (2000). セルフヘルプ・グループ——自己再生の援助形態 八千代出版.
- 中田智恵海 (2004). セルフヘルプ・グループと専門職 助産雑誌, **58**(7), 31-36.
- 野口裕二 (2005). ナラティブの臨床社会学 勁草書房.
- 野口裕二 (編) (2010). ナラティブ・アプローチ 勁草書房.
- 野村晴夫 (2004). ナラティブ・アプローチ 下山晴彦(編) 臨床心理学の新しいかたち 誠信  
書房. pp.42-60.
- 能智正博 (2006). “語り”と“ナラティブ”のあいだ 能智正博(編)〈語り〉と出会う——質的研究  
の新たな展開に向けて ミネルヴァ書房. pp.11-72.
- 能智正博 (2015). 質的研究におけるナラティブとディスコース 鈴木聡志・大橋靖史・能智正  
博編 ディスコースの心理学——質的研究の新たな可能性のために ミネルヴァ書房.  
Pp3-23.
- 能重真作・浅川道雄・春野すみれ (2004). いつか雨はあがるから——支えあう「非行」と向き  
合う親たちの中で かもがわ出版.
- 小田博志 (2010). エスノグラフィーとナラティブ 野口裕二(編) ナラティブ・アプローチ 勁  
草書房. pp.27-52.



- 岡知史 (1999). セルフヘルプ・グループ——わかちあい・ひとりだち・ときはなち 星和書店.
- 岡知史・Borkman (2011). セルフヘルプ・グループとセルフヘルプ・グループ・サポーター,そしてソーシャルワーク——自死遺族「本人の会」の事例を用いた理論的考察 ソーシャルワーク研究, **37**(3), 4-19.
- Rappaport, J. (1993). Narrative studies, personal stories, and identity transformation in the mutual help context. *Journal of Applied Behavioral Science*, **29**, 239-256.
- Rappaport, J. (1995). Empowerment meets narrative: Listening to stories and creating settings. *American Journal of Community Psychology*, **23**(5), 795-807.
- Rappaport, J. (1998). The art of social change: Community narrative as resources for individual and collective identity. Arriaga & Oskamp (eds) *Addressing community problems: Psychological research and interventions*. CA: Sage Publication. pp.225-246.
- Rappaport, J. (2000). Community narratives: Tales of terror and joy. *American Journal of Community Psychology*, **28**, 1-24.
- Riessman, F. (1965). The “helper” therapy principle. *Social Work*, **10**, 27-32.
- 酒井奈津子・宮坂道夫 (2013). 断酒会における規範逸脱とその修正についてのナラティブ分析 質的心理学研究, **12**, 119-137
- 阪本英二 (2007). 同じ〈場所〉にいたること——「当事者」の場所論的解釈 宮内洋・今尾真弓 (編) あなたは当事者ではない——〈当事者〉をめぐる質的心理学研究 北大路書房. pp.146-156.
- 佐藤郁哉 (1992). ワードマップ フィールドワーク——書を持って街へ出よう 新曜社.
- 佐藤恵 (2008). 起点としての「聴く」こと——犯罪被害者のセルフヘルプ・グループにおけるある回復の形 崎山治男・伊藤智樹・佐藤恵・三井さよ (編) 「〈支援〉の社会学：現場に向き合う思考」 青弓社. pp.40-61.
- Schön, D. (1983). *The reflective practitioner : How professionals think in action*. New York: Basic books (佐藤学・秋田喜代美 (訳) (2001) 専門家の知恵——反省的実践家は行為しながら考える ゆみる出版.)
- 柴田理恵・戸川朝子・葉山もも・春野すみれ・小島喜孝 (2003). わが子の「非行」に揺さぶられ, 考える親の責任 季刊教育法, **139**, 16-26.
- 柴山真琴 (2004). エスノグラフィー 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ (編) 質的心理学——創造的に活用するコツ 新曜社. pp.163-168.
- 椎野睦 (2008). ナラティブ・アプローチにおけるユーモアによる笑いの効果 カウンセリング研究, **41**(4), 1-7.
- 下山晴彦 (2000). 心理臨床の発想と実践 岩波書店.
- 下山晴彦 (2008). 何のために研究をするのか——研究の目的と方法 下山晴彦・能智正博 (編) 心理学の実践的研究法を学ぶ 新曜社. pp.17-30.

- 水津嘉克 (2013). 葛藤を承認すること, 沈黙を共有すること——あしなが育英会を「物語の共同体」として読む試み 伊藤智樹 (編) ピア・サポートの社会学. pp93-122.
- 鈴木聡志 (2007). 会話分析・ディスコース分析——ことばの織りなす世界を読み解く 新曜社.
- Stewart, M. (1990). Expanding theoretical conceptualisations of selfhelp groups. *Social Science and Medicine*, **31**, 1057–1066.
- 生島浩 (1993). 保護観察における家族援助に関する実証的研究 法務総合研究所.
- 生島浩 (2002). 非行臨床の基本問題——処遇上の課題と対応策 犯罪と非行, **129**, 58-78.
- 生島浩 (2008). 非行臨床における家族支援 更生保護, **59(2)**, 6-11.
- 高嶋克子 (2011). コミュニティ・アプローチ 東京大学出版会.
- 高松里 (1999). トラウマに対するセルフヘルプ・グループと専門家のアプローチの違い 女性ライフサイク研究, **9**, 126-131.
- 特定非営利活動法人非行克服支援センター (2014). 何が非行に追い立て, 何が立ち直る力となるか——「非行」に走った少年をめぐる諸問題とそこからの立ち直りに関する調査研究 新科学出版社.
- TOUGHLOVE (2016). TOUGHLOVE International (<http://www.toughlove.org/>) (2016年11月12日)
- 東京保護観察所観察第一課特別処理実施班 (2007). 家族への視点——保護者会の実践を通して 更生保護, **58(2)**, 38-41.
- Ussher, J., Kirsten, L., Butow, P., & Sandoval, M. (2006). What do cancer groups provide which other supportive relationships do not? The experience of peer support groups for people with cancer. *Social Science & Medicine*, **62**, 2565–2576.
- 好井裕明 (1999). 制度的状況への会話分析 好井 裕明・山田 富秋・西阪 仰 (編) 会話分析への招待 世界思想社. pp.36-70
- 和田 幸子 (2007). セルフヘルプ・グループにおけるアトピー性皮膚炎患者の心的変容プロセス——修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによるインタビュー分析から 臨床心理学, **7(4)**, 507-518.
- White, M. (1992). Deconstruction and therapy. In Epston, D. & White, M. (eds.) *Experience, contradiction, narrative & imagination*. Adelaide, Australia: Dulwich Centre Publications. pp.37-46.
- White, M. & Epston, D. (1990). *Narrative means to therapeutic ends*. NY: W. W. Norton. (小森康永(訳) (1992) 物語としての家族 金剛出版.)
- Willig, C. (2001). *Introducing Qualitative Research in Psychology: Adventures in Theory and Methods*, Buckingham: Open University Press. (上淵寿・大家まゆみ・小松孝至(訳) (2003) 心理学のための質的研究法入門—創造的な探求に向けて 培風館.)
- Winslade, J. & Monk, G. (1999). *Narrative counseling in schools: Powerful & brief*. Thousand Oaks: Corwin press.

- (ウインスレイド, J. & モンク, G. 小森康永 (2001). 新しいスクール・カウンセリング  
——学校におけるナラティブ・アプローチ 金剛出版)
- Winslade, J. (2005). Utilising discursive positioning in counselling. *British Journal of Guidance & Counselling*, **33**(3), 351-364.
- Woolfit, R. (2005). *Conversation analysis and discourse analysis: A comparative and critical introduction*. London: Sage.
- やまだようこ (2000). 人生を物語ることの意味——ライフストーリーの心理学 人生を物語る  
——生成のライフストーリー ミネルヴァ書房. pp.1-38.
- 山本智也 (2005). 非行臨床における家庭教育支援の意義 現代のエスプリ, **461**,179-188.
- York, P., York, D., & Wachtel, T. (1982). *Toughlove*. New York: Doubleday & Company, Inc.
- Wertsch, J.V. (1998). *Mind as action*. New York: Oxford University Press. (ワーチ, J.V. (2002).  
行為としての心. (佐藤公治・田島信元・黒須俊夫・石橋由美・上村佳代子, 訳) 京都: 北  
大路書房)

## 謝辞

本論文は、多くの方々からのご指導やご協力、そして励ましと支えをいただき、執筆することができました。改めて、ここにお礼を申し上げたいと思います。

まず、本研究を行うことを許していただき、お忙しいなか研究協力者をご紹介いただき、いつも論文の執筆を励ましていただいた「非行」と向き合う親たちの会の代表の春野すみれ様に心から感謝申し上げます。研究についてご相談をした際に、春野さんから頂いたたくさんの温かい励ましの言葉が論文を執筆する大きな力になりました。

インタビュー調査にご協力して頂いた研究協力者の方々には、お忙しいなか、私の拙い面接調査に長時間、親切におつき合いくださって、本当にありがとうございました。みなさまから聴かせて頂いたお話は、一つひとつがかけがえのない宝物だと思っております。みなさまのご協力がなければ、研究自体を行うことができませんでした。

また、筆者を温かく受け入れてくださった、「非行」と向き合う親たちの会のみなさまにも心からお礼を申し上げます。例会に参加して、お話を聴かせていただくこと、そして時には私の話を聴いていただくことで、論文を書くことよりもはるかに多くの、生きていく上で大切なことを学んでいると感じております。

そして、指導教官である臨床心理学コース教授能智正博先生には、修士課程から本当に長い間、大変お世話になりました。先生には、いつも穏やかに、的確なコメントやアドバイスを頂いたほか、研究の進め方や研究に取り組む姿勢など、研究についての心構えを教えてもらいました。修士に入学した頃には、研究について何もわかってなかった私が、質的研究の魅力に惹かれ、最後まで論文を執筆できたのは、誰よりも先生のおかげです。

また、博士論文を審査してくださった教育心理学コース教授遠藤利彦先生、教職開発コース准教授藤江康彦先生、教職開発コース准教授浅井幸子先生、比較教育社会学コース准教授仁平典宏先生にも大変お世話になりました。先生方が審査の過程において、様々な観点から問いやご意見を投げかけてくださったことで、研究の課題に深く気づくとともに、また発展の可能性について考えることができました。審査をして頂く過程が、私にとってはとても幸せなものでした。心よりお礼申し上げます。

私の論文執筆を支えてくれた家族にもお礼を言いたいと思います。長い期間学生でいることを許し、いつも応援してくれた両親、姉、祖母には感謝の心でいっぱいです。また、最も近くで私のことを支え、励ましてくれた妻にも本当に感謝しています。論文執筆の過程は思うように進みませんでした。苦しみも喜びも共にしてくれた彼女がいたことは私にとって何よりも大きな支えになりました。

こうして謝辞を書いている、本当に多くの方の助けや支えがあったことを思い出します。大学院でお世話になった先生方、教育学研究科の事務の方々、同じゼミの先輩や後輩、同期の仲間、学会や研究会でお会いした先生方、職場の同僚、親戚や友人、これまで関わってきた子どもたち

など、本論文は、たくさんの人との出逢いやご協力のおかげによって、成り立ったものです。全てを書くことはできませんが、改めてお礼を申し上げて筆をおきたいと思います。